
危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した 実地調査研究

平成30年度

奄美大島笠利町佐仁方言の動詞・形容詞の活用……………	白田 理人・重野 裕美	(1)
伊平屋方言の形容詞の活用と文法的な形について……………	目差 尚太	(34)
沖縄県伊平屋方言の動詞の活用と文法的な形式……………	當山 奈那	(49)
沖縄県国頭村奥方言の動詞形態論の概要……………	狩俣 繁久・島袋 幸子	(78)
国頭村奥方言の『大きなかぶ』……………	島袋 幸子	(94)
沖縄県大宜味村大兼久方言の動詞・形容詞の活用……………	中本 謙	(98)
阿嘉島方言の動詞、形容詞の初期報告……………	横山 晶子	(114)
宮古語大神方言 動詞と形容詞の活用の概要……………	金田 章宏	(130)
八重山地方西表島船浮方言の動詞・アスペクト・形容詞について……………	荻野千砂子	(164)
八重山地方竹富町黒島方言の『桃太郎』……………	荻野千砂子	(184)
沖縄県竹富町小浜島・八重山語小浜方言の動詞の活用について……………	Christopher Davis	(192)
与論島「方言劇」 地域社会へのインパクトと「旅人〜たびんちゅ」の役割 ……	前田 達朗	(210)
しまくとぅば継承としまくとぅば劇……………	石原 昌英	(223)

プロジェクトの概要

琉球大学島嶼地域科学研究所
狩俣繁久

本書は、平成 30 年度の文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」の成果を報告するものである。

我が国における言語・方言のうち、消滅の危機にあるものについて、ユネスコが平成 21 年に発行した“Atlas of the World's Languages in Danger”の内容及び、平成 23 年度から平成 26 年度にかけて大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所及び琉球大学島嶼地域科学研究所（平成 30 年 4 月 1 日に国際沖縄研究所から改称）が実施した文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業」及び「危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実体に関する調査研究事業」を参照の上、消滅の危機にある七つ（八丈方言、奄美方言、国頭方言、沖縄方言、宮古方言、八重山方言、与那国方言）の区画において、音声資料や映像資料、調査研究が十分とは言えない区画内の地域の方言について、当該地域の方言の保存・継承に資するため、アーカイブとして公開することを想定した実地調査及びその分析（以下「アーカイブ研究」とする）、方言の保存継承に資する諸研究（以下「保存調査研究とする」）を行った。

アーカイブ研究については、琉球大学国際沖縄研究所（現島嶼地域科学研究所）が平成 27 年度に実施した研究と同じ内容の調査を方言資料の蓄積の少ない、奄美語の奄美大島北部笠利町方言、国頭語の伊平屋島方言と国頭村奥方言と大宜味村大兼久方言、沖縄語の座間味村阿嘉島方言、宮古語の大神島方言、八重山語の小浜島方言と西表島舟浮方言について臨地調査を実施した。方言研究および方言資料の蓄積が少なく危機度の高い八重山語の石垣島川平方言、竹富町波照間島において予備調査を行った。

本事業で調査対象地としている 8 地点での調査（音声資料・映像資料を含む）は 2 年計画のものである。その 2 年目にあたる本年度は、昨年度の対象地域をひきつぎ、当該方言の継承にとって重要な要素である文法的特徴のうち、特に重要な動詞の活用体系（動詞の活用体系と活用のタイプ）の概要および形容詞活用の概要についての臨地調査、資料収集を行った。この調査研究は、昨年度の当該方言の発音体系を知るための音素・音節の一覧と語彙リストおよび、名詞に接続する格助詞・取り立て助詞のリストとその例文の調査研究に続くものであり、2 年間の調査研究によって、当該方言の発音と文法に関する基礎的で総合的な成果を記録保存することが可能になった。琉球大学島嶼地域科学研究所のホームページ上で公開する。

方言継承のあり方の研究については、方言劇の効果についての調査を実施した。調査地点は鹿児島県与論町及び沖縄県で演劇活動の指導に当たっている元学校教師へのインタビュー等を行った。当該地域では、学校や NPO 等が子ども達に方言劇の上演を通して方言を指導する取組を行っているが、方言劇に演者として参加することが、児童生徒及び成人の方言意識及び方言修得にどのような影響があるのかをインタビュー調査等を通

じて分析した。

消滅の危機に瀕しているとされ、音声資料、調査研究が、保存・継承にとって十分ではない7区画内の8地点（鹿児島県の奄美大島北部（笠利町）、沖縄県の沖縄島北部の国頭村奥及び大宜味村大兼久、伊平屋島、阿嘉島、大神島、西表島船浮、小浜島）において、将来のアーカイブ化を想定して、次の項目の臨地調査を行った。

当該方言の文法的な特徴が分かるように作成された動詞と形容詞の活用体系の概要がわかる活用形とその基本的な意味と例文の記述と録音。

方言継承の意識が高いとされる与論町で方言劇の取組について当事者（指導者および実演者）にインタビュー調査を行った。方言劇に取り組む前と公演したあとで方言意識と方言能力にどのような変化があったのか、考えられる課題は何か等について質問をした。また、公演に際しては、許可を得た上で、観客にもアンケート調査を実施した。これらのインタビュー調査及びアンケート調査の内容を分析した。調査結果については、本報告書に収録している。

アーカイブ研究及び保存研究の調査研究の結果については、平成31年2月3日に琉球大学東京オフィスで成果報告会を開催し、報告書原稿執筆のための意見交換と討議を行った。調査研究の結果については、琉球大学の島嶼地域科学研究所のHPに開設する本事業のHPで公開する。合わせて、事業報告書を作成し公表するものである。

奄美大島笠利町佐仁方言の動詞・形容詞の活用

白田 理人（志學館大学） 重野 裕美（広島経済大学）

1 奄美大島笠利町佐仁方言の概要

鹿児島県奄美大島佐仁方言（以降佐仁方言）は、奄美大島の北端の佐仁（さに）集落（鹿児島県大島郡奄美市笠利町佐仁、旧大島郡笠利町）で話される（以下地図ⁱ参照）。奄美市役所発行の資料によれば、2019年1月現在の佐仁集落の人口は266人（169世帯）である。

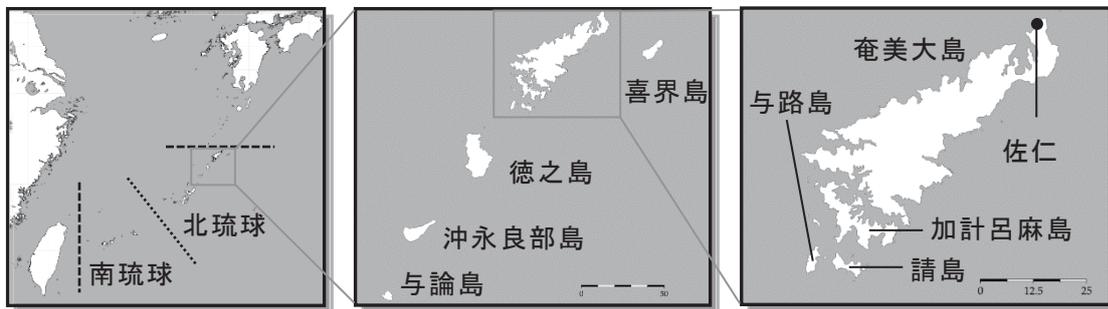


図 1 琉球列島／奄美群島／奄美大島／佐仁集落の位置

佐仁方言を流暢に話すのは主に 65～70 歳以上である。地域における方言継承に関わる活動として、現在、小学校の朝の朗読・給食時・学習発表会におけるあいさつが方言で行われており、また小学生及び PTA による伝統的な八月踊りの継承活動が行われている。また、奄美市笠利町中金久にある大島北高等学校では 2014 年から高校生が地元のお年寄りを訪問し、昔の暮らしを記述する「聞き書き調査」を実施し、報告書としてまとめ発行している。

佐仁方言の先行研究として、語彙集（狩俣 2003）、アクセント付き名詞・用言資料集（上野 1996・1997）、敬語形式の報告（重野 2014, 重野・白田 2018）、モーラー覧・格助詞と取り立て助詞の文例・童謡「おおきなかぶ」の方言訳（白田 2018）がある。佐仁方言は近隣の方言との差が大きく、「言語の島」と言われており、先行研究では主な特徴ⁱⁱとして両唇破裂音の保持（例 [pana]「花」、[pidʒi]「肘」、[punī]「船」）、語頭で広母音、半広母音に遡る母音の前での k の摩擦音化（例：[hata]「肩」、[xībujī]「煙」、[hujī]「腰」）、母音間の m の弱化／脱落及び鼻母音化（例：[jaã] ~ [ja:]「山」）が指摘されているⁱⁱⁱ（狩俣 2003, 上野 1996, 1997 参照）。

以下、2 節で本稿に用いる表記と分析の方針について示した上で、3 節で動詞、4 節で形容詞について記述する。補足資料として、会話例を示す。データは筆者の調査^{iv}に基づく。

2 表記及び分析方針

2.1 音韻体系と表記

以下表 1, 2 に、本稿で用いる表記^vにより、佐仁方言の音素一覧を示す。[]内は音声実現である。

表 1 母音音素

	前		後
狭	i	ĩ	u
	e	ë	o
広			a

表 2 子音音素

調音方法		調音点	両唇	歯茎	歯茎硬口蓋 ～硬口蓋	軟口蓋～声門
破裂音	無声	非喉頭化	p[p~pʲ]	t		k[k~x~kʲ~ç]
		喉頭化	p'[pʔ~pʔʲ]	t'[tʔ]		k'[kʔ~kʔʲ]
	有声	b[b~bʲ]	d		g[g~gʲ]	
破裂音	無声	非喉頭化		ts[ts~tsʔ]	ch[tç]	
		喉頭化			c'h[tçʔ]	
摩擦音	無声			s[s~ç]	sh[ç]	h
	有声			z[z~dz]	[z~dz]	
鼻音	非喉頭化		m	n[n~m~ ɲ~ŋ~N]		
	喉頭化		m'[mʔ~mʔʲ]	n'[nʔ]		
		弾音		r[r~rʲ]		
接近音	非喉頭化		w		y[j]	
	喉頭化		w'[wʔ]		y'[jʔ]	

以下、母音・子音の音声実現と、音節構造・音素配列について述べる。

母音について、語頭母音の前には声門破裂音[ʔ]が挿入される（例：/isho/ [ʔiço] 「漁」、/au/ [ʔau] 「雨」、/o/ [ʔo] 「泡」、/ushi/ [ʔuçi] 「牛」）。狭母音 i, ĩ, u は、無声阻害音に挟まれる環境で無声化する（例：/cikyaka/ [tçikʲakʰa] 「近い」、/yasika/ [jasikʰa] 「安い」、/puturya/ [pʰüturja] 「稲光」）。また、語末で無声阻害音の後でも無声化することがある（例：/m'aci/ [mʔatsi] 「火」、/pyaku/ [pʰjakû] 「百」、/poki/ [pʰokij] 「箒」）。音声上の長母音、二重母音は、短母音の連続として解釈する（例：nuuna [nu:na] 「飲むな」、hai [hai] 「買い

(不定形)」。なお、先行研究で報告されていた鼻母音は、筆者の調査した話者 (S8～S18 年生) では見られなかった (注 iii 参照)。

子音について、i, y の前では口蓋化して実現する (例: /min/ [m^hin] 「耳」、/asibyun/ [ʔasib^hyun] 「遊ぶ」)。有声摩擦音 z, j は母音間以外では破擦音として実現する (例: /zĩn/ [d^hzĩn] 「金銭」、/zyoo/ [dzo:] 「斧」)。両唇／軟口蓋破裂音 (喉頭化音を除く) は母音間では摩擦音として実現することがある (例: /makika/ [max^hik^ha] 「大きい」、/təpu/ [t^həp^hu] 「台風」)。n は後続する子音に調音点が同化して実現し、語末では [n] となる。喉頭化／非喉頭化の対立について、語頭では対立を持つすべての子音対立が見られるが、語中での対立は単子音の両唇／軟口蓋無声破裂音に限られ、重子音及び破擦音、鼻音では対立が中和している。また、母音が無声化する環境では先行する阻害音の喉頭化／非喉頭化の対立が中和し、非喉頭化音のみが分布する (例: kicya [k^hi^ht^hca] 「着た」 cf. k'iryun [k^hʔir^hyun] 「着る」)。対立が中和する環境では、音声上は喉頭化音が現れる場合でも、非喉頭化音で表記する。

音節構造は子音を C、半母音を S、母音を V とすると (C)(S)V(V)(C) である。S には y, w が分布する。半母音 w の前には軟口蓋破裂音のみが分布する。半母音 y の前には両唇／軟口蓋破裂音 (p, p', b, k, k', g)、両唇／歯茎鼻音 (m, n, n') と r が分布する。語末の音節末子音には鼻音 n のみが現れる。語中の音節末子音は後続子音と調音点が同じ子音に限られる。語境界、複合境界は音節境界に、接語境界は音節境界または音節核と音節末子音の境界に一致する。

2.2 形態音韻論的分析の方針

語幹と接辞の形態素境界に生じる交替について、本稿では、規則ではなく分布による説明を採る。異形態交替分析の方針は以下の通りである。

- A) 可能であれば、音声的な条件による接辞の異形態として説明する。
- B) A で説明できない場合、一つの動詞に語幹を複数認め、接辞によってどの語幹につくかが決まっていると考える。語幹末音の交替によって動詞クラスを立てる。
- C) A, B のどちらでも説明できない場合は、動詞クラスの上位分類として動詞タイプを認め、動詞タイプごとに接辞の異形態が決まっていると考える。

A について、例えば、以下(1)のような語例に対して、(2)のように語幹を設定し、(3)のように語幹末音にしたがって接辞の異形態の分布が決まっていると説明する。

- (1) a. 「置く」—命令形: uk-i 「置け」、非過去形 uk-yun 「置く」
- b. 「売る」—命令形: ur-i 「売れ」、非過去形 ur-yun 「売る」
- c. 「浴びる」—命令形: au-rī 「浴びろ」、非過去形 au-n 「浴びる」
- d. 「降りる」—命令形: uri-rī 「降りろ」、非過去形 uri-n 「降りる」

- (2) 語幹—a. 「置く」 uk-、b. 「売る」 ur-、c. 「浴びる」 au-、d. 「降りる」 uri-

- (3) 接辞異形態—a. 命令接辞—異形態 $\bar{i}/r\bar{i}$ 、子音の後に \bar{i} 、母音の後に $r\bar{i}$ が分布
 b. 非過去接辞—異形態 yun/n 、母音の後に n 、子音の後に yun が分布

B について、例えば、以下(4)のような語例に対して、(共時的には)隣接する音の条件から異形態の分布を説明できないため、(5)のように語幹を複数設定し、(6)のように接辞によってつく語幹が決まっていると説明する。

- (4) a. 「売る」—非過去形 $ur-yun$ 「売る」、過去形 $ut-a$ 「売った」
 b. 「飛ぶ」—非過去形 $tub-yun$ 「飛ぶ」、過去形 $tud-a$ 「飛んだ」
 c. 「置く」—非過去形 $uk-yun$ 「置く」、過去形 $ush-a$ 「置いた」
 d. 「吹く」—非過去形 $puk-yun$ 「吹く」、過去形 $puch-a$ 「吹いた」
 e. 「漕ぐ」—非過去形 $hug-yun$ 「漕ぐ」、過去形 $huj-a$ 「漕いだ」

- (5) 語幹 X— a. 「売る」 $ur-$ 、 b. 「飛ぶ」 $tub-$ 、 c. 「置く」 $uk-$ 、
 d. 「吹く」 $puk-$ 、 e. 「漕ぐ」 $hug-$
 語幹 Y— a. 「売る」 $ut-$ 、 b. 「飛ぶ」 $tud-$ 、 c. 「置く」 $ush-$ 、
 d. 「吹く」 $puch-$ 、 「漕ぐ」 $huj-$
 語幹クラス—a. 「売る」 r/t クラス、 b. 「飛ぶ」 b/d クラス、 c. 「置く」 k/sh クラス、
 d. 「吹く」 k/ch クラス、 e. 「漕ぐ」 g/j クラス

- (6) 語幹と接辞の関係—a. 非過去接辞—語幹 X につく
 b. 過去接辞—語幹 Y につく

C について、例えば、以下(7a)のような語例は、(子音脱落の音変化により、) A の例外となっており、B でも説明できない。このため、動詞クラスの上位概念として動詞タイプを立て、動詞タイプにしたがって接辞が分布していると考ええる。

- (7) a. 「飲む」—命令形： $nu-\bar{i}$ 「飲め」、非過去形 $nu-yun$ 「飲む」
 b. 「浴びる」—命令形： $au-r\bar{i}$ 「浴びろ」、非過去形 $au-n$ 「浴びる」
 (8) 動詞タイプ—a. 「飲む」 X タイプ、 b. 「浴びる」 Y タイプ
 (9) 接辞異形態—a. 命令接辞—X タイプの動詞に \bar{i} 、Y タイプに $r\bar{i}$ がつく
 b. 非過去接辞—X タイプの動詞に \bar{i} 、Y タイプに $r\bar{i}$ がつく

3 動詞

3.1 動詞クラス・動詞タイプと活用語例

規則動詞として 4 タイプ、28 クラスの動詞を認め、語幹として A~E の 5 つを認める^{vi}。A 語幹が分かれば、B/C/D 語幹は一意に決まるが、E 語幹は決まらない場合がある。このため、A 語幹と E 語幹が異なる場合、動詞クラスの名称は「A 語幹末/E 語幹末」とし、そ

うでない場合は「A 語幹末」とする。以下表 3 に、動詞タイプによって接辞の異形態が生じる例を示し、表 4 に、語幹の異同パターンの例を示す。表 5 に、タイプ/クラスの一覧を示す。表 5 の A~E 語幹にはクラスに共通する部分のみ示し、それ以外の部分を X とする。母音は V で代表させて示す。V_iV_i は同母音連続（音声上の長母音）である。語例が得られていない部分は一で示している。表 6~表 15 に、不規則動詞を含めて否定形（～しない）、意志形（～しよう）、命令形（～しろ）、禁止形（～するな）、非過去形（～する）、不定形（～し）、過去形（～した）の活用語例を示す。不定形は「～もしない（X=daka sīran、X=n sīraN、X=ni sīraN）」の形で採取した。一は未調査または語形が得られていない。特に非過去形（2）は未調査の動詞が多いが、不規則動詞で語幹の母音長が非過去（1）と異なる場合があるため載せている。

表 3 タイプによる接辞の違い

タイプ	意味	不定	非過去	禁止
I	「飛ぶ」	tub-i	tub-yun	tub-una
I	「飲む」	nu-i	nu-yun	nu-una
II	「売る」	ur-i	ur-yun	u-nna
III	「召し上がる」	misho-i	misho-n	misho-nna
IV	「降りる」	urī-φ	urī-n	urī-nna
IV	「浴びる」	au-φ	au-n	au-nna

表 4 語幹の異同パターン

パターン	語幹	A	B	C	D	E
	意味	否定	命令	禁止	非過去	過去
ABCDE	降りる	urī-raN	urī-rī	urī-nna	urī-n	urī-ta
ABDE/C	開ける	y'ee-ran	y'ee-rī	y'e-nna	y'ee-n	y'ee-ta
ABCD/E	飛ぶ	tub-an	tub-i	tub-una	tub-yun	tud-a
ABC/D/E	持つ	mut-an	mut-ī	mut-una	much-un	mucch-a
ABD/C/E	座る	yir-an	yir-i	yi-nna	yir-yun	yish-a
A/BCD/E	買う	haw-an	ha-u	ha-una	ha-yun	haut-a

表 5 タイプ/クラス一覧

タ	ク	A	B	C	D	E	語幹異同	語例 (A 語幹・意味)	
I	b/d	Xb-				Xd-	ABCD/E	tub-「飛ぶ」、 tamb-「頼む」	
	w/t	Xw-	X-				Xt-	A/BCD/E	araw-「洗う」、 k'uww-「閉める」
	aw/aut	Xaw-	Xa-				Xaut-	A/BCD/E	haw-「買う」
	w/d	Xw-	X-				Xd-	A/BCD/E	ugaw-「拝む」、 nuw-「飲む」
	a/ad	Xa-					Xad-	ABCD/E	ka-「食べる」
	t/cch	Xt-			Xc-	Xcch-	ABC/D/E	mut-「持つ」	
	s/sh	Xs-			Xsh-	Xsh-	ABCDE	pus-「干す」	
	n/j	Xn-					Xj-	ABCD/E	sin-「死ぬ」
	k/s	Xk-					Xsh-	ABCD/E	yak-「焼く」、 mank-「招く」
	k/ch	Xk-					Xch-	ABCD/E	kik-「聞く」、 akk-「歩く」
	k/j	ik-					ij-	ABCD/E	ik-「行く」
	g/j	Xg-					Xj-	ABCD/E	hug-「漕ぐ」
II	r/t	Xr-		X-	Xr-	Xt-	ABD/C/E	war-「割る」	
	V _i V _i r/V _i V _i t	V _i V _i r-		V _i -	V _i V _i r-	V _i V _i t-	ABD/C/E	noor-「登る」	
	ir/sh	Xir-		Xi-	Xir-	Xis-	ABD/C/E	nir-「煮る」	
	ir/ch	Xir-		Xi-	Xir-	Xich-	ABD/C/E	pashir-「走る」	
	kir/ch	Xk'ir-		Xk'u-	Xk'ir-	Xk'ich-	ABD/C/E	k'ir-「着る」	
	r/cch	Xir-		Xi-	Xir-	Xicch-	ABD/C/E	ir-「入る」	
	bir/pich	Xbir-		Xbi-	Xbir-	Xpich-	ABD/C/E	k'ubir-「括る」	
	bur/put	Xbur-		Xbu-	Xbur-	Xput-	ABD/C/E	habur-「被る」	
	tsir/sit	Xtsir	—	—	Xtsir	Xsit-	A/C/E	utsir-「分かる」	
	gir/kich	Xgir-		Xgi-	Xgir-	Xkich-	ABD/C/E	nigir-「握る」	
gur/kut	Xgur-		Xgu-	Xgur-	Xkut-	ABD/C/E	mugur-「回る」		
III	or/osh	Xor-		Xo-	Xo-	Xosh-	ABCD/E	misho-「召し上がる」	
	oor/oosh	oor-		o-	oo-	oosh-	ABCD/E	oo-「行く／来る(尊敬)」	
	oor/oot	oor-		o-	oo-	oot-	A/BCD/E	oo-「居る(尊敬)」	
IV	V	XV-					ABCDE	uri-「降りる」	
	ViVi	XViVi-		XVi-	XViVi-		ABDE/C	y'ee-「開ける」	

表 6 動詞活用語例 (クラスごと) ①

	語幹分類	A	B	B	C
クラス	意味	否定	意志	命令	禁止
b/d	飛ぶ	tub-an	tub-o	tub-ī	tub-una
b/d	遊ぶ	asīb-an	asīb-o	asīb-ī	asīb-una
b/d	畳む	tak'ub-an	tak'ub-o	tak'ub-ī	tak'ub-una
b/d	頼む	tamb-an	tamb-o	tamb-ī	tamb-una
b/d	包む	tsimb-an	tsimb-o	tsimb-ī	tsimb-una
w/t	洗う	araw-an	ara-o	ara-u	ara-una
w/t	歌う	utaw-an	uta-o	uta-u	uta-una
w/t	使う	sīkaw-an	sīka-o	sīka-u	sīka-una
w/t	飼う	sīkanaw-an	sīkana-o	sīkana-u	sīkana-una
w/t	思う	oow-an	—	oo-u	oo-una
w/t	追う	uw-an	u-o	u-ī	u-una
w/t	閉める	k'uw-an	k'u-o	k'u-ī	k'u-una
w/ut	会う	aw-an	a-o	a-u	a-una
w/ut	買う	haw-an	ha-o	ha-u	ha-una
w/ut	縫う	naw-an	na-o	na-u	na-una
w/ut	這う	paw-an	—	—	—
w/ut	編む	aw-an	a-o	a-u	a-una
w/d	拝む	ugaw-an	uga-o	uga-u	uga-una
w/d	孕む	panaw-an	—	—	—
w/d	飲む	nuw-an	nu-o	nu-ī	nu-una
w/d	積む	tsuw-an	tsu-o	tsu-ī	tsu-una
w/d	履く	k'uw-an	k'u-o	k'u-ī	k'u-una
w/d	盗む	nusuw-an	nusu-o	nusu-ī	nusu-una
w/d	喜ぶ	yuruk'uw-an	yuruk'u-o	yuruk'u-ī	—
a/ad	食べる	ka-n	ka-o	ka-u	ka-una
a/ad	痛い	ya-n	—	—	—

表 7 動詞活用語例（クラスごと）②

	語幹分類	D	D	D	E	E
クラス	意味	非過去 1	非過去 2	不定形	過去 1	過去 2
b/d	飛ぶ	tub-yun	—	tub-i	tud-a	tud-ī
b/d	遊ぶ	asīb-yun	asīb-yuri	asīb-i	asīd-a	asīd-ī
b/d	畳む	tak'ub-yun	—	tak'ub-i	tak'ud-a	tak'ud-ī
b/d	頼む	tamb-yun	—	tamb-i	tand-a	tand-ī
b/d	包む	tsīmb-yun	—	tsīmb-i	tsīnd-a	tsīnd-ī
w/t	洗う	ara-yun	—	ara-i	arat-a	arat-ī
w/t	歌う	uta-yun	—	uta-i	utat-a	utat-ī
w/t	使う	sīka-yun	—	sīka-i	sīkat-a	sīkat-ī
w/t	飼う	sīkana-yun	—	sīkana-i	—	—
w/t	思う	oo-yun	—	oo-i	oot-a	oot-ī
w/t	追う	u-yun	—	u-i	ut-a	ut-ī
w/t	閉める	k'u-yun	—	k'u-i	k'ut-a	k'ut-ī
w/ut	会う	a-yun	—	a-i	aut-a	aut-ī
w/ut	買う	ha-yun	—	ha-i	haut-a	haut-ī
w/ut	縫う	na-yun	—	na-i	naut-a	naut-ī
w/ut	這う	pa-yun	—	pa-i	paut-a	paut-ī
w/ut	編む	a-yun	—	a-i	aut-a	aut-ī
w/d	拝む	uga-yun	—	uga-i	ugad-a	ugad-ī
w/d	孕む	pana-yun	—	pana-i	panad-a	panad-ī
w/d	飲む	nu-yun	—	nu-i	nud-a	nud-ī
w/d	積む	tsu-yun	—	tsu-i	tsud-a	tsud-ī
w/d	履く	k'u-yun	—	k'u-i	k'ud-a	k'ud-ī
w/d	盗む	nusu-yun	—	nusu-i	nusud-a	nusud-ī
w/d	喜ぶ	yuruk'u-yun	—	yuruk'u-i	yuruk'ud-a	yuruk'ud-ī
a/ad	食べる	ka-yun	ka-yuri	ka-i	kad-a	kad-ī
a/ad	痛い	ya-yun	—	ya-i	yad-a	yad-ī

表 8 動詞活用語例 (クラスごと) ③

	語幹分類	A	B	B	C
クラス	意味	否定	意志	命令	禁止
t/ch	持つ	mut-an	mut-o	mut-ī	mut-una
t/ch	待つ	mat-an	mat-o	mat-ī	mat-una
t/ch	勝つ	—	kat-o	kat-ī	—
s/sh	干す	pus-an	pus-o	pus-ī	pus-īna
s/sh	治す	noos-an	noos-o	noos-ī	noos-īna
s/sh	隠す	hakus-an	hakus-o	hakus-ī	hakus-īna
s/sh	落とす	utus-an	utus-o	utus-ī	utus-īna
s/sh	壊す	k'es-an	k'es-o	k'es-ī	k'es-īna
s/sh	移す	nawas-an	nawas-o	nawas-ī	nawas-īnaa
s/sh	降ろす	urus-an	urus-o	urus-ī	urus-īna
s/sh	生む	nas-an	—	—	—
n/j	死ぬ	shin-yan	shin-yo	shin-i	shin-yuna
k/sh	焼く	yak-an	yak-o	yak-ī	yak-una
k/sh	置く	uk-an	uk-o	uk-ī	uk-una
k/sh	梳かす	saak-an	saak-o	saak-ī	saak-una
k/sh	掃く	pok-an	pok-o	pok-ī	pok-una
k/sh	手招きする	mank-an	mank-o	mank-ī	—
k/sh	沈む	shink-yan	—	—	—
k/ch	聞く	kik-yan	kik-yo	kik-i	kik-yuna
k/ch	弾く	pik-yan	pik-yo	pik-i	pik-yuna
k/ch	突く	sik-an	sik-o	sik-ī	sik-una
k/ch	吹く	puk-an	—	—	—
k/ch	歩く	akk-an	akk-o	akk-ī	akk-una
k/ch	解く	pukk-an	pukk-o	pukk-ī	pukk-una
k/ch	沈む	shikk-yan	—	—	—
k/j	行く	ik-yan	ik-yo	ik-i	ik-yuna

表 9 動詞活用語例 (クラスごと) ④

	語幹分類	D	D	D	E	E
クラス	意味	非過去 1	非過去 2	不定形	過去 1	過去 2
t/cch	持つ	much-un	—	much-i	mucch-a	mucch-i
t/cch	待つ	mach-un	—	mach-i	macch-a	macch-i
t/cch	勝つ	kach-un	—	kach-i	kacch-a	kacch-i
s/sh	干す	push-un	—	push-i	push-a	push-i
s/sh	治す	noosh-un	—	noosh-i	noosh-a	noosh-i
s/sh	隠す	hakush-un	—	hakush-i	hakush-a	hakush-i
s/sh	落とす	utīsh-un	—	usīsh-i	utīsh-a	utīsh-i
s/sh	壊す	k'esh-un	—	k'esh-i	k'esh-a	k'esh-i
s/sh	移す	nawash-un	—	nawash-i	nawash-a	nawash-i
s/sh	降ろす	urush-un	—	urush-i	urush-a	urussh-i
s/sh	生む	nash-un	—	nash-i	nash-a	nash-i
n/j	死ぬ	shin-yun	—	shin-i	shij-a	shij-i
k/sh	焼く	yak-yun	—	yak-i	yash-a	yash-i
k/sh	置く	uk-yun	—	uki	ush-a	ush-i
k/sh	梳かす	saak-yun	—	saak-i	saash-a	saash-i
k/sh	掃く	pok-yun	—	pok-i	posh-a	posh-i
k/sh	招く	mank-yun	—	mank-i	mansh-a	mansh-i
k/sh	沈む	shink-yun	—	shink-i	shinsh-a	shinsh-i
k/ch	聞く	kik-yun	—	kik-i	kich-a	kich-i
k/ch	弾く	pik-yun	—	pik-i	pich-a	pich-i
k/ch	突く	sīk-yun	—	sīk-i	sīch-a	sīch-i
k/ch	吹く	puk-yun	—	puk-i	puch-a	puch-i
k/ch	歩く	akk-yun	—	akk-i	acch-a	acch-i
k/ch	解く	pukk-yun	—	pukk-i	pucch-a	pucch-i
k/ch	沈む	shikk-yun	—	shikk-i	shicch-a	shicch-i
k/j	行く	ik-yun	—	ik-i	ij-a	ij-i

表 10 動詞活用語例（クラスごと）⑤

	語幹分類	A	B	B	C
クラス	意味	否定	意志	命令	禁止
g/j	漕ぐ	hug-an	hug-o	hug-ī	hug-una
g/j	泳ぐ	oog-an	oog-o	oog-ī	oog-una
g/j	掴む	ming-yan	ming-yo	ming-i	ming-yuna
r/t	割る	war-an	war-o	war-ī	wa-nna
r/t	借りる	har-an	har-o	har-ī	ha-nna
r/t	なる	nar-an	nar-o	nar-ī	na-nna
r/t	売る	ur-an	ur-o	ur-ī	u-nna
r/t	作る	sukur-an	sukur-o	sukur-ī	suku-nna
r/t	移る	nawar-an	nawar-o	nawar-ī	nawa-nna
r/t	吠える	bur-an	—	bur-ī	bu-nna
r/t	降る	pur-an	—	—	—
r/t	踊る	wudur-an	wudur-o	wudur-ī	wudu-nna
r/t	戻る	modor-an	modor-o	modor-ī	modo-nna
r/t	もらう	yir-an	yir-o	yir-i	yi-nna
VVr/VVt	通る	tuur-an	tuur-o	tuur-ī	tu-nna
VVr/VVt	(人を) 送る	uur-an	uur-o	uur-ī	u-nna
VVr/VVt	治る	noor-an	—	—	—
VVr/VVt	登る	noor-an	noor-o	noor-ī	no-nna
VVr/VVt	はかる	paar-an	paar-o	paar-ī	pa-nna
ir/ish	煮る	nir-an	nir-o	nir-i	ni-nna
ir/ish	座る	yir-an	yir-o	yir-i	yi-nna
ir/ich	走る	pashir-an	pashir-o	pashir-i	pashi-nna
k'ir/kich	着る	k'ir-an	k'ir-o	k'ir-i	k'i-nna
k'ir/kich	生きる	ik'ir-an	ik'ir-o	ik'ir-i	—
ir/icch	入る	ir-an	ir-o	ir-i	i-nna
ir/icch	要る	ir-an	—	—	—

表 11 動詞活用語例（クラスごと）⑥

	語幹分類	D	D	D	E	E
クラス	意味	非過去 1	非過去 2	不定形	過去 1	過去 2
g/j	漕ぐ	hug-yun	—	hug-i	huj-a	huj-i
g/j	泳ぐ	oog-yun	—	oog-i	ooj-a	ooj-i
g/j	掴む	ming-yun	—	ming-i	minj-a	minj-i
r/t	割る	war-yun	—	war-i	wat-a	wat-ī
r/t	借りる	har-yun	—	har-i	hat-a	hat-ī
r/t	なる	nar-yun	—	nar-i	nat-a	nat-ī
r/t	売る	ur-yun	ur-yuri	ur-i	ut-a	ut-ī
r/t	作る	sukur-yun	—	sukur-i	suku-ta	sukut-ī
r/t	移る	nawaryun	—	nawar-i	nawat-a	—
r/t	吠える	bur-yun	—	bur-i	but-a	but-ī
r/t	降る	pur-yun	—	—	put-a	—
r/t	踊る	wudur-yun	—	wudur-i	wudu-ta	—
r/t	戻る	modor-yun	—	modor-i	modo-ta	—
r/t	もらう	yir-yun	yir-yuri	yir-i	yit-a	yit-ī
V _i V _{ir} /V _i V _{it}	通る	tuur-yun	—	tuur-i	tuut-a	tuut-ī
V _i V _{ir} /V _i V _{it}	（人を）送る	uur-yun	—	uur-i	uut-a	uut-ī
V _i V _{ir} /V _i V _{it}	治る	noor-yun	—	noor-i	noot-a	noot-ī
V _i V _{ir} /V _i V _{it}	登る	noor-yun	—	noor-i	noot-a	noot-ī
V _i V _{ir} /V _i V _{it}	はかる	paar-yun	—	paar-i	paat-a	paat-ī
ir/ish	煮る	nir-yun	—	nir-i	nish-a	nish-i
ir/ish	座る	yir-yun	—	yir-i	yish-a	yish-i
ir/ich	走る	pashir-yun	—	pashir-i	pashich-a	pashich-i
k'ir/kich	着る	k'ir-yun	—	k'ir-i	kich-a	kich-i
k'ir/kich	生きる	ik'ir-yun	—	ik'ir-i	ikich-a	ikich-i
ir/icch	入る	ir-yun	—	ir-i	icch-a	icch-i
ir/icch	要る	ir-yun	—	ir-i	icch-a	icch-i

表 12 動詞活用語例（クラスごと）⑦

	語幹分類	A	B	B	C
クラス	意味	否定	意志	命令	禁止
bir/pich	括る	k'ubir-an	k'ubir-o	k'ubir-i	k'ubi-nna
bur/put	被る	habur-an	habur-o	habur-ī	habu-nna
bur/put	あぶる	abur-an	abur-o	abur-ī	abu-nna
bur/put	絞る	shibur-an	shibur-o	shibur-ī	shibu-nna
bur/put	吸う	shibur-an	shibur-o	shibur-ī	shibu-nna
bur/put	眠る	nībur-an	nībur-o	nībur-ī	nību-nna
tsīr/sīt	分かる	utsīr-an	—	—	—
tsīr/sīt	（脚が）つる	tsīr-an	—	—	—
zīr/sīt	えぐる	kaazīr-an	kaazīr-o	kaazīr-ī	kaazi-nna
gir/kich	握る	nigir-an	nigir-o	nigir-i	nigi-nna
gir/kich	沸騰する	tagir-an	—	—	—
gur/kut	回る	mugur-an	mugur-o	mugur-ī	mugu-nna
gur/kut	蹴る	hīttagur-an	hīttagur-o	hīttagur-ī	hīttagu-nna
or/osh	召し上がる	misho-ran	misho-ro	misho-rī	misho-nna
or/osh	眠る（尊敬）	yasīoran	—	yasīorī	yasīo-nna
oor/oosh	行く／来る（尊敬）	oo-ran	oo-ro	oo-rī	o-nna
oor/oot	居る（尊敬）	oo-ran	oo-ro	oo-rī	o-nna
V	出る	iji-ran	iji-ro	iji-rī	iji-nna
V	しまう	haji-ran	haji-ro	haji-rī	haji-nna
V	逃げる	pingi-ran	pingi-ro	pingi-rī	pingi-nna
V	投げる	nagī-ran	nagī-ro	nagī-rī	nagī-nna
V	外す	pazī-ran	pazī-ro	pazī-rī	pazī-nna
V	降りる	urī-ran	urī-ro	urī-rī	urī-nna
V	落ちる	utī-ran	—	—	—
V	捨てる	sītī-ran	—	—	—
V	教える	yusī-ran	yusī-ro	yusī-rī	yusī-nna

表 13 動詞活用語例（クラスごと）⑧

	語幹分類	D	D	D	E	E
クラス	意味	非過去 1	非過去 2	不定形	過去 1	過去 2
bir/pich	括る	k'ubir-yun	—	k'ubir-i	k'upich-a	k'upich-i
bur/put	被る	habur-yun	—	habur-i	haput-a	haput-i
bur/put	あぶる	abur-yun	—	abur-i	aput-a	aput-i
bur/put	絞る	shibur-yun	—	shibur-i	shiput-a	—
bur/put	吸う	shibur-yun	—	shibur-i	shiput-a	—
bur/put	眠る	nībur-yun	—	nībur-i	nīput-a	nīputī
tsīr/sīt	分かる	utsīr-yun	—	utsīr-i	usīt-a	usīt-i
tsīr/sīt	（脚が） つる	tsīr-yun	—	tsīr-i	sīt-a	sīt-i
zīr/sīt	えぐる	kaazīr-yun	—	kaazīr-i	kaasīt-a /kaazīt-a	kaasīt-i /kaazīt-i
gir/kich	握る	nigir-yun	—	nigir-i	nikich-a	nikich-i
gir/kich	沸騰する	tagir-yun	—	tagir-i	takich-a	takich-i
gur/kut	回る	mugur-yun	—	mugur-i	mukut-a	mukut-i
gur/kut	蹴る	hīttagur-yun	—	hīttagur-i	hīttakut-a	hīttakut-i
or/osh	召し上がる	misho-n	—	misho-i	mishosh-a	mishosh-i
or/osh	眠る（尊敬）	yasīo-n	—	yasīo-i	yasīosh-a	yasīosh-i
oor/oosh	行く／来る（尊敬）	oo-n	—	oo-i	oosh-a	oosh-i
oor/oot	居る（尊敬）	oo-n	—	oo-i	oo-ta	oo-tī
V	出る	iji-n	—	iji	iji-ta	iji-tī
V	しまう	hiaji-n	—	haji	haji-ta	haji-tī
V	逃げる	ping-n	—	pingi	pingi-ta	pingi-tī
V	投げる	nagī-n	—	nagī	nagī-ta	nagī-tī
V	外す	pazī-n	—	pazī	pazī-ta	pazī-tī
V	降りる	urī-n	—	urī	urī-ta	urī-tī
V	落ちる	utī-n	—	utī	utī-ta	utī-tī
V	捨てる	sītī-n	sītī-ri	—	sīt-ta	sītī-tī
V	教える	yusī-n	—	yusī	yusī-ta	yusī-tī

表 14 動詞活用語例（クラスごと）⑨

	語幹分類	A	B	B	C
クラス	意味	否定	意志	命令	禁止
V	破れる	yaburī-ran	—	—	—
V	割れる	warī-ran	—	—	—
V	くれる	k'urī-ran	—	—	—
V	覚める	sau-ran	—	—	—
V	溜める	tau-ran	tau-ro	tau-rī	tau-nna
V	浴びる	au-ran	au-ro	au-rī	au-nna
V	覚える	obē-ran	obē-ro	obē-rī	—
V	育てる	podē-ran	—	podē-rī	—
V _i V _i	開ける	y'ee-ran	y'ee-ro	y'ee-rī	y'e-nna
V _i V _i	痩せる	yee-ran	yee-ro	yee-rī	ye-nna
V _i V _i	燃える	mēē-ran	—	—	—
V _i V _i	分ける	wēē-ran	wēē-ro	wēē-rī	wē-nna
V _i V _i	探す	tuu-ran	tuu-ro	tuu-rī	tu-nna
V _i V _i	染める	suu-ran	suu-ro	suu-rī	su-nna
V _i V _i	褒める	huu-ran	huu-ro	huu-rī	hu-nna
V _i V _i	起きる	uu-ran	uu-ro	uu-rī	u-nna
V _i V _i	換える	hēē-ran	hēē-ro	hēē-rī	hē-nna
V _i V _i	肥える	k'wēē-ran	—	k'wēē-rī	k'wē-nna
V _i V _i	植える	uu-ran	uu-ro	uu-rī	u-nna
特殊	居る	wu-ran	wu-ro	wu-rī	wu-nna
特殊	ある／ない	nēn	—	—	—
特殊	する	sī-ran	sī-ro	sī-rī	sī-nna
特殊	言う	y'-an	y'oo	ii	y'-una
特殊	見る	ny-an	nyoo	nii	ny-una
特殊	来る	ku-n	kuu	kuu	k-una

表 15 動詞活用語例（クラスごと）⑩

	語幹分類	D	D	D	E	E
クラス	意味	非過去 1	非過去 2	不定形	過去 1	過去 2
V	破れる	yaburī-n	—	yaburī	yaburī-ta	yaburī-tī
V	割れる	warī-n	—	warī	warī-ta	warī-tī
V	くれる	k'urī-n	k'urī-ri	—	k'urī-ta	k'urī-tī
V	覚める	sau-n	—	sau	sau-ta	sau-tī
V	溜める	tau-n	—	tau	tau-ta	tau-tī
V	浴びる	au-n	—	au	auta	au-tī
V	覚える	obē-n	—	obē	obē-ta	obē-tī
V	育てる	podē-n	—	podē	pode-ta	podē-tī
V _i V _i	開ける	y'ee-n	—	y'ee	y'ee-ta	y'ee-tī
V _i V _i	痩せる	yee-n	—	yee	yee-ta	yee-tī
V _i V _i	燃える	mēē-n	—	mēē	mēē-ta	mēē-tī
V _i V _i	分ける	wēē-n	—	wēē	wēē-ta	wēē-tī
V _i V _i	探す	tuu-n	—	tuu	tuu-ta	tuu-tī
V _i V _i	染める	suu-n	—	suu	suu-ta	suu-tī
V _i V _i	褒める	huu-n	—	huu	huu-ta	huu-tī
V _i V _i	起きる	uu-n	—	uu	uu-ta	uu-tī
V _i V _i	換える	hē-n	—	hēē	hēē-ta	hēē-tī
V _i V _i	肥える	k'wē-n	—	k'wēē	k'wēē-ta	k'wēē-tī
V _i V _i	植える	u-n	—	uu	uu-ta	uu-tī
特殊	居る	wu-n	wuur-i	wur-i	wu-ta	wu-tī
特殊	ある／ない	a-n	aar-i	ar-i	a-ta	a-tī
特殊	する	sh-un	—	shii	sh-a	shi
特殊	言う	y'-un	—	ii	ish-a	ish-i
特殊	見る	n-yun	—	nii	nish-a	nish-i
特殊	来る	k-yun	k-yuuri	kii	kich-a	kich-i

表に示した接辞の異形態の分布は以下(10)の通りである。その他の接辞は、初頭音が同じである接辞に準じた異形態を示す^{vii}。

- (10) a. 否定—in/ik/ink/ing 語幹：yan、それ以外の子音語幹：an、Iタイプ母音語幹：n、
それ以外の母音語幹：ran
- b. 命令—in/ik/ink/ing/ir 語幹：i、それ以外の子音語幹：i、Iタイプ u 語幹：i、
Iタイプのその他の母音語幹：u、それ以外の母音語幹：ri、
- c. 意志—in/ik/ink/ing 語幹：yo、それ以外の子音語幹：o、Iタイプ母音語幹：o、
それ以外の母音語幹：ro
- d. 禁止—in/ik/ink/ing 語幹：yuna、s 語幹：ina、それ以外の子音語幹：una、
Iタイプ母音語幹：una、それ以外の母音語幹：nna
- e. 非過去(1)—sh/ch 語幹：un、それ以外の子音語幹：yun、Iタイプ母音語幹：yun、
それ以外の母音語幹：n
- f. 不定—子音語幹：i、I/IIIタイプ母音語幹：i、それ以外の母音語幹：φ
- g. 過去(1)—子音語幹：a、母音語幹：ta
- h. 過去(2)—sh/ch/j 語幹：i、それ以外の子音語幹：i、母音語幹：ti、

3.2 動詞の構造と活用語例

拘束形式に付き語を閉じうる接辞を屈折接辞と認定し、活用形の構造を示すと、以下(11)～(13)のようになる。

(11) 定動詞 (主節及び単文の主動詞)

- a. 語幹 — ムード接辞
- b. 語幹 — 極性接辞
- c. 語幹 — (極性接辞) — テンス接辞
- d. 語幹 — (極性接辞) — テンス接辞 — ムード接辞

(12) 連体動詞 (名詞の修飾部)

- a. 語幹 — (極性接辞) — (テンス接辞) — 連体接辞
- b. 語幹 — 連体接辞

(13) 副動詞 (動詞/節の修飾部)

- a. 語幹 — 副動詞接辞
- b. 語幹 — (極性接辞) — 副動詞接辞
- c. 語幹 — (極性接辞) — (テンス接辞) — 副動詞接辞

以下、表 16 に a/d クラスの ka-「食べる」と V クラスの urī-「降りる」を例に活用語例を示す。

表 16 動詞活用語例（構造・接辞ごと）

機能ラベル		日本語訳	食べる	降りる
命令		～しろ	ka-u	uri-rī
禁止		～するな	ka-una	uri-nna
意志		～しよう	ka-o	uri-ro
直説	非過去 1	～する	ka-yun	uri-n
	非過去 2	～する	ka-yuri	uri-ri
	否定（非過去）	～しない	ka-n	uri-ran
	過去 1	～した	kad-a	uri-ta
	過去 2	～した	kad-ī	uri-tī
	否定-過去 1	～しなかった	ka-n-ta	uri-ran-ta
	否定-過去 2	～しなかった	ka-n-tī	uri-ran-tī
推量	非過去	～するだろう	ka-yu-ro	uri-ro
	過去	～しただろう	kad-a-ro	uri-ta-ro
	否定-過去	～しなかっただろう	ka-n-ta-ro	uri-ran-ta-ro
疑問詞疑問	非過去	～する	ka-yu-rye	uri-rye
連体 1	非過去	～する	ka-yu-n	uri-n
	否定（非過去）	～しない	ka-n	uri-ran
	過去	～した	kad-a-n	uri-ta-n
	否定-過去	～しなかった	ka-n-ta-n	uri-ran-ta-n
連体 2		～する	ka-o	uri-ro
不定		～し	ka-i	uri
同時		～しながら	ka-igacchana	uri-gacchana
目的		～しに	ka-iga	—
期間		～するあいだ	ka-oda	—
状況		～したら	kad-attu	uri-tattu
中止		～して	kad-ī	uri-tī
	否定	～せずに	ka-a-zī	uri-ra-zī
並列		～したり	kad-ari	uri-tari
	否定	～しなかったり	ka-n-tari	uri-ran-tari
条件	非過去	～すれば	ka-uba	uri-rība
	否定（非過去）	～しなければ	ka-n-ba	uri-ran-ba
	過去	～したら	kad-a-rība	uri-ta-rība
	否定-過去	～しなかったら	ka-n-ta-rība	uri-ran-ta-rība

接辞にさらに接辞が後続する場合の異形態について、語幹に直接後続する場合と異なる点は、以下(14)の通りである。

- (14) a. 過去接辞／並列接辞は、否定接辞のあとで、初頭に t を持つ異形態で現れる。
 b. 中止接辞は否定接辞のあとで zi で現れる。
 c. 非過去接辞は、ムード接辞／連体接辞／条件接辞の前では、末尾の n/ri が削除された異形態で現れる。よって、タイプ I 以外の母音語幹では \varnothing になる。
 d. 否定接辞は、連体接辞／中止接辞の前では末尾の n を伴わない異形態で現れる。
 a/d クラスでは連体接辞の前では \varnothing 、中止接辞の前では a で現れる。

以下に、動詞の活用形を含む文例を示す。

(15) 動詞：命令形

un k'washi ka-u.
 この菓子 食べる-imp
 この菓子を食べろ。

(16) 動詞：禁止形

nuu=yashima ka-una.
 何=も 食べる-PROH
 何も食べるな。

(17) 動詞：意志形

un k'washi=ya wa-ttari=shi ka-o.
 この菓子=TOP 1-DU=INST 食べる-INT
 この菓子は私達 2 人で食べよう。

(18) 動詞：非過去形 (1)

napa=n c'hu=ya nabura ka-yun.
 那覇=GEN 人=TOP ヘチマ 食べる-NPST
 沖縄の人はヘチマを食べる。

(19) 動詞：非過去形 (2)

yanaka ka-yuri=ya.
 たくさん 食べる-NPST=SFP
 たくさん食べるなあ。

(20) 動詞：否定（非過去）形

yagi=ya kabi=ba=ya ka-n.
 ヤギ=TOP 紙=ACC=TOP 食べる-NEG.NPST
 ヤギは紙は食わない。

(21) 動詞：過去形（1）

nēsari=ya yaa=nanti kad-a.
 朝食=TOP 家=LOC 食べる-PST
 朝食は家で食べた。

(22) 動詞：過去形（2）

y'a an k'washi kad-ī(=na)?
 2.SG あの 菓子 食べる-PST(=YNQ)
 お前あの菓子食べた？

(23) 動詞：過去形（2）

an k'washi taru=ga kad-ī(=urī)?
 あの 菓子 誰=NOM 食べる-PST(=WHQ)
 あの菓子誰が食べた？

(24) 動詞：否定過去形（1）

ak'ia=ya mun ka-n-ta=ga.
 アキラ=TOP ご飯 食べる-NEG-PST=SFP
 アキラはご飯を食べなかったよ。

(25) 動詞：否定過去形（2）

y'a un k'washi ka-n-tī?
 2.SG この 菓子 食べる-NEG-PST
 お前このお菓子食べなかった？

(26) 動詞：否定過去形（2）

taru=ga ka-n-tī=urī?
 誰=NOM 食べる-NEG-PST=WHQ
 誰が食べなかった？

(27) 動詞：非過去推量形

un k'washi ka-yu-ro.
 この 菓子 食べる-NPST-INFR
 このお菓子を食べるだろう。

(28) 動詞：過去推量形

n'aa mun ka-da-ro.
 もう ご飯 食べる-PST-INFR
 もうご飯を食べただろう。

(29) 動詞：否定過去推量形

mun ka-n-ta-ro.
 ご飯 食べる-NEG-PST-INFR
 ご飯を食べなかつたろう。

(30) 動詞：非過去疑問詞疑問形

un k'washi=ya taru=ga ka-yu-rye?
 この 菓子=TOP 誰=NOM 食べる-NPST-WHQ
 このお菓子は誰が食べる？

(31) 動詞：非過去連体形 (1)

y'a=ga ka-yu-n k'washi=ya duri=uri?
 2.SG=NOM 食べる-NPST-ADN 菓子=TOP どれ=WHQ
 お前が食べる菓子はどれ？

(32) 動詞：否定（非過去）連体形 (1)

k'washi ka-n c'hu=ya taru=uri?
 菓子 食べる-NEG.NPST.ADN 人=TOP 誰=WHQ
 菓子を食べない人は誰？

(33) 動詞：過去連体形 (1)

y'a=ga kad-a-n k'washi=ya duri=uri?
 2.SG=NOM 食べる-PST-ADN 菓子=TOP どれ=WHQ
 お前が食べた菓子はどれ？

(34) 動詞：否定過去連体形 (1)

k'washi ka-n-ta-n c'hu=ya taru=uri?
 菓子 食べる-NEG-PST-ADN 人=TOP 誰=WHQ
 菓子を食べなかつた人は誰？

(35) 動詞：連体形 (2)

y'a=ga doku=chi y'-an-ta-riiba abuni ka-o pazi
 2.SG=NOM 毒=QUOT 言う-NEG-PST-COND あやうく 食べる-ADN はず
 お前が毒だと言わなければ危なく食べるどころだった。

(36) 動詞：連体形 (2)

abunī ya-yu-n poro=chi ir-o pazi.
 あやうく 痛い-NPST-ADN 風呂=ALL 入る-ADN はず
 あやうく熱湯風呂に入るところだった。

(37) 動詞：連体形 (2)

nada=nu uti-ro=gari yuruk'ud-a.
 涙=NOM 落ちる-ADN=LMT 喜ぶ-過去
 涙が落ちるほど喜んだ。

(38) 動詞：連体形 (2)

un posha=ya udurunk-o=gari k'iri-ri.
 この 包丁=TOP 驚く-ADN=LMT 切れる-NPST
 この包丁は驚くほど切れる。

(39) 動詞：不定形

ka-i=daka si-ran.
 食べる-INF=ADD する-NEG.NPST
 食べもしない。

(40) 動詞：同時形

aki'ra=tu mun ka-igacchana panashi sha.
 アキラ=COM ご飯 食べる-SIM 話 する.PST
 アキラとご飯を食べながら話をした。

(41) 動詞：目的形

nazē=chi mun ka-iga ik-yo.
 名瀬=ALL ご飯 食べる-PURP 行く-INT
 名瀬にご飯を食べに行こう。

(42) 動詞：期間形

ka-oda macch-ur-ī.
 食べる-あいだ 待つ-PROG-IMP
 食べるあいだ待っている。

(43) 動詞：状況形

kad-attu wata+yaburī sha.
 食べる-CIRC 腹+壊れる-INF する.PST
 食べたらお腹を壊した。

(44) 動詞：中止形

(maya=nu) y'u kad-ī sugu pingi-ta.
 (猫=NOM) 魚 食べる-MED すぐ 逃げる-PST
 (猫が) 魚を食って、すぐに逃げた。

(45) 動詞：否定中止形

p'an=ya ka-a-zī gyuunyuu=bari nud-at-a-n=do.
 パン=TOP 食べる-NEG-MED 牛乳=だけ 飲む-RES-PST-NMLZ=ASSR
 パンは食べずに、牛乳だけ飲んであったよ。

(46) 動詞：列挙形

kad-ari nud-ari sī-rība nudī=nu ya-yun.
 食べる-LIST 飲む-LIST する-COND 喉=NOM 痛い-NPST
 食べたり飲んだりすると喉が痛い。

(47) 動詞：条件形

mun ka-uba podē-kka.
 ご飯 食べる-NPST.COND 育つ-NPST.SFP
 ご飯を食べたら大きくなるよ。

(48) 動詞：否定条件形

ka-m-ba dai podē-k'ir-an=do.
 食べる-NEG-COND 大きく 育つ-POT-NEG=ASSR
 食べないと大きくなれないよ。

(49) 動詞：過去条件形

kad-a-rība hēkku nību-rī.
 食べる-PST-COND 早く 眠る-IMP
 食べたなら早く寝ろ。

(50) 動詞：否定過去条件形

sak'i ka-n-ta-rība n'aa ka-u.
 さっき 食べる-NEG-PST-COND 今 食べる-IMP
 さっき食べなかったなら今食べろ。

4 形容詞

4.1 形容詞の形態統語的特徴

形容詞について、以下(51)に示すように、大部分は基本的な語形の末尾が ka である。現時点で見つかっている末尾が ka 以外の例は(52)に示したもののみである(上野 1997 に

も同様の指摘がある)。

(51) taaka 「高い」、c’huuka 「強い」、pëëka 「はやい」、yasika 「安い」、ikiraka 「少ない」、
pooraka 「嬉しい」、uturuka 「怖い」

(52) yiccha 「良い」、pusha 「欲しい」、wassa 「悪い」、makisa～makika 「大きい」

上記の基本的な形で述語、副詞的にも用いられる (例(53),(54)参照)。活用が限られており (非過去接辞、ムード接辞、理由形接辞-nu^{viii}、連体形接辞-n/-(r)(y)o のみ、例(55)～(60)参照)、相当する活用形がない場合は、助動詞 ar-が後続し、助動詞が (存在動詞 ar-に準じて) 活用する (例 61～参照)。

(53) 形容詞：基本形 (述語)

taroo=ya pagi=nu pëëka.
太郎=TOP 足=GEN 速い
太郎は足が速い。

(54) 形容詞：基本形 (動詞修飾)

napun pëëka pashi-ri.
もっと 早く 走る-IMP
もっと早く走れ。

(55) 形容詞：非過去形 (2)

wan=ya zīn=nu pusha-ri
1.SG=TOP 金=NOM 欲しい-NPST
私はお金が欲しい。

(56) 形容詞：非過去形 (2)

ak’ira=ya ututu=nika tēē=nu taaka-ri.
アキラ=TOP 弟=CMPR 背丈=NOM 高い-NPST
アキラは弟より背が高い。

(57) 形容詞：非過去推量形

an m’a=ya pashir-i=nu pëëka-ro.
あの ウマ=TOP 走る-NMLZ=NOM 早い-INF
あのウマは走りが速いだろう。

(58) 形容詞：非過去疑問詞疑問形

un naa=nantī taru=ga pashir-i=nu pēēka-rye?
 この 中=LOC 誰=NOM 走る-NMLZ=NOM 早い-NPST.WHQ
 この中でだれが走りが早い？

(59) 形容詞：理由形

taroo=ya pagi=nu pēēka-nu wakya=shi=ya usīk-ik'ir-an.
 太郎=TOP 足=GEN 速い-CSL 私.APPR=INST=TOP 追いつく-ABL-NEG
 太郎は足が速くて私なんかでは追いつけない。

(60) 形容詞：非過去連体形 (1)

pasin-i=nu pēēka-n c'hu=nu onaoka.
 走る-NMLZ=GEN 速い-ADN 人=NOM うらやましい
 走りが速い人がうらやましい。

(61) 形容詞：連体形 (2)

asīka-ro uchi ka-u.
 熱い-ADN うち 食べる-IMP
 熱いうちに食べろ。

(62) 形容詞：連体形 (2)

inaka-ro uchi=ya ton yanaka ka-yu-ta-n
 小さい-ADN うち=TOP サツマイモ たくさん 食べる-HAB-PST-NMLZ
 ja=ga.
 COP.NPST=AC
 小さい頃はサツマイモをたくさん食べていたんだが。

(63) 形容詞＋助動詞：否定形

jiroo=ya pashir-i=ya asshi=garī pēēka nēn=do.
 ジロウ=TOP 走る-NMLZ=TOP そう=まで 速い AUX.NEG.NPST=ASSR
 ジロウはそれほど足が速くないよ。

(64) 形容詞＋助動詞：過去形 (1)

mukashi=ya wan=daka pashir-i=nu pēēka a-ta.
 昔=TOP 私=ADD 走る-NMLZ=NOM 速い AUX-PST
 昔は私も走りが速かった。

(65) 形容詞＋助動詞：条件形

napun pasir-i=nu pëëka ar-iba usik-yu-ta-n=ba.
 もっと 走る-NMLZ=NOM 早い AUX-NPST.COND 追いつく-CF-PST-ADN=AC
 もっと走りが早ければ追いついたのに。

(66) 形容詞＋助動詞：列举形

taroo=ya uu-n=nu pëëka at-ari yodeka at-ari sh-un.
 タロウ=TOP 起きる-NPST.NMLZ=NOM 早い AUX-LIST 遅い AUX-LIST する-NPST
 タロウは起きるのが早かったり遅かったりする。

4.2 ナ形容詞相当の形式について

ナ形容詞（形容動詞／第2形容詞）相当のものとして、連体接辞-nan をとって名詞修飾に用いられる形式が見られる。述語では名詞に準じた振る舞いを示し、コンピュータが後続しうる（以下例参照）。

(67) 形容詞（ナ形容詞相当）：連体形

uri=ya dak'u-nan shigutu ja.
 これ=TOP 楽-ADN 仕事 COP.NPST
 これは楽な仕事だ。

(68) 形容詞（ナ形容詞相当）＋コンピュータ：非過去形

un shigutu=ya dak'u ja.
 この 仕事=TOP 楽 COP.NPST
 この仕事は楽だ。

(69) 形容詞（ナ形容詞相当）＋コンピュータ：否定（非過去）形

un shigutu=ya dak'u a-ran=do.
 この 仕事=TOP 楽 COP-NEG=ASSR
 この仕事は楽ではないよ。

(70) 形容詞（ナ形容詞相当）＋コンピュータ：過去形（1）

mae=nu shigutu=ya dak'u a-ta.
 前=GEN 仕事=TOP 楽 COP-PST
 前の仕事は楽だった。

(71) 形容詞（ナ形容詞相当）＋コンピュータ：非過去推量形

cigi=nu shigutu=ya kishitu dak'u dar-o.
 次=GEN 仕事=TOP きっと 楽 COP-INFR
 次の仕事はきっと楽だろう。

補足資料 会話例

本節では、方言による会話の例を報告する。1つ目は、友人の家に鋤を借りにいった場面の会話の例、2つ目は、鋤を返しに来た場面の会話の例である。

- (1) α: k-yoor-o k-yoor-o
 来る-POL-INT 来る-POL-INT
 ごめんください、ごめんください。
- (2) β: hoo nuga dar-yo-n?
 はい なぜ COP-POL-NPST
 はい、なんですか？
- (3) α: yee. wan=ya na-kya yaa=chi
 はい 1.SG=TOP 2.HON-PL 家=ALL
 はい。わたしはお宅に
- (4) α: soodan s-iga k-yoo-tan=ba
 相談 する-PURP 来る-POL-PST=AC
 相談しに来たんですが。
- (5) β: nuga dar-yo-kkēi?
 なぜ COP-POL-NPST.DUB
 为什么呢。
- (6) α: wa-kya=n k'wa=nu huu gakkoo yasīmi=cch-un=kana
 1-PL=GEN 子=NOM 今日 学校 休み=QUOT.言う-NPST=CSL
 うちの子が今日学校休みというから
- (7) α: patē asika-oo=chi oot-i shan=ba
 畑 耕す-INT=QUOT 思う-MED する.PST=AC
 畑を耕そうと思ったんだけど
- (8) α: wa-kya=ya toogē=nu t'aatsi=shika nee-zī
 1-PL=TOP 鋤=NOM 2つ=しか ある.NEG-MED
 うち鋤が2つしかなくて
- (9) α: k'wa=n tau toogē=nu nee-zī
 子=GEN ため 鋤=NOM ある.NEG-MED
 子どもの分鋤がなくて

- (10) α: toogë har-iga k-yoo-ta-n ja=ga
 鋤=NOM 借りる-PURP 来る-POL-PST-NMLZ COP.NPST=AC
 鋤を借りに来たんですが
- (11) α: toogë=nu ar-ība har-ash-i k'urī-ran=kēi
 鋤=NOM ある-COND 借りる-CAUS-MED BEN-NEG.NPST=DUB
 鋤があったら貸してくれませんかね。
- (12) β: toogë=tu t'aamata=tu a-n ja=ga
 鋤=COM 二股(の鋤)=COM ある-NPST.NMLZ COP.NPST=AC
 鋤と二股の鋤とあるのだけれど
- (13) β: durī=ga iccha-kkēi?
 どれ=NOM 良い-NPST.DUB
 どちらがいいかな。
- (14) α: nar-ība=ya toogë=nu ar-ība=ya
 COP-COND=TOP 鋤=NOM ある-NPST.COND=TOP
 それなら鋤があれば
- (15) α: toogë har-ash-i k'urī-shor-ë
 鋤 借りる-CAUS-MED BEN-HON-IMP
 鋤を貸してください。
- (16) β: assa toogë mucch-ij-i yanaka patë
 CONJ 鋤 持つ-ていく-MED たくさん 畑
 では鋤を持って行って、たくさん畑を
- (17) β: asikaw-ash-un=nishi shi oor-ī
 耕す-CAUS-NPST=MAN する.MED 来る.HON-IMP
 耕させるようにしてきてください。
- (18) α: toogë daa=nantī ar-yo-kkēi?
 鋤 どこ=LOC ある-POL-NPST.DUB
 鋤はどこにありますかね。
- (19) β: sooko=nantī a-n=kana du=shi tuu-tī
 倉庫=LOC ある-NPST=CSL REFL=INST 探す-MED
 倉庫にあるので自分で探して

- (20)β: mucch-i oor-ī
持つ-MED 行く.HON-IMP
持って行ってください
- (21)α: yaduri yanshiro=nu yaduri-gwa dar-yo-n=ya?
小屋 家の後=GEN 小屋-DIM COP-POL-NPST=SFP
小屋、家の後の小屋ですね。
- (22)β: yaduri-gwa ja=ga
小屋 COP.NPST=SFP
小屋だよ。
- (23)α: assa yaduri=raga du=shi tuu-tī
では 小屋=ABL REFL=INST 探す-MED
では小屋から自分で探して
- (24)α: hat-īk-yun=kana har-ash-i k'urī-shor-ī=yo
借りる-ていく-NPST=CSL 借りる-CAUS-MED BEN-HON-IMP=SFP
借りていくので貸してくださいね。
- (25)β: hai yanaka k'wa=nkya yanaka
はい たくさん 子ども=APPR たくさん
はい、たくさん、子どもなんか、たくさん
- (26)β: sika-uba yiccha-kka
使う-COND 良い-NPST.SFP
使えばいいよ。
- (以降 2 つ目の場面)
- (27)α: k-yoor-o
来る-POL-INT
ごめんください。
- (28)β: nuga dar-yo-kkēi?
なぜ COP-POL-NPST.DUB
为什么呢。

- (29) α: yee piru=nkya arigatosama ar-yoo-ta
 はい 昼=APPR ありがとう COP-POL-PST
 はい、昼はありがとうございました。
- (30) β: ai ai
 いいえ いいえ
 いいえ、いいえ。
- (31) α: na-kya=n toogë=nu okagë=shi yanaaka
 2.HON-PL=GEN 鍬=GEN おかげ=INST たくさん
 お宅の鍬のおかげでたくさん
- (32) α: patë=nu asikaw-att-ï n'aa shigutu=nu dachiash-i
 畑=NOM 耕す-POT-MED もう 仕事=NOM 捗る-MED
 畑が耕せて、もう仕事ははかどって
- (33) α: hagë tasïkar-yoo-ta arigatënan sabak'uri
 INTJ 助かる-POL-PST ありがたい こと
 助かりました。ありがたいこと
- (34) α: hontoni arigatësaa^{ix} ar-yoo-ta
 本当に ありがとう COP-POL-NPST
 本当にありがとうございました。
- (35) β: ai ai asshi=gari=ya kaam-an=ga
 いえ いえ そう=まで=TOP 構う-NEG.NPST=SFP
 いいえ、そうまでは
- (36) β: yaa=chi noot-ï chaa=nunkya nud-ï oor-ï
 家=ALL 上がる-MED 茶=APPR 飲む-MED 行く.HON-IMP
 家に上がってお茶など飲んでいきなさい。
- (37) α: arigatënan panashi ar-i=ya sh-ukka
 ありがたい 話 COP-INF=TOP する-NPST.AC
 ありがたい話ではあるけれど
- (38) α: n'aa ya ij-ï mata yuuban ka-n-ba=ya
 もう 家 行く-MED また 夕飯 食べる-NEG-COND=TOP
 もう、家に行ってもまた夕飯を食べないと

- (39) α: iky-an dar-o
 いく -NEG.NPST.NMLZ COP.NPST-INFR
 いけないだろう。
- (40) α: kīnzuk'u=nu macch-u-n=kana ya ij-i mun=kya
 家族=NOM 待つ-PROG-NPST=CSL 家 行く-MED ご飯=APPR
 家族が待っているのだから家に行ってお飯を
- (41) α: ka-yun=nishi shi mata=nkya maat-ī k-yoo-ro=i
 食べる-NPST=MAN また=APPR 回る-MED 来る-POL-INT=SFP
 食べることにして、また、まわって来ますね。
- (42) α: huu=nkya doomo piru=nkya arigatosama ar-yoo-ta
 今日=APPR どうも 昼=APPR ありがとう COP-POL-PST
 今日はどうもお昼はありがとうございました。
- (43) β: ai ai assa mata yuuji=nu a-n duk'i=ya
 いえ いえ では また 用事=NOM ある-NPST.ADN とき=TOP
 いえいえ、では、また用事があるときは
- (44) β: har-iga kuu=yo
 借りる-PURP 来る.IMP=SFP
 借りに来てね。
- (45) α: arigatēnan un duk'i mata soodan nat-ī k'urī-shor-ē
 ありがたい その とき また 相談 なる-MED BEN-HON-IMP
 ありがたい。その とき、また、相談に乗ってください。

グロス略号一覧

1	first person	一人称	INT	intentional	意志
2	second person	二人称	INTJ	interjection	感動詞
ABL	ablative	奪格	LIST	listing	列挙
AC	adversative conjunction	逆説	LMT	limitative	限界格
ACC	accusative	対格	LOC	locative	所格
ADD	additive	添加	MAN	manner	様態
ADN	adnominal	連体	MED	medial	中止
ALL	allative	方向格	NEG	negation	否定
APPR	approximative	曖昧	NMLZ	nominalizer	名詞化
ASSR	assertive	断定	NOM	nominative	主格
AUX	auxiliary	助動詞	NPST	non-past	非過去
BEN	benefactive	受益	PL	plural	複数
CAUS	causative	使役	POL	polite	丁寧
CF	counterfactual	反事実	POT	potential	可能
CIRC	circumstantial	状況	PROG	progressive	進行
CMPR	comparative	比較	PROH	prohibitive	禁止
COM	comitative	共格	PST	past	過去
COND	conditional	条件	PURP	purposive	目的
COP	copula	コピュラ	QUOT	quotative	引用
CSL	causal	理由	REFL	reflexive	再帰
DIM	diminutive	指小辞	RES	resultative	結果
DU	dual	双数	SFP	sentence final particle	文末助詞
DUB	dubitative	疑念	SIM	simultaneous	同時
GEN	genitive	属格	SG	singular	単数
HAB	habitual	習慣	TOP	topic	主題
HON	honorific	尊敬	WHQ	wh-question	疑問詞疑問
IMP	imperative	命令	YNQ	yes-no question	真偽疑問
INF	infinitive	不定	+		複合境界
INFR	inferential	推量	-		接辞境界
INST	instrumental	具格	=		接語境界
INF	infinitive	不定	+		複合境界

- ⁱ 国土地理院発行の地図データをもとに Thomas Pellard 氏が作成した地図を編集した。
- ⁱⁱ また、先行研究で明示的に言及されていないが、語頭が *VkV* に遡る形式に生じた音変化が佐仁方言と奄美大島北部の他の方言とでは異なっている（例 佐仁方言：[ʔa:ka]「赤い」、[ʔje:n]「開ける」、他方言：[ha:sa~ha:ka]「赤い」、[φɛ̃n]「開ける」）。
- ⁱⁱⁱ 狩俣（2003）は、*ĩ, ä, õ, ě* の4つの鼻母音を音素として立てているが、調査した中で鼻母音を持つのは80代～90代の数人であったと報告している。
- ^{iv} 2017年2月～2019年2月に断続的に行った、佐仁集落出身・在住の安田重照氏（昭和13年生）、安田絹枝氏（昭和18年生）、前田和郎氏（昭和15年生）、前田幸代氏（昭和14年生）への聞き取り調査である。本稿では主に安田重照氏と安田絹枝氏への調査で得たデータを用いている。JSPS 科研費 15K16754、15J02695、及び国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（プロジェクトリーダー|木部暢子）の助成を受けて行った調査のデータを含む。
- ^v 小川（2015）のアルファベット表記に基づく。ただし、*rje[rie]*を加えている。また、文末の音声上の長母音は短母音で表記している。
- ^{vi} I～IVのタイプについて、Iは他方言で子音語幹動詞／強変化動詞として分類されているもののうち *r* 語幹以外のもの、IIは他方言で子音語幹動詞／強変化動詞として分類されている *r* 語幹動詞、IIIは尊敬動詞、IVは他方言で母音語幹動詞／弱変化動詞として分類されているものである。また、A～Eの語幹について、A/B/Cは他方言の基本語幹、Dは連用語幹、Eは音便語幹に対応する。
- ^{vii} ただし、条件接辞が *u* を末尾に持つ語幹につく場合、異形態 *iba* ではなく *uba* が現れる（例：*nu-uba* 飲む-COND「飲めば」）。
- ^{viii} 自由形式につくので助詞と分析する可能性もあるが、形容詞のみにつくため本稿では接辞に分類する。
- ^{ix} *arigatosama aryoota* よりも *arigatësaa aryoota* のほうがより古い佐仁方言独特の表現である。

参考文献

- ・上野善道（1996）「奄美大島佐仁方言のアクセント調査報告—名詞の部」『琉球の方言』20:26-57.
- ・上野善道（1997）「奄美大島佐仁方言のアクセント調査報告—用言の部」『琉球の方言』21:1-42.
- ・小川晋史（編）（2015）『琉球のことばの書き方』東京：くろしお出版.
- ・狩俣繁久（2003）『奄美大島笠利町佐仁方言の音声と語彙』京都：中西印刷.
- ・重野裕美（2014）「北琉球奄美大島佐仁方言の敬語形式」『広島経済大学論集』36(4)：75-85.
- ・重野裕美・白田理人（2018）「北琉球奄美大島笠利佐仁方言の尊敬動詞について」『琉球の方言』42：25-59.
- ・白田理人（2018）「鹿児島県奄美大島佐仁方言」『文化庁委託事業報告書 平成29年度 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』pp. 177-180.

伊平屋方言の形容詞の活用と文法的な形について

目差尚太（琉球大学博士後期課程／日本学術振興会 DC）

1 調査目的

本調査は、伊平屋村方言の言語活動を支える、形容詞の活用形と様々な文法的な形について明らかにすることを目的としている。表記は、簡略的な音声表記と標準語訳に分ける。[]には話者が発話するにあたっての場面設定や前提、単語の省略等を補いとして記入する。

2 調査対象

調査の対象は、A) 終止、連体、連用、条件形に現れる、様々な文法的な形にはどのような形があるか、B) その形の単語づくりとしての用いられ方、2つである。

3 伊平屋方言の形容詞

特性形容詞は、恒常的に存在する人や物の側面的な特徴を表す。状態形容詞は、人の生理的な、あるいは心理的な、一時的な状態を表したり、物や空間の一時的な状態を表す形容詞である。記述は、終止形、非終止（連体形、連用形、条件形）の順に記述していく。

3.1 形容詞の文法的な形

特性形容詞の用例には、「ma:haN（おいしい）」を代表し、状態形容詞の用例には、「hadʒikahaN 恥ずかしい」を代表して用いている。第1と第2の違いは、意味的なものではなく、語構成上の違いである。第2状態形容詞は、調査が十分ではないので、表にはしていない。なお、第1特性形容詞は野甫方言のもので、それ以外は島尻方言のものである。

第1 特性形容詞					肯定		否定	
					非過去	過去	非過去	過去
完結	終止形	平叙	直接	〈断定〉	ma:haN	ma:hataN	ma:ku ne:N	ma:ku ne:NtaN
			間接	〈推量〉	ma:hanu haɟi	ma:hataru haɟi	ma:ku ne:nu haɟi	?
		質問	〈肯否質問〉	ma:hami	ma:ha:ti:	ma:ku neni:	?	
非完結	連体形				ma:hanu	ma:hatanu	ma:ku ne:N	?
	連用形				ma:hanu		ma:ku ne:na	
	条件形	まさめ	原因・理由	ma:hatu	ma:hata <u>tu</u>	ma:ku neN <u>tu</u>	ma:ku ne:Ntatu	
			条件・前提	①ma:haro: ②ma:hataro:		ma:ku neN <u>ko</u> :		
		うらめ	うらめ・ゆずり	ma:hatiN	ma:hataN <u>te</u> N	ma:ku ne:N <u>ti</u> N	ma:ku ne:NtaN <u>te</u> N	

第2 特性形容詞					肯定		否定	
					非過去	過去	非過去	過去
完結	終止形	平叙・直説	直接	〈断定〉	ɖɔ:to:	ɖɔ:to jataN	ɖɔ:to: anaN	ɖɔ:to: araNtaN
			間接	〈推量〉	ɖɔ:to: jaru haɟi	?	?	ɖɔ:to: araNtaru haɟi
		質問	〈肯否質問〉	ɖɔ:to: jaimi	ɖɔ:to: jaimi	?	ɖɔ:to: araNti:	
非完結	連体形				ɖɔ:to:	ɖɔ:to jataN	ɖɔ:to: anaN	?
	連用形				ɖɔ:to:ne:		ɖɔ:to: araNna	
	条件形	まさめ	原因・理由	ɖɔ:to jatu	ɖɔ:to: jaitatu	ɖɔ:to: araNtatu	?	
			条件・前提	ɖɔ:to: jara:		ɖɔ:to: araNro:		
		うらめ	うらめ・ゆずり	ɖɔ:to: jatiN	ɖɔ:to: jatafga	?	?	

第1 状態形容詞				肯定		否定		
				非過去	過去	非過去	過去	
完結	終止形	平叙・直説	直接	〈断定〉	hadʒikahaN	hadʒikahataN	hadʒikaku ne:Nro:	hadʒikaku ne:NtaN
		質問	間接	〈推量〉	?	hadʒikahataN hadʒi	hadʒikaku ne:nu hadʒi	hadʒikakuja ne:Ntanu hadʒi
			質問	〈肯否質問〉	hadʒikahami	hadʒikaharuti:	hadʒikaku ne:ni:	hadʒikaku ne:Nruti
非完結	連体形			hadʒikahanu	hadʒikahataN	hadʒikaku ne:N	?	
	連用形			hadʒikahanu		?		
	条件形	まさめ	原因・理由	hadʒikaha:tu	hadʒikahata:tu	hadʒikaku ne:Ntu	hadʒikaku ne:Ntatu	
			条件・前提	hadʒikaharo:	hadʒikaku ne:Nko:	hadʒikaku ne:Nko:	?	
	うらめ	うらめ・ゆずり	①hadʒikahaʒiga ②hadʒikahataNteN	hadʒikaha:taʒiga	①hadʒikaku ne:Nʒiga ②hadʒikaku ne:NtaNteN	①hadʒikaku ne:Ntaʒiga ②hadʒikaku ne:NtaNteN		

3.1.1 終止形

終止形は、主語で述べられる物に対して、その述べられる物のもつ特性や状態を述べる文の部分＝述語であり、文を完結させる述語の形である。〈断定〉と〈推量〉、〈質問〉と〈疑問〉などの、話し手の陳述的な態度が文によって表現される場合、伊平屋方言の形容詞の終止形には様々な形が見られた。以下に、伊平屋方言の形容詞の終止形の様々な形をあげるが、終止形は、〈断定〉と〈推量〉、〈質問〉と〈疑問〉など、文のモダリティのレベルで記述しておくことにする。

3.1.1.1 平叙文の終止形

伊平屋方言の平叙文の調査には、〈断定〉、〈体験的確認〉、〈意識的確認〉、〈表出(感嘆)〉、〈驚き〉、〈推量〉、〈間接的エヴィデンシャルティ〉をモダリティとして持つ文について取り上げて調査した。しかし、それらのモダリティは、ムードとして分化していないと考えられるので、省略して以下に記述していく。

3.1.1.1.1 〈断定〉

〈断定〉は、現実世界の出来事を経験したり、事実確認したものとして文の対象的な内容にとりこむ、話し手の陳述的な態度である。間接的に確認したかどうかという〈話し手

の確認のし方)という点で、(推量)と主に対立するモダリティである。

●第1 特性形容詞

1)aNmanu gohaNja ma:haNdo:.

お母さんの ごはんは おいしいよ。【肯定・非過去形】

2)Nkafija amanu ʃaŋpuru:N hoNto:ni ma:hataN.

昔は あそこの チャンプルーも 本当に おいしかった。【肯定・過去形】
[今も店はあるが、作る人が変わって味が全く変わってしまった]

3)ne:ne:ga gohaNja ma:ku ne:Ndo:.

お姉ちゃんの ごはんは おいしく ないよ。【否定・非過去形】

4)hoNtorari:amanu irifaja Nkafi ma:ku ne:NtaNdo:.

本当? あそこの チャンプルーは 昔 おいしく なかったよ。【否定・過去形】
[店はまだあるが、作る人が変わって味が全く変わって、今は美味しいということに対して]

●第2 特性形容詞

5)ariga kurumaja dʒo:to: wa: kurumaja dʒo:to: anaN.

あいつの 車は 良いもの。俺の 車は 良いものではない。【肯定・非過去形】

6)me:nu kuruma:N diteN dʒo:to jataN.

前の 車も とても 良い物だった。【肯定・過去形】

7)ariga kurumaja dʒo:to: wa: kurumaja dʒo:to: anaN.

あいつの 車は 良いもの。俺の 車は 良いものではない。【否定・非過去形】

8)anu kurumaja dʒo:to: araNtaNdo:.

あの 車は 上等ではなかったよ。【否定・過去形】

●第1 状態形容詞

9)uNtu he: tsu:nu me:ne abifija hadzikahaN.

こう して 人の 前で 話すのは 恥ずかしい。【肯定・非過去形】

10)ʃiNnu ʃu:nu me:ne: hanafi ʃiʃaN tuʃi, hadzikahataN.

昨日 人の 前で 話を した 時、 恥ずしかった。【肯定・過去形】

11) [恥ずかしくないか聞かれたが、自分は目立ちたがり屋なので]

hadzikaku ne:Nro:.

恥ずしく ないよ。【否定・非過去形】

12) [お祝いの言葉を話していた時、恥ずしくなかった?と聞かれて]

aN tuʃija hadzikaku ne:NtaN.

あの 時は 恥ずかしく なかった。【肯定・過去形】

「hadzikaharu」という形式も現れているが、このモダリティについては未詳である。

13)uNtu he: hadzikaha ho:ʃi nu:ʃigaru hadzikaharu.

こう して 恥ずかしく しているの を 見る方が 恥ずかしい。【肯定・非過去形】

●第2 状態形容詞

14)ariga ku:nu ʃiNja diteN iΦuna jassa:.

あいつの 今日の 服は とても 変だなあ。【肯定・非過去形】

15)ʃiNnu sugainuN iΦuna jataNro:.

昨日の 恰好も 変だったよ。【肯定・過去形】

16)wata taNme:ja ʃu:N gaNdzu:.

私たちの おじいちゃんは いつも 元気だ。【肯定・非過去形】

17)ʃiNnu:N gaNdzu: jataN.

昨日も 元気だった。【肯定・過去形】

18)geNki ne:taNro:.

元気じゃなかったよ。【否定・非過去形】

- 「元気が なかったよ。」の可能性もある。他の活用形における否定形を参照。

3.1.1.1.2 〈推量〉

〈推量〉は、経験のなかにすでに確認されている事実、あるいは、すでに証明されている判断をよりどころに現実世界の出来事を、想像・判断によって間接的に確認したものとして文の対象的な内容にとりこむ、話し手の陳述的な態度である。間接的に確認したかどうかという〈話し手の確認のし方〉という点で、〈断定〉と対立するモダリティである。

●第1 特性形容詞

19)kumanu misenu ʃaNpuru:ja hoNto:ni ma:hanu hadzija.[行列をみて]

この 店の チャンプルーは 本当に おいしいんだろうなあ。【肯定・非過去形】

20)amanu misenu ʃaNuruja ma:hataru hadzija.

あそこの 店の チャンプルーは おいしかったんだろうなあ。【肯定・過去形】
[昔はおいしかったと残念そうに言うのを聞いて]

21)arija ma:ku ne:nu hadzi.[隣の席のある料理がたくさん残されているので]

あれは おいしく ないんだろう。【否定・非過去形】

●第2 特性形容詞

22)taro:ga ko:tanu mi:kurumaN dzo:to: jaru hadzija/dzo:to: jara hadzija.

太郎が 買った 新車も 良い物だろうね。【肯定・非過去形】

23)ʃa: ko:rije:, ʃi:fihe:, dzo:to: araNtaru hadziro:.

すぐ 壊れて、直して、上等じゃなかったんだろうよ。【否定・過去形】

●第1 状態形容詞

24)[この間のスピーチでモジモジしながら話していたのを思い出して]

aN tuʃija hadzihakataru hadziro:.

あの 時は 恥ずかしかったんだろう。【肯定・過去形】

25)ʃu:nu me:N jataNteN hadzikaku ne:nu hadziro:.

人の 前でも 恥ずかしく ないんだろうよ。【否定・非過去形】

26)[発表会があったということを聞いて]

ariga kutu jatu, hadzikakuja ne:Ntanu hadziro:.

あいつの ことだから、恥しくは なかったんだろう。【否定・過去形】

●第2状態形容詞

27) aŋaŋ gaNdʒu: jaru hadʒiro:/gaNdʒu: hadʒiro:.

明日も 元気だろう。【肯定・非過去形】

28) aŋaŋ kana: dʒi iΦuna hadʒiro: ja.

明日も [恰好は] きっと 変だろうね。【肯定・非過去形】

3.1.1.1.3 〈間接的エヴィデンシャルティ〉

〈間接エヴィデンシャルティ〉は、話し手によってアクチュアルに直接的に事実確認された、表情やふるまい、記録などの証拠を通して、現実世界の出来事を間接的に確認したものとして文の対象的な内容にとりこむ、話し手の陳述的な態度である。表情やふるまい、痕跡などの間接的な結果などの証拠を通じた場合は、間接的な確認(事実未確認)であり、思考を表現するという点では〈推量〉に近づくが、法則的な知識や公理などの証拠をもとにした〈推量〉とは、アクチュアルな物(証拠)を媒介にするという点で異なる。

「-ka」と「形容詞語幹-ha jeN」との関係は未調査である。なお、「-harassaja」「harussaja」「ba(:)ssaja」「ba:russaja」は、別のモダリティを表す終助辞である可能性が高い。ある心理＝思考過程が別のさまざまな心理＝思考過程を構成に持っていて、間接的エヴィデンシャルティとして言語の意味に固定化するまでに、その別の過程を切り取って固定化して表現している可能性、あるいは、全く別のある心理＝思考過程によって切り取られている可能性がある。それらの形式をもつ文が、話しあいの構造の中でどのような文と関係しているか、今後調査していく必要がある。

●第1特性形容詞

29)[店から出てくる人達の顔が満足そうなので]

ma:haraka/ma:harassaja:.

この 店の チャンプルーは おいしいのだ。【肯定・非過去形】

30) hoNto: ni ma:ku neNdaka:.

本当に おいしく なかったんだろう。[驚いている顔を見て]

31) ma:ha jessaja.

あの 店の チャンプルーは おいしかったのだ／おいしかったのにちがいない
[店から出てくる人たちの顔が満足そうだったのを思い出して] 【肯定・過去形】

●第1状態形容詞

32) hadʒikaharussaja:.

恥ずかしいんだなあ。[顔が真っ赤になっているのを見て] 【肯定・非過去形】

33) hadʒikakuja ne:Nbassaja.

恥ずかしくは ないんだなあ。[人前でも楽しく話しているのを見て] 【否定・非過去形】

34)[人前で話している時、顔が真っ赤ではないが、早口だったのを思い出して]

ari jatiN hadʒikahataNba:ssaja.

あいつでも 恥ずかしかったんだなあ。【肯定・過去形】

35) aNfe:, aN tuʃiN hadzihakataNba:russaja:.

じゃあ、あの 時も 恥ずかしかったんだなあ。【肯定・過去形】

36)[恥ずかしがり屋だが、人前でも楽しく、ゆっくり話していたのを思い出して]

aN tuʃija hadzikaku ne:NtaNbassaja.

あの 時は 恥ずかしく なかったんだなあ。【否定・非過去形】

3.1.1.2 質問文の終止形

伊平屋方言の質問文の調査には、〈肯否質問〉、〈疑問詞質問〉をモダリティとして持つ文を取り上げて調査した。以下、順にしたがって記述する。

3.1.1.2.1 肯否質問文の終止形

〈肯否質問〉は、ある出来事が実際にそうであるのか、そうではないのか話し手が知りたくて、そして、聞き手の是非を通してたしかめたい現実世界の出来事を文の対象的な内容にとりこむ、話し手の陳述的な態度である。

●第1 特性形容詞

37) ne:ne:ga muNja ma:hami.

お姉ちゃんの ごはんは おいしい? 【肯定・非過去形】

38) ama:nu iriʃa:ja ma:ha:ti:. 【肯定・過去形】

あそこの チャンプルーは おいしかったか? [今はもうなくておいしくない]

39) ma:ku neni:/ma:ku neNdari:. 【否定・非過去形】

おいしく ないのか? [正直に言うことを躊躇っているように見えたので]

●第2 特性形容詞

40) dʒiro: kuruma dʒo:to: jaimi.

次郎の 車 上等? 【肯定・非過去形】

41) ja:ga nu:jo:taru kuruma dʒo:to: jaiti:.

お前が 乗っていた 車 上等だった? 【肯定・過去形】

42) ja:ga me: muʃo:taru kuruma dʒo:to: araNti:.

お前が 前 持っていた 車 上等じゃなかったの? 【否定・過去形】

●第1 状態形容詞

43)[子供がなかなか自己紹介しないのを見て]

hadzihakami / hadzihakari:.

恥ずかしい? 【肯定・非過去形】

44) [お祝いの時に皆の前でスピーチをしていたので]

A : aN tuʃija hadzihakaruti: / hadzihakataraja:.

あの 時は 恥ずかしかった? / 恥ずかしかったら? 【肯定・過去形】

45)[いつもとは違って、たくさん話しているので]

hadzikaku ne:ni:.

恥ずかしく ない？【否定・非過去形】

46) [いつもとは違って、先日たくさん話していたことが気になっていたので]

aN tuŋija hadzikaku ne:Nruti:.

あの 時は 恥ずかしく なかったの？【否定・過去形】

用例47は、意外な事実の出来事を知って、たずね返す時は、別の形式で現れた。

47)[人前でよく話せる人が、実は恥ずかしいと言ったのを聞いて]

je:, hadzihakataNna/hadzihakataN.uNtu Φu:dzike: mi:raNtaN.

ええっ、恥ずかしかったの？ そんな 風に 見えなかった。【肯定・過去形】

●第2状態形容詞

48)ŋa: gaNdzu:ri:.

いつも 元気？【肯定・非過去形】

49)gaNdzuro:, ja:jahe: geNki jaNmi:.

元気だよ。お前はよ。元気？【肯定・非過去形】

50)ŋu:ja geNki jati:.

今日は 元気だった？【肯定・過去形】

51)ŋu:ja gaNdzu araNruri:.

今日は 元気じゃないの？[元気がないことをたずねている] 【否定・過去形】

3.1.1.2.2 疑問詞質問文の終止形

〈疑問詞質問〉は、ある出来事を引き起こしたのは誰か（何か）、起こった出来事はいつか、なぜ起こったのかななどの情報が欠けた現実世界の出来事を文の対象的な内容にとりこみ、その欠けた情報を知りたくて、聞き手にたずねるという話し手の陳述的な態度である。そのため、疑問詞質問文では、聞き手にたずねる、その文の部分＝主語、補語などが、「nu:ga 何が」「duruga どれ・どっち」といった疑問詞になっている。

●第1特性形容詞

52)nu:ga ma:hajo:.

何が おいしい？【肯定・非過去形】

53)duruga ma:ku ne:Njajo:.

どれが おいしく ないの？【肯定・非過去形】

[「俺の頼んだのはおいしくなかった」というのを聞いてメニュー表を見ながら]

54)duruga ma:hataga:.

どっちが おいしかった？【肯定・過去形】

55)nu:ga iŋibaN ma:hata:. 【肯定・過去形】

何が 一番 おいしかった？[今は作る人が変わって、おいしくない]

56)nu:ga iŋibaN ma:ku neNtaga:.

何が 一番 おいしく なかった？【否定・過去形】

[料理し始めのお姉ちゃんのごはんはほとんどおいしくなかったというので]

●第1 状態形容詞

57)[さっきまで話をしていたが、急に顔が赤くなり、しゃべらないので]

nu:ga hadzihakahajo:.

何が 恥ずかしいの? 【肯定・非過去形】

58) [話をしていた時に、急に顔が赤くなり、喋らなくなったことが気になっていたので]

nu:ga hadzihakahataru:.

何が 恥ずかしかったの? 【肯定・過去形】

59) diruga hadzihakahata:/hadzihakahataga.

勘違いした時と人の前で話すのは どっちが 恥ずかしかった? 【肯定・過去形】

60)ɸu:ja mata nu:ga hadzihakaku ne:Nga/ne:Nru.

今日は また なんて 恥ずかしく ないの? ●「ne:jo:/ne:」は不可。【否定・非過去形】

61)aN tuɸija nu:ga hadzihakaku ne:taru/ne:Ntaga.

あの 時は なんて 恥ずかしく なかったの? 【否定・過去形】

3.1.2 連体形

連体形は、主語や補語、状況語にさしだされる内容を詳しくする、文の部分＝連体修飾語、規定語の形である。

●第1 特性形容詞

62)ma:hanu muNbika kamaNke:.

おいしい ものだけ 食べるな。【肯定・非過去形】

63)[おいしいチャンプルーを出していた店がなくなったので]

anu ma:hatanu iriɸa:ja ne:Nsaja:/neNdasaja:.

あの おいしかった チャンプルーは もう ないんだなあ。【肯定・過去形】

64)ma:ku ne:N munu kadiN, imiga ne:hani/ne:Nja.

おいしく ない ものを 食べても、意味が ないだろ? 【否定・非過去形】

●第2 特性形容詞

65)ɸɸo:to: kurumake nu:jo:taN.

立派な 車に 乗っていた。【肯定・非過去形】

66)ɸɸo:to: jataN kurumaga ɸɸikone: ko:ritanɸa:.

立派だった 車が 事故で 壊れたらしい。【肯定・過去形】

67)ɸɸo:to: anaN kurumaru ko:je ɸɸo:Nmahe:.

上等じゃない 車を 買って 来ているんだよ。【否定・非過去形】

第1 状態形容詞

68)hadzihakahanu kutuja haNke:.

恥ずかしい ことは するな。【肯定・非過去形】

69)hadzihakahataN kutuja na: wafire:.

恥ずかしかった ことは もう 忘れろ。【肯定・過去形】

70)tsu:nu me:ne: hanaʃi he:N, hadzikaku ne:N tsu:ja uN.

人の前で話をしても、恥しくない人はいる。【否定・非過去形】

●第2状態形容詞

71) [近くにいたる友だちみんなで見ても確かめあっている]

ʃiNnuNmadinu iΦuna sugaiga ʃu:ja no:jomahe:.

昨日までの変な恰好が今日は直っているよ。【肯定・非過去形】

●元々は「昨日まで変だった恰好が」。

72)gaNdzu: taNme: no:, mussaN.

元気なおじいちゃんを見ると、うれしい。【肯定・非過去形】

73)ki:samadi gaNdzu: jataNnu waraba:ga utuN idziramahe:. 【肯定・過去形】

さっきまで元気だった子供達が音も出さないよ(静かになった。)

74)geNki araN ba:ja itʃaNtu ho:.

元気じゃない時はどうしているの? 【否定・非過去形】

3.1.3 連用形

連用形は、動作や状態など物の属性をいくつか続ける働きをもった述語の形である。形容詞の連用形は、肯定の場合、連体形と同音形式である。

●第1特性形容詞

75)ma:hanu ohohataN.

おいしくて、多かった。【肯定】

76)arija ma:ku ne:na, aNdagu:saN.

あれはおいしくなくて、油っこそう。【否定】

●第2特性形容詞

77)taro:nu kurumaja dzo:to:ne:, haiʃiN he:haN.

太郎の車は良い物で、走るのもはやい。【肯定】

78) dzo:to: araNna, de:dʒi jataNro:.

[車は]上等じゃなくて、大変だったよ。【否定】

動詞「naN なる」や「mi:N 見える」と組み合わせさせて合成述語の要素として働くとき、「dzo:to:」と「dzo:to:ke」の形で現れた。

79)itʃaNtunu kurumaN araro:, dzo:to: naN.

どんな車も洗ったら、立派になる。

80)Φuruguruma jatiN araro:, dzo:to:ke mi:N.

中古車でも洗ったら、立派に見える。

●第1状態形容詞

81)hadzikahanu, hanaʃi ʃi: haN.

恥ずかしくて、話せない。【肯定】

否定形容詞の連用形は、いまのところ「恥ずかしい」の場合では確認できていない。次のように、「形容詞の語幹＋代動詞（ΦuN する）」の否定・連用形でさしだされている。

82)arija haɟʒikaha ha:na, tsu:nu me:neN hanaʒi ɕi: ΦuN/hanaʒi naN.
あいつは 恥ずかしがらないで、人の 前でも 話せる。●元々は、「あいつは恥ずかしくなくて、」。

●第2 状態形容詞

83)sugainuN iΦunane:, atʃiʒo:N iΦuna jataN.
恰好も 変で、 歩いているのも（歩き方も） 変だった。【肯定】

84)gaNdʒu:ne:, keNko: jaN.
元気で、 健康だ。【肯定】

動詞「naN なる」と組み合わせさせて述語として働く時、「iΦuna」「gaNdʒu:」形で現れた。

85)ariga ʃi:ro:/ʃikiro:,nu: jatiN iʃaNtu ʃiNnutaNteN iΦuna naijo.
あいつが 着れば、何でも どんな 服でも 変に なるよ。

86)taNme:ja utajo:taNteN,nu:ro:, gaNdʒu: naN.
おじいちゃんは 疲れても、 寝れば、元気に なる。

3.1.4 条件形

条件形は、文の対象的な内容にとりこまれた、現実世界のいくつかの出来事の間、様々な因果関係を表すために、文と文をつなげる機能を担った形である。つなげられる文と文は、条件となる出来事をさしだす文と、その出来事によって条件づけられた出来事をさしだす文とに分かれている。前者の文を《つきそい文》とよび、後者の文を《いいおわり文》とよぶ。つきそい文にさしだされる条件には、原因、理由、条件、前提(仮定)が代表される。

つきそい文＝条件 いいおわり文＝結果

namaja ma:ku neNtu, ʃu:ga uraNteNdo:.
今は おいしく ないので、人が いないってよ。

3.1.4.1 まさめ的な因果関係を表すつきそい文にあらわれる形

原因、理由、条件、前提(仮定)が条件となり、それが有効に働き、結果となる出来事が起こるという関係を表すつきそい・あわせ文がある。そのようなつきそい・あわせ文のことを、ひとまとめにして、《まさめ的な条件・結果のつきそい・あわせ文》とよぶことにする。伊平屋方言のまさめ的な因果関係を表す条件形は、1)原因・理由形、2)条件・前提(仮定)形のふたつに分けられる。以下、順にしたがって述べる。

3.1.4.1.1 原因・理由的なつきそい・あわせ文に現れる形

伊平屋方言の原因・理由的なつきそい・あわせ文に現れる形は、原因と理由を形式上区別していない。

●第1 特性形容詞

87)jukuŋi araŋdo:ΦuNtu:ni ma:hatu, namakara kamiŋga ika:.

嘘じゃないよ！本当に おいしいから、今から 食べに 行こう。【肯定・非過去形】

88)jaŋiga, ma:hatatu, juku kamiŋga ŋdzaŋ.

けど、おいしかったから、よく 食べに 行った。【肯定・過去形】

89) iriŋa:ja ma:ku ne:Ntu, kamiga ikaŋke:.

[あの店の]チャンプルーは おいしく ないから、食べに 行くな。【否定・非過去形】

90)ma:ku ne:NtaNtu, waŋja aŋmari kamiŋga ikaŋtaŋdo:.

おいしく なかったから、自分は あまり 食べに 行かなかったよ。【否定・過去形】

●第2 特性形容詞

91)unu kuruma ɔzo:to jatu,ko:N.

この 車が 良いから、買う。【肯定・非過去形】

92)ɔzo:to: jaitatu, nage: nu:jo:ruhani.

上等だったから、長く 乗っているよね。【肯定・過去形】

93)ɔzo:to: araŋtaturu, ko:riŋohani.

上等じゃなかったからこそ、壊れてるんだよね。【否定・過去形】

●第1 状態形容詞

94)munu wakaraŋŋija hadzikaha:tu, bu:ru beŋkjo:Φuŋ.

物が 分からないのは 恥ずかしいから、みんな 勉強する。【肯定・非過去形】

95)tsu:nu me:ne: hanaŋi Φu:ŋija hadzikahata:tu, iŋgaŋtaŋ. 【肯定・過去形】

人の 前で 話すのは 恥ずかしかったから、行かなかった。

96)waŋja hadzikaku ne:Ntu, wa:ga abiŋ.

私は 恥ずかしく ないから、私が 話す。【否定・非過去形】

97)gumahaŋ tuŋŋija hadzikaku ne:Ntatu, tsu:nu me:neŋ hanaŋi Φu:taŋ/ho:taŋ.

小さい 時は 恥ずかしく なかったから、人の前でも 話していた。【否定・過去形】

●第2 状態形容詞

98)ariga sugaija iŋiŋ iΦuna jatu,naraŋba:jo:.

あいつの 恰好は いつも 変だから、ダメなんだよ。【肯定・非過去形】

99)haŋŋi:N gaŋdzu: jatu,maŋna ge:tobo:ru he: attsuŋ.

おばあちゃんも 元気だから、一緒に ゲートボールを して いる。【肯定・非過去形】

100)ŋiŋnu:ja geŋki jatatu, ŋigutu ŋdze ŋoŋro:.

昨日は 元気だったから、仕事に 行って 来ているよ。【肯定・過去形】

101) dʒiro:ja tsu:N geNki ne:Nturu, nu:gara airu Φutukaja. 【否定・非過去形】
 次郎は 今日も 元気が ないから、何か あったのかな。●「元気じゃないから」

3.1.4.1.2 条件・前提(仮定)的なつきそい・あわせ文に現れる形

伊平屋方言の条件・前提的なつきそい・あわせ文に現れる形は、条件と前提を区別していない。

●第1 特性形容詞

102) ma:haro:/ma:hataro:. ika:.

本当に おいしいなら、 行こう。【肯定・非過去形】

103) iriŋa:ga ma:hataro:. iŋfutaNdo:.

チャンプルーが おいしかったら、[私は]どこでも 行っていたよ。【肯定・過去形】

104) ma:ku ne:Nko:. kamaNdari.

おいしく なければ、[お前は]食べないのか? 【否定・非過去形】

105) ma:ku ne:Nko:. juku nuΦuΦutaNja:.

おいしく なかったら、[おじいちゃんは]よく 残していたね。【否定・非過去形】

●第2 特性形容詞

106) taro:N kurumaga dʒo:to: jara:. nui busassaja.

太郎の 車が 良かったら、乗って みたいなあ。【肯定・非過去形】

107) dʒo:to: araNro:. ko:raNŋi maŋi arani.

上等じゃないなら、買わない方が いいんじゃないかな。【否定・非過去形】

●第1 状態形容詞

108) hadʒikaharo:. abiŋi he:ku naN.

恥ずかしければ、話すのが はやく なる。【肯定・非過去形】

109) hadʒikaharo:ja. ja:ke ke:re:/ke: ŋimuNro:.

恥ずかしければ、家に 帰れ/帰って いいよ。●この場合、やさしい態度がある。

110) hadʒikahara:. ja:ke ke:re:.

恥ずかしいなら、家に 帰れ。●この場合、きつい態度があるとのこと。

111) hadʒikaku ne:Nko:. he:ku Φu:wa.

恥ずかしく ないなら、はやく 来い。【否定・非過去形】

112) hadʒikaku ne:Nko:. ŋu:ŋiga maŋi jataN.

恥ずかしく ないなら、来るのが よかった。【否定・非過去形】

●第2 状態形容詞

113) ŋu:N iΦuna jatara:. je: turuΦuN.

今日も 変だったら、言って やろう。【肯定・非過去形】

114) taNme:N haNŋi:N gandʒu: jatara. kaΦu: jassa.

おじいちゃんも おばあちゃんも 元気だったら、幸せだなあ。【肯定・非過去形】

115) geNki jataro:, umi ifutarufiga, geNki araNtatu, da:N ifi haN. 【否定・非過去形】

元気だったら、海に 行ったけど、元気じゃなかったら、どこにも 行けない。

116) geNki araNko:, so:je ifufi ma:fi arani. 【否定・非過去形】

元気じゃなかったら、連れて 行くのが いいんじゃないかな。

3.1.4.2 うらめ的な因果関係を表すつきそい文にあらわれる形

条件となる出来事が有効に働かず、結果となるべき出来事が起こらなかつたり、逆に起こるといふ関係を表すつきそい・あわせ文がある。そのようなつきそい・あわせ文のことを《うらめ的な条件・結果のつきそい・あわせ文》とよぶ。

3.1.4.2.1 うらめ・ゆずり的なつきそい・あわせ文に現れる形

伊平屋方言のうらめ・ゆずり的なつきそい・あわせ文に現れる形はうらめとゆずりを区別していないが、「figa」系はうらめへ、「teN/tiN」系はゆずりへと表現される傾向がある。

●第1 特性形容詞

117) ma:hafiga, nuΦuho:sa.

おいしいのに、残している！【肯定・非過去】

118) iriŋa:ga ma:hataNfiga/ma:hataNteN, kamiNga ikaNtaN.

チャンプルーが おいしかったのに、 食べに 行かなかったんだ。【肯定・過去】

119) uNte uΦuharo:, ma:hatiN, kami haNdo:.

こんなに 多かったら、おいしくても、食べれないよ。【肯定・非過去】

120) ma:ku ne:NtiN, nuΦuhana kanuNdo:.

おいしく なくても、残さず 食べるよ。【否定・非過去】

121) ma:ku ne:NtaNteN, ŋe:rutaka.

おいしく なかったのに、来てたんだ。【否定・過去】

122) ma:hatafiga, ifiN kamihaNtaNssa:.

おいしかったとしても、いつも 食べられなかったよ。【否定・過去】

●第2 特性形容詞

123) dzo:to: jatafigaja/dzo:to: jatiN, do:gufikai arahanuru, he:ku jaNrjo:sa.

上等だったけどね/上等でも、道具使い 荒くて、 早く 壊れているぞ。【肯定・過去/肯定・非過去】

上等の否定形は、語彙的に補われて、jana jati N で表現される場合が確認できた。

124) do:guja tsuraku ŋikaine:, jana jatiN, nagamuŋi ΦuN

道具は きれいに 使えば、ダメなものでも、長持ちする。[元々は、「上等じゃなくても」]

●第1 状態形容詞

125) hadzikaha:figa, tsu:nu me:ne: hanafi ΦuNro:. ja:N iΦigwa minarae:.
 恥ずかしいのに、人の前で話しているんだよ。お前もちょっと見習え。【肯定・非過去】

126) hadzikaha:tafiga, tsu:nu me:ne hanafi nataNro:, nu:gaja:.
 恥ずかしかったのに、人の前で話せたんだよ。なんでかなあ。【肯定・過去】

127)[目立ちたがり屋な人がなかなか来ないので、不思議がって]

hadzikaku ne:Nfiga, iNɔʒe: ΦuN.
 恥ずかしくもないのに、出て来ないんだ。【否定・非過去】

128)[自分は人前でも恥ずかしくない性格なのに、]

hadzikaku ne:Ntafiga, hanafi naraNtaN.
 恥ずかしくなかったのに、話せなかったんだ。【否定・過去】

129) hadzikahataNteN,fibaje: hanafi fiʒaNro:.
 恥ずかしくても、頑張って話したよ。【肯定・非過去】

130) hadzikaku ne:NtaNteN,fira:ja makkara: naN.
 恥ずかしくなくても、顔は真っ赤になる。【否定・非過去】

●第2 状態形容詞

131) fiNnu geNki jatafiga, fu: jukuraharitaN. 【肯定・過去】
 昨日 元気だったけど、今日 休ませられた。●「元気だったのに」

インフォーマントの方

【野甫方言】

A : S29 年生、伊平屋出身、伊平屋育ち。結婚してから那覇で 5 年ほど住んでいた経験あり。

B : S24 年生、伊平屋出身、伊平屋育ち。20 代に伊平屋から出て、S63 年に伊平屋に戻る。

【島尻方言】

C : S33 年生、伊平屋出身。

【参考文献】

- ・工藤真由美 2007 『日本語形容詞の文法』 ひつじ書房
- ・工藤真由美 2014 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』 ひつじ書房
- ・言語学研究会・構文論グループ 1986 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文—その体系性をめぐって—」 『教育国語』 84 号 むぎ書房
- ・名護市史編さん委員会 2006 「14 節 伊平屋村の方言」 『名護市史本編・10 言語』 所収 名護市役所 p270-277
- ・琉球方言研究クラブ 1975 「伊平屋村我喜屋方言の形容詞」

沖縄県伊平屋方言の動詞の活用と文法的な形式

當山 奈那（琉球大学）

1. はじめに

§ 調査情報

本報告のデータは、全て伊平屋村島尻出身／在住の話者 2 名、H・N（S33 年生、男性）、H・S（S7 生、男性）への面接調査によるものである。

§ 動詞の一般的な性格づけ

動詞は、(I) 語彙的な意味 (II) 構文論的な機能 (III) 形態論的な形式の性格にしたがって分類される品詞の一つである。語彙的な意味として、動詞は、基本的に、動作、変化、状態のような具体的な、動的な現象をとらえている。この動詞の特性と関連して、動詞は、文の構文論的な構造において主として述語としてはたらいっている。そこで陳述的な機能をはたし、テンスやアスペクトやムードのような形態論的なカテゴリーにしたがって、文法的な形式をさまざまにとりかえる。動詞は人や物の動的な特徴をあらわしながら、述語として機能するために、種々の文法的な形式を担わされているのである。この形態論的な体系は言語によって異なる。

§ 伊平屋方言の動詞の形態論的なカテゴリーと形態論的な形式

沖縄県島尻郡伊平屋方言（以下、伊平屋方言）の動詞がもつ形態論的なカテゴリーには、現代日本語の動詞と同じように、テンス、ムード、みとめかた、ていねいさ、アスペクト、やりもらいがある。形態論的なカテゴリーは、それを構成する形態論的な形をパラディグマティックな体系に統一する一般化された意味・特徴である。個々の形態論的なカテゴリーには、派生（文法的な接尾辞）によってあらわされるもの、補助的な単語（補助動詞、コピュラなど）とのくみあわせによってあらわされるもの、語尾のとりかえによってあらわされるものがある。

個々の形態論的な形式は、語幹、語尾、助辞などの形づくりの要素に分化している。語幹は「原則として、それぞれの活用形に共通な要素であって、それらが特定の動詞の（活用以外の）特定のカテゴリーに属することを表現するやくわりをもっている要素」であり、語尾は「同一の（活用以外の）カテゴリーに属する個々の活用形を特徴づけるやくわりをもった要素のうち、基本的なもの」である。語尾は文法的な意味に応じで変化する部分で、残りの変化しない部分が語幹である。語幹と語尾の境界には、「-」を挿入する。

おのおのの動詞がどのように語幹を形成し、どのような語尾をともなって活用形を作るかということは、個々の動詞の形づくりにとって重要である。語幹と語尾の形成は、動詞の活用のタイプに分類する上でも重要になる。また、個々の活用形の形づくりをみることによって、個々の活用形の成り立ちをしるうえでも重要である。

§ 終止形と非終止形の体系と伊平屋方言の特徴

動詞は、文のなかの機能にしたがって、大きく終止形 finite form と非終止形 non-finite form とにわかれている。非終止形の動詞は、連体形、連用形、条件形にわかれている、それぞれ独自の体系をもっている。次の表に動詞「のむ」を代表させて一覧を示す（確認できていない形式は空欄にしている）。

【表】動詞「nunun（飲む）」の語形変化

テンス		非過去形	過去形
ムード			
直説法		nun-un（飲む）	nu-nan（飲んだ） / nun-utan
質問法	肯否質問	nun-umi（飲むか）	nu-ni:（飲んだか） / nun-uti num-i:（飲んだか）
	疑問詞質問	nun-o:	nun-a:（飲んだか）
命令法		num-e:（飲め）	
勧誘法		num-ani（飲もう） nuno:（飲もう）	
連体形		nun-unu（飲む）、nun-un	nu-nanu/nun-utanu
連用形	中止形	num-i（飲み）、nun-e:（飲んで）	
	同時形		
条件形	原因形	nun-utu（飲むから）	nu-natu（飲んだから）
	契機形	nu:no:（飲むと）	
	前提形		
	譲歩形	nunen（飲んででも）	
	逆接形	nunufiga（飲むが）	nunafiga、nunutafiga
	目的形	numinga（飲むに）	

終止形は、いいおわりの述語になって文の陳述のセンターとしてはたらくことから、テンス、ムードを表示する形式として文法的な形を発達させている。

【表】伊平屋方言の終止形の体系

ムード				テンス	アスペクト		
					完成	継続	
叙述	事実確認	断定	記述	非過去	nun-un	nun-e: atʃun nun-o:N	
				過去	nu-nan	nun-e: atʃu:tan nun-o:tan	
				目撃過去	nun-utaN		
	事実未確認	非断定	判断	推量	非過去	nununu hadʒi	nun-o:N hadʒi nun-e: attsun hadʒi
					過去	nun-an hadʒi	
			判断不可	疑い	非過去	numura nunugaja:	
					過去	nunaga nunagaja:	
	実行	勧誘			—	num-ani、nuno:	nun-o:kapi
命令			—	num-e:	nun-o:kanahe:		
禁止			—	num-una	num-anʒi		
質問	肯否質問			非過去	nun-umi	nun-o:ka nun-e: attsu:ka:	
				過去	nun-i:、num-i:		
	疑問詞質問			非過去	nun-o:	nun-o:jo:	
				過去	nun-a:		

連体形は、連体的な従属節の述語になって名詞をかざる形である。連体形も非過去形と過去形の対立があり、終止形と同様に過去に2系列（第一過去形と第二過去形）があるが、連体形のあらかず時間は、いいおわりの述語があらかず時間を基準にする相対的なテンスである。

連用形は、ふたつの出来事をならべ、その時間的な関係を表現するならばあわせ文やふたまた述語文のつきそい文（従属文）の述語になる。第一中止形は、形式上、現代日本語の第一中止形に対応し、単語づくりや形づくりの要素になる。伊平屋方言の場合、単独では述語になることはない。第二中止形は、現代日本語の第二中止形に対応し、第一中止形に接辞「テ」が接続している。他の沖縄島諸方言の場合、あわせ文の述語として使用されてふたつの動作の間の同時の関係や先行後続の関係をあらわしたり、補助動詞をともなつて文法的な形式を作る要素となることもできるが、伊平屋方言は第二中止形をもたない。時折、調査中に観察される第二中止形は周辺の方言や首里那覇方言のような権威的な方言との接触による影響とみなしている。

第三中止形は第一中止形にアリ（有り）が接続していて¹、他の沖縄島内の諸方言では

¹ *huri ari > *hurjari > *hujai > huje:（降って）

「第三中止形は、首里方言でヌマーニ、あるいはヌマーイであらわれ、『沖縄語辞典』（国立国

先行後続の時間的な関係をあらわすあわせ文の述語でしか使用されないが、伊平屋方言や宮古島方言、石垣島方言では、単語づくり、形づくりの要素にもなる。

【表】標準語の第二中止形に対応する伊平屋と首里の対応（『名護市史言語編』：275）

	田名	我喜屋	島尻	野甫	首里
落ちて	utie:	utie:	utie:	utie:	utiti
買って	ko:e	ko:e	ko:e:	ko:e:	ko:ti
笑って	ware:	warae	ware:	warae:	warati
降っている	hujo:n	hujo:n	hujon	hujo:n	huto: n

条件形は、条件づけを表現するあわせ文の従属文の述語になる。

伊平屋方言の動詞の活用形の特徴としては、(1)完成相の直説法の終止形、質問法の非過去形のように、第一中止形に存在動詞 un（居る）が補助動詞としてくみあわせり、音声的に融合したタイプ、(2)否定形や命令形や勧誘形などのような、un の融合しないタイプ、(3)第三中止形や、継続相のように存在動詞 ari（あり）が融合しているタイプが同居している点が大きな特徴であるといえよう。さらに、派生（文法的な接尾辞）によってあらわされるものや、補助的な単語（補助動詞、コピュラなど）とのくみあわせによってあらわされるものがあり、動詞の形態論的な形式は複雑な活用の体系をなしている。

2 伊平屋方言の動詞の形づくりの要素

伊平屋方言を含む多くの琉球語の動詞には、形態論のカテゴリーとして、テンス、モード、みとめかた、ていねいさ、アスペクト、ヴォイス、もくろみ、やりもらい、それらを構成する文法的な対立のしかた、文法的な形を構成する語幹（あるいは語根）は、現代日本語の動詞と共有のものを有し、音韻的にも対応している。語尾や助辞も、現代日本語と対応し、よく似た構造をもつものが少なくない。一方で、琉球語に固有の語尾や助辞、接尾辞もあって、琉球語独自の形態論的な体系を有している。

o>u、e>i の狭母音化、それに伴う子音の変化、前後する音声の同化による子音の変化などの音韻変化があり、その音韻変化は動詞の語幹、および語尾の音声形式にも及んでいて、伊平屋方言の動詞の形づくりを複雑なものにしている。

伊平屋方言の動詞の語幹には、基本語幹、音便語幹、連用語幹、融合語幹の四つの変種（ヴァリエント）が存在する。この変種の名称は、上村幸雄（1963）による。語幹と語尾の作り方から、伊平屋方言の動詞は規則変化動詞と特殊変化動詞に分けることができる。規則変化動詞は、さらに、強変化動詞と混合変化動詞に分けられる。強変化動詞は、基本語幹と連用語幹の末尾に子音があらわれ、音便語幹をもつ動詞である。音便語幹には、促

語研究所)によると、ヌマーイの方がより古い言い方のようなのである。1531年に第一巻が編纂された古歌謡集『おもろさうし』にも「～やり」の形でみられる。(巻4-176「とよむ 大きみやもゝしま そろへやり みおやせ。」(訳:名高い大君は百島を揃えて差し上げよ。)) (巻11-632「いと ぬきやり、なわ ぬきやり、」(訳:糸を貫いて、縄を貫いて)) (『名護市史言語編』: 89)

音便語幹、語幹末子音が脱落した脱落音便語幹のふたつの変種がある。

混合変化動詞は、基本語幹末に子音があらわれ、連用語幹末と音便語幹末に母音があらわれる、子音語幹と母音語幹の混合した動詞である。

基本語幹は、命令形、勧誘形、同時形、条件形にあらわれる。連用語幹は、直説法と質問法の非過去形、連体形の非過去形の活用形にあらわれる語幹で、歴史的には、語基に人の存在をあらわす *un* (居る) が文法化して融合した語形にあらわれるものである。融合語幹は、連用形に物の存在をあらわす *ari* (有り) が融合する過程で生じた語幹である。第三中止形や継続相の形式がここに分類される。音便語幹は、直説法と質問法の過去形、譲歩形にあらわれる。

2. 1 基本語幹

基本語幹を構成要素にもつ活用形は、その動詞本来の形を保存している場合があって、当該動詞のなりたちを知る上で重要である。連用語幹も音便語幹も基本語幹から派生していて、基本語幹からそのなりたちを説明することができるという点でも基本的である。また、基本語幹は、使役動詞などの文法的な派生形式をつくる語基になるという点でも当該動詞の基本的な形式である。

伊平屋方言	日本語
強変化	強変化
I m num-AN (飲まない)	N1m nom-anai
kam-AN (食べない)	kam-anai
?am-AN (編まない)	am-anai
I b tub-AN (飛ばない)	N1b tob-anai
I k kak-AN (書かない)	N1k kak-anai
I g φu:g-AN (漕がない)	N1g kog-anai
I g ?e:g-AN (泳がない)	N1g ojog-anai
I h ?ndzah-AN (出さない)	N1s das-anai
I r1 ?ur-AN (売らない)	N1r ur-anai
I r1 tur-AN (取らない)	tor-anai
I r2 ?are:r-AN (洗わない)	N1w araw-anai
I r3 ko:r-AN (買わない)	kaw-anai
I r3 i:r-AN (酔わない)	jow-anai
混合変化	弱変化
II e1 ?akir-AN (開けない)	N2e ake-nai
fittir-AN (捨てない)	ne-nai
i:r-AN (もらわない)	je-nai
?irir-AN (入れない)	ire-nai
II e2 ?ukir-AN (起きない)	N2i oki-nai
?urir-AN (降りない)	ori-nai
?u(t)tir-AN (落ちない)	oci-nai

II i	tʃi:r-aN (着ない)	ki-nai
	特殊変化	特殊変化
III 1	h-aN~s-aN (しない)	si-nai
III 2	φuN (来ない)	konai

強変化動詞の場合、語幹末の子音は伊平屋方言と日本語とでよく対応している。Im、Ib、Ik、Ig などである。

日本語の強変化動詞の語幹末が母音になる動詞 (N1w) に対応する伊平屋方言の強変化動詞 (Ir2、Ir3) の語幹末に r があらわれる。同様に、現代日本語の弱変化動詞に対応する伊平屋方言の動詞の基本語幹末も r になる。伊平屋方言で語幹末子音が r であらわれる現象を、かりまた (2010) にならい、「r 語幹化」とよぶ。

古代日本語の f 語幹動詞 (基本語幹末子音が f の動詞で、現代日本語の N1w の動詞) に対応する伊平屋方言の動詞 (Ir2、Ir3) は、基本語幹末にも r があらわれ、r 語幹化する。

2. 2 連用語幹

強変化動詞の第一中止形は、基本語幹に語尾-i のついたものだが、語幹末の子音が語尾 i の逆行同化によって音韻変化し、第一中止形の語幹が基本語幹と異なる形になった。この語幹の変種が連用語幹である。直説法非過去形、質問法の非過去形、第二過去形などは、第一中止形をもとにして派生した活用形だが、語幹 (あるいは語基) と語尾や接辞、補助的な単語などとのむすびつき方のつよさの度合いによって語幹と語尾が融合し、相互に影響して変化した結果、語幹に変種を生じさせたものがある。また、特定の活用にかぎってこれらの変化をこうむらなかったものがある。

特に、伊平屋方言では、直説法非過去形は基本的に連用語幹を用いて作られるが、強変化動詞の m 語幹末動詞、b 語幹末動詞の場合、連用形に-ari を融合させた第三中止形の語幹である融合語幹と同じ語幹になっている点に留意されたい。この m、b 両語幹末動詞の融合語幹化が起こるかどうかは、伊平屋島内でも集落によって異なるようである²。

	融合語幹	連用語幹	
強変化	第三中止形	第一中止形	直説法非過去
Im	nun-e: (飲んで)	num-i (飲み)	nun-UN (飲む)
Ib	tun-e: (飛んで)	tub-i (飛び)	tun-UN (飛ぶ)
Ik	?attf-e: (歩いて)	?atf-i (歩き)	?atf-UN (歩く)
	mutf-e: (もって)	mutf-i (もち)	muts-UN (もつ)
Ig	φu:ɕ-e: (漕いで)	φu:ɕ-i (漕ぎ)	φu:ɕ-UN (漕ぐ)
Ih	?ndzah-e: (出して)	?ndzah-i (出し)	?ndzaφ-UN (出す)
Ir1	?u:-e: (売って)	?u-i (売り)	?u-N (売る)

² 例えば、田名方言の場合、「num-UN (飲む)」「tub-UN (飛ぶ)」のように、b 語幹末動詞も m 語幹末動詞も直説法非過去形式は連用語幹であらわれている。(崎山・上門 2017 より)

Ir2	?ara-e: (洗って)	?ara-i (洗い)	?ara-N (洗う)
	ko:-e: (買って)	ko:-i (買い)	ko:-N (買う)
混合変化			
II e1	?aki-e: (開けて)	?aki: (開け)	?aki-N (開ける)
	ʃitti-e: (捨てて)	ʃiti: (捨て)	ʃiti-N (捨てる)
II e2	?uki-e: (起きて)	?uki: (起き)	?uki-N (起きる)
	?uri-e: (降りて)	?uri: (降り)	?uri-N (降りる)
II i	tʃi:-e: (着て)	tʃi: (着)	tʃi-N (着る)
特殊変化動詞			
III 1	h-e: (して)	hi: (し)	φu-N (する)
III 2	ʃe: (きて)	ʃi: (来)	ʃuN (来る)

また、基本語幹末の子音が r になる動詞 (I r1) の連用語幹は、語幹末が母音になっていて、基本語幹とことなる形になっている。これは、語尾 i の影響をうけた口蓋音化によって語幹末の子音 r が脱落したために生じたものである。

Ir1 ur-i > ?uri > ?u-i (売り)

伊平屋方言の混合変化動詞の第一中止形語幹末には、長母音があらわれ、r 語幹化している基本語幹とは異なっている。この変種も連用語幹である。古代日本語では混合変化動詞の基本語幹 (連用語幹も) は、語幹末が i になる動詞と e になる動詞の 2 タイプがあるが、伊平屋方言のばあい、いずれも e になるタイプにさかのぼる³。

最後に、融合語幹から作られる継続相非過去の形をあげておく。強変化動詞では、基本的に、語幹に語尾-o:N を後接させて作る。r 語幹末の動詞と、混合変化動詞では、-jo:N を後接させて作る。

	融合語幹		連用語幹
強変化	第三中止形	継続相非過去	直説法非過去
Im	nun-e: (飲んで)	nun-o:N (飲んでいる)	nun-un (飲む)
Ib	tun-e: (飛んで)	tun-o:N (飛んでいる)	tun-un (飛ぶ)
Ik	mutʃ-e: (持って)	mutʃ-o:N (持っている)	muts-un (持つ)
Ik	?attʃ-e: (歩いて)	?attʃ-o:N (歩いている)	?attʃ-un (歩く)
Ig	φu:ɬ-e: (漕いで)	φu:ɬ-o:N (漕いでいる)	φu:ɬ-un (漕ぐ)
Ih	?ndzah-e: (出して)	?ndzah-o:N (出している)	?ndzaφ-un (出す)
Ir1	?u:-e: (売って)	?u-jo:N (売っている)	?u-N (売る)
Ir2	?ara-e: (洗って)	?ara-jo:N (洗っている)	?ara-N (洗う)
	ko:-e: (買って)	ko:jo:N (買っている)	ko:-N (買う)
混合変化			
II e1	?aki-e: (開けて)	?aki-jo:N (開けている)	?aki-N (開ける)

³ 「降る」「満つ」のような上二段型の混合変化も、「降れる」「満てる」のような下二段型と対応していると考えられる。沖縄島内の方言全体で、下二段型、上二段型に対応する動詞は、破擦音化や口蓋音化がおこっていない。 *ote=te > uti-ti

	fitti-e: (捨てて)	fiti-jo:N (捨ている)	fiti-N (捨てる)
Ⅱ e2	?uki-e: (起きて)	?uki-jo:N (起きている)	?uki-N (起きる)
	?uri-e: (降りて)	?uri-jo:N (降りている)	?uri-N (降りる)
Ⅱ i	tʃi:-e: (着て)	tʃi:-jo:N (着ている)	tʃi-N (着る)
特殊変化動詞			
Ⅲ 1	h-e: (して)	ho(:)N (している)	φu-N (する)
Ⅲ 2	ʃe: (きて)	ʃo:N (来ている)	ʃuN (来る)

2. 3 音便語幹

伊平屋方言の過去形には、音便化の現象がみられる。音便語幹のタイプには、語幹が母音で終わるタイプと促音で終わるタイプと、標準語と同様に音便がないタイプとがある。

① 母音語幹

I m 動詞と I b 動詞の過去形の語尾は-nan である。音便語幹の末尾子音が脱落した脱落音便がみられる。また、「sukun-un (死ぬ)」もここに含まれる。(脱落音便：標準語の場合、撥音便であらわれるもの)

nu-nan (飲んだ)、ka-nan (食べた)、ju-nan (読んだ)、ku-nan (汲んだ)、?a-nan (編んだ)、tu-nan (飛んだ)、?asi-nan (遊んだ)、ju-nan (呼んだ)、?ira-nan (選んだ)、suku-nan (死んだ)

I k 動詞と I h 動詞、I g 動詞の過去形の語尾は-tʃan である。I k 動詞動詞のうち、標準語の t 語幹動詞に所属する一部の動詞がこのタイプに含まれる。「見る」「沈む」「縊る」もここに含まれる。(脱落音便：標準語の場合、イ音便、促音便、撥音便になるものの一部)

?a-tʃan (開いた)、?at-tʃan (歩いた)、ka-tʃan (書いた)、tat-tʃan (出した)、?ndʒa-tʃan (出した) no:-tʃan (直した)、mu-tʃan (もった) in-tʃan (見た)、ʃin-tʃan (沈んだ)、kun-tʃan (縊った)

強変化動詞のうち、基本語幹の語幹末が r になる動詞は、過去形の語尾が-tan である。存在動詞もここに含まれる。(脱落音便：標準語の場合、促音便になるもの)

?u:-tan (売った)、tu-tan (取った)、wa-tan (降った)、na-tan (なった)、ke:-tan (帰った)、φu-tan (掘った)、φu-tan (降った)、habu-tan (かぶった)、?ara-tan (洗った)、ko:-tan (買った)、mo:-tan (舞った)、tʃi:-tan (切った)

I g 動詞の過去形の語尾は-dʒan (dʒan) である。また、「ndʒ-un、?indʒ-un (行く)」もここに含まれる。(脱落音便：標準語の場合、促音便とイ音便に対応するものの一部)

n-dʒan (行った)、φu:-dʒan (漕いだ)、?e:-dʒan (泳いだ)、?in-dʒan (行った)

② 促音語幹

促音便語幹になる動詞は、標準語の t 語幹動詞に所属する「立つ」と不規則活用動詞の「座る」である。第三中止形の語幹末が促音になる。語尾は ci である。

tat-ʃan (立った)、ʔit-ʃan (座った)

③ 音便なし

現代日本語の弱変化動詞に対応する伊平屋方言の混合変化動詞の過去形も語幹尾が母音でおわるが、現代日本語のばあいと同様に音便現象がおきていないと考える。

ʔaki-tan (開けた)、ʃitti-tan (濡れた)、kwi-tan (くれた)、ʔiri-tan (入れた)、u-tan (いた)、ʔa-tan (あった)

2. 4 強変化動詞

強変化動詞は、下位タイプの分化がはげしく、どの動詞がどんな活用形をつくるのか、規則を見つけるのが難しい。活用形を導き出す規則は基本語幹末子音によって決まってくるが、動詞語幹の音環境によって容易にやぶられる。

(1) m 語幹動詞

m 語幹動詞には、nun-un (飲む)、kan-un (食べる)、ʔan-un (編む)、kun-un (汲む) などがある。基本語幹の末尾子音は -m になり、連用語幹と融合語幹の末尾子音は -n になり、音便語幹は母音になる。音便語幹の語尾頭子音は n である。

基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
否定形	非過去形	第三中止形	過去形
num-an (飲まない)	nun-un	nun-e:	nu-nan
kam-an (食べない)	kan-un	kan-e:	ka-nan
ʔam-an (編まない)	ʔan-un	ʔan-e:	ʔa-nan
kum-an (汲まない)	kun-un	kun-e:	ku-nan

対応は不明であるが、「死ぬ」を意味する次の動詞も m 語幹動詞と同じ活用をする。

否定形	非過去形	第三中止形	過去形
sukum-an (死なない)	sukun-un	sukun-e:	suku-nan

(2) b 語幹動詞

b 語幹動詞には、tunun (飛ぶ)、ʔaʃin-un (遊ぶ) などがある。基本語幹の末尾子音は -b になり、連用語幹、融合語幹は -n になる。音便語幹は母音になる。音便語幹の語尾頭子音は n である。

基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
否定形	非過去形	第三中止形	過去形
tub-an (飛ばない)	tun-un	tun-e:	tu-nan
ʔaʃib-an (遊ばない)	ʔaʃin-un	ʔaʃin-e:	aʃi-nan

(3) g 語幹動詞

g 語幹動詞には、 $\phi u:dz-un$ (漕ぐ)、 $?e:dz-un$ (泳ぐ) などがある。基本語幹の末尾が -g、連用語幹、融合語幹の末尾子音は -dz ($d\zeta$) になり、音便語幹は母音になる。音便語幹の語尾頭子音は -dz ($d\zeta$) である。

基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
否定形	非過去形	第三中止形	過去形
$\phi u:g-an$ (漕がない)	$\phi u:dz-un$	$\phi u:dz-e:$	$\phi u:-dzan$
$?e:g-an$ (泳がない)	$?e:dz-un$	$?e:d\zeta-e:$	$?e:-dzan$

また、「 $?ind\zeta-un$ (行く)」もこのタイプの活用になる。

$?ing-an$ (行かない)	$?ind\zeta-un$	$?in-d\zeta-an$
------------------	----------------	-----------------

(4) k 語幹動詞

k 語幹動詞には、 $?atf-un$ (歩く)、 $ka\zeta-un$ (書く)、 $muts-un$ (持つ) などがある。基本語幹末が -k、連用語幹末が -f (t_s)、音便語幹末が母音あるいは促音で、語尾頭子音が -f である。

基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
否定形	非過去形	第三中止形	過去形
$?akk-an$ (歩かない)	$?atf-un$	$?atf-e:$	$?at-fan$
$kak-an$ (書かない)	$ka\zeta-un$	$ka\zeta-e:$	$ka-tfan$
$?ak-an$ (開かない)	$?af-un$	$?af-e:$	$?a-fan$

また、 $muts-un$ (持つ)、 $tats-un$ (立つ) のような標準語の t 語幹末動詞に対応する伊平屋動詞もこのタイプの活用になる。命令形も $takke:$ (立て) のようになる。現在のところ、t 語幹動詞は確認できていない。

$muk-an$ (持たない)	$muts-un$	$mutf-e:$	$mu-tfan$
$takk-an$ (立たない)	$tats-un$	$taf-e:$	$tat-fan$

また、次の動詞もこの活用のタイプに含めてよいだろう。ただし、 $nd\zeta-un$ (行く) は、基本語幹末子音が -k である点で、k 語幹動詞とみなせるが、連用、融合、音便語幹末の子音は異なる。過去形の語尾が -dzan になっている。k 語幹動詞に、他の活用語幹のタイプが補充法の手続きによって混ざったと考えられる。

$ink-an$ (見ない)	$intf-un$	$intf-e:$	$in-tfan$
$\jmath ink-an$ (沈まない)	$\jmath int\zeta-un$	$\jmath intf-e:$	$\jmath in-tfan$
$kunk-an$ (くびらない)	$kunt\zeta-un$	$kuntf-e:$	$kun-tfan$
$?ik-an$ (行かない)	$nd\zeta-un$	$n:dz-e:$	$n-dzan$

(5) h 語幹動詞

h 語幹動詞は、基本語幹、連用語幹、融合語幹が -h (ϕ) であらわれる。音便語幹は母音でおわり、語尾頭子音が -tf である。

基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
否定形	非過去形	第三中止形	過去形
ʔndzah-aN (出さない)	ʔndzaφ-uN	ʔndzah-e:	ʔndza-tʃaN
no:h-aN (直さない)	no:φ-uN	no:h-e:	no:-tʃaN
turuh-aN (とらさない)	turuφ-uN	turuh-e:	turu-tʃaN
ʔutuh-aN (落とさない)	ʔutuφ-uN	ʔutuh-e:	ʔutu-tʃaN

(6) r 語幹動詞

r 語幹動詞は、3つのタイプにわけた。ひとつは、古代日本語との比較から、「取る」「売る」などの r 語幹動詞に対応するタイプである。ふたつめは、w 語幹動詞に属するものである。基本語幹末子音は r で、連用語幹末、融合語幹末は母音になっている。音便語幹も母音でおわっていて、語尾は -tan になっている。

	基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
強変化	否定形	非過去形	第三中止形	過去形
Ir1	ʔu:r-aN (売らない)	ʔu-N	ʔu:-e:	ʔu:-tan
	tur-aN (取らない)	tu-N	tu-e:	tu-tan
	war-aN (割らない)	wa-N	wa-e:	wa-tan
	nar-aN (ならない)	na-N	na-e:	na-tan
	ke:r-aN (帰らない)	ke:-N	ke:-e:	ke:-tan
	φur-aN (降らない)	φu-N	φu-e:	φu-tan
	φur-aN (掘らない)	φu-N	φu:-e:	φu-tan
Ir2	habur-aN (かぶらない)	habu-N	habu-e:	habu-tan
	tʃir-aN (切らない)	tʃi-N	tʃi:-e:	tʃi:-tan
	ʔarar-aN (洗わない)	ʔara-N	ʔara-e:	ʔara-tan
	ko:r-aN (買わない)	ko:-N	ko:-e:	ko:-tan
	mo:r-aN (舞わない)	mo:-N	mo:-e:	mo:-tan
	i:r-aN (酔わない)	i:-N	i:-e:	i:-tan

2. 5 混合変化動詞

混合変化動詞は、連用語幹も音便語幹も同じ形で末尾に母音があらわれる。基本語幹末に子音があらわれる。母音語幹と子音語幹の混合したタイプである。伊平屋方言の場合、基本語幹が強変化動詞化することによって混合変化動詞に移行したものが分類される。

混合変化	基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
	否定形	非過去形	第三中止形	過去形
II e1	ʔakir-aN (開けない)	ʔaki-N	ʔaki-e:	ʔaki-tan
	ʃittir-aN (捨てない)	ʃiti-N	ʃitti-e:	ʃitti-tan
	ki:r-aN (くれない)	kwi:-N	kwi-e:	kwi-tan
	ʔirir-aN (入れない)	ʔiri:-N	ʔiri-e:	ʔiri-tan
	i:r-aN (もらわない)	i:-N	i:-e:	i:-tan

	fittar-aN (濡れない)	fitta-N	fitta-e:	fitta-taN
	?indar-aN (濡れない)	?inda-N	?inda-e:	?inda-taN
	nu:r-aN (寝ない)	nu-N	nu:-e:	nu:-taN
	ku:r-aN (閉めない)	ku-N	ku:-e:	ku:-taN
	me:r-aN (燃えない)	me-N	me:-e:	me:-taN
	ke:r-aN (蹴らない)	ke-N	ke:-e:	ke:-taN
II e2	?ukir-aN (起きない)	?uki-N	?uki-e:	?uki-taN
	?urir-aN (降りない)	?uri-N	?uri-e:	?uri-taN
	?u(t)tir-aN (落ちない)	?u(t)ti-N	?utti-e:	?uti-taN
II i	tʃi:r-aN (着ない)	tʃi-N	tʃi:-e:	tʃi:-taN

2. 6 特殊変化動詞

	否定形	非過去形	第三中止形	過去形
	h-aN ~ s-aN (しない)	ɸu-N	h-e:	ʃitʃaN
	ɸuN (来ない)	ʃuN	ʃe:	(t)ʃaN
	ma:N (みない)	nun	ne:	na:N
	kw-aN (食わない)	kwe-N	kwa:-e:	kwa:-taN
	?jaN (言わない)	?ju:N	?je:	?ju:taN
	j-aN (座らない)	ju-N	j-e:	?it-ʃaN
		neN		neN-taN
	ur-aN (いない)	u-N	u-e:	u-taN
	(?ar-aN)	?a-N	?a-e:	?a-taN

【資料】動詞活用一覧

	基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
強変化	否定形	非過去形	第三中止形	過去形
Im1	num-aN (飲まない)	nun-un	nun-e:	nu-naN
	kam-aN (食べない)	kan-un	kan-e:	ka-naN
	?am-aN (編まない)	?an-un	?an-e:	?a-naN
	kum-aN (汲まない)	kun-un	kun-e:	ku-naN
Im2	sukum-aN (死なない)	sukun-un	sukun-e:	suku-naN
Ib	tub-aN (飛ばない)	tun-un	tun-e:	tu-naN
	?aʃib-aN (遊ばない)	?aʃin-un	?aʃin-e:	aʃi-naN
Ik1	?akk-aN (歩かない)	?atʃ-un	?attʃ-e:	?at-ʃaN
	kak-aN (書かない)	kaʃ-un	kaʃ-e:	ka-tʃaN
	?ak-aN (開かない)	?aʃ-un	?aʃ-e:	?a-tʃaN
Ik2	muk-aN (持たない)	muts-un	mutʃ-e:	mu-tʃaN
	takk-aN (立たない)	tats-un	taʃ-e:	tat-ʃaN
Ik3	ink-aN (見ない)	intʃ-un	intʃ-e:	in-tʃaN
	ʃink-aN (沈まない)	ʃints-un	ʃintʃ-e:	ʃin-tʃaN

Ik4	kunk-aN (くびらない)	kunts-un	kuntʃ-e:	kun-tʃaŋ
Ik5	ʔik-aN (行かない)	ŋdʒ-un	ŋ: dʒ-e:	ŋ-dʒaŋ
Ig1	ʔu:g-aN (漕がない)	ʔu: dʒ-un	ʔu: dʒ-e:	ʔu:- dʒaŋ
	ʔe:g-aN (泳がない)	ʔe: dʒ-un	ʔe: dʒ-e:	ʔe:- dʒaŋ
Ig2	ʔiŋg-aN (行かない)	ʔiŋdʒ-un		ʔiŋ-dʒaŋ
Ih	ʔŋdzah-aN (出さない)	ʔŋdzaph-un	ʔŋdzah-e:	ʔŋdzah-tʃaŋ
	no:h-aN (直さない)	no:φ-un	no:h-e:	no:-tʃaŋ
	turuh-aN (とらさない)	turuφ-un	turuh-e:	turu-tʃaŋ
	ʔutuh-aN (落とさない)	ʔutuφ-un	ʔutuh-e:	ʔutu-tʃaŋ
Ir1	ʔu:r-aN (売らない)	ʔu-N	ʔu:-e:	ʔu:-taŋ
	tur-aN (取らない)	tu-N	tu-e:	tu-taŋ
	war-aN (割らない)	wa-N	wa-e:	wa-taŋ
	nar-aN (ならない)	na-N	na-e:	na-taŋ
	ke:r-aN (帰らない)	ke:-N	ke:-e:	ke:-taŋ
	ʔur-aN (降らない)	ʔu-N	ʔu-e:	ʔu-taŋ
	ʔur-aN (掘らない)	ʔu-N	ʔu:-e:	ʔu-taŋ
	habur-aN (かぶらない)	habu-N	habu-e:	habu-taŋ
Ir2	tʃir-aN (切らない)	tʃi-N	tʃi:-e:	tʃi:-taŋ
	ʔarar-aN (洗わない)	ʔara-N	ʔara-e:	ʔara-taŋ
	ko:r-aN (買わない)	ko:-N	ko:-e:	ko:-taŋ
	mo:r-aN (舞わない)	mo:-N	mo:-e	mo:-taŋ
	i:r-aN (酔わない)	i:-N	i:-e:	i:-taŋ
混合変化	基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
	否定形	非過去形	第三中止形	過去形
II e1	ʔakir-aN (開けない)	ʔaki-N	ʔaki-e:	ʔaki-taŋ
	ʃittir-aN (捨てない)	ʃiti-N	ʃitti-e:	ʃitti-taŋ
	ki:r-aN (くれない)	kwi:-N	kwi-e:	kwi-taŋ
	ʔirir-aN (入れない)	ʔiri:-N	ʔiri-e:	ʔiri-taŋ
	i:r-aN (もらわない)	i:-N	i:-e:	i:-taŋ
	ʃittar-aN (濡れない)	ʃitta-N	ʃitta-e:	ʃitta-taŋ
	ʔindar-aN (濡れない)	ʔinda-N	ʔinda-e:	ʔinda-taŋ
	nu:r-aN (寝ない)	nu-N	nu:-e:	nu:-taŋ
	ku:r-aN (閉めない)	ku-N	ku:-e:	ku:-taŋ
	me:r-aN (燃えない)	me-N	me:-e:	me:-taŋ
II e2	ke:r-aN (蹴らない)	ke-N	ke:-e:	ke:-taŋ
	ʔukir-aN (起きない)	ʔuki-N	ʔuki-e:	ʔuki-taŋ
	ʔurir-aN (降りない)	ʔuri-N	ʔuri-e:	ʔuri-taŋ
II i	ʔu(t)tir-aN (落ちない)	ʔu(t)ti-N	ʔutti-e:	ʔuti-taŋ
	tʃi:r-aN (着ない)	tʃi-N	tʃi:-e:	tʃi:-taŋ

特殊変化	基本語幹	連用語幹	融合語幹	音便語幹
	否定形	非過去形	第三中止形	過去形
	h-aN~s-aN (しない)	φu-N	h-e:	ʃitʃaN
	φuN (来ない)	ʃuN	ʃe:	(t)ʃaN
	ma:N (みない)	nun	ne:	na:N
	kw-aN (食わない)	kwe-N	kwa:-e:	kwa:-tan
	ʔjaN (言わない)	ʔju:N	ʔje:	ʔju:tan
	j-aN (座らない)	ju-N	j-e:	ʔit-ʃaN
		neN	ne:na ⁴	nen-tan
	ur-aN (いない)	u-N	u-e:	u-tan
	(ʔar-aN)	ʔa-N	ʔa-e:	ʔa-tan

3 文法論的なカテゴリーと文法的な形式

羅列的な記述になってしまうが、これまでに得られた用例を用いて可能な限り文法論的なカテゴリーに基づいて文法的な形式をまとめてみることにする。形態論的な形式を中心にまとめるが、整理ができておらず、語彙的な形式までふくみこんでしまっているところもある。なお、3. 1の一部には、當山(2017)の内容が含まれている。

3. 1 アスペクト・テンス

伊平屋方言のアスペクト・テンス形式には、スル、シタ、シオル、シオッタ、シアリオル、シアリオッタ相当形式が存在する。

表に、主体動作客体変化動詞、主体変化動詞、主体動作動詞のアスペクトによる動詞の分類に従って、それぞれの動詞のタイプによってどのような形式が存在しているか／存在していないかをまとめた。各タイプは、「開ける(主体動作客体変化動詞)」、「開く(主体変化動詞)」、「飲む(主体動作動詞)」、「ある、いる(存在動詞)」を代表させて動詞の語形を整理する。

⁴第三中止形の否定は、形式上は存在していないと思われる。

【表】 動詞の分類とアスペクト・テンス形式の分布

	主動客変 (開ける)	主体変化 (開く)	主体動作 (飲む)	存在動詞 (いる)	存在動詞 (ある)
スル				u-N (いる)	?a-N (ある)
シタ	?aki-tan (開けた)	?a-ʃan (開いた)	nu-nan (飲んだ)	u-tan (いた)	?a-tan (あった)
シオル	?aki-N (開ける)	?aʃ-un (開く)	nun-un (飲む)		
シオッタ	?aki-tan (開けた)	?aʃ-utan (開いた)	nun-utan (飲んだ)	ui-tan ⁵ (いた)	?ai-tan (あった)
シアリオル	?aki-jon (開けている)	?aʃ-o:N (開いている)	nun-o:N (飲んでいる)		
シアリオッタ	?aki-jo:-tan (開けていた)	?aʃ-o:-tan (開いていた)	nun-o:-tan (飲んでいた)		

シオッタ相当形式は、連用語幹に -tan、-utan を後接させて作る。シアリオル相当形式は、融合語幹に -jon、-o:N を後接させて作る。シアリオッタ相当形式は、融合語幹に -jo:-tan、-o:-tan を後接させて作る（スル、シタ、シオル相当形式の単語づくりについては、2節を参照されたい）。

伊平屋方言は、完成相と継続相の二項対立型のアスペクト体系をもつ。これは、首里方言と共通しているが、首里方言の継続相がシテ中止形に存在動詞を接続させて作られるのに対して、伊平屋方言の継続相はシアリ中止形に存在動詞を接続させている。

【表】 島尻方言のアスペクト・テンス体系

アスペクト	完成相	継続相
テンス		
非過去	?aki-N (開ける)	?aki-jon (開けている)
過去	?aki-tan (開けた)	?aki-jo:-tan (開けていた)

動詞の完成相非過去の形式は、基本的に、〈はじめ〉から〈なか〉をへて、〈おわり〉にいたるまでのひとまとまりの動作を表す。しかし、変化の進行や動作の進行、すなわち、限界に到達していない動作や状態をあらわすこともできる。はじめの2例が限界に到達したひとまとまりの動作をあらわしていて、後の3例が変化の進行、あるいは動作の進行をあらわしている。この進行の意味は、この形式がシオル相当形式であり、もともと進行を

⁵ 形式上は、「un (居る)」の第一中止形にさらに un がくっついて融合した形式 uin の過去形である。そのため、シオッタ相当形式とした。現在までに utan (シタ形式) との違いは確認できていない。

表す形式であったことと関連している。

- (1) taro:ga afa: rokuɖzine jaraɖuɖi aki:N.
太郎が 明日 六時に 戸を 開ける。
- (2) unu miseja me:naɖi ʃikama: kuɖzine afo:ʃiga afa:ja ɖzu:ɖzine: aɖun.
その 店は 毎日 朝 9時に 開いているが、 明日は 10時に 開く。
- (3) une une makuga aɖundo:.
ほら ほら、幕が 開きつつあるよ。
- (4) nɖendi iʃiga ʃiʃanu ka:rake: uttin.
みて! 岩が 下の 川に 落ちつつある。[岩が崖から落ちてくるのをみて]
- (5) ai, amiru ɸunmahe:.
おや、雨が 降っているじゃないか。[窓を開けて]

また、伊平屋方言では、シアリ中止形と動詞 attsun (歩く) の分析的な形式が進行をあらわす意味として文法的に発達している。ここでの補助動詞 attsun (歩く) は、主体の制限から解放され、語彙的な意味を失っている (意味の喪失 (semantic bleaching))。また、動作進行という新たな文法的意味を獲得しており、次の例のように音韻縮約が起こっている。また、変化の主体が無情物であっても、変化の進行を表現するためにこの形式を用いることができる。

- (6) jaraɖuɖi akie: attsun/akja:tsun.
戸を 開けている。[今何をしているのかと質問されて]
- (7) iʃiga uttie attsun.
岩が 落ちているよ。[崖が高くて、岩が地面に落ちている途中なのをみて]

このシアリアルキオルに相当する形式 (あるいは、テンス的に対立するシアリアルキオッタ相当形式) は、〈反復習慣〉をあらわすことができる。したがって、継続相であるシアリアル相当形式と表現領域の重なりが大きい。特に、主体動作動詞のような非内的限界動詞の場合、競合している。ただし、シアリアルキオル相当形式は、動作や状態の終了限界達成後を表すことはできず、そのため、主体動作客体変化動詞のような内的限界動詞の場合、〈主体結果〉〈客体結果〉まであらわすことはできないようである。この時はシアリアル相当形式が用いられる。

- (8) ai, jaraɖuɖi afo:ssa:.
おや、戸が 開いているね。
- (9) e, gumi ɸirakajo:ssa:, majaga mata ʔma:mari ɸo:ssa.
あ、ゴミが 散らかっているね。猫が また ここまで 来ているね。
- (10) ane magi:nu iʃiga ɖzi:ke: uttijon.
あれ、大きな 岩が 地面に 落ちている。
- (11) jaraɖuɖi akijon.
戸を 開けてある。
- (12) anma:ga ɸuton ha:rakahon.
お母さんが 布団を 干してある。

- (13) su:ga gomi fittijo:N.
お父さんが ゴミを 捨ててある。

〈開始限界後の段階〉をあらわす次の例はすべて「シリアルキオル（している）」相当形式への置き換えが可能である。さらに、調査時にこのような例をたずねると、話者は、はじめに「シリアルキオル」形式で回答する。このため、伊平屋方言では、かつては、シオルとシリアルキオルによる完成相と継続相の二項対立型アスペクトをなしていたが、シリアルキオル相当形式が新しく生じた結果、〈開始限界後の段階〉をシリアルキオル相当形式が担うようになっていると考える。

- (14) ane nʃendi su:ga saki nuno:NRO:.
ほら、見て、お父さんが 酒を 飲んでいるよ。

- (15) ane, ami ʃujo:ssa.
おや、雨が 降っている。[窓を開けて]

- (16) ja:ke: ke:ro: taro:ga jaraʃi aki:jo:nu hadʒiro:.
家に 帰ると、太郎が 戸を 開けているだろう。[太郎が窓を開けている（窓が開きつつある）のを想像]

他の沖縄島内の方言とは異なる、伊平屋方言のもうひとつ特筆すべきことに、シテアル相当形式がないという点があげられる。〈痕跡〉や〈パーフェクト〉は、シリアルキオル（あるいは、シリアルキオッタ）相当形式が表現する。

- (17) ta:gara saki nuno:ssa:.
誰かが 酒を 飲んでいるね。[部屋のおいぐさいの気づいて]

- (18) dʒi: ʃittae:, uri:ja mata ju:bi ami ʃujo:ssaja:.
地面が 濡れて、これは また 昨夜 雨が 降っているね。

- (19) taro:ga jaraʃi aki:jo:mahe:.
太郎が 戸を 開けてあったんじゃないか。[太郎が戸を開けてしまっていた（戸は開いていた）のを思い出して]

テンス的に対立しているシリアルキオッタ相当形式は、実現の直前までいったが、実現しなかったことをあらわす〈未遂〉というモーダルな意味を表すことができる。シリアルキオッタ相当形式におきかえることもできる。

- (20) an tukije wanja na: iʃigwa:ne: sukuno:tassa:.
あの時、私は もう 少しで 死ぬところだった。

- (21) midʒitu maʃigae: na: iʃigwa:ne: saki nuno:tassa:.
水と まちがえて、もう 少しで お酒を 飲むところだった。

また、文法的なアスペクトには含まれないが、時間的展開を表現する形式としての語彙的なアスペクト形式をいくつかあげておく。

(1) スルト シオル形式

	非過去形	第二過去形
完成相の形式	akinte ϕ un (開けようとする)	akinte ϕ utan (開けようとした)
継続相の形式	akinte hon (開けようとしている)	akinte hotan (開けようとしていた)

(2) スルト シアリ アルキオル形式

	非過去形	第二過去形
	akinte he: attsun (開けようとしている)	akinte he: attsu:tan (開けようとしていた)

(3) シガタ ナリアリオル形式

	非過去形	第二過去形
	akigata najon (開けそう)	akigata najo:tan (開けそうだった)

(1) スルト シオル形式

内的限界動詞

(22) magihe:nu iſiga nagari hadzimitan. gakikara utinte ϕ undo:.
大きな 石が 転がり 始めたよ! 崖から 落ちようと している!

(23) jarkuſiga atunte: ϕ un.
戸が 開こうと している。(早く 閉めない) [風が強いので、戸がガタガタ動いているので]

(24) ane ahangwa:ga anu gakinu subane ue: utinte hondo:.
ほら、赤ちゃんが あの 崖の 近くに いて、落ちようと しているよ。

非内的限界動詞

(25) ane: su:ga saki nununte ϕ un.
あ、お父さんが 酒を 飲もうと している。[お父さんが酒をテーブルの上に置いているのを見て]

(2) スルト シアリ アルキオル形式

内的限界動詞

(26) taro:ga jarkuſi akinte he: attsun.
太郎が 戸を 開けようと している。[戸に近づいているのを見て]

非内的限界動詞

(27) ane: su:ga saki nununte he: attsu:n.
あ、お父さんが 酒を 飲もうと している。[目撃している場合]

無意志動詞の場合、違和感がある文になる。

(28) ?? attangwa:ne: dzo: makkuru: nae: hadži hidžuruku nae:, ami nama φuinte he: attfun.

急に 外が 暗く なって、 風が 冷たく なって、 雨が 今にも 降ろうと している。

(29) ?? anu gakinu i:nu ifi nʃenri.garagara e: nama sugu utinte he: attfun.

あの 崖の 上の 石を 見て! ぐらぐら して、今にも 落ちようと している。

(3) シガタ ナリアリオル形式

内的限界動詞

(30) taro:ga jarakuʃi akigata najo:tafiqa akantassa:.

太郎が 戸を 開けそうに なっていたが、 開かなかったよ。

非内的限界動詞

(31) attangwa:ne: dzo: makkuru: nae: hadži hidžuruku nae:, ami nama φuigata: najon.

急に 外が 暗く なって、 風が 冷たく なって、 雨が 今にも 降ろうとし ている。

(32) anehja tanme:ga sakigami akie: saki ʃidze: nama sugu

ほら、おじいちゃんがサケガメを 開けて、酒を ついで、 今にも

saki numigata najon.

お酒を 飲もうと しているよ!

また、動作や変化の開始限界の兆候をとらえる形式-gisan (過去形は-gi:satan) がみられた。

内的限界動詞

(33) jarakuʃiga atʃiqi:samahe:

戸が 開きそうじゃないか。

(34) ro:sokuno hi:ga na:jagati ʃaigi:sa.

ろうそくの 火が もうすぐ 消えそうだ。

(35) anu gakinu i:nu ifi nʃenri. garagara he: nama sugu utiqi:saro:

あの 崖の 上の 岩を 見て! ぐらぐら して、今にも 落ちそうだよ。

非内的限界動詞

(36) hadžiga tsu:hanu hatakinu hi:ga uʃie: jamaga me:gi:satan.

風が 強いから 畑の 火が うつつて 山が 燃えそうだった。

3. 2 ヴォイス

受動動詞の形式は、基本語幹に接辞-ari:N あるいは-rari:N を後接させて作る。能動文との対応関係、つまり能動文のどの要素が主語になるかという観点からタイプ化すると、直接対象主語の受動文、あい手対象主語の受動文、所有者主語の受動文、間接受動文に大別す

ることができる。伊平屋方言の特徴として、あい手対象主語の受動文は確認することができなかったが、そのほかすべてのタイプの受動文の例がみられた。また、自動詞を受動動詞の形式にして用いることも可能ということである。ただし、他の沖縄島内の方言では、所有者主語の受動文、間接受動文は作れない地点が多く、今回調査した話者の方が比較的若い方だったことや、日本語を方言に訳していただく形で用例をえた方法上の問題点をふまえると、確認する必要があるかと思われる。また、使役文の用例は得ることができなかった。

直接対象主語の受動文

- (37) bappe:e: matʃigae: gadzimarʉ tʃi:e: tanme:ne mugeraritan.
間違えて、ガジュマルを 切って、(祖父に) 怒られた。
- (38) tara:ja denwane ukuharitan.
区長は 電話に 起こされた。
- (39) niʃiru:ja tara:ne naqiraritan.
泥棒は 太郎に 投げられた。

もの主語の受動文

- (40) ʃuroʃikine tʃitʃimarijo:tanu taru:nu dzinja bu:ru niʃimaritan.
風呂敷に 包まれていた 太郎の お金は すべて 盗まれた。
- (41) tʃina ʃitsunu me:nu hi:ne tʃinaga ta:gara:ne: tʃi:rarijo:tan.
綱引きの 前日に 綱が 誰かに 切られていた。(結果継続)
- (42) tʃinaja ha:munne rippangwa:ne tʃi:rarijo:tan.
綱は 刃物で きれいに 切られていた。(結果継続)

所有者主語の受動文

- (43) niʃiru:ja taru: sugunte hitʃaʃiga tara:ne kenna: katʃimiraritan.
泥棒は 太郎を なぐろうとしたが、太郎に 腕を つかまれた。

間接受動文

- (44) hanakoja warabine nakaritan. / warabine ʃunde: harie:jo:.
花子は 赤ちゃんに 泣かれた。
- (45) tara:ja amine ʃu:rarie kumatan.
太郎は 雨に 降られて、困った。

また、動作主体が人ではなく、外的作用（ここでは、風や大雨）による影響である受動文の例もみられた。この場合も、直接補語は ne 格であらわされる。

- (46) tara:ga ja:nu ka:raja hadzine tubaharitan.
太郎さんの 家の 屋根は 風に とばされた。
- (47) u:ami/magiami ʃue: haʃinu nagaharitan.
大雨が 降って、 橋が 流された。

3. 3 やりもらい

やりもらいの形式は、第三中止形に補助動詞 *туруфун* を組み合わせた分析的な形式が用いられる。授受動詞には *kwi:n* (くれる)、*i:n* (もらう) があるが、これまでにこれらが用いられている例は確認できていない。

(48) *su:ga u:mike n:dʒe: turuʃan.*
父が 海に 行って くれた。

(49) *odʒi:ga manna tʃi:e: turuʃan.*
おじさんが 一緒に 切って くれた。

依頼表現

やりもらいの形式は、述語が命令形になると、依頼表現の文になって、相手に動作の実行をたのむ・お願いするというモーダルな意味を表現する。得られた用例では、命令形や勧誘形、あるいは「～してくれない？」に相当する形式など複数の形式であらわれている。命令文や勧誘文との関連とそれぞれを使い分ける条件を調査する必要がある。

(50) *ittutʃi tungwane ujo:kiro: / uenri / ʔjo:tʃe turuhən. / ʔjo:tʃituruhendija.*
しばらく 台所に いて ください。

(51) *ʃi:dʒa: kundun mi: utuʃi:ro: / utuhe: turuhi:ro: / ʔturuhi:.*
兄さん、今年も 実を 落として くれ。

(52) *du:kara / ʔja:kara / uqakara satʃine: uriranahe: / urie: turahani.*
君から さきに 降りて くれ。

(53) *uttu:ken nisenen turuhendi / turuhe: turuhando:.*
弟にも 2000 円を あげて / くれて くれ。

(54) *unu ju: jaʃiku u:e: turuhendi. / turaha:ni.*
その 魚を 安く 売って ください。

(55) *wanga kawaine unu saki nunenri. / nune: turuhənri. / umanahe:. / nuno: (のもう) . / nune: turahani (すすめる) .*

私の かわりに この酒を のんで ちょうだい。

(56) *ʔja:n ʃuendi / ʃue: turuhe:.*
お前も 掘って くれ。

3. 4 可能表現

内的に条件づけられた可能

イーブン可能形

(57) *watta: warabi:ja ʃiman ho:gen dikiindo: / naindo: / i:ʃunro:.*
うちの 子は 伊平屋方言を 話せるよ。

(58) *tara:ja je:goja abihanro:.* (太郎は英語は話せないよ。)

(59) *wanja arerugi: jatujo, saki nununu kutuja naranro: / saki numihanro:.*
私はアレルギーだから、酒を飲むことができないの。

ナイン可能形

- (60) wanja arerugi: jatujo, saki nununu kutuja naranro: / saki numihanro:.
私はアレルギーだから、酒を飲むことができないの。
- (61) watta: warabi:ja ſiman ho:gen dikiindo: / naindo: / i:φunro:.
うちの 子は 伊平屋方言を 話せるよ。

外的に条件づけられた可能

サリーン可能形

- (62) tſu:ja ſigutu he:ku uwatatu φu:rarintero:.
今日は 仕事が 早く 終わったから、来れるってよ。
- (63) tſu:ja harijo:ta:tu, u:mine e:garitan. (今日は晴れていたから、海で泳げた。)
- (64) A : ?ja:ga saki numantan midzirahani. (お前が飲まなかったの? 珍しいな.)
B : namakara uttu so:nga inganko: narantu, jattu numarantanba:jo:.
今から弟を迎えにいかないといけないんだよ。だから飲めなかったんだよ。
- (65) nitſi ndzie: tſu: hittſi: nu:N kanunu kutu narantassa: / nu:N kamarantassa:.
熱が出て、一日何も食べることができなかったよ。

ナイン可能形

- (66) nitſi ndzie: tſu: hittſi: nu:N kanunu kutu narantassa: / nu:N kamarantassa:.
熱が出て、一日何も食べることができなかったよ。

社会的に条件づけられた可能（規範的な可能）の例もみられた。

- (67) wanja hatatſi natatu, kisa saki numarinro: / saki nununu kutu nain.
私は一昨日、20歳になったから、もう、お酒を飲むことができるよ。

必然表現

- (68) urja: bu:ru namanko: narante ſinſi:ga ?ju:tamahe: / ?ju:tahani?
これは 全部 飲まないといけないって 先生が 言ってたろ。

3. 5 たずね

疑問詞質問形

疑問詞質問文の述語は、非過去形の場合、-ru を後接させた形式があらわれる。過去形の場合は、動詞の語末の N を脱落させた形式（尾略形）の語末の母音を長母音にした形式、尾略形に-ga を後接させた形式がみられた。

〈非過去形〉

- (69) nu:nte ſittajoru. (なぜ 濡れているの?)
- (70) A : ane, nu:ga numanru: midzirahamahe: なんでのまないの? 珍しいんじゃないか。
B : tſu:ja kuruma mutſe tfo:tu numaran. 今日車をもってきているから飲めない。

- (71) A : nu:ga nune: ne:nru? (なんで (薬を) 飲んでいないの?)
 B : kisa no:ta:tu, numanten Jimuhaji. (もう治ったから、飲まなくてもいいでしょ。)
 A : urja: bu:ru namanko:, narante jinfi:ga ?ju:tamahe: / ?ju:tahaji?
 これは 全部 飲まないと いけないって 先生が 言ってたどろ。

〈過去形〉

- (72) A : kinnuja ta:tu afina:. (昨日は誰と遊んだの?)
 B : tara:tu afinan. (太郎と遊んだよ。)
 (73) A : ?ja:ja namamadi nankai to:kjo:ke: n:dzaqa:.
 お前は 今まで 何回 東京に 行ったの?
 B : wanja namamadine sankwai n:dzo:ndo:.
 私は 今までに 三回 行っているよ。

肯否質問形

肯否質問文の述語の動詞は、非過去形の場合、尾略形に -mi を後接させた形式、-ruri を後接させた形式がみられた。過去形の場合、-ti: (あるいは、-pi:) を後接させた形式、また、否定の形式のみ、-ruti: を後接させた形式がみられた。それぞれの形式を述語にもつ文の違いは不明である。

〈非過去形〉

- (74) A : tfu:ja nunumi?. (今日は飲むの?)
 B : wanja ku:ja numanro:. (俺は今日は飲まないよ)
 (75) A : bu:ru kisa fikake:ruri? (みんなもう飲んでいるの? (しかけてるの?))
 B : n:n: na:da nune: ne:ndo: / fikake: ne:nro:. (いや、まだ飲んでいないよ。)
 (76) hanakoja numanruri? / numaji? (花子は飲まないの?)

〈過去形〉

- (77) anu mise kisa afoti:.
 あの 店、 さっき 開いていた?
 (78) A : kisa jarakufi akiti:.
 もう 戸を 開けた?
 B : ?N: taro:ga akitando:.
 うん、 太郎が 開けたよ。[目撃した場合]
 (79) A : gakko:ne:ru afini:. (学校で遊んだの?)
 B : ananro:. tara:nu ja:ne: afinanro:.
 ちがうよ。太郎の 家で 遊んだよ。
 (80) ?ja: uiru fu:ti:.
 お前、いたのか?
 (81) A : kisa kusui nuni:. (さっき 薬を 飲んだか?)
 B : in: kisa nunando:. (うん、 さっき 飲んだ。)
 (82) kusuija nunihe: / numanba:i. (薬は飲んだの?)

- (83) ?ja:ja unu kusui nune: ne:nruri? (お前はこの薬を飲んでいないの?)
 (84) ?ja:ja anu tutʃi nu:n kamanruti:? (食べないの?) / kanene:nruti:? (食べていなかったの?)
 あなた、あのとき、何も食べていなかったの?

うたがいたずね形

聞き手へのはたらきかけ性が低い形式である。否定形式の場合は、-ruki: (-ruka:) を、肯定形式の場合は-ka:を後接させている例を得ることができた。

- (85) bento:ga ti:tʃi nukuinro: ta:gara kamanruki:?
 お弁当が一つだけ残っているよ。誰かしら食べなかったの?
 (86) taro:ja nama: nuno:ka. / nune: attsu:ka:? (太郎はまだ飲んでいるのかな?)
 (87) tara:ja kusui buru numanruta:ka? (太郎は薬を全部飲まなかったのかな?)
 (88) tara:ja sakija nune: ne:nrutaka:. (太郎はお酒は飲んでいなかったのかな?)

3. 6 はたらきかけ

命令形

命令形を述語に用いる命令文の他に、第三中止形に動詞「見る」の命令形 nri を組み合わせた分析的な形式、また、-kanahe: (している) のような接辞を後接させた形式がみられた。

- (89) sugu jarakuʃi akire:.
 すぐ 戸を 開ける。
 (90) tamapija ?ja:n araendi arare:hja:.
 (弟に)「たまには お前も (皿を) あらえよ」
 (91) gu:gu ja:n gutu he:kuna: miruku nume:.
 いやいや いわないで 早く 牛乳を 飲め。
 (92) aʃibangutu ʃigutu he:.
 休んでないで 仕事を しろ。
 (93) tenki najotu dzo:ne: aʃine: ʃa:.
 天気は いいから、 外で 遊んで 来い。
 (94) ?jan ittutʃi tʃi:e nri.
 おまえも ちょっと 着て みろ。
 (95) ?ma:ke tʃe nri. (こっちへ 来て みろ。)
 (96) tʃu:ja du:tʃine nu:re: / nu:enranahe: / nu:e nri.
 今日は 一人で 寝て みろ。
 (97) mu:ru akijo:kanahe:.
 (戸を) 全部 開け終わっている。 [会場に行った時には窓を開け終わっているよう
 命じて]
 (98) ukuritujo:, satʃine: nuno:kanahe: / ʃikakiranahe:.
 遅くなりそうだから、先に飲んでいろよ。

勧誘形

勧誘文の述語は、これまで「～しないか」というような肯否質問形の否定形であらわれている。最後の例は聞き手に動作の実行をうながしており、もはや命令文に近い。

- (99) basu urie: attfe: ka:ra:ni.
バスを 降りて、 歩いて 帰らないか。
- (100) nimutʃi dzo:ke ndzahe: ja:n naha katadzikirani.
荷物を 外に 出して、家の 中を 片づけないか。
- (101) bu:rune: ʃu:ni: ʃu:dze ndani.
みんなで 舟を 漕いで みないか。
- (102) bu:rune: ʃu:ni: ʃu:qani.
みんなで 舟を 漕がないか。
- (103) kamanahe:. 食べないか。

禁止形

禁止形は語尾に-jo のついた形式があらわれる。また、否定形に-ki、あるいは-ke を後接させて「～せずにおけ（～せずにいる）」のようにあらわす文のほうが多くみられた。

- (104) jatten ʔja:ja kamidzu:hatu na: kamanke: / kamunajo: / kane: naranro:.
でもお前は食べすぎだから、もう 食べるな。
- (105) abunahattu, waraba:ja ʃunke:.
危ないから、子供は 来ないでおけ。
- (106) na: iʃigwa: ho:, wa:ga tsu:numari numankiro:.
もうすぐ来るから、俺が来るまで 飲まないでおけよ。
- (107) na: kamanke:ro: / kamanke:ro: / ju:kure: tara:nu bunga ne:n naiʃiga.
もう 食べないでおけよ。 太郎の分がなくなるよ。

3. 7 中止形（連用形）

中止形は、動詞が述語になっても文が続く場合に使われる形である。中止形には、第一中止形と、第一中止形に助辞=te がついた形の第二中止形、そして、第一中止形に存在動詞「アリ」（有り）が接続した形の第三中止形がある。また、いいおわりの形（終止形）にみられるテンス・ムードの対立はない。首里方言や北部方言において、第一中止形が単独で使われることはほとんどなく、名詞づくりや複合動詞、派生形容詞などの単語づくりの要素として用いられているようであることから、伊平屋方言でも同様と考える。第二中止形は伊平屋方言にはなく、第三中止形が積極的に用いられている。第三中止形は、単語づくりの要素にもなるが、単独で文の中にあらわれて2つの動作の時間的な関係（先行、同時）もあらわす。また、修飾語としてはたらくこともある。

- (108) wanga arae: su:ga katadzikitan.
僕が 洗って、お父さんが 片づけた。
- (109) u:mike n:dze: ʔe:dze: ʃan.
海に 行って、泳いで 来た。

(110) sa: kuntʃe: kagoke: iritan.

足を 縛って、籠に 入れた。

中止形と同じ動詞を述語に用いて、動作や存在を対比的に示す例がみられた。

(111) hiqafineja gamaga ae: nifineja hakaga an.

東には 洞窟が あって、西には お墓が ある。

(112) wanja makkara jo:ɸuku tʃi:e: imo:toja o:ru jo:ɸuku tʃi:tan.

私は 赤い 服を 着て、妹は 青い 服を 着た。

修飾語としてはたらき、第二の動きの側面（具体的なあらわれ、ようす、方法）を説明する例。

(113) arija i:e: nu:jon.

彼は 酔って 寝ている。

(114) tara:ja wadzine: nijiru: ʔwa:gitan.

太郎は 怒って 泥棒を 追いかけた。

(115) hadzINU ɸutʃe: nankuru u(t)titan.

風が 吹いて 自然に 落ちた。

(116) habUN sukune: ka:bike: nukujo:tan.

ヘビも 死んで 皮だけ 残っていた。

(117) bu:ru ke:e: namaja tarUN uran.

みんな かえって 今は だれも いない。

3. 8 条件形

条件形は、あわせ文のなかの条件的なつきそい文の述語としてもちいられる動詞のかたちである。条件的なつきそい文は、いいおわる文のあらわすことがらなりたつための条件をあらわしている。伊平屋方言の条件形は、おおきく、原因・理由、条件、契機などのまさめの関係をあらわす形式と、うらめ原因やゆずり状況などのうらめの関係をあらわす形式とに分かれる。

-tu 条件形

-tu 条件形は、原因・理由、契機をつきそい文にさしだすときに用いられる。意味・機能的には、現代日本語のノデ条件形、カラ条件形に対応する。現代日本語の場合には、「するので」のかたちがせまい意味での原因をあらわし、「するから」のかたちが理由をいいあらわすというちがいがあがるが、伊平屋方言のばあいにはそれらを区別してあらわす形式は分化していないようである。

(118) anma:ja mun tsukuitu araran.

お母さんは 料理を 作るから、洗わない。

(119) taro:ga kadze hiʃatu saikinja dʒiro:garu jarakuʃi akie: attsun.

太郎が 風邪を ひいたので 最近 は 次郎が 戸を 開けている。

- (120) uma:ne kwa:finu aita:tu wa:ga kanan.
 そこに お菓子が あったから 私が 食べた。
- (121) he:ti ?ja:ritatu figutu fitjan.
 しなさいと 言われたから、仕事を した。

また、つきそい文に実際におこったリアルな出来事がさしだされ、いいおわり文にそれによって引き起こされる出来事が描かれる契機的なつきそいあわせ文にも-tu条件形が用いられる。

- (122) ki:sa miŋi atfo:ta:tu, amiga usumasa ŋue:jo:, urine indajo:n.
 さっき 道を 歩いていたら、雨がはげしくふってね、それでびしょぬれだ。
- (123) ja:ke ke:ta:tu ŋakuga uitan.
 家に 帰ったら、お客さんが いた。

伊平屋方言は、他の多くの北琉球諸語と同様に連用形の否定の形式をもたないが、かわりに-tu条件形の否定の形を用いる。この場合、条件づけ・条件づけられの関係をもっているとはみなせない。述語動作の側面をあらわしているとみなしてよいのかもしれない。

- (124) su:ja figutu sangutu me:nafi ja:ne: un.
 父は 仕事をしないで 毎日 家に いる。
- (125) ta:ken ŋikangutu fittie: ne:n.
 誰にも 聞かないで 捨てて しまった。
- (126) aŋibangutu figutu he:.
遊ばないで 仕事を しろ。

-o:条件形

一般的な出来事、繰り返しの出来事を表現する場合にこの条件形があらわれやすかった。いいおわり文にはものがたり文があらわれる。

- (127) arija su:ke ?ja:riro nu:tanten ŋun.
 彼は お父さんに 言われたら、何でも する。
- (128) ju: ki:ro: tarun aŋiban.
暗く なったら、誰も 遊ばない。
- (129) uttu:ja nu:no: sugu: i:n.
 弟は 飲んだら、すぐに 酔う。
- (130) uno:, ki:nu mi:ja nankuru utin.
熟したら、木の 実は 自然に 落ちる。
- (131) arija ?ja:nko:, nu:n han.
 彼は 言われなければ、何も しない。

未来における出来事を仮定、あるいは想定して、その実現を条件としてつきそい文にさしだすとき、この条件形が用いられることがあった。いいおわりの文にはおしはかりの

文があらわれている。

(132) ja:ke: ke:ro: taro:ga jarakuŋi akie: attsunu hađziro:.

家に 帰ったら、太郎が 戸を 開けて いるだろう。[太郎が窓を開けている（窓が開きつつある）のを想像]

(133) dzira:ga undero:, madzUN nuno: hađziro:. / nune: attsun hađziro:./ dzira:ga madzUNjare:.,
nama manna nuno:N hađziro:.

次郎がいるなら、まだ一緒に飲んでいるはずよ。

-figa 条件形

figa 条件形は、うらめ原因的な関係をあらわすつきそい文の述語になる。現在や過去の事実的なうらめ原因的な関係をあらわし、つきそい文にもいいおわり文にもリアルなできごとが表現される。

(134) iŋin taro:ga aki:figa ŋunage:naja dziro:garu jarakuŋi aki:ssa.

いつも 太郎が 開けるが 時々は 次郎が 戸を 開けるよ。

(135) su:ja ŋui:figa anma:ja ŋuran.

お父さんは 掘るけど、お母さんは 掘らない。

(136) wanja nu:tatu, wandzu: wakaranhiga, ŋinnu magiami ŋu:ti.

私は寝ていたから、私はわからないけど、昨日、大雨がふった？

(137) nama: ŋikarari:figa ŋittitan.

まだ 使えるが、捨てた。

-N 条件形

N 条件形は、ゆずり状況的な関係をあらわすつきそい文の述語になる。つきそい文にさしだされる出来事は、話し手にとっては仮定や前提である。繰り返しの、一般的な場合にも用いられるようである。

(138) ki: ŋu:dze:N,o:ru mi:ja u(t)tiran.

木を 揺らしても、青い 実は 落ちない。

(139) ŋi:dzaja ŋassa nunen i:ran.

兄は どんなに 飲んでも 酔わない。

参考文献

- ・上村幸雄（1963）「首里方言の文法」『沖縄語辞典』国立国語研究所編
- ・奥田靖雄（1992）「動詞論」北京外国語学院講義プリント（『奥田靖雄著作集(3)言語学編(2)』（2015）むぎ書房所収）
- ・奥田靖雄（1993、1994）「動詞の終止形」『教育国語』2-9、2-12、2-13（『奥田靖雄著作集(3)言語学編(2)』（2015）むぎ書房所収）
- ・かりまたしげひさ（2010）「琉球語安慶名方言の動詞の形づくり」『琉球の方言』34号
- ・かりまたしげひさ（2016）「琉球諸語のアスペクト・テンス体系を構成する形式」『琉球諸語と古代日本語—日琉祖語の再建にむけて』くろしお出版
- ・崎原正志（2018）琉球語沖縄首里方言のモード・モダリティーモード・モダリティー調査票作成のため

- にー（覚書）沖縄言語センター月例研究発表会 2018 年 4 月 7 日配布資料
- ・ 崎山拓真・上門梨緒（2017）「伊平屋島田名方言の動詞の活用」『文化庁委託事業報告書危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』琉球大学国際沖縄研究所
 - ・ 鈴木重幸（1983a）「形態論的なカテゴリーについて」『教育国語』72 号、『形態論・序説』1996、むぎ書房に再録
 - ・ 鈴木重幸（1983b）「動詞の形態論的な形の内部構造について」『横浜国大 国語研究』創刊号、『形態論・序説』1996、むぎ書房に再録
 - ・ 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
 - ・ 當山奈那（2017）「伊平屋島尻方言のアスペクト・テンス・モダリティ」『国際琉球沖縄論集』6
 - ・ 仲宗根政善（1983）『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店
 - ・ 名護市史編さん委員会（2006）『名護市史本編・10 言語』名護市役所
 - ・ 琉球方言研究クラブ（1988）「伊平屋の中止形：田名方言を中心に」『琉大方言』3
 - ・ 琉球方言研究クラブ（1989）「伊平屋方言の第三中止形」『琉大方言』4
 - ・ 国立国語研究所（1963）『沖縄語辞典』大蔵省印刷局

沖縄県国頭村奥方言の動詞形態論の概要

狩俣 繁久¹ 島袋 幸子²

1 奥方言の動詞

奥方言の動詞は、語彙的な意味として、人やものの動作、変化、状態、存在等を表し、アスペクト、ヴォイス、もくろみ、みとめかた、ムード、テンス等の文法的なカテゴリーをもっている。連語論的には、連用的な形式によってかざられ、連体修飾語として名詞をかざる。構文論的には、主として述語として機能する。そのような語彙的な特徴と文法的な特徴によってほかの品詞から区別される。

形態論的なカテゴリーは、それを構成する形態論的な形をパラディグマティックな体系に統合する一般化された意味・特徴である。奥方言の動詞のもつテンス、アスペクト、ムード、みとめかた等の個々の形態論的なカテゴリーは、語尾のとりかえ、派生（文法的な接尾辞）、補助的な単語との文法的なくみあわせによって表されるものがある。動詞の文法的な形は、せまい意味での活用形と派生動詞との二つの軸によって整理することができる。せまい意味での活用形は、語尾のとりかえ、助辞の膠着によって表されるが、一部に形式名詞とのくみあわせによるものがある。語幹と語尾の境界は・で示し、単語形式に助辞が膠着する境界は＝で示す。特定の活用形と補助的な単語のくみあわせは、間にスペースを設ける。

奥方言の動詞は、構文論的な機能を表しわける文法的な形として「終止形」「連体形」「連用形」「条件形」の形式がある。終止形は、いいおわりの位置に現れて述語としてはたらく文法的な形式である。

奥方言の終止形は、アスペクト、テンス、ムードの体系をなし、個々の形式は、それぞれに固有のアスペクト、テンス、ムードの意味を表現する形式である。連体形はムードのカテゴリーを欠く。条件形は、従属文の述語の位置に表れて、主文にさしだされる出来事の様々な条件づけられ性を明らかにする形式である。連用形は、二つの動作の間の時間的な関係を二つの述語によって表すとき、まえの述語の形式である³。

¹ 琉球大学・島嶼地域科学研究所。

² 琉球大学・島嶼地域科学研究所

³ 本報告のデータは、国頭村奥集落出身で奥在住の話者2名、N・S（S9年生、F）、M・M（S4年生、F）、H・T（S9年生、F）、M・H（S8年生、F）、M・S（S9年生、F）、への面接調査によるものである。

2 アスペクト

奥方言のアスペクトは、完成相と継続相の対立を基本としている。

完成相非過去形

非過去形は、未来のひとまとまりの動作を表す。

- 1) asa=N umi=Nkai ik-u-N.
明日も 海へ 行く。
- 2) aNma:=ja asa: to:kjo:=Nkai kwa:=ni it-te:-ga ik-u-N=do:.
母が 明日 東京に 子に 会いに 行くよ。
- 3) ak'ira=t'u waN=t'u t'ai=fj ik'-u-N=do:.
アキラと 私と 二人で 行くよ。
- 4) su:=ja uNme:=ga ja:=Nkai hu-i-N.
今日は おじいさんが 家に 来る。

存在動詞の非過去形は、現在の状態を表す。

- 5) aN jama=ne:ti jamafi=nu u-i-N=do:.
あの 山に イノシシが 居るよ。
- 6) p'ida=ne: gama=nu a-ti iri=ne:=ja paka=nu a-i-N.
東には 洞窟が あって 西には お墓が ある。

非過去形は、時間的な局所限定のない反復的な動作や習慣、特性も表す。

- 7) taro:=ja me:nitji gakko:=nu me:=ne: uri:-N.
太郎は 毎日 学校の 前で 降る。
- 8) itji=N iru=ja su:ta:=ga ho:r-u-N.
いつも 魚は お父さんが 買う。
- 9) utfina:=nu t'u=ja nabe:ra: kam-u-N.
沖縄の 人は ヘチマを 食べる。
- 10) taro:=ja eigo=nu hoN jumibu:s-u-N.
太郎は 英語の 本が 読める。

完成相第一過去形

- 11) guNda mi-tji uduru-t'a-N.
クジラを 見て、 おどろいた。
- 12) hudu=ja p'a:ti atabita=nu hita:N ji-da-N.
去年は ひでりで カエルが たくさん 死んだ。

13) hame:, ami=nu puipadzimi-ta-N.

あ、雨が 降り始めた。

14) mukaʃi=ja hikatu hiN hu-da-N.

昔は よく 舟を 漕いだ。

完成相過去形

第二中止形と同音形式の過去形があり、完成相過去を表わす。

15) muka=ʃi: iNdanaba: e:-ti.

糠で 苦菜を 和えた。

16) gadami=ni ku:r-at-tʃi

蚊に 食われた。

17) p'e:=nu tʃija=ne: tuma-ti.

ハエが 顔に とまった。

18) uttʃi=hara hadʒi tsu:ku na-ti=ja:.

一昨日から 風が 強く なったなあ。

完成相第二過去形

19) hubagasa hat-tʃi saba kum-u-t'a-N.

くば笠を かぶって ぞうりを はいていた。

20) tahu=nu takkwa-ti jam-u-ta-N.

タコが くっついて 痛かった。

21) jagati tʃawaN utus-u-ta-N.

あやうく 茶碗を 落とすところだった。

22) mukaʃi=ja uguma kam-u-ta-N=do:.

以前は ゴマを 食べたよ。

継続相

奥方言の継続相を表す形式には、主として主体変化動詞の表す主体の変化結果の継続を表す形式と、主体動作動詞の表す動作の継続を表す形式の二つがある。

前者は、中止形に uN（居る）が文法化して組み合わせあった融合した形式（nudi+uN>nudo:N）である。後者は、中止形に akkuN（歩く）が文法化して組み合わせあった融合した形式（nudi+akkuN>nuda:kuN）である。前者を第一継続相、後者を第二継続相と名づける。

第一継続相

主体変化動詞が第一継続相の形をとって述語になるとき、主体の変化結果が継続してい

ることを表す。

- 23) mitʃi=ne: atabita=nu ʃi-do:-N.
道路で カエルが 死んでいる。
- 24) taro:=ja hudu=hara to:kjo:=Nkai i-do:-N=do:.
太郎は 去年から 東京に 行っているよ。
- 25) hanako=a kinu:=hara jaNme:=ʃi: nit-to:-N.
花子は 昨日から 病気で 寝ている。
- 26) du:=nu tʃiritiN it-to:-N.
尾が切れても、生きている。
- 27) aʃʃi=ja iNdʒij-aN gutu=ʃi hakugu=ʃi: mut-to:-ta-N.
松明を 濡らさない ように 大事に 持っていた。

状態

人や物が数多く存在することを表す状態動詞 guNdo:N は、第一継続相の形式しか有しない動詞である。

- 28) isuku guN-do:N
いところが たくさんいる。
- 29) ?naNma=ja munu=nu guN-do:-N.
今は ものが たくさんある。
- 30) taro:=ja mi:=nu su:ta:=ne: dziko: ni-to:-N.
太郎は 眼が 父に よく 似ている。
- 31) huN muʃi=ja gata=ne: ni-to:-N.
この 虫は バッタに 似ている。

第二継続相

主体動作動詞、主体動作客体変化動詞が第二継続相の形をとって述語になるとき、主体の動作継続を表す。

- 32) tiN=hara su:sadzi=nu tu-da:-k-u-N.
空を 白鷺が 飛んでいる。
- 33) tʃiNnanfe:=nu jo:Nna: uN-ta:-k-u-N.
カタツムリが ゆっくり 動いている。
- 34) ju:=nu pu-ta:-k'-u-N=do:.
湯が 沸いているよ。
- 35) p'e:=hara nama hibufi=nu idzi-ta:-k-u-N.
灰から まだ 煙が 出ている。
- 36) hama=ʃi: ju: puka-ta:-k-u-N.
釜で 湯を 沸かしている。

37) ami=nu p'i:=ja saburo:=ja ja:=ne: maNga=beN=du ju-da:-k-ur-u.

雨の日は三郎は家で漫画ばかり読んでいる。

38) papp'a:=a nibaNdza=ne: terebi mi:-ta-k-u-N=do:.

祖母は二番座でテレビを見ているよ。

39) sa:ru:ge:=nu daNdaN ka-da:-k-u-N.

カマキリがセミを食べている。

次の例は、再帰動詞が述語になっている。最初の例は、第一継続相が述語に現れ、主体が身に着けた状態（変化結果の継続）であることを表している。二つ目の例は、第二継続相が述語に現れ、主体が衣装類を自らに身に着ける行為を行っている最中であることを表している。

40) aN kwa:=ja afida=du ku-do:-r-u.

あの子は下駄を履いている。

41) tʃiNtu ?naNma tabi=du ku-da:-k-u-r-u

ちょうど今、足袋を履いている。

結果相

42) dʒiro:=ja habi=fɪ: koinobori hiku-te:-N.

次郎は紙で鯉のぼりを作ってある。

43) uNme:=ga tʃiburu=ne: sadzi kut-te:-N.

祖父が頭にタオルをしぼっている。

44) uimi=nu posuta:=ja ko:miNkwaN=nu paʃi:=ne: pa-te:-ta-N=do:.

祭りのポスターは公民館の戸に貼ってあったよ。

45) usa: iNnukwa:=nu kwa: na-te:-N.

うちの犬が子供を産んである。

終結相

無情物の不存在を表す動詞 ne:-N も有情物の存在を表す ui-N が継続相のアスペクト形式を作る語彙的資源になり、無情物の存在を表す ai-N が結果相のアスペクト形式をつくる語彙的資源になるのと同じく、ne:-N は、終了限界まで達した動作や変化を表す終結相のアスペクト形式を作る語彙的資源になる。話者たちは、この終結相を「～してしまった」と訳することが多いが、この形式には過去形があるので、「～してしまっている」のように非過去形に訳するのがよい。

46) taru=neN hikaN=guto:=N hitʃi-ti ne:-N.

誰にも聞かないで、捨ててしまっている。

47) uttu=ja aNme:=ne: purimuN=tʃi itʃi ne:-N.

弟は兄に「ばか」と言ってしまっている。

48) atʃiha-nu ja:=nu ma:uta=N ʃi-dʒi ne:-N.
暑くて、家のネコも死んでしまっている。

49) bapp'e:-ʃi: hi-ti ne:-N.
間違えて、蹴ってしまっている。

3 授受表現

現在、確認できている奥方言の授受動詞は、t'a:suN と hu:iN の 2 系列である。t'a:suN は、主語から相手対象の補語に向かう所有権の移動を表す。人称の制限がなく、「やる・あげる」と「くれる」を表す。t'a:suN には t'urasuN の語形もあらわれる。t'a:suN は t'urasuN の音韻変化した語形で、t'urasuN は、沖縄本島中南部方言の語形と同形である。hu:iN は「乞う」に対応し、「もらう」の意味を表す。補語の相手対象から主語に向かう所有権の移動を表す。二項対立の変種である標準語の授受動詞と異なり、ある意味で完全な二項対立である。

50) p'app'a:=ja waN=ne: dʒiN t'a:-t'a-N.
おばあさんは私に お金を くれた。

51) waN=ja mi:kk'wa=ne: dʒiN t'a:-t'a-N.
私は 姪に お金を あげた。

52) tʃide:kuni hita:N hu:-ti mina=ʃi wahi-ta-N.
ニンジン を たくさん もらって みんなで 分けた。

53) hu:-ha-ru gani=ja taru=N hu:-ra-N.
小さい カニは 誰も もらわない。

t'a:suN は授受表現を表す述語をつくる補助動詞になる。hu:iN は授受動詞としての使用は可能だが、授受表現をつくることはできない。授受表現は、主語から補語の相手対象に行為の向かうタイプだけの単項型である。なお、相手対象の補語から主語に向かう行為を表すときは、使役動詞を述語にした文が用いられる。このとき利益性・不利益性については中立である。

54) taro:=ja uttu=ne: kwa:ʃi wahi-ti ta:-ta-N.
太郎は 弟に 菓子を 分けて やった。

55) kadzuko muN=tu junu kutsu hanako=ne:=N ho:-ti ta:h-a.
和子の ものと 同じ 靴を 花子にも 買って やろう。

56) ura=hara satʃi=ni uri-ti ta:ʃi=ja.
君が さきに 降りて くれ。

57) uttu=ni=N niseNeN t'a:-tʃi t'ur-aʃi.
弟にも 2000 円を やって くれ。／あげてやれ。

- 58) hanako=ja aNma:=ne:ti munu kam-ah-at-ta-N.
花子は 母に ご飯を 食べさせられた。食べさせてもらったの訳

4 可能動詞

- 59) taro:=ja eigo=nu hoN jum-i-bu:s-u-N.
太郎は 英語の 本が 読める。
- 60) hanako=ja muka:fi=hara saNfiN pik-i-bu-su-N.
花子は 昔から 三線が 弾ける。
- 61) huri usa: k'wa:fi dat'u, ura=ja kam-ar-aN=do:.
それは 私たちの お菓子だから、お前は 食べられないよ。

5 ムード

奥方言の動詞の終止形は、文のいい終わりの述語としてはたらいて、文の表すモーダルな意味を表現するセンターとなる。認識的ムードと関わる形式と意志的ムードと関わる形式がある。意志的ムードはさそいかけ法と命令法がある。

5. 1 認識的ムード

認識的ムードには、叙述法、質問法がある。叙述法には断定と推量がある。断定と推量は、テンスのカテゴリーにしたがって非過去形と過去形の対立がある。断定を表す形式は、非強調形と強調形がある。

非強調形の非過去形

- 62) ha:ri:=ja uNgaNsa:=nu hiN hug-u-N.
ハーリーでは 男たちが 舟を 漕ぐ。
- 63) uttu=ja num-iwa tade:ma uir-u-N.
弟は 飲むと、すぐに 酔う。
- 64) isa=nu t'a:t'a-ru kusui num-i-ba no:r-u-N=do:.
医者 の くれた 薬を 飲めば 治るよ。
- 65) to:pu=ja to:pumami=fi: hiku-i-N=do:.
豆腐は 大豆で 作るんだよ。

強調形の非過去形

強調形は、文中に焦点化助辞 du をふくむ文の述語として使用される。

- 66) u:uma=ru t'u: hi:-ru.

オス馬が 人を 蹴るのだ。

67) saki=ja suido:=nu midzi=fj:=ru hiku-i-ru.

酒は 水道の 水で 作るんだ。

68) ami=nu p'i:=ja saburo:=ja ja:=ne: naNga=beN=du ju-da:-k-u-ru.

雨の 日は 三郎は 家で 漫画ばかり 読んでいる。

69) pari-to:-ru p'i:=ja saburo:=ja umi:=dzi iru=beN=du kwa:s-u-ru.

晴れた 日は 三郎は 海で 魚ばかりを 釣る。

次の例に見るように焦点化助詞 *du* が文中にあっても文末の述語に強調形のあらわれな
い場合が多い。

70) basu=ja p'i:=ni mine:=du a-i-N=do:.

バスは 一日に 三回 ある。

71) aN k'wa:fj:=ja natt'a:=ga=du iNsagi-t'i=na:.

あの 菓子は あなたがたが 召し上がったの？

72) aji: de:hutu naNma dzibuN aNt'u=ja tfa:=du nu-da:-k-u-ru padzi.

お昼だから今頃あの人はお茶を飲んでいるだろう。

73) ipidu nu-do:-si-ga ui-to:-N.

少ししか 飲んでいないのに、酔っている。

非強調の過去形

第一過去形

74) uNme:=ja hitumiti=hara jama=Nkai mimigui tu-i-ga i-da-N.

祖父は 朝から 山に キノコを 取りに 行った。

75) ma:uta=nu puha=hara ja:=N utfi=Nkai ittfit-t'a-N=do:.

猫が 外から 家の中に入ってきたよ。

76) jinugu=nu ba:=ja papp'a:=ga:deN udu-ta-N.

シヌグの ときは 祖母まで 踊った。

77) naNma=ta:na tfaku=nu u-i-ta-N.

さっきまで 客が いた。

強調の過去形

文中にとりたて助辞 *du* の接続する成分と呼応して現れる。終止形は、非強調形の過去
形の語末の *N* を *ru* に替えて作る。

78) miNna dzabutoNne:ru bi-ta-ru.

みんな ざぶとんに 座った。

79) mukafija basagiNdu k'i-ta-ru.

昔は 芭蕉布を 着た。

推量形

- 80) ho:rimuN suru ba: saihu utu-ta-ru padzi.
 買い物 する とき、財布を 落としたみたいだ。
- 81) aN t'u=nu saba=nu aihutu t'o:-ru padzi.
 あの 人の草履が あるから、来ているだろう。
- 82) p'ani=nu tʃiraba-to:-hutu nu:gara=ne: ʃij-a-ta-ru padzi.
 羽が 散らばっているから、何かに やられただろう。
- 83) aʃi: de:hutu naNma dzibuN aNt'u=ja tʃa:=du nu-da:-k-u-ru padzi.
 お昼 だから 今頃 あの人は お茶を 飲んでいるだろう。

質問法

奥方言の質問法には、肯否質問文の述語になる専用形式と疑問詞を含む疑問詞質問文の述語になる専用形式とがある。これは他の沖縄語諸方言と同じである。

肯否質問の非過去形

肯否質問の非過去形は、叙述法過去形の語末に終助詞 na を後接させてつくる。

- 84) dziro:, huN nimutʃi basutei=ga:de: hatami-ti idzi tur-ah-a-N=na:.
 次郎、この 荷物を バス停まで かついで いって くれないか。
- 85) ura=ja nabe:ra kam-u-N=na:?
 君は へちまを食べるの？
- 86) aN k'wa:ʃi=ja na:=ga=du iNsagi-t' i=na:.
 あの 菓子は あなたが 召し上がったの？
- 87) hitumitimuN=ja ka-dʒit-tʃi=na:?
 朝食は 食べてきたか？
- 88) munu=ja ka-dʒit-tʃi=na:.
 飯は 食ってきたか？

疑問詞質問の非過去形

疑問詞質問文の述語には、非強調形の非過去形の語末の N を ga に取り換えた形が使用される。

- 89) nagu=hara naha=Nta:na basutʃiN=ja iʃita: su-N=ga.
 名護から 那覇まで バス賃は いくら するか？
- 90) taro:=ja itʃi to:kjo:=hara ke:-ti hui-N=ga.
 太郎は いつ 東京から 帰って くるの？
- 91) nu: ho:r-i=ga ik-u-N=ga

何を 買いに 行くの？

92) ikutʃi ho:r-u-N=ga

いくつ 買うの？

疑問詞質問の過去形

疑問詞質問文の述語には、第二中止形の語末の母音を伸ばした形式が現れる。非強調形の過去形の語末の N を ga に取り換えた形も使用される。

93) huri=ja da:=hara ho:-ti:.

それは どこで 買ったの？

94) huri=ja da: matʃija=hara ho:-ti:.

それは どの 店で 買ったの？

95) nattaja itʃi mo:-tʃi.

あなたたちは いつ 来たの？

希求法

話し手自身の欲求、欲望、意欲を表す形式として希求法の形がある。希求文の述語になる形式は、numibusa:-N（飲みたい）のような、動詞の語基に busa:-N のついた形式がある。しかし、busa:-N をつけた述語は、形容詞と同じ活用の型を示し、文法的な派生形容詞だとかんがえられる。この形式を動詞のムードの体系のどこにどう位置づけるかについては検討したい。

96) waN=ja irabutʃa:=nu namaʃi=du kam-i-bu-sa:-N.

俺は イラブチャーの 刺身が 食いたい。

意志的ムード

意志的ムードには命令法と勧誘法がある。

命令法

命令法文の述語の命令形は、二人称に対して動作の実現をもとめてはたらきかけるときに使用する形である。

97) juru mitʃi akkuru ba:=ja pabu=ne: ki: hikir-i=jo:.

夜 道を 歩く ときは ハブに 気を つけるよ。

98) juhur-aN=gutu ʃigutu ʃir-i.

休んでないで 仕事を しろ。

99) ura=N guNda mi-tʃi hu:.

お前も クジラを 見て こい。

100) aN midzi=ja num-u-na. numiba-ja huN midzi num-i.

あの 水は 飲むな。飲むなら この 水を 飲め。

禁止法

禁止形は、旧連体形に *na* をつけてつくる。強変化 *r* 語幹動詞は *runa* が *Nna* に変化した語形が現れる。

- 101) *abuna-ha-tu mitʃi=nu suba=hara=ja akk-u-na.*
危ないから 道の 側は 歩くな。
- 102) *iNkari=jas-sa:hutu hatadi:=ʃi=ja mut-u-na.*
こぼれやすいから、片手では 持つな。
- 103) *ukaha:hutu warabi:=ja hu-i-N-na.*
危ないから、子どもは 来るな。
- 104) *p'iNgi-to:ru ma:uta=Nkai kamimuN kura:s-u-na.*
野良猫に 食べ物を 食わすな。

勧誘法

勧誘形は、動作の実現をもとめて、二人称に対して一緒に動作をするようはたらきかけるときに使用する形である。

- 105) *kamimuN mut-tʃi umi=Nkai ik-a:.*
食べ物を 持って、海へ 行こう。
- 106) *nimutʃi puka=Nkai ida-tʃi ja:=nu utʃi hatadzik-i=ja.*
荷物を 外に 出して、家の 中を 片づけよう。
- 107) *dzikaN=nu a-i-hutu godzi=ga:de: terebi mij-a=ja:.*
時間が あるから 五時まで テレビを 見ようね。
- 108) *aN jaNkwa:=Nta:na: paibe:ku: ʃij-a:=ja:.*
あの 小屋まで 駆けっこ しようよ。

疑い形

- 109) *na:taN p'i:ku nai-ka:.*
もっと 寒くなるかなあ。
- 110) *itʃi=ga do:hitʃi ʃi:-bus-u-ru gutu nai-ka=ja:.*
いつ 料理が できる ように なるかなあ。
- 111) *nu: ho:r-u-N=ga=ja:.*
何を 買おうかな。
- 112) *wa: kutsu=ja da:=ne: a-i-N=ga=ja.*
おれの 靴は どこに あるかなあ。

6 連体形

非過去形

- 113) ka:mi=nu hu-i-ru p'ama=ja huma daka:.
ウミガメが 来る 浜は ここか？
- 114) ami=nu pu-i-ru p'i:=ja saburo:=ja maNga=beN=du ju-da:-k-u-ru.
雨の 降る 日は 三郎は 漫画ばかり 読んでいる。

過去形

- 115) ?isa=nu t'a:-t'a-ru kusui num-i-ba no:r-u-N=do:.
医者 の くれた 薬を 飲めば 治るよ。
- 116) k'inu: ?ura=ga nara:-t'a-ru ?aN hoN, na: ju-da-N=do:.
昨日 あなたが 教えた あの 本、 もう 読んだよ。
- 117) hanako na-ta-ru ba:=ja iso:-ha:-ta-N.
花子 を 生んだ ときは うれしかった。
- 118) wa:=ga k'wa:-tja-ru iru=ja dziru=ga.
私が 釣った 魚は どれ？
- 119) pari-to:-ru p'i:=ja saburo:=ja ?umi:=dzi ?iru=beN=du kwa:-s-u-ru
晴れた 日は 三郎は 海で 魚ばかりを 釣る。
- 120) p'iNgi-to:-ru ma:uta=Nkai kamimuN kura:s-u-na.
野良猫に 食べ物を やってはいけない。
- 121) hitaku ni-to:-ru ujakk'wa ja-N=do:.
よく 似た 親子だよ。

7 中止形

中止形は、並列複文やふたまた述語文等の述語動詞といいおわり文の述語動詞の表す二つの動作や変化等の先行・後続、同時等の時間的な関係を表す形式である。奥方言には先行後続も同時もあらわすことのできる第二中止形と、同時を表す同時形、いい終わりの述語動詞の実現する時間の範囲を表す到達形がある。

先行後続

- 122) seNse:=ga pafi: k'u:-ti satfi=ni ke:-taN.
先生が 戸を 閉じて、さきに 帰った。
- 123) purumuNradzio=ja hitfi-ti mi:muN ho:-tit-t'a-N.
古い ラジオを 捨てて、新しいのを 買って きた。
- 124) kusui nu-dzi pe:ku nibur-i:. /nibu-i-ba.
薬を 飲んで、早く 寝ろ。

- 125) basu urit-i at-tʃi ke:r-a:.
バスを 降りて、 歩いて 帰ろう。

同時

- 126) dza:=ne:=ja dzu:niN u-ti to:gura=ne:=ja t'aibeN=du u-i-ru.
座敷には 十人 いて、台所には 二人しか いない。
- 127) tʃaku=ja bi-tʃi kwattʃi: ka-da:k-u-N.
客は 座って、ごちそうを 食べている。
- 128) ari=ja ui-ti nit-to:-N.
彼は 酔って、寝ている。
- 129) p'ida=ne: gama=nu a-ti iri=ne:=ja paka=nu a-i-N.
東には 洞窟が あって、西には お墓が ある。

到達形

- 130) me:nitʃi ju:=nu kur-i=t'a:na puha=ne: aʃib-u-N.
毎日 暗く なるまで、 外で 遊ぶ。

8 条件形

原因理由形

- 131) dzikaN=nu a-i-hutu godzi=ga:de: terebi mij-a=ja:.
時間が あるから、五時まで テレビを 見ようね。
- 132) p'ani=nu tʃiraba-to:-hutu nu:=gara=ne: ʃij-a-ta-ru padzi.
羽が 散らばっているから、何かに やられたらろう
- 133) ha:ra=nu utʃi-to:-hutu hadzi tsu:ha-ta-ru padzi=ja:.
瓦が 落ちているから、風が 強かったんだらうね。
- 134) ʃita:-ʃi=tʃi ijat-ta-hutu ʃigutu saN.
してくれと 言われたから、仕事を した。

条件形

- 135) isa=nu t'a:t'a-ru kusui num-i-ba no:r-uN=do:.
医者 の くれた 薬を 飲めば、治るよ。
- 136) um-i-ba hi:=hara du:na:=ʃi: hiN=nu mi:=ja uti:-N.
熟したら、木の 実は 自然に 落ちる。

仮定形／前提形

- 137) aN midzi=ja num-u-na. num-i-ba=ja huN midzi num-i.
あの 水は 飲むな。飲むなら、この 水を 飲め。

譲歩形

138) ujadui=nu tu-da-dzi=N tuiNkwa=ja tub-aN.

親鳥が 飛んでも、小鳥は 飛ばない。

139) ujadui=nu tu-dzi=N tuiNkwa=ja tub-aN.

親鳥が 飛んでも、小鳥は 飛ばない。

9 動詞の活用のタイプ

奥方言の動詞は、活用形の作り方によって分類すると、規則変化動詞と不規則変化動詞に大きく分けることができる。語幹は、語幹末が子音の子音語幹と語幹末が母音の母音語幹の二つに分けることができる。規則変化動詞は、語幹と語尾の作り方によって下位タイプに分けることができる。

規則変化動詞

奥方言の規則変化動詞は、標準語の強変化動詞と弱変化動詞に対応する。子音語幹の活用形をもつ標準語の強変化動詞は、促音や撥音で終わる音便語幹があるが、標準語の強変化動詞に対応する奥方言の動詞も音便語幹をもっていたが、音便語幹末尾の子音が脱落して母音語幹になっていて、子音語幹の活用形と母音語幹の活用形ができています。

母音語幹の活用形をもつ標準語の弱変化動詞に対応する奥方言の動詞は、勧誘形や命令形の語幹および否定形の語幹が強変化（r 語幹）化した活用形に変化している。いっぽう、過去形や中止形は強変化化しておらず、母音語幹の活用形のままであり、結果として、子音語幹の活用形と母音語幹の活用形が共存する。

子音語幹

子音語幹は、語幹末の子音の違いによって、s 語幹、t 語幹、g 語幹、m 語幹、n 語幹、b 語幹、r 語幹の変種がある。なお、k 語幹には二つの下位の変種があり、r 語幹には七つの下位の変種がある。g 語幹動詞、m 語幹動詞、n 語幹動詞、b 語幹動詞は、それぞれイ音便、撥音便が起きていた痕跡として語尾の頭子音に有声音化した d が現れ、k 語幹動詞、s 語幹動詞もイ音便が起きていた痕跡として dz が現れる。

母音語幹

母音語幹は、語幹末が短母音のタイプと長母音のタイプ、長母音の途中で語幹と語尾の境界のできるタイプの三つのタイプとがある。

不規則変化動詞

huiN（来る）は、基本語幹 1、基本語幹 2、連用語幹、音便語幹 1、音便語幹 2 のいず

れの形も異なる、最も不規則な活用の型をしめす不規則変化動詞である。音便語幹1、音便語幹2を規則動詞のそれと比べてみると、語幹と語尾が音融合して変化した結果、語幹と語尾を分離できなくなっている。

suN（する）は、過去形と中止形が不規則な活用形をつくる不規則変化動詞である。否定形、勧誘形をつくる基本語幹1と第一命令形をつくる基本語幹2は強変化r2型と同じだが、終止形の語尾が異なる。

有情物の存在を表すu-iN（居る）は、強変化型のr語幹動詞に似た活用をするが、連用語幹u-と音便語幹ui-があり、r語幹動詞がいずれも同形になると異なる。

無情物の存在を表すaiN（有る）は、命令形や勧誘形等のムード形式、継続相や受身、使役等のアスペクトやヴォイスのカテゴリーをもたない等、形容詞と共通の特徴を多くもっている。命令形、勧誘形、否定形を欠いていることが不規則変化動詞として分類する理由でもある。

無情物の不存在を表すne:N（無い）も、命令形や勧誘形等のムード形式、継続相や受身、使役等のアスペクトやヴォイスのカテゴリーをもたない等、形容詞と共通の特徴を多くもっている。形容詞の語尾のhaNをもたない等、形式上の特徴から動詞に分類される。また、終結相の形式を作る語彙的な資源となる点は、第一継続相をつくるuiN（居る）、結果相をつくるaiN（有る）と同じく存在動詞としての役割りを果たしており、動詞として分類されるべきものである。

有情物と無情物が数多く存在することを表す動詞のguNdo:Nは、継続相の活用形しか持たない動詞で、u-iN（居る）、aiN（有る）と同じく命令形や勧誘形等のムード形式、受身、使役等のヴォイスやアスペクトのカテゴリーをもたず、それらの活用形がない。

本稿で使用した方言資料には、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（プロジェクトリーダー：木部暢子）による調査研究の成果もふくまれる。

動詞活用のタイプ

	基本語幹 1 否定形	基本語幹 2 命令形	連用語幹 非過去形	音便語幹 1 過去形	音便語幹 2 中止形
--	---------------	---------------	--------------	---------------	---------------

規則変化動詞

t 語幹	~t-	~t-	~t-	~t-t'	~t-tf
持つ	mut-aN		mut'-uN	mut-t'aN	mut-tfi
s 語幹	~h-	~s-	~s-	~t'	~tf
出す	idah-aN	idaf-i	idas-uN	ida-taN	ida-tfi
k 語幹 1	~k-	~k-	~k-	~t'	~tf
歩く	akk'ar-aN	akk-i	akk-uN	at-taN	at-tfi
k 語幹 2	~k-	~k-	~k-	~d	~d3
行く	ik-aN	ik-i	ik-uN	i-da:N	i-dzi
g 語幹	~g-	~g-	~g-	~d	~d3
漕ぐ	hug-aN	hug-i	hug-uN	hu-daN	hu-dzi
m 語幹	~m-	~m-	~m-	~d	~d3
飲む	num-aN	num-i	num-uN	nu-daN	nu-dzi
n 語幹	~n-	~n-	~n-	~d	~d3
死ぬ	fjn-aN		fjn-uN	fj-daN	fjdzi
b 語幹	~b-	~b-	~b-	~d	~d3
遊ぶ	afjb-aN	afjb-i	afjb-uN	afj-daN	afj-dzi
r 語幹 1	~r-	~r-	~r-	~t	~t
買う	ho:r-aN	ho:r-i	ho:r-uN	ho:-taN	ho:-ti
r 語幹 2	~r-	~r-	~i	~t	~t
掘る	pur-aN	pur-i	pu-iN	pu-taN	pu-ti
r 語幹 3	~j-	~r-	~i-	~t	~t
捨てる	hitfij-aN		hitfi-N	hitfi-taN	hitfi-ti
r 語幹 4	~j-	~r-	~i:	~t	~tf
見る	mij-aN	mir-i	mi:N	mi-taN	mi-tfi
r 語幹 5	~j-	~r-	~i:	~tf	~tf
着る	kij-aN	kir-i	ki:N	ki-tfaN	ki-tfi
r 語幹 6	~aN	~r-	~e:	~t	~t
使う	hikaN		hike:N	hika:-taN	hika:-ti
r 語幹 7	~r-	~r-	~i-	~i-t	~t
居る	ur-aN	ur-i	ui-N	ui-taN	u-ti
ある	—	—	ai-N	ai-taN	a-ti

不規則変化動詞

する	fijaN	firiyo: fi:ja	suN	saN	fi:
来る	huraN	hu:	huiN	t'aN	tfi
無い	—	—	ne:N	ne:NtaN	
多い	—	—	guNdo:N	guNdo:NtaN	

国頭村奥方言の『大きなかぶ』

島袋幸子（琉球大学）

沖縄県国頭村奥方言の『大きなかぶ』を収録した。話者は、奥集落出身で奥集落在住の M.N さん（S4 年生まれ、女性）、H.T さん（S9 年生まれ、女性）である。日本語訳を上段に、片仮名表記を中段に、奥方言の簡略音韻表記を下段に書く。

大きなだいこん
 ウブデアクニ
 ?up'ude:k'uni

1. おじいさんが、かぶの たねを まきました。
 ウンメーガ デークニ サニ マタン。
 ?uNme:ga de:k'uni sani mat'aN.
2. 「あまい あまい かぶに なれ。」
 アマハール アマハール デークニンカイ ナリヨー。
 ?amaha:ru ?amaha:ru de:k'uniNk'ai narijo:.
3. 「おおきな おおきな かぶに なれ。」
 ウプハール ウプハール デークニンカイ ナリヨー。」
 ?up'uha:ru ?up'uha:ru de:k'uniNk'ai narijo:。」
4. あまい めずらしい、とてつもなく おおきい かぶが できました。
 アマハール ミジヤーハール、ジコー ウプハール デークニヌ ジキタン。
 ?amaha:ru midzija:ha:ru,dziko': ?up'uha:ru de:k'uninu dzik'it'aN.
5. おじいさんは、かぶを めこうと しました。
 ウンメーガ デークニ ピカンジ サン。
 ?uNme:ga de:k'uni p'ikaNdzj saN.
6. 「うんとこしょ、どっこいしょ。」
 ヒヤ サッサー、
 hija sassa:.
7. ところが、かぶは ひけない。
 ヤシガ デークニヤ ピカラン。
 jajiga de:k'unija p'ik'araN.
8. おじいさんは、おばあさんを よんできました。
 ウンメーヤ パッパー ユジッタン。
 ?uNme:ja p'app'a: judzit'aN.
9. おばあさんが おじいさんを ひっぱって、
 パッパーガ ウンメー ピッパティ
 p'app'a:ga ?uNme: p'ipp'at'i,
10. おじいさんが かぶを ひっぱって。

- ウンメーガ デークニ ピッパティ、
 ?uNme:ga de:k'uni p'ipp'at'i,
11. 「うんとこしょ、 どっこいしょ。」
 ヒヤ サッサー、
 hija sassa:,
12. それでも、 かぶは ぬけません。
 ヤシガ デークニヤ ピカラン。
 jafiga de:k'unija p'ik'araN.
13. おばあさんは まごを よんできました。
 パッパーヤ マガ ユジッタン。
 p'app'a:ja maga judʒit'aN.
14. まごが おばあさんを ひっぱって、
 マガヌ パッパー ピッパティ、
 maganu p'app'a: p'ipp'at'i,
15. おばあさんが おじいさんを ひっぱって、
 パッパーガ ウンメー ピッパティ
 p'app'a:ga ?uNme: p'ipp'at'i,
16. おじいさんが かぶを ひっぱって。
 ウンメーガ デークニ ピッパティ、
 ?uNme:ga de:k'uni p'ipp'at'i,
17. 「うんとこしょ、 どっこいしょ。」
 ヒヤ サッサー、
 hija sassa:,
18. まだまだ、 かぶは ぬけません。
 ナマ デークニヤ ピカラン
 ?nama de:k'unija p'ik'araN.
19. まごは、 イヌを よんできました。
 マガヤ インヌクァ ユジッタン。
 magaja ?iNnuk'wa judʒit'aN.
20. イヌが まごを ひっぱって、
 インヌクァヌ マガ ピッパティ、
 ?iNnuk'wanu maga p'ipp'at'i,
21. まごが おばあさんを ひっぱって、
 マガヌ パッパー ピッパティ、
 maganu p'app'a: p'ipp'at'i,
22. おばあさんが おじいさんを ひっぱって、
 パッパーガ ウンメー ピッパティ
 p'app'a:ga ?uNme: p'ipp'at'i,
23. おじいさんが かぶを ひっぱって。
 ウンメーガ デークニ ピッパティ、

- ʔuNme:ga de:k'uni p'ipp'at'i,
 24.「うんとこしょ、どっこいしょ。」
 ヒヤ サッサー、
 hija sassa:,
- 25.まだまだ、まだまだ、ぬけません。
 ナマン ナマン ピカラン。
 namaN namaN p'ik'araN.
- 26.イヌは、ネコを よんできました。
 インヌクァヤ マーウタ ユジッタン。
 ʔiNnuk'waja ma:ut'a judʒit'aN.
- 27.ネコが イヌを ひっばって、
 マーウタヌ インヌクワ ピッパティ、
 ma:ut'a ʔiNnuk'wa p'ipp'ati,
- 28.イヌが まごを ひっばって、
 インヌクワヌ マガ ピッパティ、
 ʔiNnuk'wanu maga p'ipp'at'i,
- 29.まごが おばあさんを ひっばって、
 マガヌ パッパー ピッパティ、
 maganu p'app'a: p'ipp'at'i,
- 30.おばあさんが おじいさんを ひっばって、
 パッパーガ ウンメー ピッパティ
 p'app'a:ga ʔuNme: p'ipp'at'i,
- 31.おじいさんが かぶを ひっばって。
 ウンメーガ デークニ ピッパティ、
 ʔuNme:ga de:k'uni p'ipp'at'i,
- 32.「うんとこしょ、どっこいしょ。」
 ヒヤ サッサー、
 hija sassa:,
- 33.それでも、かぶは ぬけません。
 アンシン デークニヤ ピカラン。
 ʔaNʃiN de:k'uni p'ik'araN.
- 34.ネコは ネズミを よんできました。
 マーウタヤ ウェンス ユジッタン。
 ma:ut'aja weNsu judʒit'aN.
- 35.ネズミが ネコを ひっばって、
 ウェンスヌ マーウタ ピッパティ、
 weNsunu ma:ut'a p'ipp'at'i,
- 36.ネコが イヌを ひっばって、
 マーウタヌ インヌクワ ピッパティ、
 ma:ut'a ʔiNnuk'wa p'ipp'ati,

37. イヌが まごを ひっぱって、
 インヌクワヌ マガ ピッパティ、
 ?iNnukwanu maga p'ipp'at'i,
38. まごが おばあさんを ひっぱって、
 マガヌ パッパー ピッパティ、
 maganu p'app'a: p'ipp'at'i,
39. おばあさんが おじいさんを ひっぱって、
 パッパーガ ウンメー ピッパティ
 p'app'a:ga ?uNme: p'ipp'at'i,
40. おじいさんが かぶを ひっぱって。
 ウンメーガ デークニ ピッパティ、
 ?uNme:ga de:k'uni p'ipp'at'i,
41. 「うんとこしょ、 どっこいしょ。」
 ヒヤ サッサー、
 hija sassa:,
42. やっと かぶは ぬけました。
 トーナティ デークニヤ ピカタン。
 t'o:nat'i de:k'unija p'ik'at'aN.

沖縄県大宜味村大兼久方言の動詞・形容詞の活用

中本謙（琉球大学）

1 沖縄県大宜味村大兼久の概要

大宜味村は、東シナ海に面し、北は国頭村、南は名護市に隣接している。また西は、脊梁山地となっており、東村に隣接している。東西に 8 km、南北に 14.4 kmの広さを持つが、村の総面積の 76%は森林となっている。

大兼久は、大宜味村のほぼ中央に位置する人口 115 人（2018 年）の集落である。方言の名称ではウフガニク、ハニクと呼ばれている。隣接する大宜味部落から 270 年ほど前に分離した部落であるといわれており、イリミ・ハニクと連称されることもある¹。

2 沖縄県大宜味村大兼久方言の概要²

大宜味村大兼久方言（以下、大兼久方言と称する）は、沖縄本島北部方言に属する。

音韻的特徴としては、沖縄北部方言に広く見られるように、大兼久方言でも現代日本語のハ行子音に対応する p 音、カ行子音に対応する h 音がみられる。具体的に主な特徴を示すと次の通りである。

①語頭において共通語のカに対応するものは、/k/→/h/により/ha/となる。

例. [hagami]（鏡）[ha:mi]（亀）

②語頭において共通語のケに対応するものは、/hi/となる。

例. [çi:]（毛）[çibuĩ]（煙）

③語頭において共通語のキに対応する/kʰi/、クに対応する/kʰu/がみられる。[kʰinnu:]（昨日）

例. [kʰiN]（衣）[kʰumuN]（汲む）

④共通語のコに対応するもの多くは、[hu]となる。

例. [hui]（声）[tahu]（たこ）

⑤共通語のハは、主に[ɸa]に対応する。

例. [ɸa:]（歯）[ɸana]（鼻）[ɸama]（浜）

[pasami]（はさみ）のように[pa]の例も少ないがみられる。

⑥共通語のヒ、フに対応する語において[pʰ]がみられる。[pʰi:]（火）[pʰigi]（髭）[pʰuju:]（冬）

⑦共通語のホは、[puĩ]（星）[ɸuni]（骨）のように[pu]と[ɸu]に対応する。

¹ 津波高志他(1982)による。

² 大兼久方言の音韻の概要については中本（2018）で示したが、動詞活用、形容詞活用を体系的に記述するにあたり音韻表記を用いるため、再度、主な特徴も含め拍体系表を示す。

なお、本報告の動詞、形容詞の活用を中心とした資料は、奥島菊江氏（1928年生・生え抜き）によるものである。調査は2019年11月から12月にかけて臨地調査を行った。

3 大兼久方言の拍体系表³

/ʔi/	/ʔe/	/ʔa/	/ʔo/	/ʔu/	/ʔja/		/ʔju/			/ʔwa/	
イ	エ	ア	オ	ウ	ツヤ		ツユ			ツワ	
[ʔi]	[ʔe]	[ʔa]	[ʔo]	[ʔu]	[ʔja]		[ʔju]			[ʔwa]	
/i/	/e/			/ʷu/	/ja/	/jo/	/ju/		/we/	/wa/	
イイ	イエ			ウウ	ヤ	ヨ	ユ		ウエ	ワ	
[ji]	[je]~[e]			[wu]	[ja]	[jo]	[ju]		[we]	[wa]	
/hi/	/he/	/ha/	/ho/	/hu/	/hja/			/hwi/	/hwe/	/hwa/	/hwu/
ヒ	ヘ	ハ	ホ	フウ	ヒヤ			フィ	フェ	ファ	フ
[çi]	[he]	[ha]	[ho]	[hu]	[ça]			[fi]	[fe]	[fa]	[fu]
/kʰi/				/kʰu/					/kʰwe/		
ツキ				ツク					ツクエ		
[kʰi]				[kʰu]					[kʰwe]		
/ki/	/ke/	/ka/	/ko/	/ku/		/kjo/				/kwa/	
キ	ケ	カ	コ	ク		キョ				クワ	
[ki]	[ke]	[ka]	[ko]	[ku]		[kjo]				[kwa]	
/gi/	/ge/	/ga/	/go/	/gu/						/gwa/	
ギ	ゲ	ガ	ゴ	グ						グワ	
[gi]	[ge]	[ga]	[go]	[gu]						[gwa]	
/tʰi/		/tʰa/									
ツティ		ツタ									
[tʰi]		[tʰa]									
/ti/	/te/	/ta/	/to/	/tu/							
ティ	テ	タ	ト	トゥ							
[ti]	[te]	[ta]	[to]	[tu]							
/di/	/de/	/da/	/do/	/du/							
ディ	デ	ダ	ド	ドゥ							
[di]	[de]	[da]	[do]	[du]							
/cʰi/											

³ 語頭において母音単独の前では、/ʔ/グロツタルストップ（声門閉鎖音）があらわれるが、便宜的にカタカナ表記では、省略して示す。

ツチ [tʃ ² i]											
/ci/	/ce/	/ca/	/co/	/cu/							
チ [tʃi]	チェ [tʃe]	チャ [tʃa] ~[tʃa]	チョ [tʃo]	ツ [tʃu]							
/si/	/se/	/sa/	/so/	/su/							
シ [ʃi]	セ [se]	サ [sa]	ソ [so]	ス [su]							
/zi/		/za/	/zo/	/zu/							
ジ [dʒi]		ザ [dza] ~[dʒo]	ゾ [dzo]	ズ [dzu]							
/ri/	/re/	/ra/	/ro/	/ru/							
リ [ri]	レ [re]	ラ [ra]	ロ [ro]	ル [ru]							
/ni/	/ne/	/na/	/no/	/nu/							
ニ [ni]	ネ [ne]	ナ [na]	ノ [no]	ヌ [nu]							
/p ² i/				/p ² u/							
ツピ [p ² i]				ツプ [p ² u]							
/pi/	/pe/	/pa/	/po/	/pu/							
ピ [pi]	ペ [pe]	パ [pa]	ポ [po]	プ [pu]							
/bi/	/be/	/ba/	/bo/	/bu/							
ビ [bi]	ベ [be]	バ [ba]	ボ [bo]	ブ [bu]							
/mi/	/me/	/ma/	/mo/	/mu/							
ミ [mi]	メ [me]	マ [ma]	モ [mo]	ム [mu]							
/N/[n,m,ŋ,N]ン											
/Q/[p,s,t,k]ッ											
/i/[:] /e/[:] /a/[:] /o/[:] /u/[:] ー											

4. 動詞活用

4. 1 活用の分類

大兼久方言の動詞の語幹を末尾に注目し分類すると〈表1〉のように6類に分けられる。

〈表1〉

	基本語幹 1	基本語幹 2	連用語幹	派生語幹	接続語幹
1類	C	C	C	CV	C
2類	CVC	CVC	CV	CVV	CV(Q)C
3類	CV	CV	CV	CVV	CVVC
4類	'wur	'wur	'wu'	'wu	'wuQt
5類	k	k	k	ku	ci
6類	s	s	s	su	si

(* C=子音、V=母音、Q=促音を表す)

4. 2 動詞活用体系

〈表1〉のそれぞれに基づいて、代表例をもって語幹と語尾とに分けて表示すると〈表2〉のようになる。音韻レベルで示し、 ϕ 記号は、語尾がゼロであることを意味する。

4. 3 活用表

〈表2〉を具体的に音声レベルで示すと〈表3〉のようになる。

〈表2〉

分類	動詞	基本語幹 1	志向形	未然形	基本語幹 2	命令形	連用語幹	連用形
1	書く	hak	a	a	hak	ee	hak	i
2	言う	?ir	a	a	?ir	ee	?i	i
3	洗う	?ara	a	a	?are	e	?are	e
4	居る	'wur	a	a	'wur	ee	'wu'	i
5	来る	k	uu	aa	k	ree	k	i
6	する	s	aa	a	s	ee	s	i
主な接尾形式			na (ね)	'N (ない)				busa'N (たい)

分類	動詞	派生語幹	終止形	連体形	du 結び び形	準体形	接続語幹	接続形
1	書く	haku	'N	'N	ru	φ	hac	i
2	言う	?ii	'N	'N	ru	φ	?ic	i
3	洗う	?aree	'N	'N	ru	φ	?araat	i
4	居る	'wu	'N	'N	Ru	i	'wutt	i
5	来る	ku	'N	u'N	ru	u	ci	i
6	する	su	'N	'N	ru	u	si	i
主な接尾形式				体言		mi (か)		k a r a (から)

〈表3〉

1類

動詞	志向形	未然形	命令形	連用形	終止形
書く	haka	haka	hake:	haki	hakun
行く	?ika	?ika	?ike:	?iki	?ikun
漕ぐ	huga	huga	hege:	hugi	hugun
眠る	nimba	nimba	nimbe:	nimbi	nimbun
飛ぶ	tuba	tuba	tube:	tubi	tubun
読む	juma	juma	jume:	jumi	jumun
動詞	連体形	du 結び形	準体形	接続形	
書く	hakun	hakuru	haku	hatji	
行く	?ikun	?ikuru	?iku	?idzi	
漕ぐ	hugun	huguru	hugu	hudzi	
眠る	nimbun	nimburu	nimbu	ninti	
飛ぶ	tubun	tuburu	tubu	turi	
読む	jumun	jumuru	jumu	juri	

2類

動詞	志向形	未然形	命令形	連用形	終止形
言う	?ira	?ira	?ire:	?i:	?i:N
切る	k?ira	k?ira	k?ire:	k?i:	k?i:N
見る	mira	mira	mire:	mi:	mi:N
起きる	?ukira	?ukira	?ukire:	?uki:	?uki:N
落ちる	?utira	?utira	?utire:	?uti:	?uti:N
受ける	?ukira	?ukira	?ukire:	?uki:	?uki:N

動詞	連体形	du 結び形	準体形	接続形
言う	?i:N	?i:ru	?i:	?itji
切る	k?i:N	k?i:ru	k?i:	k?ittji
見る	mi:N	mi:ru	mi:	mittji
起きる	?uki:N	?uki:ru	?uki:	?ukiti
落ちる	?uti:N	?uti:ru	?uti:	?utiti
受ける	?uki:N	?uki:ru	?uki:	?ukiti

3類

動詞	志向形	未然形	命令形	連用形	終止形
洗う	?ara:	?ara:	?are:	?are:	?are:N
笑う	wara:	wara:	ware:	ware:	ware:N
動詞	連体形	du 結び形	準体形	接続形	
洗う	?ara:N	?are:ru	?are:	?ara:ti	
笑う	wara:N	ware:ru	ware:	wara:ti	

4類・5類・6類

動詞	志向形	未然形	命令形	連用形	終止形
居る	Wura	wura	wure:	wui	wun
来る	ku:	ka:	ku:	ki:	kun
する	sa:	san	se:	si:	sun
動詞	連体形	du 結び形	準体形	接続形	
居る	wun	wuiru	wui	wutti	
来る	ku:N	ku:ru	ku:	tji:	
する	sun	suru	su:	si:	

4. 4 活用の用法

以下、大兼久方言の活用の用法について示す。

(1) 志向形

①そのままの形で用いられる。

mandzui dʒi: haka: (一緒に字を書こう)

mandzui kʰiN ʔara: (一緒に着物を洗おう)

mandzui humane: wura: (一緒にここに居よう)

mandzui ʃiɡutu sa: (一緒に仕事しよう)

②ja: (ね) を後続させる。

mandzui ʔiraja: (一緒に言おうよ)

mandzui ʔara:ja: (一緒に洗おうよ)

③na (よ) を後続させる。

mandzui kʰiN ʔara:nna. (一緒に着物を洗おうよ)

(2) 未然形

①N (ない) がつき、否定の意味をあらわす。

dʒi:ja hakan (字は書かない)

ʔutahataja nu:etiN ʔiran (弟は何も言わない)

ʔanma:ja ju:ban tsukuitu ʔara:nna

(お母さんは夕飯を作るから洗わない。)

mutu he:ti taruN wuraN (みんな帰って今は誰もいない)

wubama:ja ka:N (おばさんは来ない)

su:ja nu:N san (今日は何もしない)

②sun (せる)、ʃimi:N (せる) を後続させる。

kwa:ne: dʒi: hakasunro: (子どもに字を書かせるよ)

ʔutahatane: kʰiN ʔara:ʃimira (妹に着物を洗わせよう)

(3) 命令形

命令形は次のように用いられる。

ʔe:ku hake: (早く書け)

hakuna: ?ire: (早く言え)

φe:ku k[?]iN ?are: (早く着物を洗え)

humane: wure: (ここに居ろ)

huma:tʃi ku:ba (ここに来い)

hakuna: se: (早くしろ)

大兼久方言では、例えば「書く」の命令形は **hake:** であらわされ、**haki** の形は確認できない。

(4) 連用形

連用形は次のような用法が認められる。

①busan (たい)、jassan (やすい)、guruhan (にくい) などを後続させる。

dzi: hakibusan (字を書きたい)

φe:ku huri ?i:busan (早くこれを言いたい。)

φe:ku tʃira ?are:busan (早く顔を洗いたい。)

humane: wuibusan (ここに居たい)

huma:tʃi ki:busan (ここに来たい。)

φe:ku huri ʃi:busan (早くこれをしたい)

②助詞 ga (に) を後接させる。

?umu φuiga ?ikundo: (芋掘りに行くよ)

③nunse: を後続させ条件をあらわす。

?ja:ga hakinunse: wa:ga jumun (君が書いたら、私が読む)

?ja:ga ?are:nunse: ki:sa (あなたが洗うなら着るよ)

?ja:ga ku:nunse: kamaja: (君がきたら食べよう)

大兼久方言の条件をあらわす形は、「書く」の例でいうと、**hakinunse:** であり、**hakaba** (書かば)、**hake:** (書けば) のような形は確認できない。

(5) 終止形

終止形では次のような用例が認められる。

dzi: hakun (字を書く)

?anne: ?i:nro: (彼に言うよ)

wa:ga k[?]iN ?are:nro: (私が着物を洗うよ)

me:nitʃi humane: wunro: (毎日ここに居るよ)

?atʃa ?utahataga kunro: (明日弟が来るよ)

wanja me:nitʃi ʃigutu sunro: (私は毎日仕事をするよ)

(6) 連体形

連体形は、次のように用いられる。

hakuntsu:ja wuran (書く人はいない)

?i:ntsu:ja taruga (言う人は誰か。)

?are:ntsu:ja taruga (洗う人は誰か。)

hamane: wuntsu:ja taruga (ここに居る人は誰か。)

huma:tji ku:ntsuja wuran (ここに来る人はいない。)

huri suntsu:ja wuran (これをする人はいない。)

(7) ru 結び形

ru 結び形は次のように用いられる。ru のかかる形式は -ru で結ぶ。

dzi:ru hakuru (字をぞ書く)

wangaru ?i:ru (私がぞ言う)

wangaru ?are:ru (私がぞ洗う)

wangaru wuiru (私がぞ居る)

kikuegaru ku:ru (菊江がぞ来る)

figuturu suru (仕事ぞする)

因みに大兼久方言では、ga (か) の結びはみられない。例えば沖縄中南部の奥武方言では、ta :gaga tsu:ra wakaran (誰が来るか分からない) のように ga (か) が [-ra] の形 (ラ結び形) と呼応し、疑問をあらわす用法がみられた。しかし大兼久方言では tarugaga ku:ra wakaran (誰が来るかわからない) のようになり、ラ結び形は確認できない。

(8) 準体形

準体形は、以下のようになる。

mi (か)、jiga (が。けれども) 等が後続する。

wa:ga hakumi (私が書くか)

wa:ga ?are:mi (私が洗うか)

以上、(5) 終止形～(8) 準体形の他に派生語幹をもとにして、以下の形式も形成される。

hakutan (書いていた*過去における動作の進行を表す)

(9) 接続形

接続形は以下のようなになる。kara を後続させる。

hatʃikara ʔikusa (書いてから行くよ)

ʔja:ga ʔitʃikara wa:ga ʔi:sa (君が言ってから私が言うよ)

ʔja:ga ʔara:tikara ʔikaja: (君が洗ってから行こうね)

ʔja:ga tʃi:kara ʔikaja: (君が来てから行こうね)

接続形にʔa_N (ある) が複合して次のような派生形式をつくる。

hatʃa_N (書いた。過去)

5. 形容詞活用

5. 1 活用の分類

形容詞を語幹の末尾に着目し分類すると次の2類〈表1〉に分けられる。

〈表1〉

		基本語幹	派生語幹	接続語幹
1	a	CV	CVCV	CVCVC
	b	CVV	CVVCV	CVVCVC
2		CV	CV	CVC

(* C=子音、V=母音を表す)

5. 2 形容詞活用体系

大兼久方言の形容詞の活用はいわゆるク活用とシク活用の区別はない。代表例をもって語幹と語尾に分けて示すと〈表2〉のようになる。音韻レベルで示し、ϕ記号はゼロを意味する。

5. 3 活用表

〈表1〉の分類に基づいて、大兼久方言の形容詞活用を具体的に音声レベルで示すと〈表3〉のようになる。

〈表 2〉

分類	形容詞	基本語幹	連用形 1	派生語幹	条件形	連用形 2	終止形	連体形	理由形	du 結び形	準体形
1 a	高い	taka	ku	takaha	ree	'i	'N	'N	nu	'iru	'i
1 b	早い	hwee	ku	hwecha	ree	'i	'N	'N	nu	'iru	'i
2	軽い	gaQsa	ku	gaQsa	ree	'i	'N	'N	nu	'iru	'i
主な接尾形式			na'i'n (なる)					体言			mi (か)

接続語幹	接続形
takahat	i
hwechat	i
gaQsat	i
	'N (も)

分類 2 の語幹は、分類 1 に類推すれば、基本語幹は gaQ となりそうであるが、sa が入る。

〈表 3〉

1 類 a

形容詞	連用形 1	条件形	連用形 2	終止形	連体形
高い	takaku	takahare:	takahai	takahan	takahan
長い	nagaku	nagahare:	nagahai	nagahan	nagahan
大きい	magiku	magihare:	magihai	magihan	magihan
重い	?ubuku	?ubuhare:	?ubuhai	?ubuhan	?ubuhan
暑い	?atjiku	?atjihare:	?atjihai	?atjihan	?atjihan
美しい	kuraku	kurahare:	kurahai	kurahan	kurahan
涼しい	firaku	firahare:	firahai	firahan	firahan
怖い	?uturaku	?uturahare:	?uturahai	?uturahan	?uturahan
恥ずかしい	φadzikaku	φadzikahare:	φadzikahai	φadzikahan	φadzikahan
形容詞	理由形	du 結び形	準体形	接続形	
高い	takahanu	takahairu	takahai	takahaiti	
長い	nagahanu	nagahairu	nagahai	nagahaiti	
大きい	magihanu	magihairu	magihai	magihaiti	
涼しい	?ubuhanu	?ubuhairu	?ubuhai	?ubuhaiti	
暑い	?atjihanu	?atjihairu	?atjihai	?atjihaiti	
美しい	kurahanu	kurahairu	kurahai	kurahaiti	
重い	firahanu	firahairu	firahai	firahaiti	
怖い	?uturahanu	?uturahairu	?uturahai	?uturahaiti	
恥ずかしい	φadzikahanu	φadzikahairu	φadzikahai	φadzikahaiti	

1 類 b

形容詞	連用形 1	条件形	連用形 2	終止形	連体形
早い	φe:ku	φe:hare:	φe:hai	φe:han	φe:han
強い	tsu:ku	tsu:hare:	tsu:hai	tsu:han	tsu:han
遠い	tu:ku	tu:hare:	tu:hai	tu:han	tu:han
形容詞	理由形	du 結び形	準体形	接続形	
早い	φe:hanu	φe:hairu	φe:hai	φe:haiti	
強い	tsu:hanu	tsu:hairu	tsu:hai	tsu:haiti	
遠い	tu:hanu	tu:hairu	tu:hai	tu:haiti	

2 類

形容詞	連用形 1	条件形	連用形 2	終止形	連体形
軽い	hassaku	hassare:	hassai	hassan	hassan
悪い	wassaku	wassare:	wassai	wassan	wassan
形容詞	理由形	du 結び形	準体形	接続形	
軽い	hassanu	hassairu	hassai	hassaiti	
悪い	wassanu	wassairu	wassai	wassaiti	

5. 4 活用形の用法

各活用形の主な用例を示す。

(1) 連用形 1

takinu takakunainro: (背が高くなるよ)

su:ja φe:ku ?ukitan (今日は早く起きた)

(2) 条件形

takahare: ho:ranke: (高いなら買うな)

?itsunahare: tanumaran (忙しいなら頼めない)

* takahare: は、takasaare (高さあれ) + wa (ば) からの変化によるものであると考えられる。

(3) 連用形 2

takahai_gisa: (高そう)

(4) 終止形

①助詞が後接しない。

huriga nagahan (これが長い)

?ja:ga wassan (君が悪い)

②助詞が後接する。

humaja firahanro: (ここは涼しいよ)

(6) 連体形

takahançi: (高い木)

?itsunahantsu:ja ka:n (忙しい人は来ない)

(7) 理由形

?uturuhanu ?ikan (怖いので行かない)

(8) ru 結び形

ru のかかる形式は -ru で結ぶ。

wa:garu wassairu (私がぞ悪い)

*動詞と同様に ga 結び形はみられない。

(9) 準体形

ji_ga (けれども) mi (か) 等が後続する。

takahai_gija horai: (高いけれども買おうね)

ʔan tsuːja kurahaimi (あの人は美しいか)

(10) 接続形

接続形は次のように用いられる。

wanja takahatin hoːin (私は高くても買う)

magahaitin hassan (大きくても軽い)

参考文献

- ・内間直仁(1984)『琉球方言文法の研究』笠間書院
- ・内間直仁、新垣公弥子(2000)『沖縄北部・南部方言の記述的研究』風間書房
- ・津波高志他(1982)『沖縄国頭の村落』新星図書出版
- ・名護市史編纂委員会(2006)『名護市史本編・10 言語』名護市
- ・中本謙(2017)「沖縄県奥武方言—動詞・形容詞の活用を中心に—」『文化庁委託事業報告書 平成 28 年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』琉球大学国際沖縄研究所
- ・中本謙(2018)「沖縄県大宜味村大兼久方言の記述—格助詞・とりたてを中心に—」『文化庁委託事業報告書 平成 29 年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』琉球大学国際沖縄研究所
- ・琉球方言研究クラブ(1992)『琉大方言 7 号 津波方言の音韻』
- ・ローレンス・ウェイン (2004)「大宜味村田嘉里方言の音調体系」『琉球の方言』29 号 法政大学沖縄文化研究所
- ・ローレンス・ウェイン(2010)「大宜味村方言の音韻について：附 大宜味村四地点音調資料」『琉球の方言』35 号法政大学沖縄文化研究所

阿嘉島方言の動詞、形容詞の初期報告

日本学術振興会特別研究員 PD／国立国語研究所
横山晶子

1. はじめに

1.1 地理

阿嘉島は、沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉に属する（図 1）。平成 22 年 9 月時点において、世帯数は 166 戸、人口は 279 名である¹。農業、漁業のほか、ダイビングを中心とした観光業が島の主要産業となっており、1 年に 8 万人近くの観光客が訪れる。



図 1. 阿嘉島の位置

1.2 阿嘉方言

阿嘉方言は、琉球諸語－北琉球－沖縄－南沖縄方言に属する（琉球方言研究クラブ編 1990）。阿嘉方言の特徴として、(1) 1 音節 2 モーラ語において、他の沖縄諸方言に特徴的な $e \rightarrow i$ の変化が起きていないこと（例：[me:]「目」、[ke:]「毛」、(2) 軟口蓋摩擦音（[k], [g]）において、他の沖縄諸方言に特徴的な口蓋化が起きていないことが挙げられる。

本稿で用いる音韻表記を以下に示す。母音には/a/i/u/e/o/の 5 つを認め、長母音は短母音の連続として表記する（例：/mee/[me:]）。半母音には/j/, /w/を認める。子音には/p/, /b/, /t/, /d/, /n/, /k/, /g/, /ʔ/, /m/, /N/[m~n~ŋ~N], /r/[r], /s/[s~ɕ], /z/[z], /c/[tɕ], /ts/[ts], /h/[h~ç], /f/[ɸ]を認める。特に、音節主音となる鼻音を/N/, [ɕi]を/sji/, [dzi~zi]を/zji/, [tei]を/cji/と表記する。

¹ 座間味村インフォメーション <http://www2.vill.zamami.okinawa.jp/info/zamami.php>

2 動詞形態論

今年度は(1) 断定肯定形、(2) 否定形、(3) 過去形、(4) シテ中止形(以下、継起形と呼ぶ)、(5) アリ中止形を、調査した。調査語彙の活用表を本稿末に添付する。

2.1 語構成

2.1.1 構造

動詞は語根に接辞が接続して形成される。現在までに分かっている相互承接順は(1)の通りである。時制接辞には具体的に(2)の接辞が、語尾接辞には具体的に(3)の接辞がある。

- (1) 語根－受動接辞－{丁寧接辞／継続接辞}－否定接辞－時制接辞－語尾接辞
- (2) 時制接辞：現在接辞、過去接辞
- (3) 語尾接辞：継起接辞、アリ中止接辞、連用接辞、直説接辞、連体接辞、意図接辞、禁止接辞、命令接辞、逆接接辞

2.1.2 接辞

現在までに分かっている接辞は表1の通りである。母音語幹に接続したとき、子音語幹に接続したときの具体例をそれぞれ挙げる。

表1. 接辞の種類と例

	例(母音語幹)	例(子音語幹)
受動接辞 -ra/V_, -a/C_		sjik-a-ra-N「好かれない」
丁寧接辞 -jabi	ui-jabit-a-N「植えました」	
否定接辞 -raN/V_, -aN/C_	fu-ra-N「降らない」	tub-a-N「飛ばない」
条件接辞 1 -ree	ja-ree「～なら」	
現在接辞 -i/V_, -u/C_	fu-i-N「降る」	tub-u-N「飛ぶ」
連用接辞 -i	fu-i「降り」	tub-i「飛び」
条件接辞 2 -iNja	mi-iNja「見れば」	ninzj-iNja「眠ると」
過去接辞 -a	fut-a-N「降った」	tur-a-N「飛んだ」
継起接辞 -i	fut-i「降って」	tur-i「飛んで」
継続接辞 -oo		asr-oo-N「遊んでいる」
アリ中止接辞 -i	fut-i「降って」	tur-i「飛んで」
直説接辞 -N	fu-i-N「降る」	tub-u-N「飛ぶ」
連体接辞 -nu/ru	tsuku-i-ru「作る(もの)」	
意図接辞 -raa/V_, -aa/C_	koo-raa「買おう」	
命令接辞 -ri/V_, -i/C_	na-ri「なれ」	

禁止接辞 -runa/V_, -una/C_		kam- una 「食べるな」
逆接接辞 -sjiga	ja- sjiga 「けれども」	

2.2 動作動詞

2.2.1 規則動詞

規則動詞は、後接する接辞のグループ（2.2.1.1）によって、語幹（語根）末尾の音が規則的に交替する（2.2.1.2）。さらに、形態音韻規則（2.2.1.3）を経て、最終的な表層形が得られる。

2.2.1.1 接辞のグループ

語幹末尾音の交替に関して、接辞は大きく A, B, C に分類できる。以下に記載がない接辞は語幹末尾音の交替に関与しない。

- A：否定接辞、命令接辞、禁止接辞、意図接辞、条件接辞
- B：現在接辞、連用接辞、条件接辞（丁寧接辞？）
- C：過去接辞、継続接辞、継起接辞、アリ中止接辞

2.2.1.2 交替の仕方

接辞グループごとの、語幹末尾が表2の通りに交替する。表3に、具体例として、接辞Aグループの否定形、接辞Bグループの現在形、接辞Cグループの過去形を挙げる。

表2. 接辞グループごとの、語幹末尾の交替

接辞のグループ	語幹末尾音 ²									
	V/N ³	#_i	b	m	n	s	t	g	d	d2
A	V/N	i	b	m	n	s	t	g	d	d
B	V/N	i	b	m	n	s	cj	zj	zj	zj
C	Vt/Nt	ccj	r	r	izj	cj	cj	zj	cj	t

² 今後の課題：(1) k 語幹の活用「引く」「抜く」などがどうなるか。(2) 語幹末 d グループと d2 グループが分かれる条件。(3) 語幹末母音グループの「食べる」の否定形（kwaraNではなく kwaaNとなる）の説明

³ 語幹末に N がある時に、母音語幹末と同じ振る舞いをする証拠として、「抜けなかった」nugi-raNt-a-N（抜ける-NEG-PST-IND）がある。

表 3. 接辞グループごとの、語幹末尾の交替（具体例）

	V	#_i	b	m	n
	降る	蹴る	飛ぶ	飲む	死ぬ
否定 -(r)a	furaN	kiraN	tubaN	numaN	sjinaN
現在 -i/u	fuiN	kiiN	tubuN	numuN	sjinuN
過去 -a	futaN	kiccjaN	turaN	nuraN	sjizjaN

	s	t	g	d1	d2
語根	落とす	待つ	漕ぐ	縛る	かぶる
否定 -(r)a	utusaN	muttaN	kugaN	kuNdaN	kaNdaN
現在 -i/u	utusuN	muccjuN	kuzjuN	kuNzjuN	kaNzjuN
過去 -a	utucjaN	muccjaN	kuzjaN	kuNcjaN	kaNtaN

2.2.1.3 形態音韻規則

上述のように語幹が交替した規則動詞は、さらに以下の形態音韻規則を経て、最終的な表層形が得られる。

- a) $r \rightarrow \emptyset / C_ :$ 子音後の r は削除される。
 (ex) kam + -runa \rightarrow kam-una
 食べる PROH 食べる-PROH
- b) $N \rightarrow \emptyset / _ -N :$ -N 前の N は削除される。
 (ex) kam + -raN + -N \rightarrow kam-a-N
 食べる NEG IND 食べる-NEG-IND

2.2.2 不規則動詞

不規則活用の動詞には、icjuN「行く」cjuuN「来る」suN「する」がある。現在までに分かっている不規則動詞の活用は、表 4 の通りである。

表 4. 不規則動詞の活用

	行く	来る	する
否定形 -ra	ikaN	kooN	saN
現在形 -ju	icjuN	cjuuN	suN
連用形 -i	iki	kii	sji
継起形 -i	?Nzji	ccji	sji
アリ形 -i	?Nzji	ccji	sji

過去形 -a	?NdaN	ccjaN	saN
--------	-------	-------	-----

2.2.3 存在動詞

現在までに分かっている存在動詞の活用は、表5の通りである。存在動詞は、動作動詞と比べ、(1) 現在形で現在接辞を取らない (2) 動作動詞ではとれるが存在動詞では取れない接辞（アリ接辞、恐らく継続接辞など）がある (3) 「ある」の否定、「ない」の否定がそれぞれ補充形になる、といった形態的特徴がある。

表5. 存在動詞

	ある	ない	いる
否定形	(neeN)	(aN)	uraN
現在形	aN	neeN	uN
連用形	?	?	?
継起形	ati	?	uti
アリ形	-	-	uti
過去形	ataN	neeNtaN	utaN

2.2.4 コピュラ動詞

コピュラ動詞は、補部に名詞、または非活用型形容詞をとる。

(4) {(名詞) / 非活用型形容詞} コピュラ動詞

コピュラ動詞には、補部に非活用型形容詞を取る*ja「～だ」が確認できている。否定の意味を表すコピュラ動詞に araN があるが(5)、これが*jaの補充形であるか、それとも別に*aがコピュラ動詞としてあるのか、まだ不明である。現在のところ分かっているコピュラ動詞の活用は表6の通りである。

- (5) waN kuruma=ja zjootoo=ja a-ra-N
 waN kuruma=ja zjootoo=ja a-ra-N
 1SG 車=TOP 立派=TOP COP-NEG-IND
 俺の車は上等じゃない。

表6. コピュラ動詞の活用

	ある	ない	いる
否定形	(neeN)	(aN)	uraN

現在形	aN	neeN	uN
連用形	?	?	?
継起形	ati	?	uti
アリ形	-	-	uti
過去形	ataN	neeNtaN	utaN

3 形容詞

形容詞には、屈折変化をする活用型形容詞と、屈折変化をしない非活用型形容詞がある。

3.1 活用型形容詞

3.1.1 活用型形容詞の構造

活用型形容詞の語構造は(6)の通りである。

(6) [形容詞語根 + sa] 語幹 - 語尾接辞

3.1.2 活用

現在までに分かっている活用型形容詞の活用は、表7の通りである。

表7. 活用型形容詞の活用

屈折	
終止形 -N	maa-sa-N 「美味しい」
連体形① -nu	maa-sa-nu 「美味しい〇〇（連体修飾）」「美味しいので（理由）」
連体形② -ru	maa-sa-ru 「美味しい〇〇（連体修飾）」
条件形 -ree	maa-sa-ree 「美味しければ」
過去形 -a	maa-sat-a-N 「美味しかった」
理由形 -gutu	maa-sa-gutu 「美味しいので」「美味しくくて」

3.1.3 派生

形容詞から副詞への派生には、2つの方法がある。

2.1.3.1 副詞化接辞

副詞化接辞-kuを用いる。-kuは、形容詞語根または形容詞語幹に接続し、形容詞全体を副詞化する。

- (7) *sooju iriree* {*maasaku / maaku*} *naisa*
sooju iri-ree *maa-sa-ku* *maa-ku* *na-i-sa*
 醤油 入れる-COND 美味しい-ADJ-ADVL 美味しい-ADVL なる-NPST-SFP
 醤油を入れれば、美味しくなるよ。

2.1.3.2 重複

形容詞語幹を重複し、助詞=tu を付ける。なお、重複された語幹末の母音は長音化する。

- (8) *sooju iriree* *masamasaa=tu* *naisa*
sooju iri-ree *ma-sa-masa=tu* *na-i-sa*
 醤油 入れる-COND 美味しい-ADJ-RED=QT なる-NPST-SFP
 醤油を入れれば、美味しくなるよ。

3.1.4 複合

形容詞語幹、または形容詞語根は名詞と複合する。

- (9) *maa-sa + munu*
 美味しい-ADJ + もの
 美味しいもの
- (10) *maagii + deekuni*
 大きい + 大根
 大きな大根

3.2 非活用型形容詞

非活用型形容詞は、活用しない。述部に立つときは、コピュラ動詞の補部となり、コピュラが屈折を担う。この点、名詞と振る舞いが非常に似ているが、(1) 形容詞の類型的要点を満たしていること、(2) 幾つかの点で名詞と異なる振る舞いをすることから、名詞とは別のカテゴリーの、形容詞の一部と考える。

3.2.1 形容詞の認定要件

通言語的に、形容詞は名詞や動詞ほど明瞭な文法カテゴリーではないと言われる。何故なら多くの言語において、形容詞は動詞的な側面と名詞的な側面を持ち、形容詞のみに認められる文法機能は存在しないからである (Hajak 2016)。こうしたなか、Dixon (2016)

はすべての言語において形容詞を動詞や名詞から区別できるとし、以下の4つを類型的な形容詞の特徴として挙げた。Dixonによると a, b は殆どの言語、c, d は一部の言語に当てはまる。

- a. 形容詞は一項文の述語 (intransitive predicate) として機能するか、コピュラの補部 (copula complement) となる。
- b. 形容詞は名詞句の修飾部に立つ。
- c. 形容詞は比較構文を形成する。
- d. 形容詞はそのままの形、または派生して動詞を修飾する。

a について(11)のように、非活用型形容詞はコピュラの補部となる。

- (11) *kinoo=N gaNzjuu jat-a-N=roo*
kinoo=N gaNzjuu ja-a-N=roo
 昨日=ADD 元気 COP-PST-IND=SFP
 昨日も (お爺ちゃんは) 元気だったよ。

b について(12)のように、非活用形容詞は名詞句の修飾部に立つ。

- (12) *gaNzjuu-na taNmee mi-iNja us-sa-N=doo*
gaNzjuu-na taNmee mi-iNja us-sa-N=doo
 元気-ADJ お爺さん 見る-COND2 嬉しい-ADJ-IND=SFP
 元気なお爺さんを見ると、嬉しいよ。

c については、まだ例文を取れていないが「A より B の方が *gaNzjuu*」といった文は恐らく可能であろう。

d については、そのままの形、もしくは副詞への派生接辞-*ni* を付けて、動詞を修飾している。

- (13) *taNmee=ja utat-oot-i=N niNzj-iNja gaNzjuu na-i-N*
taNmee=ja uta-oo-i=N niNg-iNja gaNzjuu na-i-N
 お爺さん=TOP 疲れる-CONT-SEQ=ADD 寝る-COND2 元気 なる-NPST-IND
 お爺ちゃんは疲れていても、寝れば、元気になる。

- (14) *tunai=nu warabaa=ga gaNzjuu-ni asur-oo-N*
tunai=nu warabaa=ga gaNzjuu-ni asur-oo-N
 隣=GEN 子ども=NOM 元気=ADVL 遊ぶ-CONT-IND
 隣の子供が、元気に遊んでいる。

以上より、阿嘉島の非活用型形容詞は、類型的に提案されている形容詞の要件を満たしている。

3.2.2 名詞と異なる振る舞い

非活用型形容詞はコピュラ動詞の補部となる点で名詞と同じであるが、名詞修飾の位置に立つときの振る舞いが異なる。

名詞が名詞修飾の位置に立つときには、属格助詞=*ga/nu* を取るが、非活用型形容詞が名詞修飾の位置に立つときは、連体接辞=*-na* を取る（これは、動詞の連体接辞=*-nu/ru* とも異なる）。

- (15) *meeniN jaccji=ga kee=nu mii utus-u-N*
meeniN jaccji=ga kee=nu mii utus-u-N
 毎年 兄=NOM 木=GEN 実 落とす-NPST-IND
 毎年兄が、木の実を落とす。

- (16) *gaNzjuu-na taNmee mi-i-N=ja us-sa-N=doo*
gaNzjuu-na taNmee mi-i-N=ja us-sa-N=doo
 元気-ADJ お爺さん 見る-NPST-IND=TOP 嬉しい-ADJ-IND=SFP
 元気なお爺さんを見ると、嬉しいよ。

3.2.3 非活用型形容詞（述部）の活用

非活用型形容詞がコピュラの補部に立った時、述部全体の活用を表8に挙げる。

表8. 非活用型形容詞述部の活用

意味	
終止	<i>gaNzjuu jaN</i> 「元気だ」
連体 -na	<i>gaNzjuu-na</i> 「元気な」
条件	<i>gaNzjuu jaree</i> 「元気なら」
過去	<i>gaNzjuu jataN</i> 「元気だった」
理由	<i>gaNzjuu jagutu</i> 「元気だから」

4 おおきなかぶテキスト（昨年度調査分）

- (1) *?NNmee=ga deekuni ui-jabit-a-N*
 お爺さん=NOM 大根 植える-POL-PST-IND
 お爺さんが大根を植えました。

- (2) ama-sa-nu ama-sa-nu deekuni=Nkai na-ri=joo
 甘い-ADJ-ADN 甘い-ADJ-ADN 大根=?<に> なる-IMP=SFP
 甘い甘い大根になれよ。
- (3) magi-sa-nu magi-sa-nu deekuni=Nkai na-ri=joo
 大きい-ADJ-ADN 大きい-ADJ-ADN 大根=?<に> なる-IMP=SFP
 大きな大きな大根になれよ。
- (4) ama-sa-nu gaNzjuu-na
 甘い-ADJ-ADN 頑丈-ADN
 甘い元気のよい。
- (5) deezji=na magii+deekuni=nu deki-jabut-a-N
 大変=な 大きい+大根=NOM 出来る-POL-PST-IND
 とてつもなく大きな大根が出来ました。
- (6) ?NNmee =ja deekuni hicjinuzj-u-N=di sabit-a-N
 お爺さん=TOP 大根 引き抜く-NPST-IND=QT する.HON-PST-IND
 お爺さんは大根を引き抜こうとしました。
- (7) urijaa harijaa
 INT? INT?
 うんとこしょ、どっこいしょ
- (8) ja-sjiga deekuni=ja nugi-jabi-ra-N
 COP-CNN 大根=TOP 抜ける-POL-NEG-IND
 ところが大根は抜けません。
- (9) ?NNmee =ja paapaa ju-ri+ccj-a-N
 お爺さん=TOP お婆さん 呼ぶ-INF+来る-PST-IND
 お爺さんはお婆さんをお呼んで来ました。
- (10) paapaa=ga ?NNmee hippat-i
 お婆さん=NOM お爺さん 引っ張る-SEQ
 お婆さんがお爺さんを引っ張って、
- (11) ?NNmee =ga deekuni hippat-i

お爺さん=NOM 大根 引っ張る-SEQ
お爺さんが大根を引っ張って、

(12) urijaa harijaa
INT? INT?

うんとこしょ、どっこいしょ

(13) ja-sjiga deekuni=ja nugi-ra-N
COP-CNN 大根=TOP 抜ける-NEG-IND
けれども大根は抜けない。

(14) paapaa=ja ?Nmaga ju-ri+ccj-a-N
お婆さん=TOP 孫 呼ぶ-INF+来る-PST-IND
お婆さんは孫を呼んで来ました。

(15) ?Nmaga =ga paapaa hippat-i
孫=NOM お婆さん 引っ張る-SEQ
孫がお婆さんを引っ張って、

(16) paapa=ga ?NNmee hippat-i
お婆さん=NOM お爺さん 引っ張る-SEQ
お婆さんがお爺さんを引っ張って、

(17) ?NNmee =ga deekuni hippat-i
お爺さん=NOM 大根 引っ張る-SEQ
お爺さんが大根を引っ張って、

(18) urijaa harijaa
INT? INT?
うんとこしょ、どっこいしょ

(19) naara naara deekuni=ja nugi-ra-N
まだ まだ 大根=TOP 抜ける-NEG-IND
まだまだ大根は抜けない。

(20) aNsaani ?Nmaga=wa iN ju-ri+cj-uu-N
そこで 孫=TOP 犬 呼ぶ-INF+来る-NPST-IND

そこで、孫は犬を呼んでくる。

- (21) paapaa=ga iNnoo hicj-i
お婆さん=NOM お爺さん 引く-SEQ
お婆さんがお爺さんを引き、
- (22) naara naara nugi-raNt-a-N=doo
まだ まだ 抜ける-NEG-PST-IND=SFP
まだまだ抜けないよ。
- (23) iN=nu maja ju-ri+cj-uu-N
犬=NOM 猫 呼ぶ-INF+来る-NPST-IND
犬が猫を呼んで来る。
- (24) maja=nu iN hicj-i iN=nu ?Nmaga hicj-i
猫=NOM 犬 引く-SEQ 犬=NOM 孫 引く-SEQ
猫が犬を引き、犬が孫を引き、
- (25) ?Nmaga=nu paapaa hicj-i paapaa=ga ?NNmee hicj-i
孫=NOM お婆さん 引く-SEQ お婆さん=NOM お爺さん 引く-SEQ
孫がお婆さんを引き、お婆さんがお爺さんを引き、
- (26) ja-sjiga deekuni=ja nugi-raNt-a-N
COP-CNN 大根=TOP 抜ける-NEG-PST-IND
けれども大根は抜けなかった。
- (27) majaa=nu weNcju ju-ri+ccj-a-N
猫=TOP 鼠 呼ぶ-INF+来る-PST-IND
猫は鼠を呼んで来た。
- (28) weNcju=nu majaa hicj-i majaa=nu iN hicj-i
ねずみ=NOM 猫 引く-SEQ 猫=NOM 犬 引く-SEQ
ねずみが猫を引き、猫が犬を引き、
- (29) iN=nu ?Nmaga hicj-i ?Nmaga=nu paapaa hicj-i
犬=NOM 孫 引く-SEQ 孫=NOM お婆さん 引く-SEQ
犬が孫を引き、孫がお婆さんを引き、

(30) paapaa=ga ?NNmee hicj-i
 お婆さん=NOM お爺さん 引く-SEQ
 お婆さんがお爺さんを引き、

(31) urijaa harijaa
 INT? INT?
 うんとこしよ、どっこいしよ

(32) joojaku deekuni nugi-jabit-a-N
 やっと 大根 抜ける-POL-PST-IND
 やっと大根が抜けました。

略号一覧

略号	意味	略号	意味	略号	意味
ADD	付加	HON	尊敬	QT	引用
ADJ	形容詞	IMP	命令	RED	重複
ADVL	副詞化	IND	直説	SEQ	継起
AND	連体	INF	連用	SFP	終助詞
CNN	逆接	INT	意図	SG	単数
COND	条件	NEG	否定	TOP	主題
COND2	条件 2	NOM	主格	1	1 人称
CONT	継続	NPST	非過去		
COP	コピュラ	POL	丁寧		
GEN	属格	PST	過去		

引用文献

- ・ 琉球方言研究クラブ編（1990）『阿嘉方言の音韻体系』琉球方言研究クラブ。
- ・ Dixon, R. M. W. 2006. Adjective Classes in Typological Perspective. In Dixon, R. M. W., and Aikhenvald, Alexandra Y. (eds.) *Adjective Classes : A Cross-Linguistic Typology*. Oxford, GBR: Oxford University Press.
- ・ Hajek, John. 2006. Adjective Classes: what can we Conclude? In Dixon, R. M. W., and Aikhenvald, Alexandra Y. (eds.) *Adjective Classes : A Cross-Linguistic Typology*. Oxford, GBR: Oxford University Press.

謝辞

本報告に用いた、動詞・形容詞の調査データは當山奈那さん（琉球大学）が調査を代行して集めて下さったものです。この場を借りて御礼申し上げます。調査にご協力いただいた、阿嘉島の与那覇正次さん、垣花武一さん、金城英雄さん、兼島菊枝さん、貴重なお話をお聞かせいただき、誠にありがとうございました。本文の不備はすべて報告者の責任です。

	縛る	かぶる	寝る	あぶる	漕ぐ	待つ	飛ぶ	遊ぶ	落とす	出す	飲む	食べる
語根	kuNd	kaNd	niNd	aNd	kug	mutt	tub	asub	utus	?Nzjas	num	kam
グループ	d1	d2	d2	d2	g	t	b	b	s	s	m	m
断定肯定	kuNzjan	kaNzjuN	niNzjuN	aNzjuN	kuzjuN	muccjuN	tubun	asubun	utusun	izjasun	numun	kamun
否定	kuNdan	kaNdan	niNdan	aNdan	kugan	muttan	tuban	asuban	utusan	?Nzjasan	numan	kaman
過去	kuNcjian	kaNtan	niNtan	aNtan	kuzjan	muccjan	turan	asuran	utucjan	?Nzjacjan	nuran	karan
シテ中止	kuNcji	kaNti	niNti	aNti	kuzji	muccji	turi	asuri	utucji	?Nzjacji	nuri	kari
アリ中止	kuNciji	kaNti	niNti	aNti	kuzji	muccji	turi	asuri	utucji	?Nzjacji	nuri	kari

	死ぬ	降る	降りる	落ちる	捨てる	掘る	買う	売る	くれる	もらう	食う	酔う
語根	sijn	fu	uri	uti	sjiti	fu	koo	u	kwi	ii	kwa	wii
グループ	n	母音1	母音1	母音1	母音1	母音1	母音1	母音1	母音1	母音1	母音1	母音1
断定肯定	sijnun	fuin	urin	utiin	sjitiin	fuin	kooiin	uin	kwiin	iiin	kwain	wiin
否定	sijnan	furán	uriran	utiran	sjitiran	furán	kooran	uran	kwiran	iiran	kwaan	wiiran
過去	sjizjan	futan	uritan	uttan	sjittan	futan	kootan	utan	kwitan	ititan	kwatan	wiitan
シテ中止	sjizji	futi	uriti	utti	sjitti	futi	kooti	uti	kwiti	iti	kwati	wiiti
アリ中止	sjizji	futi	uriti	utti	sjitti	futi	kooti	uti	kwiti	iti	kwati	wiiti

	洗う	閉じる	起きる	いる	切る	蹴る	着る	座る	見る	言う	ある	ない
語根	ara	kuu	uki	u	ki	ki	cji	ii	mi	i		
グループ	母音1	母音1	母音1	母音1	母音2	母音2	母音2	母音2	母音2	母音2	不規則	不規則
断定肯定	arain	kuuin	ukiin	un	kiin	kiin	cjiin	iiin	miin	iiin	an	neen
否定	araaran	kuuran	ukiran	uran	kirán	kirán	cjiran	iiran	miran	iran	neen	an
過去	araatan	kuutan	ukitan	utan	kiccjan	kiccjan	cjicjootan	iicjan	micjan	icjan	atan	neentan
シテ中止	araati	kuuti	ukiti	uti	kiccji	kiccji	kicji	iicji	micji	icji		
アリ中止	araati	kuuti	ukiti	uti	kiccji	kiccji	kicji	iicji	micji	icji	ati	neen

	行く	来る	する
語根	不規則	不規則	不規則
グループ	不規則	不規則	不規則
断定肯定	icjuN	cjuuN	sun
否定	ikan	koon	san
過去	?Ndan	cjan	san
シテ中止	?Nzji	ccji	sji
アリ中止	?Nzji	ccji	sji

宮古語大神方言 動詞と形容詞の活用の概要

金田 章宏

1 はじめに

本稿は「平成 30 年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」で調査した結果をもとに、文化庁委託事業成果報告会で発表（金田 2019）したのちにまとめたものである。

大神島についての基本情報や大神方言の音声音韻と表記、名詞の格の用法などについては前年度の報告書（金田 2018a）を参照されたい。また、本稿では用例を中心としたため、文法記述に関する基本的な内容については簡便にした。これについての詳細は高橋ほか 2005 を参照されたい。

話者情報：狩俣英吉氏（1925(T. 14)年 9 月 25 日生）

2 動詞活用の概要

本稿では動詞の活用と活用形の意味用法について記述する。肯定形を中心に扱うこととし、否定形については適宜ふれる。動詞活用のタイプについては本稿末に表をあげるが、詳細は稿をあらためたい。

2.1 活用表

動詞 num(飲む)、mi:ɿ(見る)、kSs·kɿ(来る)、asɿ(する)、ff(降る)を例にあげる。

終止形

のべたて

非過去 num / mi:ɿ / kSs·kɿ / asɿ // ff

過去 1 numi(=tu) / mi:(=tu) / k!isi(=tu) / asi // ffi

過去 2 numtaɿ / mi:taɿ / kSstaɿ / astaɿ // fftaɿ

はたらきかけ

意志勧誘 1 numa / mi: / ku: / asi // ×

意志勧誘 2 numati / mi:ti / ku:ti / asiti // ffati(uɿ)

命令 1 numi / mi:ru / ku: / assu // ffi

命令 2 numata / mi:ta / ku:ta / assita // ffata (否定形命令)

(依頼 あわせ形式を使用 numi fi:ru / nume:ri < numi jari)

願望 numte: / mi:te: / kSste: / aste: // ffte:

連体形 非過去 num / mi: / kSs / as~asɿ // ff

	過去	numta ₁ / mi:ta ₁ / kSsta ₁ / asta ₁ // ffta ₁
動名詞		num / mi: / kSs / as // ff
中止形	中止 1	numi / mi: / kSsi / asi // ffi
	中止 2	numis!iti: / mi:s!iti: / k!isis!iti: / asis!iti: // ffis!iti:
	中止 3	numikara / mi:kara / k!isikara / asikara // ffikara
	中止 4	numis!iti:kara / mi:s!iti:kara / k!isis!iti:kara / asis!iti:kara // ffis!iti:kara
副動詞	目的	numka / mi:ka / × / aska // ×
	同時	numsse:N / mi:sse:N / kSsse:N / asse:N // ×
条件形	仮定 1	numtika: / mi:tika: / kSstika: / astika: // fftika:
	仮定 2	numapa / mi:pa / ku:pa / assipa // ffapa
	仮定 3	nume:< numija / mi:ja / k!isje: / asje:? / ffe:?
	既定	numtarapa: / mi:tarapa: / kSstarapa: / astarapa: // fftarapa:
譲歩形		numripamai·nummipamai·numapamai / mi:(ri)pamai / ku:pamai· kSsipamai / a(s)sipamai // ffapamai
接続形	順接	num(ta)ripa / mi:(ta)ripa / kSssipa / assipa // ?
	逆接	num(tas)suka / mi:(tas)suka / kSs(tas)suka / as(tas)suka // ff(tas)suka

2.2 終止形

ムードについて

この方言では、できごとに対する話し手の認識の確かさにかかわるムード表現（断定・推量）は、共通語などのような活用語形の対立によってではなく、確かさにかかわる補助的な単語との組み合わせによってあらわされる。

断定的な表現ではハダカの語形が使用されるほか、当為・予定的な意味をあらわす **kumata** と組み合わせるし、より断定性がさがるとハズに対応する **pak₁**、さらにさがると古代語のベンに由来する **pe:m** が使用される。したがって、この点に関しては活用形レベルのムードの対立はみられない。

否定形について

否定の非過去形には **numaN** と **numate:N** の2語形がある。**numaN** は意志的な意味のない文に使用され、「～しない、まだ～していない」の意味になる。このことと関わって、継続動詞の否定形 **numi uraN** の使用が多くはみられない。**numate:N** は意志形 **numati** との関連が考えられる語形で、単独の述語では一人称の意志的な意味（する意志がない）に使用されるが、伝聞などに使用されると人称制限がなくなる。

m[mita] ɣriN. まだ入れていない。私は。もう入れたか?の返事。

m[me] ɣrite:N. もう入れない。私は。もっと入れるか?の返事。

fa:]te:N [tim. 食べないって。あの人は。

a[ta:] ffa[te:N] pe:m. あしたは降らないんじゃないかな。

2.2.1 のべたて形

非過去1 num / mi:ɿ / kSs·kɿ / asɿ // ff

非過去2 num=tu sɿ / mi:=tu sɿ / kSs=tu sɿ / as=tu sɿ // ff=tu sɿ

過去1 numi(=tu) / mi:(=tu) / k!isi(=tu) / asi // ffi

過去2 numtaɿ / mi:taɿ / kSstaɿ / astaɿ // fftaɿ

過去3 num=tu staɿ / mi:=tu staɿ / kSs=tu staɿ / as=tu staɿ // ff=tu staɿ

非過去形1 num / mi:ɿ / kSs·kɿ / asɿ // ff

動詞に強調辞のつかない語形で、基本的には未来テンスをあらわす。存在動詞には動詞以外の文中に強調辞があるときの語形 uɿ/aɿ と、それがないときの語形 um/am の区別がある。

・個別の未来

uri:=pa:] kari=mai=tu [fa]u. これはあいつも食べるよ。

kari=ka=tu] munu:=[pa:] sukaɿ. あの人が食事を作るよ。

kare:] mata=tu [num]ka kS:. あの人はまた飲みに来るよ。

・個別の現在

taro:]=ka=tu [peɿ. 太郎が行く。見つけて。

taro:]=ka=tu kɿ:. 太郎が来た。見つけて。

・反復習慣

kanu pStu:] ikS=mai=tu uma=u ikɿ. あの人はいつもここに行く。通る。

ikS=mai] uri=ka=tu] ukam. いつもこれが拝む。この人が

kare:] ju:tu fau. あいつはよく食べる。

・存在動詞

katam=nu]=tu uɿ. 蚊がいる。

kare:] ata=mai um. あの人はあしたもいるよ。

maɿ=[a] am? > [pi:]maka:=tu aɿ. 米はある? > 少ししかない。

[am. あった!

非過去形2 num=tu sɿ / mi:=tu sɿ / kSs=tu sɿ / as=tu sɿ // ff=tu sɿ

動詞に強調辞がついたときの分析的な語形である。分析形にあらわれるスルに相当する補助動詞は sɿ であるが、本動詞スルは asɿ である。

・個別の未来

ka[ri=mai] ikS=tu s₁. あの人も行くよ。
 mme] su[ti]=tu s₁. もうかえるよ。鶏の卵が。
 m[mesku] uwa₁=tu s₁. もうすぐ終わるよ。
 mmesku] ff=tu s₁. もうすぐ降るよ。
 ・ 反復習慣
 ikS=mai] arau=tu s₁. いつも洗う。
 ju:=tu] kanu pStu[: a:ku]:=pa[:] a₁. よくあの人は歌を歌う。
 ure: ikS=mai a₁=tu] s₁? これはいつもあるか? 品物

・ 存在動詞
 ma₁=a a₁=tu] s₁? >[a₁]=tu [s₁. 米はある? >あるよ。
 a₁=tu s₁. あった!
 na[ukara:=nu=tu u₁? >N: u₁]=tu s₁. なにかいるの? >うん、いるよ。
 kare:] ata=mai u₁]=tu s₁. あの人はあしたもいるよ。

存在動詞ではこのほかに補助動詞 u₁ との組み合わせが使用される。

uri]=tu u₁. いる。
 uma=N=[tu] uri:]₁. ここにいる。 <uri u₁
 uma=N=mai=tu] ari:]₁. ここにもある。 <ari u₁
 u[ma=N] ari:m. ここにあるよ。 <ari um

過去形 1 numi(=tu) / mi:(=tu) / k!lisi(=tu) / asi // ffi

中止形と同音の語形で、存在動詞アリとの融合形とされている。動詞以外の文中に強調辞がないばあいは、文のタイプによって動詞に強調辞がつく。この語形は存在動詞にはみられないようだ。過去形 2 よりも使用頻度が高いが、使い分けの明確な基準は確認できていない。存在動詞のこの語形はみられない。

・ 個別の過去
 skama=u] asse:N=[tu] kaNkai. 仕事をしながら考えた。
 katam=nu=tu] sasi. 蚊が刺した。
 nau=ju=tu nu]mi? なにを飲んだ?
 k!lisi]=tu. 来たよ。手紙が。教える。
 ・ 習慣・反復
 nna]ma=kami=tu [ifu]mmai pi:. いままで何回も酔った。
 uri:]]=pa: [ifu]mmai=tu mi:. これは何回も見た。
 ifum]mai=[tu] ivvi. 何回もこわがった。

過去形 2 numta₁ / mi:ta₁ / kSsta₁ / asta₁ // ffta₁

日本語の古代語シタリ形に対応するとされている。強調辞が動詞につかない語形である。非過去1存在動詞と同様、動詞以外の文中に強調辞があるときの語形～ η と、それがないときの語形～ m の区別がある。

・個別の過去

u[pu:sa=tu] ka]u[ta] η . たくさん買った。

kSsa:] kama=N=tu ata: η . さっきはあそこにあった。むこうに

ki:=mai] app η tam. きょうも遊んだ。

ju]mtam. 読んだよ。読み終わって返すとき。

・習慣・反復

i[ke:m:na] uri=si=tu [ap]p η ta η [ju. むかしはこれで遊んだよ。

ike:m:na] ju:=[tu] huni: kuk η ta η . むかしはよく船をこいだ。

・存在動詞

kari=mai=tu] uta η . あいつもいた。

aN=mai] utam. 私もいた。

ka[ma=N=tu] ata η . あそこにあった。

a[tam. あったよ。

過去形3 num=tu sta η / mi:=tu sta η / kSs=tu sta η / as=tu sta η // ff=tu sta η

動詞に強調辞がついたときの分析的な語形で、非過去2の過去形である。

・個別の過去

ka[re:] pe η]=tu sta η . あの人は行った。

mi]:=tu sta η . 見た。いま、飛行機が飛んでいるのを。

aN=mai] pi:=tu sta η . 私も酔った。

・存在動詞

aN=mai] u η =tu sta η . 私もいた。

2.2.2 はたらきかけ形

意志勧誘1 numa / mi: / ku: / asi // ×

意志勧誘2 numati / mi:ti / ku:ti / asiti // (ffati)

命令1 numi / mi:ru / ku: / assu // ffi

命令2 numata / mi:ta / ku:ta / assita // ffata (否定形命令)

(依頼 あわせ形式を使用 numi fi:ru / nume:ri<numi jari)

意志勧誘 1（勧誘形）はおもに勧誘表現に使用されるが、話し手の意志的な用法もみられる。また、意志勧誘 2（意志形）は、意志勧誘 1 の引用形式に由来する語形とみられるもので、おもに話し手の意志の表現に使用されるが、**ma:takina**（いっしょに）などの副詞とともに勧誘表現にも使用される。述語に使用されたばあいには人称制限があるが、伝聞などのなかに組み込まれると、人称に関係なく意志性や様態などをあらわす用法で使用される。

意志勧誘形 1（勧誘形） **numa / mi: / ku: / asi // ×**

勧誘

聞き手に対して、話し手とともに動作をするようはたらきかける。

kanu] ka:ssɪ=pa: tu:ta=ka mita:ɣ=si [fa:. あのお菓子は自分たちが三人で食べよう。
 ma:takina] uka[ma. いっしょに拝もう。
 u[kam]fkɪ a[si] aɣa. 大神言葉で話そう。大神口で話そう。
 mata] ku:. また来よう。
 ma:takina] ta:vva[sa. いっしょにたぶらかそう。

意志

この語形は、用例としてはわずかだが、話し手の意志の意味で使用されることがある。

aka] nu[ma. 私が飲む。
 Nme] a[si. もうしよう。やろう。独話

意志勧誘形 2（意志形） **numati / mi:ti / ku:ti / asiti // (ffati)**

意志

話し手の意志的な動作をあらわす。

aka] tafke:=si [fa:]ti. 私が一人で食べよう。
 a[Nsi:] uma:ti. そう思おう。
 ki:=ja [pi:]ti. きょうは酔おう。
 ki:] ja:ɣ=pa: asiti. きょうお祝いをしよう。
 aka] pakai] ku:[ti. 私が奪ってくる。

これに対応する否定的な意志の意味に使用されるのは、この語形がもとになったとみられる **numate:N / mi:te:N / ku:te:N / asite:N / (ffate:N)** である。一人称でも意志的でない予定的な意味や三人称では、**numaN / mi:N / ku:N / asiN / (ffaN)** が使用される。

ara:] numate:N. 私は飲まない。

taru=[mai] numaN. だれも飲まない。
a[ra:] i[ka]te:N. 私は行かない。
kari=[mai] ikaN. あの人も行かない。

勧誘

この語形は勧誘の意味で使用されることがある。

tu: Nme] Nki[ti. さあ、もう行こう。
munu: kauka ika]ti. ものを買いに行こう。
ma:ta]ki[na] katiti. いっしょに耕そう。
N[ta=N]ki [fa:]ti? どこで食べようか？

命令形 1 numi / mi:ru / ku: / assu // ffi

聞き手にその動作をするよう強くはたらきかける。人の意思的な動作でない場合は話し手の願望をあらわす。

・命令

ka:ma=Nkai] muti iki. 遠いところに持っていけ。
ma:takina] tati. いっしょに立て。
mmapi] mai=N[kai] jusiru. もっと前に寄せろ。
kakata] uki. 書かないでおけ。

fa:ta] ma[ti:]ri. 食べずに待っている。（継続相）

・願望

pe:pe:] ffi. 早く降れ。
pe:pe:] saki. 早く咲け。

命令形 2 numata / mi:ta / ku:ta / assita // ffata（否定形命令）

聞き手にその動作をするよう強くはたらきかける。語形としては否定の中止形（シナイデ）と同音になり、直訳としては～シナイカ！に対応するが、日本語でこの表現がいますぐの命令になるのに対して、この語形は命令 1 とおなじく、未来の動作の命令にも使用される。人の意思的な動作でない場合は話し手の願望をあらわす。

・すぐの命令

vva=ka] nara:sata. あなたが教えろ。
m[mapil] jaita. もっと痩せろ。
u[ma=N] ka[ke:]rata. ここに書いてくれ。<kaki jarata
vva] suna:si:]rata. あなたは黙っている。（継続相）<suna:si urata

・未来の命令

ata=Nkai] numata. あした飲め。
 ata=[mai] pe:pe: pe]ra[ta. あしたも早く帰ってほしい。
 ・願望
 m[mapi] ffata. もっと降れ！空に向かって。
 pe:pe:] saka[ta. 早く咲け。花に。

否定命令形 1 numna / mi:Nna / kSsna / asna / ffna

否定の命令形は禁止の意味に使用される。人の意思的な動作でない場合は話し手の願望をあらわす。

・命令：禁止
 aN[si=nu] k!utu: kaNkaiNna. そんなことを考えるな。
 uri:=pa:] stiNna. これは捨てるな。
 Nme] k[mu i]tiNna. もう怒るな。
 iv]viNna. こわがるな。
 ・願望
 mme] ffna. もう降るな。
 nnama ke:]riNna. まだ消えるな。
 [sukumiNna. 沈むな。

否定命令形 2 numtu: / mi:ɲtu: / kSstu: / astu: / fftu:

否定命令形 1 と同じ意味に使用される語形である。人の意思的な動作でない場合は話し手の願望をあらわす。

・すぐの命令
 mme kaN]kaiɲtu:. もう考えるな。
 uri:=pa:] vvtu:. これは売るな。
 u[ri kSsi]ɲtu:. これを着るな。
 u[ma=N] uɲ]tu:. ここにいるな。
 ・未来の命令
 ata:] num[tu:. あしたは飲むな。
 ・願望
]sɲtiɲtu:. 消えるな。
 mme] fftu:. もう降るな。
 suku]m[tu:. 沈むな。

2. 2. 3 願望形

願望形 numte: / mi:te: / kSste: / aste: // ffte:

希望形容詞 numpuskam（飲みたい）は基本的に一人称の動作であるが、願望形は基本的には三人称に対する願望に使用される。ただし、試行の意味の派生動詞では話し手自身の願望にも使用される。

pe:pe:] nau]te:. 早く治ったらいいのにな。

Nma[pi] unakai u]te:. もっと長くいてほしいな。

Nma[pi] upu:sa a]te:. もっとたくさんあってほしい。あって！

pe:pe:] ff]te:. 早く降ったらいいな。降って！

・一人称

fa[i] mi:]te:. 食べてみたいなあ。

N[ki] mi:]te:. 行ってみたいなあ。

mmepi k!i]si] mi:]te:. また来てみたいなあ。

2.3 連体形

非過去 num / mi: / kSs / as~as] // ff

過去 numta] / mi:]ta] / kSsta] / asta] // ffta]

名詞をかざる語形で、終止形の非過去形、過去形2と同形である。

日本語には相対的テンスの用法があって「あした来た人に見せる」のようにいえるが、この方言では話の時を基準にした絶対的テンスだけのようである。したがって、終止形と連体形を区別する根拠は、この点では日本語ほど明確ではない。

ata=Nkai] kSs pStu=N uri:=pa: [fi:]ti. あした来る人にこれを（あした）やる。

ata=Nkai] kSs kumata=nu pStu=[N] uri:=pa: [fi:]ti. あした来る予定の人にこれを（いま）やる。

2.3.1 非過去形 num / mi: / kSs / as~as] // ff

kire:]s] pStu=nu=tu [mi:]N. 蹴る人がいない。

kama=N u] pS]ta: [taru? あそこにいる人はだれ？

as kumata:] ne:]N. することがない。する「予定」がない。

結果・痕跡相の連体形では語形末の] が脱落することがある。（結果の状態なので意味的には過去になる）

pusje:]] munu: tuNki. 干したものを取り込め。<pusi a]

u[tusje:]] munu: pSsui ku:. 落としたものをひろってこい。<utusi a]

ka[ke:] munu: jumi. 書いたものを読め。 <kaki a]

形式名詞 munu と組み合わせさって動名詞化する。

as] muna: [ne:N ftu] nari. することはなくなった。

fau] munu:=[pa: na]mari. 食べるのをやめろ。

pa[ri:] sau munu: namari. 畑をするのをやめろ。

num] munu:=[pa:] numa[ta] uri. 飲むのを飲まないでいろ。飲むのをやめろ。

kj: ka]kS munu:=[pa:] namari:]ri. 字を書くのをやめている。やめろ。

2.3.2 過去形 numta] / mi:ta] / kSsta] / asta] // ffta]

sa[kjN] num[ta] munu: muti ku:. さっき飲んだものを持ってこい。

mi:[ta] munu: a]ri. 見たことを言え。

kSsk]ta] munu: a]ri. 聞いたことを言え。

sakSN uma=N uta] pSta: ta]ru? さっきここにいた人はだれ?

ja:] turi kSsta]]wu:=[pa: vv]=tu s]. お父さんは取ってきた魚を売る。

satari klisi:ta] pStu: ta]ru? さっき来ていた人はだれ? (継続相)

kunusak] ite:uta:] pStu]=nu=[tu [cau]kata]. このまえ会っていた人がよかった。(継続相)

2.3.3 否定形

uri:] a[siN] pSta: [mi:N. これをしない人はいない。

fai=ja:] mi:N munu:=tu [kai k!]sje:] . 食べたことのないものを買ってきてある。

uri:] numata[ka:] nau=mai sitata] munu:. これを飲まなければどうもしなかったのに。

2.4 動名詞

動名詞 num / mi: / kSs / as // ff

先行する名詞を格支配して動詞的にはたらき、後続する動詞に格支配されて名詞的にはたらく。過去形もあるかと思われるが手元の資料にはみられなかった。

mu[nu:] fau=ju=[pa: na]mari. ものを食べるのをやめろ。

sa[kj:] num=u=[pa: na]mari. 酒を飲むのをやめろ。

pa[ri:] saVvu=[pa:] jukui. 畑を(ヘラで)耕すのを休め。

kj:] kakSsu=[pa:] namari. 字を書くのをやめろ。

動作の比較ではハダカのかたちであらわれる。

num]=ju[ɣ] fau=tu] masɿ. 飲むよりも食べるほうがいい。
 fau]=ju[ɣ] num=tu] masɿ. 食べるよりも飲むほうがいい。
 mi:] =ju[ɣ] fau=tu] masɿ. 見るより食べるほうがいい。
 ff]=ju[ɣ] ffaN=tu] masɿ. 降るより降らないほうがいい。

比較の意味には NkSuke: も使用されるが、対岸の狩俣地区的な表現だという。

a[sɿ=NkSske:] a[siN=tu] masɿ. するよりしないほうがいい。
 mi:] =N]kSske: [fau=tu] masɿ. 見るより食べるほうがいい。
 ff=NkSske:] ffaN=tu] masɿ. 降るより降らないほうがいい。

～mta: ssaN のかたちで、「～するのがへただ」の意味になる。

a[ra:] a:ku:=pa: [aɿmta:] ssaN. 私は歌を歌うのがへただ。
 jummta:] ssaN. 読むのがへただ。
 ara:] kFfmta: ssaN. 私は作るのがへただ。
 faum[ta:] ssaN. 食べるのがへただ。

つぎの用法では、連体形のハダカの形なのか全体で一語化しているのか判然としない。

jum] taukɿ. 読むのがじょうずだ。(読みじょうずだ?)
 fau] tau[kɿ. 食べるのがじょうずだ。(食べじょうずだ?)
 ara:] kFf taukɿ. 私は作るのがじょうずだ。(作りじょうずだ?)
 kare: aɿ] taukɿ. あの人は歌う/話すのがじょうずだ。(歌いじょうずだ?)

2.5 中止形

中止 1 numi / mi: / k!isi / asi // ffi
 中止 2 numis!iti: / mi:s!iti: / k!isis!iti: / asis!iti: // ffis!iti:
 中止 3 numikara / mi:kara / k!isikara / asikara // ffikara
 中止 4 numis!iti:kara / mi:s!iti:kara / k!isis!iti:kara / asis!iti:kara // ffis!iti:kara

2.5.1 中止形 1 numi / mi: / k!isi / asi // ffi

先行する動作や、動作の仕方などをあらわす。また、補助動詞と組み合わせさせて派生動詞を作る。

ki:=nu] pa:=nu]=[tu] uti [sa]ri:ɿ. 木の葉がおちて枯れている。
 uri:] numi [niv]vi. これを飲んで寝ろ。

kari=ka=tu] naosi fi:. あの人が直してくれた。あの人に直してもらった。
kari=kara [pakai] mi:ru. あいつから奪ってみろ。

目的のために移動するばあい、「～しに行こう」よりも「行って～しよう」や、目的形を使用した「行って～しに」の形がよくみられる。

tu:] iki mik:] numi [ku:. さあ、行って水を飲んで来よう。
ti: iki] kari: mi:ka. さあ、行ってあれを見に（行こう）。

2.5.2 中止形2 numis!iti: / mi:s!iti: / klisis!iti: / asis!iti: // ffis!iti:

先行する動作であることを明示する。中止形3や中止形4との違いはまだわからない。

kFfis!iti:] fa:[ti. 作ってから食べよう。
mi:s!i]ti:=[tu] umuiti. 見てから思い出した。
uri:] numis!iti: [niv]vi. これを飲んでから寝ろ。
u[ri:] kSsis!i]ti:] iki. これを着てからいけ。
gakko:=N] appis!iti:=[tu] ja:=Nkai [k!isi. 学校で遊んでから家に帰った。私は。

2.5.3 中止形3 numikara / mi:kara / klisikara / asikara // ffikara

先行する動作であることを明示する。

vva=ka] numika[ra] ara: nu]mati. あなたが飲んでから私が飲む。
fa:=nu] nivvika[ra] nivvati. 子どもが寝てから寝る。私は。
uri=ka] faikara fai. この人が食べてから食べろ。
kari=ka] umikara[tu] ara: [numi. あの人が飲んでから、私は食べた。

2.5.4 中止形4 numis!iti:kara / mi:s!iti:kara / klisis!iti:kara / asis!iti:kara // ffis!iti:kara

先行する動作であることを明示する。

uri:] fais!iti:ka[ra niv]vi. これを食べてから寝ろ。
numis!iti:ka[ra] ikati. 飲んでから行く。私は。
fa:=u] nivvasi s!iti:ka[ra] nivvati. 子どもを寝かしてから寝る。私は。
uri:] assis!iti:[kara] kuri:=[pa:] assu. これをしてから、これをしろ。

2.6 副動詞

目的 numka / mi:ka / × / aska // ×

同時 numsse:N / mi:sse:N / kSsse:N / asse:N // ×

2.6.1 目的形 numka / mi:ka / × / aska // ×

移動動作の目的をあらわす。

u[pu=ɣwu]=tuɣka ika. 大きい魚をとりに行こう。

ukam[ka] i[ka. 拝みに行こう。

a:ku:] aɣ[ka] i[ka. 歌を歌いに行こう。

atukara] ɣwu=kSska i]kati. あとで魚釣りに行くよ。

munu:] kauka=[tu] iki kSsi. ものを買いに行ってきたよ。買い物をしてきたよ。

目的形で文を終止する。

muti iki] ipi[ka. 持って行って植えに（行こう）。

ti:] gakko:=N[ki ap]pɣ[ka. さあ、学校に行って遊びに（行こう）。

kari:] mi:[ka. あれを見に（行こう）。

2.6.2 同時形 numsse:N / mi:sse:N / kSsse:N / asse:N // ×

主節のあらわす動作と同時にされる動作をあらわす。日本語にみられる逆接の用法はみられない。

terepi:] mi:sse:N=tu [umu]iti. テレビを見ながら思い出した。

uma=Nkai] kSsse:N=[tu] kaNkai. ここに来ながら考えた。

kuri:] as[sje:N] kuri:=[mai] assu. これをしながら、これもしろ。

a:ku:] a[ɣsse:N] kaki. 歌を歌いながら書け。

faussje:N] numi. 食べながら飲め。

kFfsje:N] fai. 作りながら食べろ。

2.7 条件形

仮定 1 numtika: / mi:tika: / kSstika: / astika: // fftika:

仮定 2 numapa / mi:pa / ku:pa / assipa // ffapa

仮定 3 nume:<numija/mi:ja/k!isje:/asje:?:ffe:?

既定 numtarapa: / mi:tarapa: / kSstarapa: / astarapa: // fftarapa:

2.7.1 仮定 1 numtika: / mi:tika: / kSstika: / astika: // fftika:

仮定条件をあらわす。

mmitika: ki:=nu] naɿ=[a] sɿtaiN=tu] utiru. 熟したら木の実は自然におちる。
 ututu:] numtika: [sku=tu] pi:ɿ. 弟は飲むとすぐに酔う。
 ami=nu] fftika: [N]kiti. 雨が降ったら帰る。
 kFfaitika:] mi:siti. 作られたら見せる。できあがったら。
 tatakai]ti[ka:] a[N=mai] tataki=tu. たたかれたら、私もたたいてやるよ。
 vva=ka] asi fi:tika: [tau]kassuka=tu. あなたがやってくれるといいんですけど。
 failjati[ka: sɿ]nita:ɿ. 食べていたら死んでいた。
 uri:] nu[mi] ukSti[ka:] nau=ja asitatam. これを飲んでおけば、どうもしなかったのに。
 vva=ka] numatijati[ka:] ara: [nu]mate:N. あなたが飲むなら私は飲まない。

2.7.2 仮定2 numapa / mi:pa / ku:pa / assipa // ffapa

仮定条件をあらわす。

kari=ka] pɿa[pa] asiti. あの人が座ったら、する。私は。
 ata=Nkai] ku:pa [fi:]ti. あした来たらあげる。あしたやる。
 u[tita] uripa=[tu] taukassuka=tu. 落ちないでいけばいいけど。
 Nma[pi] kFfipa=tu taukataɿ. もっと作ればよかったのに。
 uri=[ka] aripa=tu [tau]kaɿ. これがあればいい。じゅうぶんだ。
 ffuɿ=wu] nume:ripa nauɿ]=tu sɿ. 薬を飲んであれば治るよ。もうすぐ

2.7.3 仮定3 nume: / mi:=ja / k!isje: / asje:? / ffe:?

中止形にとりたて ja がついたもの（融合）とみられる。仮定条件をあらわす。

u[ri:] fai=[ja] dami. これを食べてはダメだ。
 u[ma=N] uri:re:] dami. ここにいてはだめだ。
 kFfe:] masɿ. 作ればいい。作ったほうがいい。
 uri:] numi:[ka:] nau=ja asitatam. これを飲んでおけばなにもしなかった。<numi uki=ja

2.7.4 既定 numtarapa: / mi:tarapa: / kSstarapa: / astarapa: // fftarapa:

すでに起こっている動作を条件にする。

mi:tara[pa:] Nkiru. 見たなら帰れ。見た。
 fftara[pa:] Nkiru. 降ったなら帰れ。降った。
 mme numtarapa:] nnasi:ki. もう飲んだなら片付ける。飲み終わった人に。

2.8 譲歩形

譲歩形 numripamai・nummipamai・numapamai / mi:(ri)pamai /
ku:pamai・kSsipamai / a(s)sipamai // ffapamai

主節のあらわすことからの成立に対して無効な条件をさしだす。

ki:=ju] jurukasapamai au naɾ=[a] utiN. 木を揺らしても青い実はおちない。
uri:] numripamai=[tu] nauratataɾ. これを飲んでも治らなかった。～nao
iki] mi:pa[mai] tuɾna. 行って、見ても採るな。魚などを
matcja=N[kai] ikapa[mai] nau=ju=[mai] ka[u]na. 店に行ってもなにも買うな。
～してもいい、～してもだめだ
kɾnu:] pi:pamai [tau]katam. きのうは酔ってもだいじょうぶだった。
ujukapamai ta[u]puN? 泳いでもいいか?
a[ta:] nu[ka:nuka] ku:pamai. あしたはゆっくり来ても(いい)。
aNsipaka:] ffapamai dami. このぐらい降ってもだめだ。

2.9 接続形

順接 num(ta)ripa / mi:(ta)ripa / kSssipa / assipa // ? 飲むから・飲んだから
逆接 num(tas)suka / mi:(tas)suka / kSs(tas)suka / as(tas)suka // ff(tas)suka 飲むけど・飲んだ
けど

終止形をもとにつくられ、テンスの対立がある。

2.9.1 順接 num(ta)ripa / mi:(ta)ripa / kSssipa / assipa // ?

原因理由的な意味で主節につづく。

kari=ka] numri[pa] ara: [nu]mate:N. あの人が飲むから私は飲まない。
kari=ka] mi: uri[pa] ara: [mi:]te:N. あの人が見ているから私は見ない。
mi:taripa] perati, paɾata. 見たから帰るよ、入らないで。顔を見たから、会ったから。
a[ri:]ripa=[tu] kai kɾ:. あるから買ってくる。
u[pu:sa] ari:ri=[tu] naupasi as kata:] ne:N. たくさんあるから、どうすればいいか分からない。(pa ナシの語形)

順接の非過去のうち意志的な用法では意志形がもとなる (<シヨウトスルカラ)。

saNzi=nna] turati: ku:tissi[ba uN=ta:sje: assi:]ki. 3時には取りに来るから、それまでに

している。終わらせろ。

saNzi=N] turati: ku:tissi[ba saNzi]=ta:[sje: assi uski:ki. 3時に取りに来るから、3時まで
でしておいている。終わらせろ。

aN=[mai] uritis[sje:] vva=[mai] uriru. 私も降りるから、あなたも降りろ。バスを。

2.9.2 逆接 num(tas)suka / mi:(tas)suka / kSs(tas)suka / as(tas)suka //
ff(tas)suka

ふたつのできごとの関係を逆接的にとらえたり、前提をあらわしたりする。

ki:=ja] ffsuka=[tu] a[ta:] ffaN. きょうは降るけど、あしたは降らない。

ki[sa:] uma=N=tu atassuka=tu [Nnama:] ne:N. さっきはここにあったけど、いまはな
い。

u[nakai ku:]tatassuka=[tu ki:]=ja [klisi]:ɣ. 長いこと来なかったけど、きょうは来ている。

a[pire:ssuka=[tu] ku:N. 呼んだけど、来ない。

ara:] numatissuka vva: naupasi asiti? 私は飲むけど、あなたはどうする？

3 動詞派生形式

3.1 継続動詞

動詞中止形と補助動詞 u₁ との組み合わせによる。

・動作の持続

kare:] mus=sui=[tu ap]pi:ɣ. あいつは虫と遊んでいる。

nikai=kara=[tu] ti:=[ju tata]ki:taɣ. 二階から手をたたいていた。

・変化の結果の持続

m:[na] ukana:ri=tu u₁. みんな集まっている。

kɣnu=kara=tu] javvi:ɣ. きノウから壊れている。

sɣ[ti:]ri. 消えている！ 火に言う。

・くりかえし

kanu] fta:ɣ=[a] ikɣ[mai] i[te:]i=tu u₁. あの二人はいつも会っている。

ami=nu=te:N=tu ffi:ɣ. 雨ばかり降っている。

ike:]m:[na] piNta=u=pa: pakɣ=u=[tu] sɣmari:taɣ. むかしはヤギを、足をしばっていた。

・状態

u[re:] makɣmunu=Nsi=[tu] mi:rai u₁. これはお化けに見える。見えている。

a[N=mai] aNsi=tu umui u₁. 私もそう思っている。

jupe:] pussa [tiri]=tu utaɣ. 夕べは星は光っていた。照っていた。

・関係

ɣa]=N=[tu] niti:ɣ. お父さんに似ている。

taru=NkSke:] masari=tu u₁/sukuri=tu u₁. だれよりもまさっている。

・連体形

aN[si=nu] mu[nu:] kaNkai u₁ pStu: [mi:N. そんなことを考えている人はいない。
ffari:ɿ] munu:=kami=tu [fai. 腐っているものをまで食べた。

・否定について

継続動詞の否定形 (numi uraN) も使用されるが、それ以上に numaN (意思動詞完成相の否定形)、numi ukaN (シテオク numi uk₁ の否定形) などの使用が多い。

N[mita] fai=ja] u[raN. まだ食べてはいない。私は。食べたかと聞かれて。

u[maN] numi:raN ne:. (なぜ) ここで飲んでいないか! < numi uraN

N[mita] fa:N. まだ食べていない。(意思動詞完成相の否定形)

N[mita] a[ɿke:] ukaN. まだ歩いてはいない。(シテオク numi uk₁ の否定形)

unakai] ite:i=[ja] mi:N. 長く会っていない。

3.2 結果動詞

動詞中止形と補助動詞 a₁ との組み合わせによる。動作や変化の結果の状態にあることや、その痕跡が存在していることをあらわす。

・意思動詞

mme] nara:sita:ɿ. もう教えてある。< nara:si=tu a₁

Nnama] uma=Nkai=[tu] muti k!isje:ɿ. いまここに持ってきてある。< klisi a₁

a[ra:] ja[ri]jariti:=[tu] na[ra]pe:ɿ. 私はだめにならべてある。

a: [zjo:to:N=tu u]re:ɿ. ああ、きれいに織ってあるねえ。見ながら。

i:]pa:=[tu] nume:ɿ. 飲んでおいてよかった。

k₁nutu] taukara:ka a₁]ke:ta₁. きのおだれかが歩いてあった。痕跡。< a₁ki ata₁

・無意思動詞

k₁nu=tu] kairi pu[ni:] pure: a₁. きのお転んで骨を折ってあるよ。

taukara:=ka=tu pi:] mu[nu:] pa[ke:]ɿ. だれかが酔ってものを吐いてある。

jupi=tu ami=nu] ffe:ɿ. ゆうべ雨が降ったようだ。

3.3 受動動詞

～レル型の動詞である。動作の対象が主語になり、動作の主体が与格であらわれる。日本語では主体がカラ格であらわれることもあるが、この方言ではそれはみられない。

a[Nsi:] uti[ka:] ɿ[aissa] ja. そんなことをしているとしかられるよ。

ka[ri=N=tu] tatakai. あいつになぐられた。

siNsi:=N]=tu [ho]mirai. 先生にほめられた。

tuɣ=wu=pa:] piNkiraiN] jo:N [pakɣ: sɣ]mari. ニワトリを、逃げられないように足をしばれ。

やりもらいの「～してもらう」の意味で受動動詞が使用されることがある。

ni:=nu] ivkari:ri=tu mu[ti] fi:raitɑɣ. 荷物が重いから持ってくれられた。＝持ってもらった。

aN=mai] isja=nu mai=Nk!i[tu] mi:rai kl!i]si. 私も医者の前に行って診られてきた。＝医者に行って診てもらってきた。（「医者」は場所名詞化する必要がある。）

ka[ri=N=tu] ukusai. あの人に起こされた。＝起こしてもらった。

3.4 使役動詞

～ス型（ノマス）と～シム型（ノマシム）の使役形がある。動作主体に対してその動作をするよう指示する人が主語になる。

・～ス型

kaɣkari:ri]=[tu] fta:kS [muta]si. 軽いから二つ持たせた。

vva=N] kFfasati. あなたに作らせよう。

kaVvasata u]ri. かぶらせないでいろ。帽子を

・～シム型

kari=N] asɣsɣmiru. あの人にやらせろ。

uri:] mutasɣmiti. これを持たせよう。おみやげに。

taro:=[ka] kSsisɣmi[ti] tim. 太郎が着させるそうだ。

やりもらいの「～してもらう」の意味で使役動詞が使用されることがある。

kari=N=tu] numasi. あの人に飲ませた。＝飲んでもらった。

3.5 使役受動動詞

使役動詞をもとにした受動動詞である。動作主体が、他者の指示を受けて別の第三者に動作を指示する。

aka numasai]sɣmiraitɑɣ. 私が飲まさせられた。＝私がだれかに飲ませた。（～サ・レ・シメ・ラレタ）

やりもらいの「～してもらう」の意味でこの動詞が使用されることがある。

taro:=N] kSsis₁mirai[ru. 太郎に着させられろ。=着せてもらえ。

k₁nu:] uri=N=tu munu: [fi:]s₁mirarita₁. きのうあの人にものをくれさせられた。=食べさせてもらった。

3.6 可能動詞

受動動詞とおなじ作り方である。

v[vanna] ure: ju[maitu] s₁? > [N: ju]maitu s₁. /ju]maiN. あなたにはこれは読める? > うん、読める。/読めない。

ja[rapi=nna ka]kaiN. 子どもには書けない。

pSsikap₁ niv]va[iN. 寒いから寝られない。

u[re: s₁v]karipa [fa:]iN anu=nna. これは酸っぱいから食べられない、私には。

upui]raiNnipa=[tu] dami. 覚えられないからダメだ。

u[re:] imikari[pa kSsi]raiN. これは小さいから着られない。

jupe:] pussa [mi:]rai=tu uta₁. タベは星は見えていた。

ki:=nu] akSsa: [mpe:]itatam. 今日の暑さは耐えられなかった。

3.7 やりもらい (授受)

やりもらいはサービス関係を表現する。この方言のやりもらいでは動作主体を主語にする能動的な構文しかみられない。～クレルに対応する動詞の使用が基本的だが、～ヤルに対応する動詞が～ヤルのほかに～クレルの意味でも使用される。

受動的な～モラウの意味には受動動詞や使役動詞を使用する(既述)か、能動的な同義の動詞を使用する。

ka[ri=kara=tu] narai. あの人から習った。=あの人に教えてもらった。

3.7.1 してくれる numi fi:₁

動詞中止形と補助動詞 fi:₁ との組み合わせによる。

主語であらわされるサービスの送り手が話し手や第三者のためにすることを、受け手のがわからあらず。願望に使用されることもある。

ikSmai] ₁wu:=[pa: ₁a]=ka=tu [kai] fi:₁. いつも魚はお父さんが買ってくれる。

u[ma=N] p₁[ri] fi:₁ru. ここに座ってくれ。

N[me] pi:ma u[ri] fi:[te:. もう少しいてくれたらなあ。願望形

pe:pe:] sa[kil] fi:₁ru. 早く咲いてくれ! 願望

3.7.2 してやる・してくれる numi ja₁

動詞中止形と補助動詞 ja₁ との組み合わせによる。

主語であらわされるサービスの受け手のためにすることを、送り手のがわからあらず、という日本語的な～ヤルの用法のほかに、主語であらわされるサービスの送り手が話し手や第三者のためにすることを、受け手のがわからあらず、という～クレル的な用法もある。また、願望に使用されることもある。

fai] jarati. 食べてやろう。目上には不自然。

a[nu=N=mai] uri: [kai] jari. 私にもこれを買ってくれ。

vva=ka] a₁re:ri. あなたが言ってくれ。< a₁ri jari (言ってくれ)

u[ma=N] ka[ke:]rata. ここに書いてくれ。< kaki jarata (書いてやらないか)

ff[e:]ri. 降ってくれ！雨に言う。< ffi jari (降ってくれ) 願望

3.7.3 してやる numi turas₁

動詞中止形と補助動詞 turas₁ との組み合わせによる。

使役的な補助動詞とともに～ヤルの意味で使用される。

vva=ka tatakStika:] aN=mai [tataki tura]satissa:. お前がたたいたら、おれもたたいてやるぞ。

3.8 してみる (試行) numi mi:₁

動詞中止形と補助動詞 mi:₁ との組み合わせによる。

試みにする動作や実際におこなわれる動作をあらわす。

m:nasi=tu] huni: kuki [mi:. みんなで船をこいでみよう。

u[nu]]wu:=[pa:] ni:[ta jaki] mi:ti. この魚を煮ないで焼いてみよう。

u[nu] ffu₁=[a] ak₁makari[pa] numi] mi:ru. この薬は甘いから飲んでみる。

fa[i] mi:[te:. 食べてみたいなあ。

kSski] mi:ta[ka:] ssaiN. 聞いてみないとわからない。

3.9 しておく (準備・痕跡) numi uk₁

動詞中止形と補助動詞 uk₁ との組み合わせによる。(本動詞の「置く」は usk₁)

対象を変化させてその状態を持続させたり、準備的に、あるいは事前に動作をおこなうことをあらわす。

mme] ffi:ki. もう閉めておけ。

kai] uski:kS ku]mata. 買っておいしておく。

uri:] mi: u[ka:] sɯne:] ukaN. これを見ておけば死ななかつたのに。
i:pa:=tu] numa[ta] ukS. 幸いに飲んでいない。運良く飲まなかつた。

動作や存在の痕跡をあらわすこともある。

appi] ukɿ. 遊んである。散らかつたおもちゃを見て。
taukara:=ka=tu numi] ukɿ. だれかが飲んである。コップを見て。
taukara:=ka=tu uri:]kS. だれかがいたようだ。座布団を見て。
naukara:=nu=tu] ari:kɿ. なにかがあつたようだ。

この動詞の否定形は、継続相の否定（まだ～していない）の意味に使用される。

nu[me:] ukaN. 飲んではいない。
N[mita] a[ɰke:] ukaN. まだ歩いてはいない。
kare:] karaku:=pa: sure: ukaN. あいつは髪を切つてはいない。
sa[tare:] m[mita] fai=[ja u]katatam. さっきはまだ食べてはいなかつた。

3.10 してくる numi kSs / numi kɿ

動詞中止形と補助動詞 kSs/kɿ との組み合わせによる。
ある動作をしてから近づくことや、しながら近づくことをあらわす。

ikSmai] ɰwu:=[pa: ɰa]=ka=tu [kai] kSs. いつも魚はお父さんが買ってくる。
mus=nu=tu] pSski=kara [iti k!isi. 虫が穴から出てきた。
passi=[tu] ka[i=ja ku:]tataɰ. 忘れて買ってこなかつた。
masakaN] aɰri ku:. ちゃんと言ってこい。はっきりと。
a[ɰke:] kSsna. 歩いては来るな。

変化の過程がすすむことや、発生や消滅の過程がすすむことをあらわす。

akSf=tu] nari kɿ:. 暑くなってくる。
u[pu]ami=N=tu [na]ri kɿ:. 大雨になってくる。
mme pari] ku:[kam. もう晴れてきそうだ。
akaɰ] ku:kam. 上がつてきそうだ。雨が。
mme ffi]=tu kS:. もう降つてきた。もう降りはじめた。

3.11 していく

本動詞として「行く（帰る）」の意味に使用されるのは、ikɿ、peɿ、Nkiɿ だが、ここで補助動詞として使用されるのは ikɿ と peɿ である。

3. 1 1. 1 numi ik₁

動詞中止形と補助動詞 ik₁ との組み合わせによる。

ある動作をしてから遠ざかることや、しながら遠ざかることをあらわす。アスペクトにかかわる、動作や変化のありかたの用法(4例目)もある。

ka[ri:=mai] sui ikati. あの人も誘って行こう。

cuke: taru:=tu sa:ri ika]ti? つぎはだれを連れて行くか?

muti iki] ipi]ka. 持って行って植えに(行こう)。目的形終止

pStu=nu=tu pi:mana: [pinari] iki:ɣ. 人が少しずつ減っていている。

3. 1 1. 2 numi pe₁

動詞中止形と補助動詞 pe₁ との組み合わせによる。

ある動作をしてから遠ざかることや、しながら遠ざかることをあらわす。アスペクトにかかわる、動作や変化のありかたの用法(4例目)もある。

u[kamata=tu [peri. 拝まないで行った。

ɣwu:] fais!iti:=[tu suku pi]Nki [peri. 魚を食べてすぐ逃げていった。

u[ma=kara] iti peri. ここから出ていけ。

sɣtaiN=tu tauf] nari pe₁. だんだん良くなっていく。

3. 1 2 してしまう numi ne:N

動詞中止形と補助動詞 ne:N との組み合わせによる。

意図の有無にかかわらず、その動作や変化が終了し、そのあとの状態であることをあらわす(終了後)。非過去形で現在の状態をあらわすが、日本語の訳では過去形になる。

maju=nu=tu m:na fai] ne:N. ネコがみんな食べてしまった。

taru=Nkai=mai] ssasata=[tu s[ti] ne:N. だれにも知らせないで捨ててしまった。

macikai=tu kiri] ne:N. 間違っ、蹴ってしまった。

Nme] ne:N ftu na[ri] ne:N. もうなくなった。ものが。

sjkeN na:]sis!iti:=[tu u[ti] ne:N. 試験をやって落ちてしまった。

pi:] ne:tatam. 酔っぱらっちゃっていた。(過去の状態)

動作の開始をあらわす。(開始後)

mme ffi] ne:N. もう降っちゃった。雨模様だったが、降りはじめた。

3.13 しようとしている numati u₁ / numati:=tu u₁

意思動詞の意志形と補助動詞 u₁ の組み合わせで、動作を開始しようとする（開始限界達成）過程にあることをあらわす。述語に使用された動詞の意志形では一人称を基本とするが、この形式では人称をえらばない。意志形に強調辞がつくと意志形末母音が長音化する。

・ ~ti u₁

mi:ti] ussa. 見ようとしているよ。

a₁ati] u₁. 言おうとしている。

fa:=u=tu] nasas₁miti u₁. 子どもを産ませようとしている。お産の手伝いなど。

・ ~ti:=tu u₁

Nme] tata]ti:=tu u₁. もう立とうとしている。

a:ku:=tu] a₁ati u₁. 歌を歌おうとしている。

nasas₁miti:=tu] uta₁. 産ませようとしていた。お産の手伝いなど。

aN=mai numati:=tu] uta₁. 私も飲もうとしていた。

無意思動詞の意志形と補助動詞 u₁ の組み合わせで、動作や変化がおこりそうであること（開始限界達成）をあらわす。

ami=nu=tu] ffati u₁. 雨が降ろうとしている。

ke:]riti:=tu u₁. 消えようとしている。

s₁na]ti:=tu u₁. 死にそうにしている。

補助動詞が ure:のかたちをとって、反語をあらわす。

ka:ma=N numati: u]re:. そんな遠いところで飲もうとしているか！ =ここで飲め。

vva nau=ju=tu numati: u]re:. おまえはなにを飲もうとしているか！ =飲むな。

nau=ju=tu asiti: u]re:. なにをしようとしているか！ 子どもに注意する。

3.14 したことがない numi mi:N

動詞中止形と補助動詞 mi:N との組み合わせによる。中止形は ja とりたて形になるのが基本的である。

それまで未経験であることや、一定期間それがおこっていないことをあらわす。

unu saki:=pa: mmita nu[me]: mi:N. この酒はまだ飲んだことがない。

ju[ke: ffe:] mi:N. 雪は降ったことがない。

unakai] ite:i=[ja] mi:N. 長く会っていない。

kunu₁[a] kS[sje:] mi:N. 最近は来たことがない。

unu] tu₁=[a mi:=ja:] mi:N [tu₁. この鳥は見たことがない鳥だ。

その時にはじめて経験したことをあらわすときは過去形が使用される。

k₁nu]=ta:[se: mi:ja mi:]tatam. きのうまで見たことがなかった。もう見た。
nama]=ta:[se: faija mi:]tatam. いままで食べたことがなかった。もう食べた。

3.15 派生形容詞

3.15.1 したい numpuskam

動作や変化を希望していることをあらわす。一人称が基本であるが、推量の用法やシタガルに相当する派生形式では三人称にも使用される。

・一人称

kari=sui] mi:tu=N [na₁]puskam. あの人と夫婦になりたい。
ara:] u[taf] na₁puffa] ne:N. 私は太りたくない。
k₁[nu:] ikS[puffa] ne:tatam. きのうは行きたくなかった。

・三人称

kari=mai fau]pus[kam] pe:m. あの人も食べたいかなあ。
num]pus[sa as=tu] s₁. 飲みたがる。あの人は。
kari=mai fau]pus[sa as=tu] s₁. あの人も食べたいよ。これを食べたがる。

3.15.2 しやすい numjaaskam

動作をするのが容易であることや、ものの性質・特徴をあらわす。

ure:] kFf]jaaskam. これは作りやすい。
u[re: ka₁]kari[pa] mukS]jaaskam. これは軽いから持ちやすい。
fau]jaaskatam. 食べやすかった。
u[nu] sake: [pi:]ja:skam. この酒は酔いやすい。

3.15.3 しにくい numkurikam

動作をするのが困難であることをあらわす。

u[re:] nu[m]kurikam. これは飲みにくい。
u[re: as]kurikam. これはしにくい。やりにくい。
ki:=ja] imma [mi:]kurikam. きょうは海は見えにくい。
fau]kurikatam. 食べにくかった。

3.16 確かさ

この方言には日本語の断定・スルー推量・スルダロウのような、できごとに対する話し手の認識の確かさにかかわるムード語形の対立はみられない。かわりに、いくつかの補助的な単語によって確かさの程度をあらわしわけける。

3.16.1 kumata

kumata は連体形につづき、すでに予定されているなど、確かさの程度が極めて高いことをあらわす。話し手の未来の動作であっても、意志的なものでなければこのかたちが使用される。

- ・ 予定性

vva=[mai] aN=[mai ikS] kuma[ta. あなたも私も行くことになっている。

karita:] jaka[ti mi:tu=N] na₁ kumata. かれらはやがて夫婦になる。

ki:=[ja] nau=ju=tu fau kumate:]re:?. きょうはなにを食べるの？

v[va=mai] aN=mai [ikS kumata ara]N. あなたも私も行くことになっていない。

ki:=[ja ikS] kumata araN. きょうは行くことになっていない。行く予定がない。

- ・ 意志

takS kumata] pe:m. [tatate:N] pe:m. 立とうかな。立つまいかな。

- ・ 連体用法

ki:] fau kumata=nu munu: muti ku:. きょう食べることになっているものを持ってこい。

ata=Nkai] kSs kumata=nu pStu=[N] uri:=pa: [fi:]ti. あした来る予定の人にこれをやる。いまやる。

- ・ 名詞用法

mme] as kumata: [ne:N. もうすることがない。もうする「予定」がない。

Nnama=kara mi:] kumata=u=[pa: pStu=Nkai=[ja] a₁na. いまから見ることを人には言うな。

3.16.2 pak₁

pak₁ は連体形につづき、kumata ほどではないが、確かさの程度がかなり高いことをあらわす。ハズに対応する。

kari=ma]i kanara[k₁] ikS=tu s₁ pak₁. あいつもかならず行くと思う。

u[ka]m kata [pak₁. 拌みが始まるだろう。

ff=tu s] pak₁ [ja:. 降るんじゃないかな。

urita:] pak₁. いたはずだ。

aNsi=nu] munu: m[me ne:N] pak₁. こういうものはもうないと思う。

3. 1 6 . 3 pe:m

pe:m は日本語古代語のベシに由来し、のべたてる文に推量的な気持ちをそえる。また、意志・勧誘の文には～しようかな、という軽い気持ちをそえる。

・ 推量

ka[ri:] m:na [fa:i=tu s] pe:m. あれをみんな食べられるかなあ。

u[ma=Nkai] kS: kuma[ta] pe:m. ここに来るのかな。遠くの人を見て。

ure: muiN] pe:m. これは燃えないんじゃないかな。

・ 様態

a[me:] f: kuma[ta] pe:m. 雨が降りそうだ。

taukara:=ka=tu] ure:ŋ] pe:m. だれかがいたようだ。

]nivve:ŋ] pe:m. 寝てあるのかなあ。そうみたいだなあ。

・ 意志 意志形

akSkaripa] mikŋ: amiti pe:m. 暑いから水を浴びようかな。

fa:ti] pe:m [fa:te:N] pe:m. 食べようかな、食べまいかな。

takS kumata] pe:m. [tatate:N] pe:m. 立とうかな。立つまいかな。

・ 勧誘 意志形

nu[mati] pe:m. 飲もうかねえ。

ma:takina] numa[ti] pe:m. いっしょに飲もうかねえ。

3. 1 6 . 4 ira:

ira:は自問やたずね、同意もとめや意志、勧誘に使用され、軽い気持ちをそえる。疑問詞をふくむ文では～ka ira:のかたちをとり、疑問詞がないばあいは ira:だけがつけられる。

・ 自問

kare:] naupasi=nu saki:=[tu] nu]m=ka [i]ra:. あいつはどんな酒を飲むかなあ。

ame: iks] ffati=ka [i]ra:. 雨はいつ降るかなあ。

ta:=ka=tu pŋri:taŋ]=ka [i]ra:. だれが座っていたのかな。座布団が暖かいのをみて。

・ たずね

naupasi kFfriipa=tu tau=ka i]ra:? どう作ればいいですか？

u[N] mi:ta:ŋ] muna: N[ti=ka i]ra:? あのとき見たものはどれだった？

・ 同意求め

kaki] pana [ira]:. きれいな花だねえ。

Nmakatam [i]ra:. おいしかったねえ。

・ 意志・勧誘 意志形

aN=mai] akusiti [i]ra. 私も仲間に入ろうかな。友達に入る。意志

fa:ti [i]ra:. 食べようね。勧誘

3.16.5 ja:

ja:はのべたてる文に推量的な気持ちをそえる。また、意志・勧誘の文には～しようかな、という軽い気持ちをそえる。

・ 推量

a[ta=naki=kara[: Nme] pSs!if] naɪ=tu s [ja:. あしたあたりからもう寒くなるだろう。
u[nu] fa:=[ja] Nme jakati niv=tu s [ja:. この子どもはもうやがて眠るんじゃないかなあ。

・ 意志 勧誘形

ika [ja:. 行こうかな。独話。

numa [ja:. 飲もうかな。独話。

・ 意志 意志形

fa:ti [ja:. 食べようかな。独話。

・ 勧誘 勧誘形

ata=mai] ika [ja:. あしたも行こうね。

ki:=nu] juɪ=[ja sake:] numi appa [ja:. 今夜は酒を飲んで遊ぼう。

・ 勧誘 意志形

ikati [ja:. 行こうね。

3.16.6 i

iは意志の意味に迷いの気持ちをそえたり、勧誘の意味に同意求めの気持ちをそえる

・ 意志 意志形

numati [i. 飲もうかなあ。どうしようかなあ。

naupasi] ikepasi] asiti [i. どうしようかな。

・ 勧誘 意志形

fa:ti [i. 食べようね。

asiti [i. しよう。やろう。

・ 勧誘 勧誘形

ma:takina] pi: [i. いっしょに酔おうね～。

u[ri:] ju:ɪ=[u] asi [i. これを夕飯にしようね。

tu:] asi [i. さあ、しようね。やろうね。

3.17 様態からの推定

3.17.1 kata

動作や変化の開始の兆候や終了の兆候といった様態を根拠にした推定は、連体非過去形+kataであらわされることが多い。(終了限界の用法は、シテアルの痕跡やシテオクの痕跡にもある。) コピュラによるテンスの対立がある。

- ・開始限界 動作や変化の開始に向かっている段階であることをあらわす。

mme] jaka[ti ukam] kata. もうやがて揉みがはじまりそうだ。

mme sɨn] kata. もう死にそうだ。

mme] akaɨ] kata. (雨が)もうあがりそうだ。

uki kata=[tu] jata:ɨ. 起きそうだった。

- ・終了限界 動作や変化の終了に向かっている段階であることをあらわす。

mme] nu[mas] kata. もう飲ませ終わろうとしている。

mme] jaka[ti aɨ] kata. もう話し終わりそうだ。

mme] ukam] kata. もう揉みが終わりそうだ。

kSsi] kata. 着終わりそうだ。

3.17.2 ku:kam

動作や変化の開始の兆候を根拠に推測する。形容詞型でテンスの対立がある。(動詞「来る」に関係するか)

- ・開始限界

kare: num] ku:kam. あの人は飲みそうだ。

mme pari] ku:[kam. もう晴れてきそうだ。

mme] p!isif naɨ] ku:kam. もう寒くなりそうだ。

mmaf] naɨ] ku:kam. おいしくなりそうだ。料理をしながら。

kare: num] ku:katam. あの人は飲みそうだった。

3.17.3 saika

その場の状況から、そうだろうと推測する。テンスの対立はないようである。

fai=tu] pere:ɨ] sai[ka. 食べて帰ってあるようだ。

num] kata sai[ka. もうすぐ飲むだろう。あの人は。

Nme jakati] fa:i] kata sai[ka. もうすぐ食べられるだろう。料理を作っているのをみて。

3.18 伝聞

伝聞にはつぎの形式が使用される。-tta と tim の使用が多い。形式間の違いの有無については未確認。

3.18.1 -tta

taro:=ka=tu] jara[pi=N fku: kSsi]sɨmi kumatat[ta. 太郎が子どもに服を着せるそうだ。

ari]=tu ut[ta. あるそうだ。

fa:]te:Nt[ta. 食べないそうだ。食べないって。

3.18.2 tim

kare:] N[ki] kumata [tim. あの人は帰るそうだ。

fai] tim. 食べたそうだ。

fa:]te:N [tim. 食べないそうだ。食べないって。

ari]:j tim. あるそうだ。

3.18.3 sauna

N[ki] kuma[ta sa]una. 帰るそうだ。

kari=mai] kSs kumata sauna. あいつも来るそうだ。

nustu=nu=tu Nta=kara:=N] u₁ sauna. 泥棒がどこかにいるようだ。

a[ri]=tu u₁] sauna. あるそうだ。

4 形容詞活用の概要

ここでは am/a₁ 型形容詞の活用の概要についてのべる。肯定形の活用を中心とし、否定形については適宜ふれるにとどめる。この方言には形容詞語幹の重複形が多くみられるが、これの詳細については稿をあらためたい。

4.1 活用表

mmakam (おいしい) を例に

終止非過去 mmakam / mmaka₁ / mmaka: (/ mma:-mma 重複形) おいしい

過去 mmakatam / mmakata₁ / mmakata: おいしかった

連体非過去 mma (/ mma:-mma=nu 重複形) おいしい

過去 mmakata₁ おいしかった

中止 mmaf おいしく

条件仮定 1 mmakatika: おいしければ／おいしかったら

仮定 2 mmakatarapa: おいしければ／おいしかったら

譲歩 mmakarapamai おいしくても

接続順接 1 mmakaripa/mmakataripa おいしいから／おいしかったから

順接 2 mmakare: おいしいから

順接 3 mmakari:ri(pa) おいしいから

順接 4 mmasa jaripa / mmasa asi:ripa おいしいから

逆接 mmakassuka / mmakatassuka おいしいけど／おいしかったけど

4.2 終止形

非過去形 mmakam / mmakaŋ / mmaka: (/ mma:-mma 重複形)

u[ri=ka=tu] marukaŋ. これが短い。

uri=[mai] mmaka:. これもおいしいよー。

kama]ras[ka]m. 悲しい。

ak[ki] jo[: pSsi]kam. う、寒い！ 外に出て。

kanamaŋ=nu=tu] jamkaŋ. 頭が痛い。

(ak[ki] ta[ka:]·taka. あら、高い！ 重複形)

過去形 mmakatam / mmakataŋ / mmakata:

uri=ka=tu sukara]kataŋ. これが塩辛かった。

u[nu si]mukS[sa] u[mussi]katam. この本はおもしろかった。

uturuski]katam. 怖かった。恐ろしかった。

ure: asi=tu] pu[ka]rikata:. これをやって疲れたよ。

4.3 連体形

非過去形 mma (/ mma:-mma=nu 重複形)

sataŋ] fau[taŋ] m[ma] ka:s[su] muti ku:. さっき食べたおいしいお菓子を持ってこい。

im=N[kai] maikaŋ tukuma=nu=[tu tau]kaŋ. 海に近いところがいい。

kakŋ]puskaŋ kŋ:=wu=ka[ra] kaki. 書きたい字をから書け。

kare:] taukaŋ pStu. あれはいい人だ。

(ure:] pukuru:-pukuru=[nu] mikŋ. これは冷たい水だよ。重複形)

過去形 mmakataŋ

sakŋ]N] fau[taŋ] mmaka[taŋ] ka:s[su] muti ku:. さっき食べたおいしかったお菓子を持ってこい。

Nma]pi] kFfipa=tu tauka[taŋ] munu:. もっと作ればよかったのに。

4.4 中止形 mmaf

文を中止する機能というよりは、形容詞の否定形やナルなどの補助動詞との組み合わせに使用されるのがふつうのようである。

a[kaffa] ne:N. 赤くない。

a[kaffa] ne:tatam. 赤くなかった。

u[re:] ma:[nu:] ivf[fa] ne:N. これそんなに重くないよ。

N[me] sku akSf naŋ=tu sŋ. もうすぐ暑くなる。

4.5 条件形

仮定1 mmakatika:

kaɣkatika:] ka[ki. かゆかったらかけ。

ivkatika:] mu[ti] fi:ti. 重いなら持ってやろう。

skatakatika: kSka]:te:N. きたなかったら使わない。

仮定2 mmakatarapa:

mmakatarapa:] numi:ka:. おいしかったら飲んでおけばよかった。

aNsi:] jaskatara[pa:] ka[i] kSsi]:ka:. そんなに安かったのなら買ってきておけばよかった。

4.6 譲歩形 mmakarapamai

u[re:] sskatakarapamai. これは汚くてもいい。

Nma]pe akakarapamai. もっと赤くてもいい。

ivkarapa[mai] mu[ti] ikati. 重くても持っていく。

4.7 接続形

順接

順接1 mmakaripa/mmakataripa

ki:=ja] pSsikaripa [ika]te:N. きょうは寒いから行かない。

kSskatakaripa=[tu] kSka:tataɣ. 汚いから使わなかった。

unu ni:=nu=tu ivka]tari[pa] futa:ɣ=si mukS[taɣ. 荷物が重かったので、二人でもった。

順接2 mmakare:

Nmakare:] fa[i] mi:ru. おいしいから食べてごらん。

ure:] Nmakare: [me]ramati. これはおいしいからめしあがれ。敬語

ure:] umussikare[:] jumi. これはおもしろいから読め。

順接3 mmakari:ri(pa)<~ku ari uri(pa)

pSsikaripa] niv]va[i]N. 寒いから寝られない。

kaukaripa=tu N]pe:[i]N. かゆくて我慢できない。

kaɣkari:ri=[tu] fta:kS [muta]si. 軽いから二つ持たせた。

順接4 mmasa jaripa / mmasa asi:ripa

ki:=ja] pSsisajaripa] ikaiN. きょうは寒いから行けない。

u[re: upu:sa]jaripa [ju:ɣ=ta:]si [fai. これはたくさんだから、夕飯まで食べる。

pSsisa asi:ri[pa] ikaiN. 寒さが続いているから行けない。

逆接 mmakassuka / mmakatassuka

Nkemaskas]su[ka nau=nu=tu] uŋka [i]ra:ʔ うるさいけど、なにがいのかなあ？

mmakatassuka=[tu] mura:tataŋ. おいしかったけど、もらわなかった。

a[ta=mai ffi]pa=[tu] taukassuka. あしたも降ればいいけど。

5 コピュラ型形容詞

コピュラ型形容詞については表をあげるにとどめる。

終止 非過去 gaba: 大きい / kitati 別だ・違う / dami ダメだ / zjo:to: いい

過去 gaba: jatam 大きかった / dami=tu jataŋ ダメだった / zjo:to: jata:ŋ よかった

連体 非過去 gaba: ŋwu 大きい魚 / kitati kata 別の・違う匂い / damina pStu ダメな・いやな人

過去 (未確認)

中止 damiN (nari)ダメに(なった) / zjo:to:N (uski)きれいに(しておけ)

表記について

pS と kS は破裂のあとに摩擦の強い s をともなう p と k の音をあらわす。kF は破裂のあとに摩擦の強い f をともなう k の音をあらわす。!はつぎの母音が無声化することをあらわす。聞こえの上で、pS と p!i の区別は容易ではない。

文献

- ・金田章宏 2018a 「沖縄県宮古語大神方言」琉球大学国際沖縄研究所 2018『平成 29 年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』文化庁委託事業報告書 pp.153-180
- ・金田章宏 2018b 「宮古語大神方言 文法化にかかわって」沖縄言語研究センター定例研究会 (発表 2018.12.1 : 沖縄)
- ・金田章宏 2019 「宮古語大神方言 動詞と形容詞の活用の概要」文化庁委託事業成果報告会 (発表 2019.2.2 : 東京)
- ・高橋太郎ほか 2005 『日本語の文法』ひつじ書房

本稿で使用した方言資料には、下記の研究プロジェクトによる調査研究の成果もふくまれる。

国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」(プロジェクトリーダー: 木部暢子)

宮古語大神方言 動詞の活用タイプ

動詞	連体	終止非過去	否定命令2	否定命令1	否定終止非過去1	否定中止	否定形命令	命令	中止(=過去1)
	Φ	Φ	tu:	na	aN	ata	ata	i	i
飲む	num	num	num-tu:	num-na	num-aN	num-ata	num-ata	num-i	num-i
読む・しゃべる	jum	jum	jum-tu:	jum-na	jum-aN	jum-ata	jum-ata	jum-i	jum-i
拝む	ukam	ukam	ukam-tu:	ukam-na	ukam-aN	ukam-ata	ukam-ata	ukam-i	ukam-i
閉める	ff	ff	ff-tu:	ff-na	ff-aN	ff-ata	ff-ata	ff-i	ff-i
降る	ff	ff	ff-tu:	ff-na	ff-aN	ff-ata	ff-ata	ff-i	ff-i
嗜む	ff	ff	ff-tu:	ff-na	ff-aN	ff-ata	ff-ata	ff-i	ff-i
作る	kFf	kFf	kFf-tu:	kFf-na	kFf-aN	kFf-ata	kFf-ata	kFf-i	kFf-i
売る	Vv	Vv	Vv-tu:	Vv-na	Vv-aN	Vv-ata	Vv-ata	Vv-i	Vv-i
かぶる	kaVv	kaVv	kaVv-tu:	kaVv-na	kaVv-aN	kaVv-ata	kaVv-ata	kaVv-i	kaVv-i
ヘラで耕す	saVv	saVv	saVv-tu:	saVv-na	saVv-aN	saVv-ata	saVv-ata	saVv-i	saVv-i
	Φ	Φ	tu:	na	(v)aNわたり音v	(v)ata	(v)ata	(v)i	(v)i
眠る	niV	niV	niV-tu:	niV-na	niV-(v)aN	niV-(v)ata	niV-(v)ata	niV-(v)i	niV-(v)i
	Φ	ɾ	tu:	na	aN	ata	ata	i	i
切る2(鉋や手で)	ffas	ffas-ɾ	ffas-tu:	ffas-na	ffas-aN	ffas-ata	ffas-ata	ffas-i	ffas-i
切る1 kss(鉋や手で)	kSsas	kSsas-ɾ	kSsas-tu:	kSsas-na	kSsas-aN/kSs-aN	kSsas-ata	kSsas-ata	kSsas-i/kSsi	kSsas-i/kSs-i
散らかす	ske:ras	ske:ras-ɾ	ske:ras-tu:	ske:ras-na	ske:ras-aN	ske:ras-ata	ske:ras-ata	ske:ras-i	ske:ras-i
走る	ske:s	ske:s-ɾ	ske:s-tu:	ske:s-na	ske:s-aN	ske:s-ata	ske:s-ata	ske:s-i	ske:s-i
蹴る2	kire:s	kire:s-ɾ	kire:s-tu:	kire:s-na	kire:s-aN	kire:s-ata	kire:s-ata	kire:s-i	kire:s-i
教える	nara:s	nara:s-ɾ	nara:s-tu:	nara:s-na	nara:s-aN	nara:s-ata	nara:s-ata	nara:s-i	nara:s-i
	Φ	Φ	tu:	na	(ɾ)aNわたり音ɾ	(ɾ)ata	(ɾ)ata	ri	ri
歌う・言う	aɾ	aɾ	aɾ-tu:	aɾ-na	aɾ-(ɾ)aN	aɾ-(ɾ)ata	aɾ-(ɾ)ata	aɾ-ri	aɾ-ri
しゃべる・言う	munuɾ	munuɾ	munuɾ-tu:	munuɾ-na	munuɾ-(ɾ)aN	munuɾ-(ɾ)ata	munuɾ-(ɾ)ata	munuɾ-ri	munuɾ-ri
	(ɾ)	(ɾ)	(ɾ)tu:	(ɾ)na	(r)aN	(r)ata	(r)ata	(r)i	(r)i
取る	tuɾ	tuɾ	tuɾ-tu:	tuɾ-na	tuɾ-aN	tuɾ-ata	tuɾ-ata	tuɾ-i	tuɾ-i
蹴る1	kiɾ	kiɾ	kiɾ-tu:	kiɾ-na	kiɾ-aN	kiɾ-ata	kiɾ-ata	kiɾ-i	kiɾ-i
行く・帰る1	peɾ	peɾ	peɾ-tu:	peɾ-na	peɾ-aN	peɾ-ata	peɾ-ata	peɾ-i	peɾ-i
いる・をる	uɾ	uɾ	uɾ-tu:	uɾ-na	uɾ-aN	uɾ-ata	uɾ-ata	uɾ-i	uɾ-i(X)
ある	aɾ	aɾ(ari:ɾ/ari:m)	X	X	aɾ-aN	aɾ-ata	X	(ari:ɾ<ari:uri)	aɾ-i(X)
なる	naɾ	naɾ	naɾ-tu:	naɾ-na	naɾ-aN	naɾ-ata	naɾ-ata	naɾ-i	naɾ-i
集まる	ukana:ɾ	ukana:ɾ	ukana:ɾ-tu:	ukana:ɾ-na	ukana:ɾ-aN	ukana:ɾ-ata	ukana:ɾ-ata	ukana:ɾ-i	ukana:ɾ-i
準備する	sukaɾ	sukaɾ	sukaɾ-tu:	sukaɾ-na	sukaɾ-aN	sukaɾ-ata	sukaɾ-ata	sukaɾ-i	sukaɾ-i
	ɾ	ɾ	ɾ-tu:	ɾ-na	(ɾ)aNわたり音ɾ	(ɾ)ata	(ɾ)ata	ri	ri
座る	pɾ-ɾ	pɾ-ɾ	pɾ-ɾ-tu:	pɾ-ɾ-na	pɾ-(ɾ)aN	pɾ-(ɾ)ata	pɾ-(ɾ)ata	pɾ-ri	pɾ-ri
切る3 skɾ(包丁で)	skɾ-ɾ	skɾ-ɾ	skɾ-ɾ-tu:	skɾ-ɾ-na	skɾ-(ɾ)aN	skɾ-(ɾ)ata	skɾ-(ɾ)ata	skɾ-ri	skɾ-ri
入る	paɾ-ɾ	paɾ-ɾ	paɾ-ɾ-tu:	paɾ-ɾ-na	paɾ-(ɾ)aN	paɾ-(ɾ)ata	paɾ-(ɾ)ata	paɾ-ri	paɾ-ri

動詞	連体	終止非過去	否定命令2	否定命令1	否定終止非過去1	否定中止	否定形命令	命令	中止(=過去1)
	ɾ/S	ɾ/S	ɾ/S-tu:	ɾ/S-na	aN	ata	ata	i	i
遊ぶ	app-ɾ	app-ɾ	app-ɾ-tu:	app-ɾ-na	app-aN	app-ata	app-ata	app-i	app-i
置く	usk-ɾ	usk-ɾ	usk-ɾ-tu:	usk-ɾ-na	usk-aN	usk-ata	usk-ata	usk-i	usk-i
行く・帰る2	ik-S	ik-ɾ~ik-S	ik-S-tu:	ik-S-na	ik-aN	ik-ata	ik-ata	ik-i	ik-i
書く	kak-S	kak-ɾ	kak-S-tu:	kak-S-na	kak-aN	kak-ata	kak-ata	kak-i	kak-i
立つ	tak-S	tak-S	tak-S-tu:	tak-S-na	tat-aN	tat-ata	tat-ata	tat-i	tat-i
歩く	ank-S	ank-S	ank-S-tu:	ank-S-na	ank-aN	ank-ata	ank-ata	ank-i	ank-i
	u	u	u-tu:	u-na	aN	ata	ata	i	i
食べる	fa-u	fa-u	fa-u-tu:	fa-u-na	fa-aN	fa-ata	fa-ata	fa-i	fa-i
追う	wa-u	wa-u	wa-u-tu:	wa-u-na	wa-aN	wa-ata	wa-ata	wa-i	wa-i
買う	ka-u	ka-u	ka-u-tu:	ka-u-na	ka-aN	ka-ata	ka-ata	ka-i	ka-i
洗う1	ara-u	ara-u	ara-u-tu:	ara-u-na	ara-aN	ara-ata	ara-ata	ara-i	ara-i
笑う	para-u	para-u	para-u-tu:	para-u-na	para-aN	para-ata	para-ata	para-i	para-i
会う	ite-u	ite-u	ite-u-tu:	ite-u-na	ite-ei-N	ite-e-ta	ite-e-ta	ite-i	ite-i
	u-u	u-u	u-u-tu:	u-u-na	a-aN	a-ata	a-ata	u-i	u-i
思う	um-u-u	um-u-u	um-u-u-tu:	um-u-u-na	um-a-aN	um-a-ata	um-a-ata	um-u-i	um-u-i
拾う	pSs-u-u	pSs-u-u	pSs-u-u-tu:	pSs-u-u-na	pSs-a-aN	pSs-a-ata	pSs-a-ata	pSs-u-i	pSs-u-i
	Φ		(i-ɾ)-tu:	(i-N)-na	(a)N	(a)ta	ta		(-i)
沈む	sukum	sukumi-ɾ	sukum(i-ɾ)-tu:	sukum(i-N)-na	sukum-aN/sukumi-N	sukum-ata/sukumi-ta	sukumi-ta	sukum-i(-ru)	sukum(-i)
死ぬ	sɾn	sɾn(i-ɾ)	sɾn(i-ɾ)-tu:	sɾn(i-N)-na	sɾn-aN/sɾni-N	sɾn-ata/sɾni-ta	sɾni-ta	sɾni-ru	sɾn(-i)
	Φ	ɾ	ɾ-tu:	N-na	N	ta	ta	ru	Φ
見る	mi:	mi-ɾ	mi-ɾ-tu:	mi-N-na	mi-N	mi-ta	mi-ta	mi-ru	mi:
やる・あげる	fi:	fi-ɾ	fi-ɾ-tu:	fi-N-na	fi-N	fi-ta	fi-ta	fi-ru	fi:
酔う	pi:	pi-ɾ	pi-ɾ-tu:	pi-N-na	pi-N	pi-ta	pi-ta	pi-ru	pi:
考える	kaNkai	kaNkai-ɾ	kaNkai-ɾ-tu:	kaNkai-N-na	kaNkai-N	kaNkai-ta	kaNkai-ta	kaNkai-ru	kaNkai
洗う2	sumi	sumi-ɾ	sumi-ɾ-tu:	sumi-N-na	sumi-N	sumi-ta	sumi-ta	sumi-ru	sumi
探す・拾う	tumi	tumi-ɾ	tumi-ɾ-tu:	tumi-N-na	tumi-N	tumi-ta	tumi-ta	tumi-ru	tumi
着る	kSsi	kSsi-ɾ	kSsi-ɾ-tu:	kSsi-N-na	kSsi-N	kSsi-ta	kSsi-ta	kSsi-ru	kSsi
落ちる	uti	uti-ɾ	uti-ɾ-tu:	uti-N-na	uti-N	uti-ta	uti-ta	uti-ru	uti
起きる	uki	uki-ɾ	uki-ɾ-tu:	uki-N-na	uki-N	uki-ta	uki-ta	uki-ru	uki
あける	aki	aki-ɾ	aki-ɾ-tu:	aki-N-na	aki-N	aki-ta	aki-ta	aki-ru	aki
耕す	kati	kati-ɾ	kati-ɾ-tu:	kati-N-na	kati-N	kati-ta	kati-ta	kati-ru	kati
植える	ipi	ipi-ɾ	ipi-ɾ-tu:	ipi-N-na	ipi-N	ipi-ta	ipi-ta	ipi-ru	ipi
帰る・行く3	Nki	Nki-ɾ	Nki-ɾ-tu:	Nki-N-na	Nki-N	Nki-ta	Nki-ta	Nki-ru	Nki
入れる	ɾri	ɾri-ɾ	ɾri-ɾ-tu:	ɾri-N-na	ɾri-N	ɾri-ta	ɾri-ta	ɾri-ru	ɾri
消える1	ke:ri	ke:ri-ɾ	ke:ri-ɾ-tu:	ke:ri-N-na	ke:ri-N	ke:ri-ta	ke:ri-ta	ke:ri-ru	ke:ri
消える2	suti	suti-ɾ	suti-ɾ-tu:	suti-N-na	suti-N	suti-ta	suti-ta	suti-ru	suti
する	as/asɾ	asɾ	as-tu:	as-na	asi-N	asi-ta	a(s)si-ta	assu	asi
来る	kSs	kSs/kɾn	kSs-tu:	kSs-na	ku:-N	ku:-ta	ku:-ta	ku:-	klis-i
ない	ne:-N	ne:-N	x	x	x	ne:-ta	x	x	(ne:Nf)

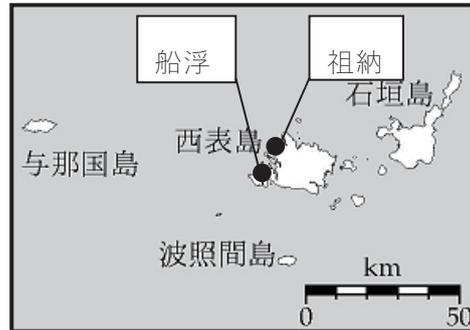
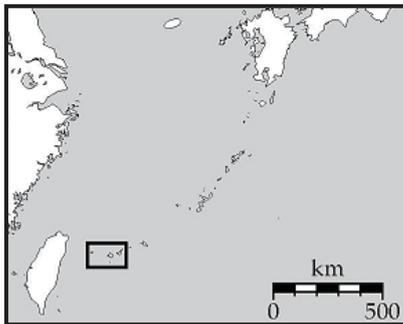
八重山地方西表島船浮方言の動詞・アスペクト・形容詞について

荻野千砂子（福岡教育大学）

1 沖縄県八重山郡竹富町西表島の船浮（ふなうき）¹

西表島の船浮集落の話者は、祖納（そない）集落のことを親村と呼ぶ。おそらく船浮集落は祖納集落からの分村としてできたのであろうが、文献上で確かめることはできていない。船浮集落は祖納集落より面積も狭く、世帯数も少ない。現在の人口は46名である（平成31年1月末）²。調査協力者は、石垣市在住の清水光江氏（昭和3年生まれ、女性）と戸眞伊擴氏（昭和15年生まれ、男性）のお二人である（清水氏は70歳まで船浮在住、戸眞伊氏は15歳まで船浮在住）。

西表島方言の動詞・形容詞に関する先行研究として、祖納（そない）方言に関する報告が金田章宏（2009a）、金田章宏（2010）、金田章宏（2011）にある。船浮方言に関しては、占部由子（2018）に記述がある。

(図) 西表島船浮の位置³

2 動詞の活用のタイプ

動詞の活用に関して船浮方言は祖納方言とよく似ている。占部由子（2018）では動詞の活用をタイプⅠとタイプⅡに分ける。タイプⅠは子音語幹動詞に相当すると考えられ、過去接辞は-ada, 否定接辞は-an, 意志・勧誘接辞は-aa が接続するとする。また、タイプⅡは母音語幹動詞に相当すると考えられ、語根の交替を伴うタイプであるとし、例えば「開ける」は ah-/ahi-の二つの語幹を立てる。過去接辞は-ida, 否定接辞は-un, 意志・勧誘接辞は-a または-oo が接続するとする。占部由子（2018）の記述と筆者が行った調査結果との比較を（表1）に示す。表中のーは用例の記載がないこと、または未調査であることを示

¹ 役場の表記は「舟浮」とあるが、話者によると、元来「船浮」が正しいが役場に漢字を間違えて届けたのだと言う。話者の見解を尊重するため、今後「船浮」と表記することにする。

² 竹富町ホームページの竹富町地区人口動態による。

³ 国土地理院発行の地図データをもとに Thomas Pellard 氏が作成した地図に加筆をしている。

す。また、用例の表記は、[te]は c, [dz~z]は z ([i]の前では[ɬ]~[z]) , 成節鼻音は N, 促音は子音を重ね、長母音は母音を重ねる。接辞境界は-で示し、接語境界は=で示す。また、*印は言えない形式であることを示す。

(表1) 船浮方言の動詞活用 (タイプ1とタイプ2とカ変とサ変)

	船浮・I (占部)	船浮・II (占部)	船浮・I	船浮・II	カ変	サ変
語幹	kak-	ahi-/ ah-	num	ah/ahir	k/ki/ku/kj	s/sa/si/su
① 終止 1	kak-u	ahi-ru	num-u (N)	ahi-ru (N)	kj-u (N)	su-u (N)
② 否定	kak-an	ah-un	num-aN	ah-uN	k-uN	s-aN sa-nu
③ 過去・完了	kak-ada	ah-ida	num-ada	ah-ida	ki-ida	sa-ada
④ 過去否定	kak-an-ada	ah-un-ada	num-aNda num-an-a(a)da	ah-uNda ah-un-a(a)da	ku-uN-da	sa-aN-da
⑤ 意志	kak-aa	(ahi mir-ar-un =naa)	num-a(a)	ah-o(o) ahir-a	ku-u	sa-a
⑥ 勧誘	kak-aa	ah-oo ahi-ra	num-a(a)	ah-o(o) ahir-a	ku-u	sa-a
⑦ 条件 1	-aba	—	num-aba	ah-uba	ku-uba	sa-aba
⑧ 連体	kak-u	—	num-u	ahir-u	kj-u	su-u
⑨ 禁止	kak-inaa	ah-ina	num-ina	ah-ina ahir-ina	ki-ina	si-ina su-una
⑩ 命令 1	kak-ii	ahi-ri	num-i	ahir-i	ku-u	si-i
⑪ 命令 2	—	—	num-ja	ahir-ja	無	s-ja(a)
⑫ 完了	—	ng-ja-N	num-jaN	ah-jaN	k-jaN	s-jaN
⑬ 条件 2	u=kkara	—	num-ukkara	ah-ikkara ah-ukkara ahir-ukkara	kj-ukkara ku-ukkara ki-ikkara	s-ukkara si-ikkara
⑭ 連用	語幹-i	—	num-i	ah-i	ki-i	si-i
⑮ 中止	語幹-iti	—	num-itti	ah-itti	ki-iti	si-itti
⑯ 理由	-ikii -akii	—	num-ikii	ah-ikii	ki-ikii	si-ikii

⑰ 同時	語幹	—	num-idoona	ah-idoona	ki-idoona	si-idoona
	-idonaa		num-idonaa	ah-idonaa		
⑱ 終止 2	—	—	num-i-su		ki-i-su	si-i-su
⑲ 過去	—	—	num-i s̄ita	ah-i s̄ita	ki-i s̄ita	si- s̄ita

異なる点を以下にまとめる。(表 1) の太枠で囲んだ部分である。

1. タイプⅡに語幹は, **ahi** ではなく **ahir** の方がよいと考える。
2. ③過去・完了のタイプⅠは**-ada** であるが, **tubu** (飛ぶ) の場合に **tub-uda** の形式もある。しかし, **-uda** 形式はほとんど出てこない。意味の違いについて現時点では不明である。
3. ④否定過去は**-aNda** が普通である。**-anada** の形式もあるが, **aa** と長音化した**-anaada** もある。**-anaada** は石垣方言と同じであり, もともとはこの形式であったかもしれない。
4. ⑤⑥意志・勧誘では必ずしも長音でなくともよいため, **-a(a)** とする。また, タイプⅡの意志形がある。
5. ⑨禁止のタイプⅡでは二つの語幹 **ah-/ahir-** とともに禁止接辞が作れる。
6. ⑩命令 1 は長音ではない。イントネーションによって長音になるときもある。
7. ⑬条件形式では, タイプⅡに複数の形式がある。
8. ⑮中止シテ形は, **-tti** と促音化する。
9. ⑯理由の**-akii** は見つからなかった。
10. ⑰同時を表す形式は**-doona** の方がよく出てくる。**-donaa** も言えないことはない。
11. ⑲過去の形式には, 子音によって **s̄ita** が融合する場合もある。s 語幹の **guusu** (殺す) は **guus-i s̄ita** とも言えるが, **guus-ita** が普通である。

また, タイプⅠとⅡの動詞の他に, 「来る」と「する」は, 活用語尾を統一化すると複数の語幹が生じることになるので, 変格活用として分類する。

次に動詞の派生形を(表 2)に示す。金田章宏(2011)の祖納方言の調査結果を参考にした。船浮方言は祖納方言とよく似ているが, 若干の相違があることが分かる⁴。表中の「無」は, 話者が「そのような言い方は無い」と答えたものである。

(表 2) タイプ 1 動詞「飲む」の派生形

	祖納	船浮
推量 1	numu hazu	num-u hazu
推量 2	numi su hazu	num-i-su hazu
推量 3	numi subee	num-i-su=bee
意志 1	numubee	num-u=bee
意志 2	numariru	num-ariru
すすめ	numiNni	num-i=Nni

⁴ 金田章宏(2011)での「!」の記号は無声化を表す。

さそい 2	numiNdaa	無
連体 2	numi su	num-i-su
連体 3	numinu	num-i-nu
中止 2	numitti	num-itti
条件	numjaa	num-jaa
条件	numisjaa	無
条件	numera	num-eera
条件	numadara	num-adara
条件	numjaNsa	無
逆接	numadaNdiN	num-ada-NdiN
譲歩	numadabaN	num-aba=N
逆接	numusunu	num-u=sunu
継続	numi bu	num-i bu-u
結果継続	numiru/numiduru	num-iru
痕跡 1	numeru/numiduru	num-eeru
痕跡 2	numi bureru	num-i bur-eeru
可能 (能力)	numissiN/numissiduru	num-issiN
受身・可能	numariN	num-ariN
使役 1	numasuN	num-asuN
使役 2	numas!imiN	無
してやる	—	num-i hi-iru
してくれる	numi hjuN	num-i hi-iru
してもらう 1	—	num-a-suN
してもらう 2	numi murauN	num-i murauN
してしまう 1	numi s!itiN	num-i s!tjaN
してしまう 2	numi c!ikiN	num-i c!kjaN
してしまう 3	—	num-i mjaN
してしまう 4	—	num-i kisjaN
希望	numissai/numissadaru	num-i-ssai
様態	numigohai/numigohadaru	num-i-gohai/num-i-gohaadaru

3 動詞活用の下位分類

動詞活用をタイプ I と II に分けたが、それぞれのタイプには変種がある。よって、次に下位分類を示す。

3. 1 タイプ I の下位分類 (ハ行四段由来以外の動詞)

タイプ I の下位分類として、(表 3) のように A から D を考えることとする。

A：語幹が子音で終わり，語幹末子音の交代がないもの。

B：語幹末 *ug* が *w* と交代するもの

C：語幹末 *z* が *tts* と交代するもの

D：語幹末が *r* で，終止形や連体形では脱落するもの

A は *numu*（飲む）に代表される動詞だが，*hui*（閉める）などのように活用形の一部で音声変化を起こすものも含むこととする。*hui*（閉める）の連体形は *-u* ではなく *-o* となる。これは，もとの連体形 *hu-u* の *uu* 連母音が *oo* となり，*ho-o* という音声形式になったものだと考える。*hui*（閉める）は，否定形でも音声変化が生じる。語幹 *hu* に否定接辞の *-aN* が下接すると *hu-aN* という *ua* 連母音が生じることとなる。この *u-a* 連母音が *waa* となるため，*hwa-aN* という形式になると考える。しかし，基底での語幹は *hu-* であり語幹の交代は無い。そのため，A タイプとして分類する。このような語は古典のハ行四段由来の語が多く，後に詳細を述べることとする。B の *tugu*（研ぐ）は，否定形に *tug-aN* と *tw-aN* と二形式がある。このとき，アクセントが変わる。*tug-aN* の方は LHL だが，*tw-aN* は HL となる。語幹 *tw-* は連体形では *tu-* に変化する。

（表3）船浮方言のタイプ I の下位分類（ハ行四段由来以外の動詞）

	動詞 語幹	A：飲む <i>num</i>	A：閉める <i>hu</i>	B：研ぐ <i>tug/tw/tu</i>	C：削る <i>kiz/kitts</i>	D：いる <i>bur/bu</i>
②	否定	<i>num-aN</i>	<i>hwa-aN</i>	<i>tug-aN</i> (LHL) <i>tw-aN</i> (HL)	<i>kiz-aN</i> <i>kitts-an</i>	<i>bur-aN</i>
③	過去・ 完了	<i>num-ada</i>	<i>hwa-ada</i>	<i>tug-ada</i> <i>twa-ada</i>	<i>kiz-ada</i> <i>kitts-ada</i>	<i>bur-ada</i>
⑤⑥	意志 勧誘	<i>num-a(a)</i>	<i>hwa-a</i>	<i>tug-aa</i> <i>tw-aa</i>	<i>kiz-a</i> <i>kitts-a</i>	<i>bur-a</i>
⑦	条件 1	<i>num-aba</i>	<i>hwa-aba</i>	<i>tug-aba</i> <i>twa-aba</i>	<i>kiz-aba</i> <i>kitts-aba</i>	<i>bur-aba</i>
⑧	連体	<i>num-u</i>	<i>ho-o</i>	<i>tu-u</i>	<i>kiz-u</i> <i>kitts-u</i>	<i>bu-u</i>
⑨	禁止	<i>num-ina</i>	<i>hu-ina</i>	<i>tug-ina</i> <i>tu-ina</i>	<i>kiz-ina</i> <i>kicc-ina</i>	<i>bur-ina</i>
⑩	命令 1	<i>num-i</i>	<i>hu-i</i>	<i>tu-i</i>	<i>kiz-i</i> <i>kicc-i</i>	<i>bur-i</i>
⑪	命令 2	<i>num-ja</i>	—	<i>tug-ja</i> <i>tʉ-ja</i>	<i>kiz-jaa</i> <i>kic-ca</i>	<i>bur-ja</i>
⑫	完了	<i>num-jaN</i>	<i>hu-jaN</i>	<i>tug-jaN</i>	<i>kiz-jaN</i> <i>kicc-aN</i>	—
⑬	条件 2	<i>num-ukkara</i>	<i>hu-ukkara</i>	<i>tu-ukkara</i>	<i>kiz-ukkara</i> <i>kitts-ukkara</i>	<i>b-ukkara</i>
⑭	過去	<i>num-i s̄ita</i>	<i>hu-i s̄ita</i>	<i>tu-i s̄ita</i>	<i>kiz-i s̄ita</i> <i>kicc-i s̄ita</i>	<i>bur-i s̄ita</i>

3. 2 タイプ I の A の下位分類 (ハ行四段由来動詞)

古典のハ行四段活用形をする動詞に関して、祖納方言では終止・否定・連体の形式が異なるとし、金田章宏 (2011) では下位分類を行っている。私が (表 4) にまとめ直し、クラスを s1~s4 と呼ぶこととする。

(表 4) 祖納方言のハ行四段由来動詞の下位分類

クラス	終止	否定	連体	動詞の例
s1	uN	waN/uwaN	uu	uN (追う), nuN (縫う), juN (言う)
s2	uN	aN	uu	umuN (思う), suN (する)
s3	uN	waN	u	auN (会う), murauN (もらう), 歩く (arahuN)
s4	oN	aN	oo	koN (買う), poN (這う), hwoN (食う)

船浮方言では、命令形や禁止形まで考慮してのクラス分けを試みる。次のようなクラス分けを提案する (表 5)。

(表 5) 船浮方言のタイプ I の下位分類 (ハ行四段由来動詞)

動詞	船浮	祖納	語形	語幹	否定	過去・完了	連体	命令	禁止
縫う	w1	s1	nui	nuw/nu	nuw-aN	nuw-ada	nu-u	nu-i	nu-ina
追う		s1	ui	uw/u	uw-aN	uwa-ada	u-u	u-i	u-ina
会う		s3	ai	aw/a	aw-aN a-aN	awa-ada a-ada	a-u	a-i	a-ina
言う	w2	s1	juu	i	ja-aN	ja-ada	ju-u	i-i	i-ina
思う		s2	umui	umu	uma-aN	uma-ada	umu-u	umu-i	umu-ina
喧嘩する		?	ai	a	a-aN	a-ada	a-u	a-i	a-ina
する	サ変	s2	suu	sa/si/su/ s	s-aN	sa-ada	su-u	si-i	su-una si-ina
買う	w3	s4	kai	ka	ka-aN	ka-ada	ko-o	ka-i	ka-ina
食べる		s4	hwoo	hw(a)	hwa-aN	hwa-ada	hwo-o	hwa-i	hwa-ina ho-ona
		s3	murai	mora	moor-a N	mora-ada moor-ada	mora-u※し muro-o と moor-u と	moor-ee	mora-ina moora-ina
笑う		s4	baaree	baar(a) bar	baar-aN	baara-ada	baro-o	baare-e	baara-ina baare-ena
洗う		s4	aaree	aar(a)	aar-aN	aara-ada	aaro-o	aare-e	aare-ena

※「し」は清水氏, 「と」は戸眞伊氏による。

ハ行四段由来動詞の中には ai「会う」や morau「もらう」のように、おそらく明治時代以降に新しく共通語から入ったと思われる語もある。否定接辞を中心にして、次のようにクラス分けをする。このクラスを w1～w3 と呼ぶ（表5）。w3 は詳細にみると、命令形語尾が i の動詞と ee の動詞に分けられる。またさらに、禁止形語尾が i の動詞と e となる動詞に分けられるが、とりあえずクラスとしては一つにしておく。

- w1 : 否定形 waN・完了 waN・連体形 u・命令形 i・禁止形 i
- w2 : 否定形 aN・完了 aN・連体形 u・命令形 i・禁止形 i
- w3 : 否定形 aN・完了 aN・連体形 o・命令形 i (e)・禁止形 i (e)

3. 3 タイプⅡの下位分類

タイプⅡも下位分類を設ける。語幹交替が二つの場合と三つの場合で分ける（表6）。下位分類を E, F とする。語幹交代は大半の語で二つの E クラスである。F クラスの中で、hiiru（くれる）の⑬条件接辞は語幹1～3のいずれでも作ることができるが、bii（酔う）は、語幹1では作れないという小さな差異はある。

（表6）船浮方言のタイプⅡの下位分類（－は未調査である）

	行く : E	くれる : F	酔う : F
	語幹 1 Ng- 語幹 2 Ngir-	語幹 1 hu- 語幹 2 hi- 語幹 3 hiir-	語幹 1 bju- 語幹 2 bi- 語幹 3 biir-
② 否定	Ng-uN	hu-uN	bju-uN biir-aN
③ 過去/ 完了	Ng-ida	hi-ida	bi-ida
⑤ 意志	Ng-o(o)	ho-o	biir-a
⑥ 勧誘	Ngir-a	hiir-a	
⑦ 条件 1 タラ	Ng-uba	hu-uba	bju-uba
⑧ 連体	Ngir-u	hiir-u	biir-u
⑨ 禁止	*Ng-ina Ngir-ina	hi-ina hiir-ina	bi-ina biir-ina
⑩ 命令 1	Ngir-i	hiir-i	biir-i
⑪ 命令 2	Ngir-ja	hiir-ja	biir-ja
⑫ 完了	Ng-jaN	h-jaN	-

⑬ 条件 2	Ng-ikkara	hi-ikkara	bi-ikkara
ナラ	Ngir-ukkara	hu-ukkara	biir-ukkara
		hiir-ukkara	
⑭ 過去	Ng-i s̄ita	hi-i s̄ita	bi-i s̄ita

3. 4 動詞の活用一覧

以下に、タイプ I の動詞の語幹末子音ごとの例と、タイプ II の動詞の例と、混合型 I / II の活用をする動詞の例を挙げる（表 7）。混合型とは「越える」「見る」のように、否定形はタイプ I だが、過去・完了や条件ではタイプ II となる動詞である。

（表 7）船浮方言の動詞活用一覧〈1〉

		語幹	否定	志向	条件	過去/完了	命令 1	命令 2
k	聞く	sik	sik-aN	sik-a	sik-aba	sik-ada	sik-i	sik-ja
s	着る	kis	kis-aN	kis-a(a)	kis-aba	kis-ada	kis-i	kis-ja(a)
h	歩く	arah	arah-aN	arah-a(a)	arah-aba	arah-ada	arah-i	—
ts	立つ (人)	sits/sic	sits-aN	sits-aa	sits-aba	sits-ada	sic-i	sic-ja
z/tts	削る	kitts/kiz/kic	kit-tsaN kiz-aN	kitts-a kiz-a	kitts-aba kiz-aba	kitts-ada kiz-ada	kic-ci kiz-i	kicc-a kiz-ja(a)
n	死ぬ	s̄in	s̄in-aN	—	—	s̄in-ada	—	—
m	読む	Jum	jum-aN	jum-a(a)	jum-aba	jum-ada	jum-i	jum-ja
r1	座る	biir	biir-aN	biir-a	baiir-aba	biir-ada	biir-i	biir-ja
r2	おる	b/bu/bur	bur-aN	bur-a	bur-aba	bur-ada	bur-i	bur-ja
b	飛ぶ	tub	tub-aN	tub-a	tub-aba	tub-ada	tub-i	tub-ja(a)
p	遊ぶ	asip	asip-aN	asip-a	asip-aba	asip-ada	asip-i	asip-ja
g1	はく	poog	poog-aN	poog-a	poog-aba	poog-ada	poog-i	poog-ja
g2	研ぐ	tug/tui	tug-aN tw-aN	tug-aa tw-a(a)	tug-aba twa-aba	tug-ada tw-a(a)da	tu-i	t̄ug-ja t̄ug-ja
hwu	閉める	hw/hwa/hu	hwa-aN	hwa-a	hwa-aba	hwa-ada	hu-i	無

w1	縫う	nuw/nu	nuw-aN	nuw-a	nuwa-aba	nuw-ada	nu-i	nu-ja
w2	言う	i/ja/ju	ja-aN	ja-a	ja-aba	ja-ada	i-i	ja-a
w3	降る	hu/hwa/ho	hwa-aN	—	hwa-aba	hwa-ada	hu-i	—
w3	買う	ka/ko	ka-aN	ka-a	ka-aba	ka-ada	ka-i	ka-ja
w3	食べる	hw/hwa/ho	hw-aN	hwa-a	hwa-aba	hwa-ada	hwa-i	—
I・II	越える	kw/ku/kuir	kw-aN	kuir-a *kwa-a	ku-ibaku-uba	ku-ida	kuir-i	kuir-ja
I・II	見る	mi/miir	miir-aN	miir-aa	—	mi-ida	—	miir-ja
II	行く	Ng/Ngir	Ng-uN	Ng-o(o) Ngir-a	Ng-uba	Ng-ida	Ngir-i	Ngir-ja
II	酔う	bju/bi/biir	bju-uN biir-aN	biir-a	bju-uba	bi-ida	biir-i	biir-ja

船浮方言の動詞活用一覧〈2〉

	禁止	過去	完了	連用	理由	条件	連体
聞く	sik-ina	—	—	sik-i	—	sik-ukkara	sik-u
着る	kis-ina	—	—	kis-i	—	kis-ukkara	kis-u
歩く	arah-ina	arah-i s̄iṭa	arah-jaN	arah-i	—	arah-ukkara	arah-u
立つ(人)	sic-ina	—	sic-aN	sic-i	—	sitts-ukara	sits-u
削る	kicc-ina	kicc-i s̄iṭa	kicc-aN	kicc-i	kicc-ikii	kitts-ukkara	kitts-u
	kiz-ina	kiz-i s̄iṭa	kiz-jaN	kiz-i	kiz-ikii	kiz-ukkara	kiz-u
死ぬ	—	s̄iṅ-i s̄iṭa	s̄iṅ-jaN	—	—	—	—
読む	jim-ina	jum-i s̄iṭa	jum-jaN	jum-i	—	—	jum-u
座る	biir-ina	biir-i s̄iṭa	biir-jaN	biir-i	—	biir-ukkara	biir-u
おる	bur-ina	bur-i s̄iṭa	—	—	—	b-ukkara	bu-u
飛ぶ	tub-ina	tub-i s̄iṭa	tub-jan	tub-i	tubi-kii	tub-ukkara	tub-u
遊ぶ	asip-ina	asip-i s̄iṭa	asip-jaN	asip-i	asip-ikii	asipu-kkara	asip-u

はく	poog-ina	poog-i s̄iṭa	poog-jaN	poog-i	poog-ikii	poog-ukkara	poog-u
研ぐ	tug-ina	t̄u-i s̄iṭa	tug-jaN	t̄u-g-i	tu-ikii	tu-ukkara	tu-u
閉める	tu-ina			tu-i			
	hu-ina	hu-i s̄iṭa	hw-jaN	hu-i	—	hu-ukkara	hwo-o
縫う	nu-ina	nu-i s̄iṭa	nu-jaN	—	—	nu-ukkara	nu-u
						nu-ikkara	
言う	i-ina	i-i s̄iṭa	ja-aN	i-i	—	ju-ukara	ju-u
降る	hu-ina	hu-i s̄iṭa	—	—	—	ho-okaraa	hu-u
買う	ka-ina	ka-i s̄iṭa	ka-jaN	ka-i	—	ko-okkara	ko-o
食べる	hwa-ina	hwa-i s̄iṭa	hw-jaN	hwa-i	—	ho-okaraa	ho-o
	ho-ona						
越える	ku-ina	ku-i s̄iṭa	kuir-jaN	ku-i	—	ku-ikkara	kuir-u
見る	mir-ina	—	—	—	—	—	—
行く	Ngir-ina	Ng-i s̄iṭa	Ng-jaN	—	—	Ng-ikkara	Ngir-u
	*Ng-ina					Ngir-ukkara	
酔う	bi-ina	bi-i s̄iṭa	—	bi-i	—	bi-ikkara	biir-u
	biir-ina					biir-ukkara	

4 テンス・アスペクトについて

4. 1 非過去（未来・現在）テンス：-uN/-i-su

非過去は、(1) のように -u (N) で表す。動作動詞はアスペクト形式を取り、現在テンスを表す。また存在動詞は単独で現在テンスを表す用法があるが、(2) のようにアスペクト形式を取ることもできる。非過去の終止接辞には **num-u** と **num-i-su** の形式がある。金田章宏 (2010) には祖納方言で「ヌミス形はヌムン形の中止形とサ変のストの組み合わせからなるもので、ヌムン形がムードの点で中立的なのに対して、ヌミス形はより強制的に使用される」とする。確かに **num-i=du su-u** のように分析的に使用できるので、スは恐らくサ変由来であろうが、非過去形の **num-i-su** と過去形の **num-i-s̄iṭa** 以外の活用形は持っていないので、本稿では **su** は接辞として考えることとする。モダリティーとして、船浮方言話者は **num-i-su** は強調ではなく、丁寧な言い方になると説明する。(3) の -uN の例では、自分の意志として自分から発話できるのに対し、(4) の -i-su は他人から「酒を飲むか」と聞かれたとき、「飲みますよ」と答える際の「ます」に相当する丁寧な言い方だという。意志を表す **bee** をつけると、(5) はどちらかといえば飲む方に心が傾いているが、(6) は人から誘われて、飲むか飲まないか迷っている状況だという。「飲むかもしれない」という意味になるのであれば、このときの **bee** は意志というよりも推量に近いのかもしれない。

- (1) atsaa=ra piiNpiN kwaa=na=du bu-u?
 明日=ABL 毎日 ここ=LOC=FOC いる-NPST
 明日から毎日ここにいる？
- (2) piiNpiN maa=na=du {bu-u/but-turu}.
 毎日 ここ=LOC=FOC {いる-NPST/いる-PROG2} .
 毎日ここにいるよ。
- (3) kjuu=mee saki num-uN=dura.
 今日=TOP 酒 飲む-NPST=SFP
 今日は酒を飲むぞ。
- (4) banu=mee saki num-i-su=dura.
 私=TOP 酒 飲む-INF -NPST=SFP
 (酒を飲むかと聞かれ) 私は酒を飲みますよ。
- (5) baa num-u=bee.
 私 飲む-ADN-INT
 私, 飲むかな。
- (6) baa num-i-su-bee.
 私 飲む-INF-NPST-INT
 私, 飲むかな, どうするかな (人から誘われて)。

4. 2 過去テンス：-ada-/i-sjta

占部由子 (2018) では過去終止の形式を-ada (p.35) としている。だが, -ada は (7) のように現在完了の用法もある。(7) で「たった今, 鳥が飛び立った」という場合は-i-sjta ではなく, -ada を用いる。よって, -ada のグロスを過去 PST1 と完了 PFV1 とに分ける。(8) -i-sjta を用いると, -ada より「遠い過去」になると話者は説明する。よって, -i-sjta のグロスを過去 PST2 とする。だが, (9) は hwu-i-sjta より hwa-ada がよいとする。主語が baN (私) であれば hwu-i-sjta が言いやすくなるという。hwu-i-sjta は, 確実に行為が終了したことを見て, それが現在テンスと切り離されたと確認できたときに使用できるのではないかと考える。

- (7) mina tub-ada.
 今 飛ぶ-PFV1
 (鳥が) 今, 飛んだ。

- (8) hanako=mee kisa kak-i-sita.
 花子=TOP さっき 書く-INF-PST2
 花子はさっき書いたよ。

- (9) kīnu=nu juuru=mee acca=du jadu hwa-ada.
 昨日-NOM 夜=TOP 父=FOC 戸 閉める-PST1
 昨日の夜は父が戸を閉めた。

4. 3 非過去（現在・未来）継続アスペクト：-iru/-i bu-u/-iduru

-iru/-i bu-u/-iduru は現在行われている動作の継続を表す。通常，(10) のように-iru が多く用いられる。よって-iru のグロスを PROG1 とし，-i bu-u のグロスを PROG2 とする。(11) のように存在動詞 aru も-iduru を下接する。-iduru は，du を含んだ形式である。グロスを PROG3 とする。動詞が r 語幹の場合，-iduru の音声形式は t-turu となる。

- (10) patee=na nai=du {ub-iru/ub-i buu}.
 畑=LOC 苗=FOC {植える-PROG1/植える-PROG2}
 畑で苗を植えている。

- (11) mina=mee at-turu.
 今=ADD ある-PROG3
 (家は) 今もあるよ。

num-iru (飲んでいる) と num-i bu-u (飲んでいる) の違いは，断続性と継続性の違いである。断続的な動作には-iru が用いられ，継続的な動作には-i bu-u を用いる。(12) は酒を飲むだけでなく，時には物を食べるだろうし，家の中を歩き回ることもあるだろう。断続的に「酒を飲んでいる」のである。それに対して，(13) は目の前で継続して行われている行為である。また，-iru は断続的ではあるが，動作としては「時間の範囲」があるときに使用できる。そのため，未来テンスでの-iru は終了時間が明確でないと使用不可となる。

(14) は，太郎が畑に出かけていて，いつ帰るか分からないときに，*ub-iru (植えている) は使用不可となる。この場合 (14) は，-i bu-u や非過去-i-su を用いる。(15) のように，おおまかな時間でも-iru は使いにくい。しかし，5 時に閉室が決まっている場所で話し合いを行う場合には，必ず 5 時に終わるため時間の範囲が定まり (16) のように-iru が使用可能となる。

- (12) taroo=mee saki=ba piizju num-iru.
 太郎=TOP 酒=ACC 一日中 飲む-PROG1
 太郎は酒を一日中飲んでいる。

- (13) taroo=mee mina tegami kak-i bu-u.
 太郎=TOP 今 手紙 書く - PROG2-NPST
 太郎は今、手紙を書いている。
- (14) juunjaa=madi {*ub-iru/ub-i-su/ub-iduru}.
 夕方=LMT {*植える-PROG1/植える-INF-NPST/植える-PROG3}
 (すぐ帰ってくるかと聞くと) 夕方まで植えているよ。
- (15) icizikaN=baaree {*si-iru/si-i buu/si-i-su}=hazu.
 一時間=ぐらい {*する-PROG1/する-PROG2/する-INF-NPST}=推量
 一時間ぐらいしているだろう。
- (16) gozi=madi {si-iru/si-i-su}=hazu.
 五時=LMT {する-PROG1/する-INF-NPST}=推量
 五時までしているだろう。(閉室5時の決まり)

-i bu-u は、ある時点での確実な動作の継続を表すのだが、未来テンスにおいて -i bu-u が使用しにくい文が (17) である。私がのど自慢に出場するとする。明日の 12 時半ごろ、テレビで放映されることが予定されている。私が歌う行為は、基準となる時間（ここでは明日の 12 時半）の手前から始まり、数分で終わることが予測される。このとき、-iru と -iduru は使用できるが、-i bu-u は使用しにくい。-i bu-u は、(18) のように比較的長い継続時間が続くとき、あるいは切れ目が予測しにくいときに使用されるのではないかと考える。

- (17) atsa=nu zjuunizi+haN=guru=mee uta=du {uta-iru/uta-iduru/*uta-i bu-u}.
 明日=GEN 12 時+半=ごろ=TOP 歌=FOC {歌う-PROG1/歌う-PROG3/*歌う-PROG2}
 明日の 12 時半ごろは歌を歌っている。
- (18) atsa isugasa-ari=kii icinici+zjuu par-i=du bu-u.
 明日 忙しい-INF-CSL 一日中 走る=FOC PROG2
 明日は忙しいから一日中走っている。

4. 4 非過去結果アスペクト：-iduru/-iru/-idaru

瞬間動詞に -iduru/-iru が下接すると、(19) のように結果を表す。(20) の -idaru は、ある時間までに動作が完了し、その状態が続いていることを表す。-idaru のグロスを PFV3 とする。

- (19) nari=du ippai {ut-iduru/ut-iru}.
 実=FOC いっぱい {落ちる-PROG3/落ちる-PROG1}
 実が落ちているなあ（木の下に実がたくさんある）。

- (20) atsa=nu zjuuzji=naa=mee cikur-idaru.
 明日=GEN 10時=DAT=TOP 作る-PFV3
 明日の10時頃は棚が作ってあるよ。

4. 5 過去継続・結果アスペクト：-ida/-i buda/-iduda

-ida/-i buda/-iduda は過去テンスにおける動作の継続を表す。-ida のグロス を PST.PROG1 とし、-i buda のグロス を PST.PROG2 とし、-iduda のグロス を PST.PROG3 とする。(21) は「三日前」という過去に「香が手紙を書いていた」出来事を表す。(22) は自分が見たときに、「猫が食べ続けている」行為があった場合に使用できる。(23) は瞬間動詞「死ぬ」に下接した例で、結果として「死んだ状態」を見たときに、-i buda もしくは-iduda が使用できる。

- (21) kaori=mee mikka maita=na kak-ida.
 香=TOP 三日 前=DAT 書く-PST.PROG1
 香は三日前に書いていた。

- (22) kɪnu maja=du hwa-ibuda.
 昨日 猫=FOC 食べる-PST.PROG2
 昨日、猫が食べていた。

- (23) baa mit-ta=basjo=mee {sin-i buda/sin-iduda}.
 私 見る-PST=時=TOP {死ぬ-PST.PROG2/死ぬ-PST.PROG3}
 私が見たときは（魚は）死んでいた。

4. 6 完了アスペクト：-jaN/-ada

(24) は「酒を全部飲む」という一連の行為が終了した場合である。「飲みきる」という動詞に-jaN を下接し完了を表す。-jaN のグロスは PFV2 とする。もともと-jaN は動詞の連用形にアリがついたものであったらと推測する。連用形の語尾の i がわたり音の j となり、-jaN は語幹接続になったと考える。-ada は直前に行為が終了し、現在まで影響がある場合に使用ができる。例えば、目の前で赤ちゃんが初めて立ったときに、(25) のように-ada を用いる。これは、「立つ」行為が直前に起こったことを表し、現在も「立っている」状態であることを表す。

- (24) muuru num-i kis-jaN.
 全部 飲む-INF 切る-PFV2
 全部飲みきった。

- (25) mina sits-ada.
 今 立つ-PFV1
 (初めて赤ちゃんが) 今, 立った。

4. 7 痕跡のアスペクト : -eer

(26) は「酒の瓶が転がっている」のを見て「誰かが飲んだ」ことが推測できる場面である。このように痕跡が残っていて、動作の推測を行う場合に -eer を用いる。-eer のグロスを TRC とする。(27) は、木を見上げると今までなっていた実が無くなっていることに気づいたときに言えるという。実があった痕跡が残っている場合である。木の根元を見て、実が落ちているのを見たら、前出の (19) のように -iduru や -iru になる。(26) も (27) も動作が本当に起きたかどうかは分からない、推測の域でも言える。酒は誰かが落としたのかもしれないし、実は誰かが取ったかもしれない。痕跡を見て、動作を推測しているのである。一方、動作が確実に行われた場合でも言える。(28) は眼前に切られた大根があるので、誰かが切ったことは確かな事実である。このようなときも -eer が用いられる。

- (26) takka=du num-eeru.
 誰.不定=FOC 飲む-TRC
 誰かが飲んである。
- (27) naarjä=du ut-eeru=ra.
 木の実=FOC 落ちる-TRC=SFP
 実が落ちたなあ (木の上を見る)。
- (19) nari=du ippai {ut-iduru/ut-iru}.
 実=FOC いっぱい {落ちる-PROG3/落ちる-PROG1}
 実が落ちているなあ (木の下に実がある)。
- (28) daikoN=du kis-eeru=ra.
 大根=FOC 切る-TRC=SFP
 大根が切ってあるな。

4. 8 過去継続痕跡のアスペクト : -i bur-eer

-i bur-eer は現在の状況から判断して、過去のある時点でどのような動作が継続されていたかを表す。(29) は「犬よりは小さい足跡がある」現在の状況から「猫が食べていたはずだ」という推測を行っている。グロスは PROG2-TRC とする。現在、目の前に証拠があるため、推測ではあるが確信に近い。

- (29) majaa=du hwa-i bur-eeru=ra.
 猫=FOC 食べる-PROG2-TRC=SFP
 (小さい足跡がある) 猫が食べていたな。

4. 9 過去完了のアスペクト：-i-dada

-i-dada は、過去にある時点以前に動作が終了していることを表す。グロスは過去完了 PST.PFV とする。(30) は息子である太郎が見たときに、すでに書類が書かれていたことを確認した場合である。(31) のような反実仮想の場合にも使用可能である。

- (30) mikka maitta=na {kak-idada/kak-i=du a-da}.
 三日 前=DAT {書く -PST.PFV/書く -INF=FOC ある -PST}
 (お母さんは) 三日前に書いてあった。

- (31) baa naraas-idada=joo.
 私 教える - PST.PFV =SFP
 (もしあなたが尋ねていたら) 教えていたよ。

5 形容詞

5. 1 アクセント

形容詞のアクセントは二種類ある。用例が多いのは、taka[saji (高い) のように低く始まって最後から2モーラ目が高くなり、最後が低くなるパターンである。このような LLHL 型に対して、平らなアクセントの HHHH 型の語が少数ある。1モーラ目は中程度の高さでもよい (MHHH)。言い切りの場合は、最後のモーラが低くなり、HHHL で実現する。

(表8) H (M) HHH~H (M) HHL 型の形容詞

厚い	asĩtsa-i
うれしい	sa*nisa-i
面白い	umussa-i
少ない	isika-i
短い	iNcika-i
多い	takacca-i

5. 2 形容詞の活用

形容詞の活用は大きく二種類に分かれる。圧倒的に多いのは、語尾が sai となる形式で、もう一つは語尾が si となる形式である。sai 型はそのまま終助詞の ra を下接し、文を終わらせることができるが、si 型はそのままでは文を終わらせることができず、語幹に siduru

(サ変のスの連用形由来か? + 進行を表す *duru*) が下接する。また, *sai* 型は否定を表すときは *mjaN* (ない) が下接するが, *si* 型の形容詞は, *bur-aN* (いない) をとる。*si* 型に *mjaN* を下接すると *hoopis-i mjaN* は「暗くなった」という意味になり, このときの *mjaN* は完了の *mjaN* である。金田章宏 (2009) によると, 西表祖納方言の形容詞には大きく二つのタイプがあるという。語彙数が多い, アリ系の～(サ)イ型と, 動詞らしい活用をし語彙数の少ない, フリ系と見られるシル型だとする。船浮方言でも同様のことが言える。(32) が *sai* 型で, (33) が *si* 型に相当する。

(32) *piisa-i=ra*.
寒い-NPST
寒いね。

(33) *hoopis-iduru=ra*. **hoopis-i=ra*
暗い-PROG3
暗いね。

si 型の用例数は少ない。以下のような色に関する語彙が現在見つかっている。

(34) 白い *sso-si* 黒い・暗い *hoopi-si* 赤い *ahas-si* 青い *abos-si*

以下に *sai* 型と *si* 型の活用を挙げる (表9)。

(表9) *sai* 型と *si* 型の形容詞の活用

	<i>sai</i> 型	<i>si</i> 型
	<i>piisa-i</i> 寒い	<i>hoopi-si</i> 暗い・黒い
終止	<i>piisa-i=ra</i>	<i>hoopi-siduru=ra</i>
否定	<i>piisa-a mjaN</i>	<i>hoopi-si bur-aN</i>
過去	<i>piisa-ada</i> <i>piisa-i ja-da</i>	<i>hoopi-si=du bu-da</i> <i>hoopi-siduda</i>
連用	<i>piisar-ite</i>	<i>hoopi-si</i>
連体1	<i>piisa-ru basjo</i> <i>piisa-nu pinici</i>	<i>hoopi-siru majaa</i> <i>hoopi-sinu maja</i>
連体2	<i>piisa-i pinici</i> <i>pii munu</i>	* <i>hoopi-si munu</i>
完了	—	<i>hoopi-si mjaN</i>

5. 3 *sai* 型形容詞と *i* 型形容の例

金田章宏 (2009) では, アリ系の～(サ)イ型をさらにサイ型形容詞とイ型形容詞とに

分ける。サイ型は形容詞の語根末が sa になっているもので、イ型は s 以外の子音がきているものであろうと考えられる。船浮方言でも sai 型と i 型がある。i 型形容詞は語根のみで否定形を作ることができるが、sa を語幹に追加することも可能である（語によって異なるので今後の調査が必要である）。例えば aba-i（味が薄い）は、(35) のように二つの語幹で否定形を作ることができる。

- (35) {aba/abasa} mjaN
 味が薄い ない
 味が薄くない。

現時点で調査した形容詞の語彙を sai 型と i 型に分けて挙げる（表 10）。アクセントは[が上昇を示し]は下降を示す。

（表 10）船浮方言の形容詞の語彙

sai 型		i 型	
熱い	asi[tsa]i	固い	koo[ha]i
暑い	asi[tsa]i	弱い	joo[ha]i
温い	nuku[sa]i	あまい	aci[ma]i
きれい	kai[sa]i	あまい	aci[ma]i
煙たい	kibu[sa]i	恐い	uu[gwa]i
恥ずかしい	bai[sa]i	塩からい	siko[ra]i
薄い	pis[sa]i	味薄い	a[ba]i/ahwai
高い	taka[sa]i	いい匂い	kabai
低い	piku[sa]i	美味しい	m[ma]i
きびしい	minu[sa]i	苦い	i[ga]i
痛ましい	kɨmusi[tsa]i	きたない	sipucinai
驚（怖い）	minu[sa]i		
重い	ubu[sa]i		
軽い	karu[sa]i		
寒い	pɨi[sa]i		
肌寒い	pɨriki[sa]i		
涼しい(5,6月 の木陰で)	oriki[sa]i		
涼しい(5,6月 の木陰で)	sidiki[sa] (清水氏の み)		
大きい	mai[sa]i		
小さい	guu[ma]i		
くさい	hɨsai		
若い	baki[sa]i		

長い	naa[ha]i
安い	jas[sa]i
速い	pai[sa]i
遅い	nibi[sa]i
ひもじい	jaa[sa]i/jaa[ha]i
辛い	ka[ra]i
遠い	tuu[sa]i
近い	cika[sa]i
難しい	mucikasaN
忙しい	paNtasai/paNtasa
滑りやすい	naburi[sa]i
広い	piro[sa]i (清水氏) piro[sa]i (戸眞伊氏)
狭い	iba[sa]i
太い	mai[sa]i
強い	tsuu[sa]i
かゆい	koo[sa]i

【グロス一覧】

ABL	ablative	奪格
ACC	accusative	対格
ADD	additive	添加
ADN	adnominal	連体
CSL	causal	理由
DAT	dative	与格
FOC	focus	焦点
GEN	genitive	属格
INF	infinitive	連用
INT	intentional	意志
LMT	limitative	限界格
LOC	locative	場所格
NOM	nominative	主格
NPST	nonpast	非過去

PFV1	perfective	完了(-ada)
PFV2	perfective	完了(-jaN)
PFV3	perfective	完了(-idaru)
PST1	past	過去(-ada)
PST2	past	過去(-i-sīta)
PROG1	progressive	進行(-ida)
PROG2	progressive	進行(-i bu-u)
PROG3	progressive	進行(-iduru)
SFP	sentence final particle	終助詞
TOP	topic	主題
TRC	trace	痕跡
+		複合境界
-		接辞境界
=		接語境界

【引用文献】

- ・ 占部由子 (2018) 「南琉球八重山西表島船浮方言の文法概説」 修士論文 九州大学

- ・金田章宏（2009a）「八重山西表方言の形容詞」『項文学解釈と鑑賞』74-8 至文堂
- ・金田章宏（2010）「沖縄西表島祖納方言ーアスペクト・テンス・ムード体系の素描」『日本語形態の諸問題ー鈴木泰教授東京大学退職記念論文集』ひつじ書房
- ・金田章宏（2011）「八重山西表島（祖納）方言動詞の活用タイプ」『琉球の方言』35

【参考文献】

- ・荻野千砂子（2017a）「西表島船浮方言の格助詞ととりたて助詞」『福岡教育大学国語科研究論集』58
- ・荻野千砂子（2017b）「沖縄県西表船浮方言」『平成28年度文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」報告書』
- ・金田章宏（2009b）「沖縄西表島（祖納）方言の格ととりたての意味用法」『琉球の方言』33
- ・金田章宏（2014）「南琉球方言におけるベシ由来形の使用実態」『琉球の方言』39
- ・久野眞（1988）「西表島祖納方言の音韻体系」『琉球の方言』13

八重山地方竹富町黒島方言の『桃太郎』

荻野千砂子（福岡教育大学）

八重山地方竹富町黒島方言の桃太郎の独話を再収録した。話者は、黒島（くろしま）の東筋（あがりすじ）集落在住の又吉智永氏（昭和14年生まれ、男性）である。録音は2017年8月1日に行った。また、一通りの話が終わった後に又吉智永氏が録音を聞き直し、修正を行ったので最後に修正の語句を記載した。書き起こしの協力を、仲本（なかもと）集落在住の宮良哲行氏（昭和21年生まれ、男性）にお願いした。書き起こしの際に、細かな語彙のニュアンスや使い方を宮良哲行氏より伺ったので注として書き入れた。黒島方言を上段に、共通語訳を下段に書く。接辞境界を-, 接語境界を=, 複合境界を+としている。

too momotaroo=nu panasi=ju s-i ssar-u=di=juu.
 さあ。始めるよ。 桃太郎の話をして差し上げますよ。

paNti=du aru hatu=na ubuza=tu paa=tu=nu=du sumai waat-ta=ttu.
 昔、あるところに おじいさんとおばあさんが 住んでいらっしやったつて。

ubuzaa=ja mainici jama=ha kii tur-i paa=ja mata haara=ha
 おじいさんは毎日 山に木を取りに おばあさんは また 川へ

kiN ara-i=N=tti...kiN=ba ara-i waat-ta=ttu. kjuu=ja waasiki=nu haijar-iba
 服を洗いに... 服を洗いにいらっしやったと。 今日 天気がきれいだから

haara=ha gi-i kiN=ba ara-i ku-u=tti iz-i paa=ja haara=ha waar-e=raasa.
 川へ行き 服を洗って来ようと言っておばあさんは川へいらっしやったようだ。

paa kiN=ba ara-i b-ee kee=du hamaata=hara mumu=nu naN=nu
 おばあさんが服を洗っていると 向こうから 桃の実が

fuk-eer-i=ja ut-i ut-i kuburukka kuburukka=ti naar-i f-utara
 浮いては沈み沈み ふかふかと 流れ来たら

kuree pirumas-i¹ kutu miziras-i kutu=ti iz-i paa=ja mir-i b-ee kee=du
 これは滅多にないこと不思議なことと言い おばあさんは見ていたけど

mumu=nu naN=na guburukka guburukka=ti iz-i paa hato=ho naar-i fu-ta.. fu-ta=tu.
 桃の実 は ふかふかと言っておばあさんの所へ流れ来た.. 来たつと。

paa=ja kuri miziras-i munu=ti iz-i kure=e mee jaa=ha mut-i gi-i
 おばあさんは これ 珍しいものと言つて これはもう 家へ持つて行き

ubuza=tu futaN=si sokki su-uba=du nar=ti iz-u kutu nar-i paa=ja
 おじいさんと二人で おやつにしないとイケないと言つことになり おばあさんは

mumu=nu naN=ba tarai=na ir-i ham-i jaa=ha waar-e=raasa.
 桃の実を たらいに入れ頭に載せ 家へいらっしやったようだ。

aitee=du mata (paa=juN) ...ubuza=N kjuu=ja mata paam-ari
 そしてまた (おばあさんも...言ひ間違い) おじいさんも 今日 また 早く

jama=hara waar-i jaa=na waar-e=raasa. paa=ja
 山から いらっしやつて 家にいらっしやつたようだ。 おばあさんは

ubuza=ba jurab-i ubuza, kjuu=ja mizuras-i kutu=nu=du ar-ee=ttu.
 おじいさんと呼び 「おじいさん 今日には不思議なことがあった」と。
 nuu jar-iba=ja paa iz-u kee=du baa kiNhaa=ba ara-i b-ee kee=du
 「何であったか。おばあさん？」 言ったところ 「私が着物を洗っていたところ
 mumu=nu naN=nu guburukka guburukka=tti iz-i baa hato=ho naar-i f-utara
 桃の実が ぷかぷかと言って 私の所に流れ来たら
 kure=e mee ubuza=tu futaaN=si sokki=ba si-i=du taboorar-i=tti iz-i tarai=na
 これはおじいさんと二人で おやつをして頂こうと言って たらいに
 mut-i k-ee=juu. ai kure=e mee ii kutu. too=ka paa manaita=tu pottsaba=ba
 持ってきたよ 「これはいいこと。さあおばあさん。 まな板と包丁を
 mut-i ku-u=ti iz-uttara paa=ja manaita=tu pottsaba=ba mut-i ki-i
 持ってこい」と言ったら おばあさんはまな板と包丁を持ってきて
 ubuza=N batas-i kee=du ubuza=ja mata manatsa=nu ui=na mumu=ba noos-i²=ti
 おじいさんに渡したら おじいさんはまたまな板の上に 桃を載せて
 kis-uN=ti si-i kee=du unu mumu=ja unaa duu=si=du zarakka=ti iz-i bar-i
 切ろうとしたら その桃は ひとりではばかっといって割れて
 unu naha=hara bikoo=nu ffa=nu mar-i taboor-ee³=ttu. uri=ju mit-ta ubuza=tu paa=ja
 その中から男の子が生まれて下さった。 それを見たおじいさんとおばあさんは
 ure=e mee kamisama=nu=du migum-i taboor-ee. baja hutaN=na vva=nu naan-iba
 「これは神様がお恵み下さった。 私達二人には子がないから
 unu bikoo=nu ffa=ha sudatir-arir-i=joo=ti iz-u kamisama=nu taboor-e ar-aN=kaja.
 この男の子へ 育てられなさいよという 神様がお恵みになったのではないか」
 ure=hara mee ubuza=tu paa=ja jurukub-ituri mainici sudat-i b-ee kee=du
 それからおじいさんとおばあさんは喜んで 毎日 育てていたけど
 kure=kka mee naa=ja nuu=ti sik-i ti iz-u kutu nar-i mumu=nu naha=hara marir-iba
 「この子に名をなんてつけようか」ということになり桃の中から生まれたので
 mee mumutaroo=ti naa=ja suk-uN... suk-ukka masi ar-anuN=tti iz-i... ubuzaa iz-uttara
 桃太郎って名を付ける...付けたらよいのではないかと言ひ...おじいさんが言ったら
 paa=ja zottoo=tti iz-i jurukub-ituri naa=ja mumutaroo=ti sik-ita=tu.
 おばあさんは「上等だ」と言って喜んで 名を桃太郎って付けたそうだ。
 ainici mee mumutaroo=ba mir-i mata mumutaroo=ba sudat-i b-ee kee=du
 毎日もう 桃太郎を見て また桃太郎を育てていたけど
 mumutaroo=ja iciniNmai=nu ningin=ha nar-i rippani maihuuna=ba mar-i⁴
 桃太郎は 一人前の人間になり 立派に よくできた子になって
 seikoo=ba si-i b-ee=raasa. aru tuki..aru piN=du mumutaroo=ja hai=jun mee
 成功をしているようだ。 あるとき...ある日 桃太郎は そういうことで
 taki=hudu nar-eer-iba uri=N paa=tu ubuza=tu=nu ukagi...ukugi=dara=di umu-i
 大きくなったので これもおばあさんとおじいさんのおかげだと思い
 kjuu=ja kukuru=hara jurukub-i bu-u. paa=tu ubuza=tu=ho
 今日心から喜んでいゝ。 おばあさんとおじいさんとへ

buNgi=ju su-uba=du nar=ti iz-u kutu=si hai=nu tusiguru nar-e=hara mee
 お礼をしないといけないということで この年頃なってからもう
 duu=sii nuu=N kui=N su-uba =du nar=ti iz-u kutu=si mumutaroo=ja
 自分で何でもしないといけないということで 桃太郎は
 kjuu=ja mee paa=tu ubuza=ba jurab-i ubuza=tu paa=tu=nu
 今日はもう おばあさんとおじいさんと呼び おじいさんとおばあさんの
 panasi=ba sik-i ubuza paa kookoo⁵ su-uba =du nar= ti iz-u kutu nar-i
 話を聞いて おじいさんとおばあさん孝行しないといけないということになり
 ubuza paa uma=ha waar-i taboor-i. ubuza=tu paa=ba sukais-i ki-i
 「おじいさんおばあさん、ここへおいで下さい。」おじいさんとおばあさんを連れてきて
 kuri=hudu madi=N zootoo=ni mee sudat-i taboor-i hukoorasa. airunu=du
 「これほどまでも 上等に育てて下さってありがとうございます。 だけど
 duu=juN⁶ iciniNmai=nu niNgiN=tu nar-i ubuza=tu paa=tu buNgi=N si-i-jus-anuN
 私も一人前の人間となりおじいさんとおばあさんとお礼もできていないので
 manuma=hara=ssaN ubuza= tu paa=tu bungu si-i ujas-uN=ti umu-i but-ta tuki=N=du
 今からでもおじいさんとおばあさんにお礼をして差し上げようと思っていたときに
 uva=tu hutaaN=nu umu-uru .. umu-u kutu mata fusar-u munu=nu aa-ka
 あなたと二人の 思う...思うこと また欲しいものがあつたら
 bane=he sikas-i taboor-i. banaa nuu=ba s-ee kutu ar-abaN nuu=ba s-ee munu ar-abaN
 私に聞かせて下さい。私はどんなことがあつても どんなものであつても
 tum-i ki-i kookoo si-i ujas-uN=ti=du umu-i but-ta tuki=N=du iz-i taboor-i=ti iz-u kee=du
 探して 孝行して差し上げるって思っていたときなので 言って下さい」と言うど
 ubuza=tu paa=ja nuu=N husuku=ti naanuN. airunu pisittie=e
 おじいさんとおばあさんは「何も不足ってない。 だけど一つは
 uva=ha tanum-i-pisar-u munu =nu ar-u.
 あなたに頼みたいことがある」
 nuu=nu=du=tti tanum-i pisar-u munu=nu=ra=ti iz-i kee=du
 「何って頼みたいもの（があるの）ですか」というと
 kunu sima=hara maineN abarek-ku midumunu=nu=du..midumunu=ju uN=nu=du saar-i par-u.
 この島から毎年美しい（女性が...言い間違い）女性を 鬼が連れ去っていく。
 kuri=ju jami-sas-i⁷ mata unu uN=ju siribis-i⁸
 これを止めさせ またこの鬼をやっつけ
 taboo...siribis-ikka mee zottoo jar-u=nu=ti iz-u kee=du mumutaroo=ja
 やっつけたら上等だけど」と言うど 桃太郎は
 kure=e mee unaa siribis-iruN⁹ ti iz-i too=ka=ra paa
 これはもう自分がやっつけると言い 「さあ そこで おばあさん
 una iz-u munui sik-i. mai=nu NbaN=ba mikku
 自分がいうことを全部聞いて 米のごはんを三個
 sukoor-i=ti waar-i taboo..sukoor-i waar-i taboor-i. baa uri=ba mut-i=ti
 お作りなさい...作りなさって下さい。 私はそれを持って

uN=nu sima=ha uN siribis-i=N par-i=ba. ti iz-uttara paa=ja jurukub-ituri
 鬼の島へ 鬼をやっつけに行くよ。 と言ったら おばあさんは喜んで
 mai=nu NbaN=ba mikku sukoor-i hai mumutaroo.
 米のご飯を三つ作って 「はい。桃太郎
 mai=nu NboN=na mikku sukoor-i k-eN=doo=ti s-itara fukoorasaa=doo. too=ka=ra
 米のご飯を三つ作ってきたよ」と。 そしたら「ありがとう。さあ。
 manuma=hara uN=nu sima=ha gi-i uN=ba siribis-i fur-iba
 今から 鬼の島へ行き 鬼を退治してくるから
 ubuza=tu paa=ja uma=na mat-i waar-i. ti iz-i mai=nu NboN=ba
 おじさんとおばあさんはここでお待ちなさい。 と言い 米のご飯を
 kusi=na mikku huNtabar-i¹⁰=ti minato=ho=tti iz-i sjuppatsu s-ee... Nz-i tat-i=raasa.
 腰に三つくり (まきつけて) 港へといって出発...出て行ったようだ。
 ai kee=du ibeebe par-e kee=du iN=nu=du
 そうだけど もう少し行くと 犬が
 mumutaroo uva maa=ha=du waa=ra kjuu=ja=ti iz-u kee=du
 「桃太郎。あなたはどこにいらっしゃるの。今日は？」と いうので
 bana=ju uN=nu sima=ha uN=juN siribis-i=N=ti=du=ju Nz-i tat-i
 「私はね。鬼の島へ 鬼をやっつけるって出で立った」
 ai jak-ka=ra banu=N mazuN saar-i waar-i.
 「そうだったら 私も一緒に連れなさいよ。
 airunu uva kusi=nu sa-iru mai=nu NbaN=ju pisukku taboor-i. s-itara uvaa zuNniN
 だけどあなたの腰に下げる米のご飯を一つ下さい」 「そしたらお前は本当に
 baN=tu mazuN par-uN? par-uN. s-itaraa mumutaroo=ja kuse=hera
 私と一緒に行くか? 「行く」 だから 桃太郎は腰から
 mai=nu NboN=ba tur-i pisukku iN=ha watas-ee=raasa.
 米のご飯を取り 一つ犬に渡したらしい。
 iN=na jurukub-ituri una=juN=ka¹¹ saar-i waar-i taboor-i=tti izi...iz-uttara
 犬は喜んで 「私でも連れて行って下さい」と言ったら
 mumutaroo=ja baa sibi=ba u-i ku-u=ti iz-i hutraaru mee minato=ho=ti iz-i par-u kee=du
 桃太郎は私の尻を追ってきなさいと言い 二人 もう 港へといって行っていると
 tsuge=e mata saN=nu k-i=tte=du mumutaroo waa maa=ha=du waa=ra?
 次はまた猿が来て 「桃太郎 あなたはどこにいらっしゃるのか」
 bana=ju kjuu=ja uN=nu sima=ha uN=ju siribis-iN=ti=du Nz-i tat-e
 「私はね今日は 鬼の島へ鬼をやっつけるって出で立った」
 ai=jak-ka banu=N mazuN saar-i waar-i taboor-ar-unuN=ti iz-uttara
 「そうだったら 私も一緒に連れていらして下さらないか？」と言ったら
 mumutaroo=ja uva hontoo baN=tu mazuN paruN= ti iz-uttara
 桃太郎は 「おまえは本当に私と一緒に来るか？」と言ったら
 par-uN. airunu=du unu kusi=na ar-u mai=nu NboN=ju pisukku taboor-i=ti s-itara
 「行く。だけどその腰にある 米のご飯を一つ下さい」と だから

mumutaroo=ja jurukub-ituri pisukku saara=ha batas-ee=raasa. aitee
 桃太郎は喜んで一つ猿に渡したようだ。そして

uva=N mata baa sibi=ba u-i ku-u=ti iz-i maa ibeebe arak-i arak-u kee=du
 「おまえはまた私の尻を追って来い」と言って もう少し歩いていくと

tsuge=e mata kizi=nu k-i=tte=du
 次はまた キジが来て

mumutarosaN... mumutaroo uva kjuu=ja maa=ha=du waa=ra=ti kee=du
 「桃太郎 あなたは今日はどこに行くのか？」そうすると

uN=nu sima=ha uni siribis-iN=ti=du... un siribis-iN=ti=du par-u.
 「鬼ヶ島へ 鬼を退治しに行く」

ai jak-ka ba=niN saar-i waar-i taboor-i. uva zuNniN par-uN?=ti iz-u kee=du
 「そうだったら、私も連れなさせて下さい。」 「おまえは本当に行くか？」というと

par-uN. airunu unu uva kusi=na ar-u mai=nu NboN=ju pisukku taboor-i=ti iz-uttara
 「行く。だけど あなたの腰にある 米のご飯を一つ下さい」と言ったら

mumutaroo=ja jurukub-ituri kize=he=N mai=nu NboN=ju pisukku batas-ee=raasa.
 桃太郎は 喜んで キジへも 米のご飯を一つ渡したようだ。

aitii jutsaN mee ..futaN minato=ho=je¹² minato=ho=tti iz-i mee arak-i kee=du
 そして 四人港へ 港へと行って歩いていると

minato=ho par-u kee=ja funi=nu=du bu-u=raasa.
 港へ行くと 船がいるようだ。

too unu funu=naa nuur-i=ti unu=nu sima=ha par-a. iz-u kutu nar-i
 「よし、この船に乗って 鬼ヶ島へ行こう」ということになり

jutaaN=nu munu=nu=du unu fune=he nuur-i uN=nu sima=ha sjuppatsu.. Nz-i tat-e=raasa.
 四人の者がその船へ乗り 鬼ヶ島へ 行ってしまったようだ。

aikée=du sikazik-i mir-u kee=du uN=nu sima=naa=ja uN=nu=du padahaa=ba nar-i
 そうだけど 近づいてみると 鬼ヶ島には鬼が 裸になり

muuru ino pama=na mee niv-i b-ee=raasa. kure=e mee ii hatoho=du k-ee. momotaroo=ja
 みんな砂浜で寝ているようだ。これはもういいところに来た。桃太郎は

hanga-i=ti too uma=naa mee panasi aasi su-u=ti iz-u kutu nar-i
 考えて 「さあ。ここで (四名で) 話し合わせをしよう」ということになり

ai jak-ka kizje=e=du baa saisjo=ja tub-i g-i=tti uN=nu mii=ju sikhuz-iba
 それならキジは 私が最初は飛んでいって 鬼の目をつつくので

IN=na mata baa atu=hara ki-i=ti paN=ju huihak-i¹³
 犬はまた 私は後から来て 足をかきむしって (くいつく感じ)

unu atu=hara mata saN=nu ur-i ki-i kusinaha=ju azipik-itturi
 その後からまた猿が降りてきて 背中をひっかくと (azipiki はかきむしる感じ)

su-u...si-ika zottoo ar-anuN=ti iz-u kee=du mumutaroo=ja
 する...したら 上等ではないかという と 桃太郎は

too uri=du masi. manuma iz-utta=niN unu tuuru mee
 「はい。それがよいだろう。今言ったように その通りに

bija=si siihak-u=ti iz-u kutu nar-i funi=ju sikazik-i=ti kee..sikazik-i
 私達でしかける」と言うことになり 船を近づけて来て...近づけて
 fini=nu sikazik-i f-uttara kize=e mee tub-i tat-i g-i=tti uN=nu mii=ju fuikkir-itara=du
 近づいて行ったら キジは飛び立ち 行って鬼の目をつついたら
 iN=na mata sugu tub-i ur-i g-i=tti uN=nu paN=ju huihak-utara=du
 犬はまた飛び降りて行って 鬼の足を かきむしったら
 tsuge=e mata sar=nu g-i=tti kusunaha=ba muuru azipik-i si-tta=tu. aikee=du mee
 次はまた猿が来て 背中を みんなをひっかいたって。 そうだから
 uN=nu taisjoo=ja kure=e=ja mee uttsaN=na hana-anuN
 鬼の大將は これはもう こいつらにはかなわない。
 mumutarosaN inuci=taNka=ja tasik-i taboor-i.
 「桃太郎さん 命だけは助けて下さい。
 nuu si-taN=tiN uvata=hara=ja hana-anuN=ti iz-u kutu nar-i
 どうしたってあなた方にはかなわない。」ということになり
 mumutaroo=ja uvata=ja maineN baNta sima=hara abar-ikkuru midumunu=ba
 桃太郎は 「お前達は毎年 私達の島から きれいな女性を
 pusuN=na saar-i par-i bu-u=raasa ar-anuN. unu kutu=ju jamir-uN=ti iz-ukka=ra
 一人ずつ連れ去っているのではないか。 そのことを やめるっていうなら
 inuci=taNka=ja tasik-iru=nu jam-unuN=ti iz-ukka kuras-i=du sit-i¹⁴
 命は助けるけど やめないというなら殺してしまうよ」
 s-itara mumutaroo...uni=nu taisjoo=ja
 そうすると (桃太郎..言い間違い) 鬼の大將は
 kure=e mee inuci=taNka=ja mee tasukar-aba=du nar=ti iz-u kutu=si
 これはもう 命だけは助からないといけないということで
 uri=nu kutu¹⁵ mee jamir-iba inuci=taNka=ja tasik-i taboor-i=tti iz-uttara
 「そのことをやめるので 命だけは助けて下さい」と言ったら
 mumutaroo=ja ure=e mee macigai nai kutu=miri=tti. ai. macigai=ja naanuN
 桃太郎は 「これは間違いはないことだろうね？」と。 「はい。間違いはない」
 ti iz-u kutu nar-i jurukub-ituri too uvataa=ja uvataa nuci=taNka=ja tasikir-uN
 ということになって 喜んで「さあ。 お前たちは お前たちの命だけは助ける」
 tti izj-u¹⁶ kutu nar-i kizi=tu iN=tu saru=tu jutaaN sima=ha mudur-uN=ti si-i kee=du
 ということになり キジと犬と猿と 四名 島へ 戻ろうとしたときに
 uni=nu taisjoo=nu mumutarosaN kiN giN saNgu=nu takara +munu=nu ar-iba
 鬼の大將が「桃太郎さん 金銀サンゴの宝物があるから
 omijage=tu=si mutas-iba kuri=ba mut-i waar-i=ti uvata sima=nu
 お土産として持たせるので これをお持ちになって あなたの島の
 piso=ho bak-i ujas-i waar-i=tti.
 人に分けて差し上げて下さい」と。
 s-itara mumutaroo=ja jurukub-ituri too=ka funi=he noos-i waar-i=tti iz-u kee=du
 そうしたら桃太郎は 喜んで 「いざ出発。船へ積み込んで下さい」と言う

uN=nu siNka=nu caa¹⁷=ja kiN giN saNgu=nu takara+munu=ba
 鬼の手下たちは 金銀サンゴの宝物を
 funinumi sim-i mutas-ee=raasa. jutaaN=nu munu=nu fumi=na nuur-i=tti
 満載に積み持たせたそうだ。 四名の者が 船に乗って
 sima=ha tador-i sik-i kizje=e sina pik-i sara=a kuruma=nu tii=ju
 島にたどりつき（戻ってきた） 「キジは綱を引いて 猿は 車の前の棒を
 tii=si.. tii¹⁸=ju pik-i sikir-i.
 棒で...棒を引っぱりなさい」
 iN=na mata atu=hara usu-i=ti iz-i mitsaaN=si kuruma=ba usu-i
 犬はまた 後から押せ」と言っ 三人で 車を押して
 paa=tu ubuza mat-i b-eeru hatu=ho par-ee=raasa.
 おばあさんとおじいさんが待っているところに 行ったようだ。
 ai kee=du ubuza=tu paa=tu
 それだけおじいさんとおばあさんと（が）
 nuu nar-i bu-u=kaja=tti iz-u panasi=ba si-i b-ee kee=du mumutaroo
 どうなっているかなという話をしていたところに 桃太郎は
 ubuza paa hai ubuza, uN=nu sima=ha gi-i
 「おじいさんおばあさん。 このように おじいさん 鬼の島へ行って
 uN=ba siribis-i=ti k-ee=doo. boori boori.
 鬼を退治してきたよ」 「よい子だ。よい子だ」
 manuma=hara unu sima=hara midoo abar-ekkuru¹⁹ midoo=ju
 「今から この島から女性 きれいな女性を
 saar-i par-uN=tti iz-u kutu su-unuN=ti iz-u kutu jakusiku=ba si-i k-ee.
 連れていくということ しないということ 約束をしてきた」
 hukoorasa. mumutaroo jakudu=du uva=ba sudat-i.
 「ありがとう。 桃太郎。お前を育てていいことがあった（育てて徳があった）。
 manuma=hara atu=N baNta=ju misut-uN=sukuN rippani kookoo si-i viir-i=joo.
 今から後も 私たちを見捨てないように 立派に 孝行してくれよ」
 ubuza=tu paa tanum-utara=du mumutaroo=ja misaN=ti iz-u kutu nar-i
 おじいさんとおばあさんが頼んだら 桃太郎は 「はい」ということになり
 jurukub-ituri kunu takara+munu=ju sima+zuu=nu kunu mura+zuu=nu piso=ho
 喜んで この宝物を 島中の この村中の人へ
 bag-i ujas-itaru sima+zuu=nu piso deezi-na jurukub-i mata uN=ba taizi=ba si-i
 分けて差し上げたら 島中の人 大変喜び また 「鬼を退治して
 kunu mura=hara manuma=hara midoo=nu ffa=ju pisur-assa²⁰
 この 村から 今から 女の子を一人さえも
 uN=ha batas-uN=ti iz-u kutu suuni.. su-uN kutu nar-idar-iba
 鬼へ渡すということ しないということになったので
 jurukub-i taboor-i=ti iz-uttara mura=nu piso-o deezi-na jurukub-itturi
 喜んで下さい」と言ったら村の人は 大変に喜んで

wat-ta=ttu.

いらっしやったって。

tuu.

おしまい。

(修正1) 「土産」をミヤゲと言ったが黒島方言の *sutu* (土産) がよい。

(修正2) *siNka=nu caa* (鬼の家来たち) と言ったが *uN=nu siNka* (鬼の家来) だけでよい。

(修正3) 「退治」と言ったが *siribisiN* (やっつける) がよい。

¹ *pirumasi* は滅多にないこと。

² 否定形は *nooh-onuN* (載せない) となる。

³ *mari taboorar-eN* となると喜ばしい感じが強い。「生まれて下さった」は *bijaha=na bikoo=nu ffa= nu mar-i {taboor-ee /taboorar-eN}* のどちらもが使用できる。

⁴ *maihunaa mar-i=ba si-i* 「かしこい生まれをした」という意味になる。

⁵ 祖父母孝行を *abu iza kokoo* と聞くことがあるがあまり使わない。改まったときは使うときもある。「親孝行」という言葉はよく使う。*uja hutaN=nu kookoo si-ir-iba misaN=dura*. (親二人の孝行をすればよいよ)

⁶ *juN* は「も」に相当するが、共通語と異なる。*turi=juN tubi=du si-i* (鳥は飛ぶものだよ), *auta=juN tub-i=du si-i* (蛙も跳ぶよ), *usi=juN kii sikir-i=jo* (牛は気をつけなさい), *bana=juN par-i=du si-i* (私もいくよ), *{ikkaiseN=juN=si/ ikkaiseN=juN} mak-ida* (一回戦で負けた)。

⁷ 共通語であるので *naaN jooni s-imiruN* という方がよい。

⁸ *siribis-ahar-ida* は「自分がやっつけられた」。

⁹ *siribisiN* ともいう。

¹⁰ 語彙として *makisiki* の方がよい。*ussui=na makisik-i* は、腰とか肩から斜めにしばって持ち歩く様子。*kusinaha* は背中のこと。

¹¹ *Nka* は次のように使える。*kuri=Nka ujas-i taboor-i* (このようなものでも役立てて下さい), *taro=Nka saar-i par-iba* (太郎でも連れていけ)。

¹² *je* という形態素があるらしい。*taroo=nu jaa=ha=je Ng-i bur-u=wa*. のように *je* を使うと行く途中という感じがするという。

¹³ 人間に「かきむしれ」という場合は、*daramir-i* となる。ねこは手でパンチができるから、*daramir-uN* と言えるが、犬は *daramir-i* と言えない。*daramir-u* は手が関係する行為である。

¹⁴ 「～してしまう」に相当する言い方。*jabur-as-i usuk-uN=doo/jabur-as-i sitir-uN=doo* (壊してしまうぞ) のように言える。

¹⁵ 直訳すると「そのこと」となる。連体詞の *unu* を用いて、*unu panasi si-i waa-Nna=jo* (その話はしないでね) とも言えるが、*uri=nu panasi* とも言える。

¹⁶ *izu* と *izju* と同じと話者は説明する。*izju kutu=nu naan-iba si-i waar-ee* (やることないので、あんたはこんなことをしたのか), *si-i=saku naan-iba uva du s-ee* (やることがないから、あんたがしたのか) とも言う。

¹⁷ *caa* は *uttsaa* のこと。先生達は、*siNsii=nu uttsa* と *siNsii+taa* は一緒の意味。グループのことを指す。

¹⁸ 人間が引く車は真ん中に一本だけ棒がある。舵をとるため。車の下から出ている。人間が引く綱は、*tii* の根元(車の下の部分)につないでおく。肩にかけて一本だけ引く。一人用の大八車。牛に引かすものより小さい。牛に引かす物は、二本手がある。

¹⁹ 複数のものがあり、美しいものから順番につれていく感じがする。

²⁰ *pisura jattsaN* (一人でも) とも言う。仲本では *pisura-ttsaN* とも言う。

沖縄県竹富町小浜島・八重山語小浜方言の動詞の活用について

クリストファー デイビス
Christopher Davis (琉球大学)

1 はじめに

本報告は、沖縄県竹富町小浜島の言葉「クモームニ」（以下では「小浜方言」）の研究結果をまとめたものである。去年の報告では、(1) 音素・音声の特徴と音素・音声・カナ表記法、(2) 格助詞及びとりたて助詞の記述、そして(3) 童話「大きなかぶ」のクモームニ版の書き起こしを紹介した。本報告では、去年の報告を背景にしながら、クモームニの動詞の活用に焦点を当てることにする。小浜方言についての背景的な情報や表記法に関しては、去年の報告書を参考されたい。

なお、本報告のデータは、全て小浜島出身／在住で、小浜言葉の話者である大嵩善立氏（S2 生、男性）への面接調査によるものである。大嵩善立氏以外にも、大嵩スエ氏と花城正美氏にたくさんのご協力を頂いた。シカットウカラミーハイユー。

2 動詞の主な活用形とその作り方

このセクションでは、これまでの調査で確認した動詞の活用形とその基本的な用法と例文を紹介する。用例は3行構成で、カナ表記・日本語訳・音声表記で記す。その用例で注目したいところをすべての行で**太文字**で示し、カナ表記の行で下線付き太文字で示す。

小浜方言の音声上の一つの特徴である母音の無声化は、カナ表記では記さないが、音声表記で母音の下に○をつけることで示す。例えば、「行く」は小浜方言で「パル」となるが、「パ」の母音が無声化するため、音声表記ではこれを p̤aru と表記する。これまでの研究では、この無声化が完全に予測できるような法則はまだ見つけられず、音韻上の対立を表してる可能性があると思われる。

2.1 現在形

まずは、動詞の現在形（非過去形とも呼ばれる）から始める。この形は基本的に動詞の語幹と接尾辞 **-u** で作り、日本語の現在形とは形上でも意味上でも似ている。しかし、八重山語の他方言と同じく、現在形の最後に接尾辞「ン」（**-n**）が付くこともあり、そのため現在形を二種類（「ン」が付いているものと付いていないもの）にわけなければならない。今の段階では、この二種類の現在形の意味上の違いは不明であるが、「ン」が付いた形はおそらく焦点を表す助詞「トゥ」（=tu）や「ンドゥ」（=ndu）と基本的には共起しないと思われる。また、これまでの聞き取り調査では、「ン」が付いた現在形が使われる頻度が低いようである。

現在形 1 (「ン」が付いていない形) の用例 :

- (1) ウトウトー プイトウルイカテイトゥ ヌブ
 弟は 一人で 寝る
 ututoo p^si_ituri=kati=tu nub-u

- (2) ンナカラトゥ シンチミル
 今から 片付ける
 nna=kara=tu jintjimiru

現在形 2 (「ン」が付いた形) の用例 :

- (3) アナワ フルン
 穴を 掘る
 ana=wa φur-un

- (4) キューヤ ブンザーウヤヌ ヤーゲ ワールン
 今日 おじさんが 家に いらっしゃる (来る)
 kyuu=ya bunzaa+uya=nu yaa=ge waar-un

現在形 2 は、上で書いたように焦点を表す助詞「トゥ」や「ンドゥ」とは基本的に共起しないと思われるが、現在形 1 はこれらの焦点助詞の有無にかかわらず使えるようである。次の 2 つの例文では現在形 1 「ヌム」(飲む) が使われているが、片方では目的語に焦点助詞「トゥ」が使われ、もう片方では「ワ」が使われているが、どちらの文でも現在形 1 「ヌム」が使われている。

- (5) ヌンドゥヌ カーリクィタラ ミンツィトウ ヌム
 喉が 乾いてきたら 水を 飲む
 nundu=nu kaari k^si_itara mintsj_i=tu num-u

- (6) ヌンドゥヌ カーリクィタラ ミンツィワ ヌム
 喉が 乾いてきたら 水を 飲む
 nundu=nu kaari k^si_itara mintsj_i=wa num-u

例文 (3) では、目的語に「ワ」と動詞の現在形 2 が使われている。このような例文が存在するのに対して、焦点助詞の「トゥ」「ンドゥ」と現在形 2 が同時に使われている例はこれまで確認されていなくて、八重山語の他方言と同じようにおそらく基本的には共起しないと思われる。

2.2 過去形

小浜方言には二種類の過去形が存在し、これらを過去形1と過去形2と呼ぶ。過去形1は、接尾辞「タ」(-ta)で表し、語幹が一種の音便化を示す。また、過去形1の-taの後ろに「ル」(-ru)を伴う形と伴わない形が存在するが、これらの意味上の違いはまだ明確ではない。次の2つの例文では、過去形1の最後に-ruが付いた形と付いていない形がそれぞれ使われているものである。

- (7) ユンボンマー ファイシティ フタキナー ヌフタ
 夕ご飯を 食べて すぐに 寝た
 yunbonmaa ɸai-si̥ti ɸɯtakinaa nuɸɯ-ta

- (8) ユーネーヤ フターリィカティ ヌフタル
 昨夜は 二人で 寝た
 yuunee=ya ɸɯtaari=kati nuɸɯ-taru

過去形2は、形上では動詞の連用形(2.4で紹介する)に-ŋitaをつけることによって作られる。以上の例文の動詞「ヌブ」(寝る)の過去形1「ヌフタ」または「ヌフタル」に対し、過去形2は「ヌビシタ」(nubiŋita)となる。また、「ハル」(行く)の過去形1が「ハッタ」または「ハッタル」となるのに対し、過去形2は「ハリシタ」(həriŋita)となる。

- (9) ヌビシタ
 寝た
 nubi-ŋita

- (10) ブネートウルィ トウッタラ ファートウルィン トウピ ハリシタ
 親鳥 飛んだら 子鳥も 飛ん いった
 bunee+turi tuɯtara ɸaa+turi=n tu̥pi həri-ŋita

過去形1と過去形2の意味上の違いは、今後の研究が必要であるが、「近い過去」と「遠い過去」の違いに関わる可能性がある。鈴木(2001)の報告では、八重山語石垣方言(四箇方言)の2つの過去形が「普通過去形」と「直前過去形」と名付けられて、それぞれの形が小浜方言の過去形1と過去形2に歴史的に相当するものであると思われる。「寝る」を表す動詞を例にすると、小浜方言ではこの動詞の現在形が「ヌブ」となり、過去形1が「ヌフタ」で、過去形2が「ヌビシタ」となる。石垣方言のこれに相当する動詞の現在形が「ニブ」となり、「普通過去形」(過去形1)が「ニブダ」で、「直前過去形」(過去形2)が「ニビッタ」となる。

このように、小浜方言の「ヌフタ」と「ヌビシタ」がそれぞれ石垣方言の「ニブダ」と「ニビッタ」に歴史的に相当すると思われるが、用法・意味上の使い分けが同じかどうかはまだ明確ではない。鈴木(2001)によれば、石垣方言の直前過去形は以下のような特徴

がある。

「直前過去形は、主として、現在に関係のある、すで実現したことを表す特別な過去形である。直前過去形には、思い起こし、発見、気付きのようなニュアンスがともなうことがある。」(鈴木 2001 : 27-28)

これまでの調査では、小浜方言の過去形2の例文もこのようなニュアンスがともなうように思われるものは少なくない。常に「直前」の出来事だけを表すかどうかは、今後の研究が必要であるが。これまでの調査で過去形1が使えるのに対し過去形2が使えないと指摘された例文は確認できている。次の例文では、述語「行った」を表すためには過去形1「ハッター」は使えるのに対して過去形2「ハリシタ」は使えないようである。

- (11) バーヤ キューヤ ハイシャ ウキシティ ハタキング ハッター
 私は 今日 早く 起きて 畑に 行った
 baa=ya kyuu=ya haija uki-fiiti hataki=ne **hāt-taru**

これまでの調査では、過去形1は過去形2より使われる頻度が多く、おそらく過去形2は鈴木等が主張するように「特別な過去形」であろうが、その詳細は今後の課題としてのこす。

2.3 否定形

動詞の否定形は、「現在否定形」と「過去否定形」の二種類が存在する。以下の例文では、動詞「ウルル」(降りる)でその2つの形を示す。

現在否定形「ウルヌ」:

- (12) ンガタレー タローン ウルヌ
 ここでは 誰も 降りない
 ngataree taroo=n **ur-unu**

過去否定形「ウルナタ」:

- (13) キューヤ ガッコヌ マイタンガタリ ウルナタ
 今日 学校の 前で 降りなかった
 kyuu=ya gakkoo=nu maitangatari **ur-unata**

動詞の現在否定形は、以下の例文のように動詞の語幹に -anu または -unu をつけることによって表す。

- (14) ブナラー プイトウルイカテー ヌバナ
 妹は 一人では 寝ない
 bunaraa pi:turi=katee **nub-anu**

- (15) オーマヌ ミーヤ ウトウヌ
 熱しない 実は 落ちない
 oom-anu mii=ya **ut-unu**

この形は、動詞の未然形 (-a または -u で終わる形) と接尾辞 -nu に分析することができる。未然形が -a で作られるか -u で作られるかは、動詞の活用グループによるものであり、i 語幹グループは -u で作り、他のグループは -a で作る (詳細はセクション3を参考されたい)。未然形に「ヌ」をつけると現在否定形ができ、「ナタ」をつけると過去否定形ができる。

さら細かく分析すると、接尾辞 -nu は否定接尾辞 -n と現在接尾辞 -u に分析することもできる。それで、過去否定形は、その現在接尾辞 -u の代わりに過去接尾辞 -ata をつけることで作られるのである。上の例では、現在否定形「ウルヌ」に対して過去否定形が「ウルナタ」となっている。これと同じように、例えば「売らない」は現在否定形「カーハヌ」(kaahanu) で表すのに対して、「売らなかった」は過去否定形「カーハナタ」(kaahanata) で表すことになる。

- (16) キューヤ イサカハーリキ カーハナタ
 今日は 少ないので 売らなかった
 kyuu=ya isakahaariki **kaah-anata**

2.4 連用形

動詞の連用形は、形上では動詞の語幹と接尾辞 -i で作る。名前の通り、連用形は節と節をつなげる用法があり、また様々な助動詞を伴う用法もある。さらに、上で紹介した「現在形」と同じような意味で文末動詞として使われる用法もある。これらの用法を示す例文を簡単に紹介する。

まず、連用形が上で紹介した現在形と同じような意味で使われる例から紹介しよう。以下の例文は、どちらも日本語の「漕ぐ」の現在形の訳文であるが、前者では現在形「コー」(koo) が使われ、後者では同じ動詞の連用形「クイ」(kui) が使われている。

現在形「コー」の例：

- (17) ビキンドウンドゥ フネー コー
 男が 船を 漕ぐ
 bikindu=ndu phi:nee **koo**

連用形現在用法「クイ」の例：

- (18) ビキンドゥンドゥ フニ クイ
 男が 船を 漕ぐ
 bikindu=ndu φ̣uni kui

これまでの調査では、動詞の「原形」（日本語の現在形）を聞くと、連用形が頻繁にその訳として現れる。以上のような用法からわかるように、現在形と同じような意味で使われるようであるが、この2つの形の意味上の違いがどこにあるのかは今後の課題にしたい。

次に紹介する例文は、節と節をつなげる用法の例である。

- (17) カヌ スィトー フニ クイ スィマンゲ バタリ クィタル
 あの 人は 船を 漕いで 島に 渡って きた
 kãnu s̃ĩtoo φ̣uni kui s̃ĩma=nge batari k̃ĩ-taru

この例文では、連用形「クイ」が日本語の「漕いで」に相当する用法で、前節と後節をつなげる形である。

節と節をつなげる用法と同じように、連用形は本動詞と助動詞をつなげる形としても使われる。上の例文の文末動詞でもこの用法が見られ、「バタリ」が「渡る」の連用形で、「クィタル」が「来た」を意味する助動詞である。次の例では、「漕いでみよう」の意味を表すため、本動詞の連用形「クイ」に助動詞「ミラ」（みよう）が付いた形が使われている。

- (19) ムールカティ フニ クイ ミラ
 みんなで 船を 漕いで みよう
 muuru=kati φ̣uni kui mira

以上で説明したように、連用形は3つの用法がある。これに加えて、他の様々な活用形を作るために、連用形に接尾辞をつけて作る形がいくつか存在する。2.2で紹介した「過去形2」もその一つの例である。この形は、動詞の連用形に「シタ」(-ʃĩta)をつけることで作る形であるが、これと同じように以下で紹介する「接続形」も「進行形」も連用形に接尾辞をつけることによって作られる形である。

2.5 接続形

接続形は連用形に接尾辞「シティ」(-ʃĩti)をつけることで作る形である。接続形の一つの用法は、節と節をつなげて、その節と節の時間軸上の「順番」を表すものである。つまり、節1の動詞を接続形にすると、節1が描写している出来事が起こってから節2の出来事が起こる、という時間の関係を表すものである。

- (20) クジンガ ヌビシティ ハチジンガ ウキタル
 9時に 寝て 8時に 起きた
 kudzi=nga **nubi-f̥iti** hatʃidzi=nga uki-taru

しかし、接続形が常にこのような時間的な順番を表すわけではない。例えば、次の例では「着る」順番が表されているわけではなく、「私」が着た服の色と「妹」が着た服の色を対比するために接続形が用いられている。

- (21) バーヤ アカクィヌワ キシシティ ブナロー アオイル クィヌトゥ クィシタル
 私は 赤い服を 着て 妹は 青い 服を 着た
 baa=ya aka+k̆inu=wa **k̆iʃi-f̆iti** bunaroo aoiru k̆inu=tu k̆iʃi-taru

以上のような用法は、連用形にもあるが、接続形は連用形と違って、助動詞を伴う用法や文末で使われ「現在」の意味を表す用法はないようである。また、接続形は上で紹介した「過去形 2」と形上で非常に似ているため、おそらく歴史的にはこの2つの形は関係があると思われるが、その関係はまだ不明である。

接続形は上で説明したように基本的に動詞の連用形に「シティ」をつけて作られるが、次の例文のように「シティ」の「ティ」が抜けて「シ」だけでできている接続形も観察されている。

- (22) クィヌ ツィカナイル スィトゥワ キリシ ピンキ ハツタル
 昨日 (馬が) 養っている 人を 蹴って 逃げて 行った
 k̆inu ts̆ikana-iru s̆itu=wa **k̆iri-ʃi** p̆inki h̆at-taru

「シティ」で終わる接続形と「シ」で終わる接続形の違いは今後の課題として残すが、後者はこれまでの調査で確認できた用例は上のものだけであり、「シティ」で終わる形より使われる頻度が低いようである。

2.6 進行形

「進行形」として考えられる形には、いくつかの形が確認されている。1つ目は、「現在進行形」と呼ぶことにし、形上では連用形に「ル」(-ru)をつけることで作られる形である。日本語の「～している」と同様に、ある行動が現在行われている最中にあるという意味を表す用法がある。

- (23) ウレー ビーシティ ヌビル
 彼は 酔っ払って 寝ている
 uree bii-f̆iti **nub-iru**

- (24) オキヤクサマー ビリシティ マールムヌワ ファイル
 お客様は 座って ごちそうを 食べている
 okyakusamaa biri-ŋiti maarumunu=wa **ɸa-iru**

また、日本語の「～している」と同様に、動詞によってはその行動の結果が現在に残っているという意味を表す用法もある。

- (25) ヌーンディトゥ ウヌ キーヌ パーヤ ウティル カヤー
 なんて その 木の 葉は 落ちている かな
 nuundi=tu unu kii=nu paa=ya **ut-iru** kayaa

i 語幹動詞（セクション3参考）は、現在進行形と現在形が同じ形であり、上の例文の「ウティル」はこの例では意味から考えて現在進行形であることがわかるが、現在形も「ウティル」となるのである。この現象は、八重山語の他方言でも観察できる。

現在進行形は、八重山語の他方言を考慮すると、おそらく動詞の連用形+助動詞「ウル」からできた形であると思われるが、連用形+ウルの形自体はまだ小浜方言では未確認である。しかし、「過去進行」を表すためには、以下の例にあるように、動詞の連用形「フィー」（降って）+助動詞「ウッタ」（いた）という形が存在する（この例では、本動詞の連用形に焦点助詞「トゥ」が付き、助動詞「ウル」が過去形1で現れている）。

- (26) クィヌヤ アメー フィートゥ ウツタル
 昨日は 雨は 降って いた
 k̄inu=ya amee **ɸii=tu** **ut-taru**

連用形+ルで作る現在進行形の他に、連用形+タルで作る形も以下の例で示すように存在する。

- (27) ウトゥトー ミナマー ヌビタル
 弟は 今 寝ている
 ututoo minamaa **nub-itaru**

この例文で使われている「ヌビタル」は、上の例文(23)の「ヌビル」と同じような解釈であり、どちらの例文も日本語の「寝ている」の訳である。よって、例文(27)の「ヌビタル」のような形も一種の「現在進行形」であろうが、これまでの調査ではこの形はまだ十分確認されていなくて、今後の研究の課題として残す。

2.7 完了形

完了形とは、動詞の語幹に接尾辞 **-een** または **-eeru** をつけた形である。日本語の「～してある」形に相当すると思われるものであり、母語話者がこの形が使われる例文を日本

語に訳すときには「～してある」と訳すことが多い。ちなみに、ここでいう「～してある」形は、日本語共通語のそれとは用法が違い、沖縄県で広く使われているものである。これまでの調査ではこの形はまだ十分に確認できていないため、細かい分析を今後の課題として残す。一つだけ書いておくべきこととして、日本語の過去形が使われるところでは、この「完了形」が使われることがある。以下の例文もそういうものである。

(28) ウスインドウ ミームヌ ナヘール
牛が メスを **産んである**
usi=ndu mii+munu **nah-eeru**

(29) パイワ フンミ カゴング イレール
足を 縛って かごに **入れてある**
pai=wa funmi kago=nge **ir-eeru**

以上の例文では、完了形が「過去に起きた出来事の結果が現在にも継続している」というニュアンスを表し、そこで「結果形」というラベルでも相応しいのかもしれない。「結果が現在にも継続している」という意味があり、この形は強いて言えば「現在完了形」と呼ぶべきである。これに対立する「過去完了形」も確認されている。過去完了形は、語幹に接尾辞 **-eeta** をつけた形であり、これまでの調査で確認できているのは以下の例だけである（協力者自身がこの形を「来てあった」と訳している）。

(30) オー イキシティヤ イツィワ トゥリ ケータ
はい （海に）行って 魚を とって **来てあった（来た）**
oo iki-fʲiti=ya itsi=wa tʲuri **k-eeta**

2.8 命令形・禁止形・志向形

命令形は連用形と同じように語幹に接尾辞 **-i** で作られる。また、その後ろに終助詞「ワ」(=**waa**) を伴うことが多い。

(31) フチリ ヌミシティ パイシャ ヌビワー
薬を 飲んで 早く **寝ろ**
ɸʊtʲiri numi-fʲiti paiʃa **nub-i=waa**

(32) ウヌ キーワ キシワー
その 木を **切れ**
unu kii=wa **kij-i=waa**

- (33) ウレーヤ シテイリ
 それは 捨てる
 uree=ya ʃiti-ri

ここでいう「命令形」は日本語の「～しろ」形で訳したが、それと全く同じような使い方ではないと思われる。例えば、丁寧な命令文を作るために、本動詞の連用形に尊敬助動詞「ワール」の命令形「ワーリ」をつけることができるようである。

- (34) ウワン ザブトンガ ビリ ワーリワー
 あなたも 座布団に 座って なされ
 uwa=n zabuton=ga **bir-i** **waa-ri=waa**

志向形は、語幹に -a をつけて作られる形である。多くの動詞では、この形が現在否定形の最後の「ヌ」をとった形（つまり未然形）と同じ形で作られる。例えば、「イク」（行く）の現在否定形は「イカヌ」であり、志向形が「イカ」である。しかし、i 語幹ではこれらの形が異なるようである。例えば、「ウルル」（降りる）の否定形は例文（12）のように「ウルヌ」となるが、志向形が「ウリラ」となる。

- (35) ファイムノー ムチ インゲ イカ
 食べ物を 持って 海に 行こう
 fai+munoo mutʃ-i in=ge **ik-a**

- (36) ディー ウリラ
 さあ 降りよう
 dii **uri-ra**

志向形の意味は、話者だけの志向を表す方法（37）と、聞き手と一緒に行動を促す方法（38）がある。志向形の後ろに、終助詞「ナー」が伴うこともある。

- (37) ミナマカラ バヌタンガーカティ フニ クイ ハラナー
 今から 私だけで 船を 漕いで 行こうね
 minama=kara banu=tangaa=kati ʃuni kui **hara=naa**

- (38) ムールカティ フニ クイ ミラ
 みんなで 船を 漕いで みよう
 muuru=kati ʃuni ku-i **mi-ra**

禁止形は、語幹に -una をつけて作られる形である。これまでの調査ではまだ用例が少なく、例文を紹介するだけにし、これ以上細かい分析は今後の課題として残すが、一つだけ記録すべきところは、禁止形は現在形+ナではないようである。「捨てる」は小浜方言で

は現在形は「シティル」となるはずであるが、その禁止形が「ストゥナ」(sɯtuna) となり、禁止形は常に現在形と似た形で現れるわけでないようである。

- (39) クポーリヤッサリキ カタチカテー ムツナ
 こぼれやすいので 片手では 持つな
 kupoori-yassar-iki k̄ata+tʃi=katee **mut̄s-ɯna**

- (40) ウレーヤ ストゥナー
 それは 捨てるな
 uree=ya **sɯtuna**

3 動詞の活用グループ

上のセクションでは、これまでの調査で確認できた動詞の主な活用形を紹介した。このセクションでは、これらの活用形の音声上の問題を簡単に紹介する。つまり、ある動詞を上で紹介した形に活用したときに、その動詞の語幹がどう変化するのか、接尾辞との関係が音声上でどう現れるのか、という問題である。八重山語の他方言と同じように、動詞の活用形の現れ方は、基本的にその動詞の語幹の最後の音によって決まるものである。よって、動詞を語幹の最後の音で分別し、「〇〇語幹」というラベルでグループに分ける。例えば、「b 語幹」動詞は、語幹が子音「b」で終わるものであり、以上の例文で見てきた「ヌブ」(寝る) がその一つの例である。この動詞の主な活用形を次のようにまとめられる。

現在形	過去形 1	現在否定形	連用形
ヌブ	ヌフタ (ル)	ヌバナ	ヌビ
nub-u	nuɸ-ɯta	nub-anu	nub-i

この4つの活用形以外の多くの形は、これらの形から予測できると思われる。例えば、現在否定形の最後の「ヌ」をとって「ナタ」をつけると過去否定形になる。上の動詞を例にすると、現在否定形「ヌバナ」の「ヌ」をとった形に「ナタ」をつけると「ヌバナタ」となり、これで過去否定形の形が計算される。連用形からは、上でも説明したように、過去形2・接続形・進行形・命令形が計算できる。よって、一つの動詞のこれまで紹介した活用形を予測するために、まずはこの4つの形を確認すればいいのである。(以上で紹介した「完了形」は、これまでの調査ではまだ数が少ないため、今回の話から外す。おそらく、連用形で使われる語幹と同じ語幹に **-een** または **-eeru** をつけることによって作られる形であると思われるが、今後の研究で確認する必要がある。志向形や禁止形も、まだ用例が少ないため、今後の課題として残す。)

以下では、活用グループ(語幹グループ)別でこれまで確認できた動詞の形をこの4つの活用形に絞ってテーブルで紹介し、テーブルの下でその語幹グループの注意点を簡単にまとめた。なお、これまでの調査で確認されていない動詞の活用形が多く、今後の研究で

これら未確認の形を確認する必要がある。また、今後の調査で以下で反映されていない活用グループが確認される可能性もある。特に、「死ぬ」に相当する動詞は以下のテーブルでは反映されず、おそらく n 語幹動詞として以下のグループとは違うパターンを示されると思われる。テーブルの空となっているところは未確認の形で、(括弧) で囲まれたものは、それがあある形となない形が両方確認されているものである。

3.1 b 語幹動詞と p 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
b 語幹					
nub	寝る	ヌブ	ヌフタ(ル)	ヌバナ	ヌビ
		nubu	nuɸɯta(ru)	nubanu	nubi
kab	かぶる	カブ	カフタ(ル)	カバナ	カビ
		kabu	kaɸɯta(ru)	kabanu	kabi
p 語幹					
tɯp	飛ぶ	トゥプ	トゥッタ	トゥパヌ	トゥピ
		tɯpu	tɯtta	tɯpanu	tɯpi
asɯp	遊ぶ	アスプ	アスツタル	アスパヌ	アスピ
		asɯpu	asɯttaru	asɯpanu	asɯpi

b 語幹動詞の活用例を見ると、過去形 1 で音便化が生じて、本来の語幹の最後の b が ɸ となっている。p 語幹動詞は、歴史的には b 語幹動詞であり、八重山語の他方言では今でも b 語幹動詞として活用される。p 語幹動詞の由来は、小浜方言の一つの特徴である無声化にある。これまでの調査で確認した動詞では、「トゥプ」(飛ぶ)と「アスプ」(遊ぶ)が p 語幹動詞であるが、「トゥプ」は歴史的には「トゥブ」から変化したもので、「アスプ」は「アスブ」から変化したものであろう。その変化は、「トゥブ」の場合は、tubu の無声子音 t の後の u が無声化し、さらにその次の有声子音が無声化し、結果的に tɯpu となったものであろう。「アスブ」も、同様 asubu から asɯpu となったものであろう。p 語幹動詞は、b 語幹動詞と同様、過去形 1 では音便化が生じるが、その形が異なり、p が t と変化した形で現れるようである。b 語幹の他に p 語幹が別の活用グループとして成立していることが、八重山語の中でも小浜方言の一つの特徴である。

3.2 k 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
k 語幹					
ik	行く	イク		イカヌ	
		iku		ikanu	
aruk	歩く				アルキ aruki

	現在	過去 1	現在否定	連用
ɸɸk	吹く			フキ ɸɸki
sɨk	聞く		スイカヌ sɨkanu	

これまでの調査では、k 語幹動詞の過去形 1 はまだ未確認であり、今後の調査で確認する必要がある。それ以外の形は、予測どおりのものとなっている。

3.3 ts 語幹動詞

	現在	過去 1	現在否定	連用	
ts 語幹					
muts	持つ	ムツ mutsu	ムツィタル mutsɨtaru	ムツァヌ mutsanu	ムチ mutɸi

ts 語幹動詞は、これまでの調査では「ムツ」(持つ) だけである。ts 語幹であり、t 語幹でないことは、否定形から明らかである。日本語の「持つ」と同じように t 語幹だったとしたら、現在否定形が「ムタヌ」(mutanu) となるはずであるが、実際には「ムツヌ」(mutsanu) である。どの形にしても語幹が ts で終わり、よって「ts 語幹」であると判断できる。連用形の mutɸi は、s が i の前で常に生じる口蓋化である。

3.4 h/s 語幹動詞

	現在	過去 1	現在否定	連用	
h/s 語幹					
kaah	売る	カーフ kaaɸu	カースイタ kaasɨta	カーハヌ kaahanu	カーヒ/カイ ka(a)(h)i
aarah	洗う	アーラフ/ アーラウ aara(ɸ)u	アーラスィタル aarasɨtaru	アーラハヌ aarahanu	アーライ aarai
abaah	落とす		アバースイタル abaasɨtaru		アバーヒ abaahi
utooh	落とす		ウトースィタ(ル) utoosɨta(ru)	ウトーハヌ utoohanu	ウトーヒ/ ウトーイ utoo(h)i
ndah	出す	ンダフ ndaɸu		ンダハヌ ndahanu	ンダイ ndai

この活用グループは、八重山語石垣方言では s 語幹となるが、小浜方言ではその s が h

となりながら、過去形 1 だけで s として残っている。この現象は、宮良方言でも観察され、おそらく宮良方言が小浜方言の影響を受けてきたところであろう。現在形では h が u の前で ϕ になるのは、音韻上の一般的な変化である。h が場合によって抜けることもあり、例えば「落とす」の連用形は「ウトーヒ」(utoohi) とも「ウトーイ」(utooi) とも言えるようである。このグループの中には、他の動詞の使役形と考えられるものがあり、例えば i 語幹動詞 abai (枝から離れて落ちるという意味) の使役語幹 abaah (枝から離して落とす) がそうである。また、八重山語他方言では、「洗う」は a 語幹の aara のようなものとなるが、小浜方言ではその動詞が h/s 語幹グループに入っているようである。

3.5 s 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
s 語幹					
k̄s	切る	クイス	クイスイタル	クィサヌ	キシ
		k̄su	k̄s̄itaru	k̄sanu	k̄ji
k̄s	着る	クイス	クイスイタル	クィサヌ	キシ
		k̄su	k̄s̄itaru	k̄sanu	k̄ji

s 語幹動詞は、これまでの調査では以上の 2 つの動詞だけであり、s/h 語幹動詞とは違って、常に s となっているようである。この 2 つの動詞は発音上では同じようであり、いずれにしても子音と子音の間の母音の無声化が強いため、その発音を正確に確かめるのが難しい。しかし、以上で表記しているように、語幹の s の前の中舌母音 i が連用形では i となっているように聞こえる。

3.6 r 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
r 語幹					
h̄ar/ p̄ar	行く	ハル	ハッタ(ル)/		ハリ
		h̄aru	パッタ(ル) h̄atta(ru) / p̄atta(ru)		h̄ari
waar	いらっしゃる	ワール(ン) waaru(n)	ワ(一)ツタル wa(a)ttaru	ワーラヌ waaranu	ワーリ waari
t̄ur	とる	トゥル t̄uru	トゥツタル t̄uttaru / tuttaru		トゥリ t̄uri
k̄ir	蹴る	キル	キツタル	キラヌ	キリ
		k̄iru	k̄ittaru	k̄iranu	k̄iri

		現在	過去 1	現在否定	連用
φ _y r	掘る	フル(ン)	フッタ	フラヌ	フリ
		φ _y ru(n)	φ _y tta	φ _y ranu	φ _y ri
ir	もらう		イッタル	イラヌ	イリ
			ittaru	iranu	iri
bir	座る	ビル	ビット	ビラヌ	ビリ
		biru	bi(t)ta	biranu	biri

このグループは、過去形 1 の音便化が生じて、日本語の r 語幹と同じようなパターンを示す。

3.7 m 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
m 語幹					
num	飲む	ヌム	ヌンタ	ヌマヌ	ヌミ
		numu	nunta	numanu	numi
oom	熟する			オーマヌ	オーミ
				oomanu	oomi
φ _u mm	縛る		フンタ	フンマヌ	フンミ
			φ _u nta	φ _u mmanu	φ _u mmi

このグループは、過去形 1 では m が n となる音便化が生じる。また、φ_umm が 2 つの鼻音子音で終わっているが、過去形ではその一つが消える。

3.8 n/m 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
n/m 語幹					
φ _y n /	履く			フマヌ	フニ
		φ _y m		φ _y manu	φ _y ni

このグループは、これまでの調査では一つの動詞だけであり、現在形と過去形 1 は未確認であるが、現在否定形と連用形を比べると、それぞれの語幹が m と n で終わり、上で紹介した m 語幹動詞のパターンと異なるようである。この動詞の他の活用形は今後の研究で要確認である。

3.9 i 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
i 語幹					
uri	降りる	ウリル	ウリタ(ル)	ウルヌ	ウリ
		uriru	urita(ru)	urunu	uri
uti	落ちる	ウティル		ウトウヌ	ウティ
		utiru		utunu	uti
tumi	探す		トゥミタル tumitaru		
pinki	逃げる		ピンキタ(ル) pinkita(ru)		ピンキ pinkii
ʃiti	捨てる		シティタル ʃititaru	ストウヌ sʉtunu	
ʃi	くれる	フィル	フィ(ー)タル	フヌ	フィー
		ʃiru	ʃi(i)taru	ʃunu	ʃii
baki	分ける		バキタル bakitaru		
ʃintʃimi	片付ける	シンチミル	シンチミタル		
		ʃintʃimiru	ʃintʃimitaru		
uki	起きる	ウキル	ウキタ(ル)	ウクヌ	ウキ
		ukiru	ukita(ru)	ukunu	uki
bii	酔う		ビータル biitaru	ビョーヌ byoonu	ビー bii
abai	落ちる	アバイル	アバイタル	アバウヌ/ アバーヌ	
		abairu	abaitaru	abaunu	
				abaanu	
mi	見る	ミル	ミ(ッ)タル	ミラヌ	
		miru	mi(t)taru	miranu	

このグループの一番大きな特徴は、否定形である。他のグループでは現在否定形は基本的に動詞の語幹に **a** をつけた上でさらに **nu** をつけることによって作られるが、**i** 語幹動詞は **a** の代わりに **u** が付く。この特徴は、八重山語の他方言でも観察される。このグループの中で例外的に見えるのが、「見る」であり、その否定形が「ミラヌ」(miranu) のようである。よって、この動詞を不規則動詞として扱うべきなのかもしれない。また、「酔う」を意味する動詞の語幹 **bii** が長母音で終わり、その否定形が「ビョーヌ」となり、他の動詞とは形が違う。**abai** (枝から離れて落ちる) の否定形は、「アバウヌ」(abaunu) も「アバーヌ」(abaanu) も両方観察されている。おそらく、長母音の **ii** で終わっている語幹や、**ai** のように2つの母音で終わっている語幹の活用形がこのグループの他の語幹とは違い、それに

向けた今後の研究が必要である。

3.10 u 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
u 語幹					
ku	漕ぐ	クー/コー	コータ	コーヌ	クイ
		kuu / koo	koota	koonu	kui
φu	降る	フォー(ン)	フォータ /	フォーヌ /	ファイ
		φoo(n)	フ(ッ)タ	ファヌ	φui
			φoota /	φoonu /	
			φu(t)ta	φanu	
φu	閉じる		フォータル	フォーヌ	ファイ
			φootaru	φoonu	φui

このグループの活用形は、動詞によって少し揺れる傾向があるようである。「漕ぐ」の語幹が ku であると思われるが、その現在形は「クー」(kuu) としても「コー」(koo) としても現れるようである。おそらく、予測される形「クー」が高母音の長母音となり、傾向としては高母音が半狭母音として発音される傾向があり、ここでは長母音 kuu から半狭母音 koo となったものであろう。「降る」の現在形「フォー」(φoo) も同様である。過去形 1 でもこのような揺れがある。否定形では、基本的に oo となり、コーヌ koonu (買わない)・フォーヌ φoonu (降らない)・フォーヌ φoonu (閉じない) のような形となる。しかし「降らない」は「フォーヌ」の他に「ファヌ」という形も観察されて、この形は予測外である。この形は、おそらく次に紹介する a 語幹グループとの間の揺れによる形であると思われる。

3.11 a 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
a 語幹					
φa	食べる	フオーン	フオータ(ル)	フアーヌ	フアイ
		φoon	φoota(ru)	φaanu	φai
ka	買う	カウ	カウタ	カーヌ	カイ
		kau	kauta	kaanu	kai

このグループの動詞は、「フォー」(φoo) のように母音融合が生じるものと「カウ」(kau) (買う) のように生じないものがある。現在否定形と連用形を見れば、これらの語幹が両方 a で終わっていることがわかる。しかし、現在形と過去形 1 では、その活用形の現れ方が違う。前者の現在形がフオーン φoon で、過去形 1 がフオータ φoota となるのに対し、後者の現在形がカウ kau で、過去形 1 がカウタ kauta となる。このような対立は、八重山語の他方言でも観察される (例えば、石垣方言や宮良方言でも見られる)。

3.12 その他（不規則動詞）

		現在	過去 1	現在否定	連用
不規則語幹					
k	来る	クー	クィタ(ル)		キー
		kuu	kʷita(ru)		kii

不規則動詞には、これまでの調査では「来る」が確認されている。この他に以上で説明したように「見る」も不規則動詞として扱うべきなのかもしれない。

4 まとめと今後の課題

本報告では、これまでの調査で確認できた主な動詞の活用形を紹介し、また活用グループ（語幹グループ）の特徴も簡単にまとめた。今後の研究では、まだ確認できていない動詞の活用形を確認し、対象とする動詞の数も増やすべきである。また、以上で紹介した活用形の細かい用法を把握するために、聞き取り調査を続けながら、自然談話の中でこれらの形がどのように使われるかを観察しなければならない。

また、本報告では扱っていない形もあり、今後の研究でそれらを明確にしてまとめる必要がある。特に必要となるのは、節と節をつなげるために使われる「仮定形」「確定形」などである。本報告では、節と節をつなげるために使われるものとして「連用形」と「接続形」を紹介したが、これ以外の形は今後の研究で報告したい。また、連用形が伴う様々な助動詞の詳細も、今後の機会で報告したい。

参考文献

- ・ 記念誌編集委員会（編）（2010）『小浜中学校創立六十周年記念誌・ふるさとの味・しまくとぅば』、小浜中学校創立六十周年事業期成会。
- ・ 福田晃（編）（1984）『竹富島・小浜島の昔話：沖縄県八重山郡竹富町』、南東昔話叢書第9号、同朋舎出版。
- ・ 仲原穰（2004）「八重山小浜方言の音韻」『沖縄芸術の科学』、第16号、pp.259～287、沖縄県立芸術大学附属研究紀要。
- ・ 中川奈津子・タイラーラウ・田窪行則（2015）「琉球八重山語白保方言の音韻」『琉球諸語 記述文法 I』（狩俣繁久（Ed.））、pp.1-21。
- ・ 鈴木重幸（研究代表）（2001）『石垣方言の動詞のアスペクトとテンス(中間報告)：琉球八重山方言の動詞の研究』、文部省科学研究費補助金研究成果報告書、科研費課題番号11610438。

与論島「方言劇」 地域社会へのインパクトと「旅人～たびんちゅ」の役割

前田 達朗（京都外国語大学）

はじめに

本報告は2017年度から与論島（鹿児島県大島郡与論町）で始まった「方言劇」についての2018年12月の現地での調査を中心としたもののまとめである。2017年の報告¹で触れたように、初めての試みとして大いに歓迎され受け容れられたと言えるが、直後の反応だけではなく地域への影響、とりわけ人々の意識など、一年をかけての変化も記録する必要があるとも考えた。我々の研究目的としては「演劇」というメディアが地域言語の継承にどのような役割が果たせるのかが重要であって、イベントとしての演劇の成功だけが意味を持つものではないからだ。またアーカイブ作成は言語学者にしか使えないものではなく、琉球諸語を学習言語とする機会がある全ての人々の使用に耐えなければならないと考えているが、そのためには見やすく効果的なメディアと記録の方法はアーカイブ構築の際に考えるべきであり、実際に「使われる場」としての演劇の可能性は大きいといえる²。

本稿は与論町の人々へのインタビューを手がかりとしている。後述するが与論語は「ゆんぬふうとうば」という音訳もあるが、与論でも「方言」はむしろ固有名詞であり、たとえば文化庁が使う「方言」とは別のものであることは明らかだが、人々の呼称、あるいは自称として尊重する³。そして小さな規模のコミュニティに特有なことであるが、人間関係が密であるが故に発言が予期せぬ影響を与えることがある。ここでは個人が特定されないために誰のコメントであるかわからない配慮を最大限にとる。そして仮に引用されたコメントの中に事実と誤認があるなどのことがあったとしても、それは調査者である筆者の責任である。以下『』の中はインタビューの回答の引用であり、一部編集も加えている。

1 「方言劇」と与論島、問題の所在

1.1 文化庁助成事業としての「方言劇」の概要

2017年度に始まった与論島での「方言劇」は文化庁の「戦略的芸術文化創造推進事業」から助成を受けている。この事業の文化庁側のねらいは「文化芸術の水準向上、鑑賞機会の充実・文化による国家ブランドの構築、文化による社会的、経済的価値の創出」とされ

¹ 石原昌英(2018)、前田達朗(2018)

² コンテンツの詳細は現時点で確定していないが、「学習に寄与できるもの」というコンセンサスはできている。しかしながら現在のところいわゆる言語調査が大半であるので、それをどう見せるかがこの研究の課題であろう。

³ 筆者の立場としては、琉球諸語は独立した言語で、日本語とは同系ではあるが、方言と呼ばれるのは言語的な近似性に依るよりも政治的な力学が働いていると考えている。

ている⁴。このうち、「鑑賞機会の充実」についての地域社会での課題の一つとして、「地方や離島、へき地等において、優れた文化芸術活動を鑑賞・参画する機会と社会的価値等を創出する取組」があげられている。巻末に採用された事業の一覧を添付するが、「方言」を手がかりにしているものは与論の事案だけである⁵。この事業に応募するのは自治体ではなく各芸術団体である。与論が採択された理由は明らかにされていないが、2016年の「方言サミット」をきっかけに、地域でのとり組みへの意識がたかくなり、「かつこいいと思われるもの」⁶として演劇という手法が紹介され、それが応募と採択につながったと。地域でのとり組みが特になかったことも応募と採択に影響した可能性がある。ここで繰り返しておきたいのは、応募の主体が芸術文化団体であるため、地域の人々とどれだけの意思疎通ができていけるかが成功の可否を握る。この与論島では、スーパー・エキセントリック・シアター (SET) という、もはや説明の必要のないくらい有名な劇団のスタッフが事業の申請と制作に関わっている。与論の人々にとっては最初から高度なものと触れる機会ともなっているのだが、一方で後述するように「どうやれば自分たちの演劇が自分たちだけでできるか」ということを考えるのが難しいという状況も生んでいる。

1.2 与論町と社会・言語状況

与論語は UNESCO の Atlas of the World's Language in Danger にあげられている国頭語の下位方言である。また Ethnologue では Yoron と Kunigami とは別の言語とされている。与論町の人口は 2015 年の国勢調査でおよそ 5200 人、人口動態としてはわずかであるが自然減が続いている。しかしながら社会増についていうと転入と転出がほぼ同数ということがこの 10 年続いている。それぞれ 300 前後という数字であるが、全人口から見ると無視できない数字である。⁷また高齢化率は 33%程度で奄美群島のほぼ平均、全国レベルでも高い。(鹿児島県全域で 31%、沖縄県 21%)

年代別人口 (国勢調査 2015) は以下のとおりである。

80 歳以上	706
60 歳～79 歳	1398
50 歳～59 歳	815
40 歳～49 歳	544
20 歳～39 歳	771
20 歳未満	952
計	5186

⁴ この項については文化庁ホームページおよび文化庁国語課国語調査官の鈴木仁也 (まさなり) 氏との談話および書簡に基づいている。

⁵ http://www.bunkago.jp/seisaku/geijutsubunka/jutenshien/senryaku/pdf/h30_senryaku_jigyo_2.pdf

⁶ 鈴木氏談。

⁷ http://www.yoron.jp/common/UploadFileDsp.aspx?c_id=22&id=47&flid=13

40代と50代を分けたのは、このあたりに「話者」の年代による境界線があると考えられているからである。このような「自己評価」は他の奄美群島よりも若い世代が与論語を使うということが覗える。特定の職種（漁業、土木・建設業などの現業）では与論語が日常的に使われており、島外出身者も含めてできることが望ましいといわれている。この点については未確認であるが、30代でも日常的な話者が存在することは確認できた。性差や職業などによる差があることが予想されるが、日常的に使われる場面が比較的多い可能性がある。さらなる社会言語学的調査が望まれる。単純に50代以上が話者だと考えても、相当数の話者が存在することになり、日常的に「方言」を話し聞く環境は存在すると言える。

また統計によると20代の前半の数が最も少ない（この調査で49名）がその傾向は何年か続いている。しかしこれまでのところ、その年代の人口は後に回復している。想像できるのは他の島同様に進学もしくは就職でいったん離れるものの戻ってくる人が多いということである。畜産業なども軌道に乗り、観光産業はかつてほどの勢いはないと言われるが、5000人という小さなコミュニティではあるが、活力はあるといえよう。

集落は9つだが3つの小学校区がある種の行政区分として機能している。中学校と高校が一つずつある。島内での方言差も意識されている。また鹿児島まで580km、那覇まで120kmという距離が示すように、経済圏は沖縄であると言っても間違いはない。名護の本部まではフェリーで2時間半である。

改めてであるが、与論島は鹿児島県の行政下にある。本土への移住、戦中・戦後にわたる方言排斥の記憶と⁸米軍政治の経験、「本土復帰」については他の奄美群島と共通するところが多い。ただ20年近くにわたって目の前に見える沖縄島との間に「国境線」があったことは与論だけの経験であるともいえる。

1.3 「もう一つのあじにつちえ（按司根津栄）伝説」と「空亡」

これらは2017年の初回の「方言劇」のタイトルと2018年のものである。按司根津栄の伝説は15世紀の北山王朝による与論侵攻に一人立ち向かい琉球軍を一度は押し戻したという英雄伝説をモチーフに、SETの坂田鉄平の脚本、白土直子の演出によって制作・上演された⁹。SETはこうした都市部以外での地域住民と演劇を作る活動の実績があり、その点も採択の材料になったと考えられる。白土も経験は豊富で、演劇経験のない人々を集め短い時間で仕上げるといった困難な作業ができる演出家、舞台監督といえる。脚本は書き下ろしで台詞のうち「方言」の部分は主に今の与論の若者たちがタイムスリップしたときの「昔の人」が話す言葉であった。その他は琉球の侵略軍も含め東京語を話していた。演技であることも含め演者の普段の言語がわからないレベルまで訓練されていたが、若い世代、特に10代20代には特に無理がないようだった。沖縄から音響と照明のスタッフ、沖縄の劇団から俳優が一名助演という形で参加し、白土の不在時には演技指導も行った。およそ3ヶ月という準備期間であったが、この条件の中では完成度の高いものであり、与論の人々へのインパクトは大きかった。この劇をきっかけに特に子どもたちが伝説の人物に興味を

⁸ 前田達朗(2013)

⁹ 前田達朗(2018)

もち、祀られている場所や集落を訪ね、小学校の授業としても取り上げられるなどの想像していなかった効果があったという。

その「実績」を受けての二回目、二作目の「空亡」（くうぼう）は脚本のコンペが行われ、応募作のうち末吉功治の作品が選ばれた。末吉は沖縄の劇団 TEAM SPOT JUMBLE (TSJ) の所属であり、沖縄で制作され全国的に知られることとなった戦隊もの「琉神マブヤー」¹⁰の重要なキャラクター「龍神ガナシー」役として人気の現役俳優である。与論でも子どもたちはマブヤーとガナシーを知っていた。TSJもまたSETを主宰する三宅裕司の発案で2005年沖縄を地盤に活動を行う劇団として立ち上げられたものである。末吉自身東京での生活経験があり「ことばについて辛い思いをしたし、シマの言葉には思い入れがある」とのことであった。ストーリーは以下のようなものだ。

平和だった島にいろいろと不思議なことが起こる。真冬に暑く、動物たちは死に、魚が突然捕れなくなった。困り果てた漁師たちはモメはじめるが、漁師仲間から「頭」とよばれる男が今では誰も信じなくなったヤブ（ユタ）に相談に行くと「空亡が来る」とだけ言い続ける。空亡とは空が海に、土地に、善が悪に、世の中のもの全て逆転してしまうことなのだという。いつものごとく気が触れたと誰も相手をしなかったが、妖怪の集団が海から上陸してくる。島民は抵抗を試みるが捕らえられ降伏する。妖怪たちは降伏する条件として若者に自分の親を殺すように迫る。親を殺して帰ってきた若者たちは妖怪の親玉、海入道に島から出ると言われる。その海入道の前に立ちはだかったのが、島民に狂人扱いされてきたヤブだった。

伝統や老人を軽んじた若い世代が、最後はそれに救われるというもの、親殺しのシーンはその象徴であろう。最初にコンペで採用された脚本は、妖怪ではなくやくざが島に乗り込んでくるという設定であったが、子どもも見る、町の行事の一環ということで大幅に改作された。巻末に脚本の一部を付すが、前回と違い今回の作品はまず与論語に全訳された。キャストの配役も前回は「方言」ができる人物を話す役に配することがされたが、今回はネイティブスピーカーが日本語だけを話す役にも配され、「方言」の台詞を普段は使わないキャストがつとめていた。「方言」の割合と存在感は大きく前作から変化した。ストーリーを理解するのに重要な台詞、たとえばヤブの台詞も与論語であった。長い語りもあったが子どもも含めた観客に飽きたような反応は見えなかった。若者の日常会話が日本語であるのは前作と変わらないが、「バイリンガル」が重要な役どころで現れた。また「笑い」も盛り込まれていた。『笑いの感覚が近くてやりやすかった』と出演者が評していた。与論語だけの台詞で笑いが起こるという前作では考えられないこともあった。合う合わないということ、あるいはキャストが演じることに慣れたなど様々な原因も考えられるが、今回の脚本の方がよかったとキャストが感じていることは劇そのものの完成度にも大きく関わったように見えた。キャストは前回からおよそ半数が入れ替わり 23 名。観客も前回同様に 300 名近くいた。全町の人口を考えると関係者だけでも相当の割合となることも忘れてはいけない。

¹⁰ マレーシアではリメイク版が制作され人気を博した

1.4 なにを考えるべきか

「はじめに」でも述べたが、我々が設定した大きなテーマは「演劇は言語継承に効果的か」というものである。これに沿ってこの与論の事例について考えると、始まったばかりでもあることから「効果」はどこに現れるかについての設定が必要であろう。まずは人々の反応であろう。石原(2018)、前田(2018)でも試みたが、特に石原についていうと、上演が終わった直後に観客にアンケートをするというもので、いわば興奮冷めやらないうちの生の反応ということで「効果」という意味では貴重な資料であろう。効果という多義的な言葉の使い方を絞る必要があるが、関わった人々がどのように捉えているか、意識が変わったか、そしてどのように動いたかということだとする。結論を先に述べることになるかもしれないが、人々は演劇という手法に「方言」の継承に改めて意義を見出し、継続の方法を探っている。次節ではこれらの動きや意識の変化を「反応」とし「効果」は人々がなにを見だし、意識がどう変わったか、ということだと考える。

2 スタッフ・キャストの反応

この節では「方言劇」に直接関わった人々へのインタビューから得たものをそれぞれのトピックごとに整理することで考察を加えたい。ここでは3つのトピック；「方言」、「旅人(たびんちゅ)」、「継承、次世代への思い」についての語りを手がかりに1で述べたようなものを背景として「方言劇」について考えていくことになる。

2.1 「方言」

与論出身で20代以上の出演者は全員が与論以外の土地に住んだ経験がある。これはもちろんこのキャストに特別なことではなく、既述のように高校を卒える、あるいはそれ以前から島を出るのが多数派であり世代を超えて共有される経験でもある。『だから方言の大切さがわかるんでしょうね』という語りも共通する。これは琉球列島全域で聞かれる言説であるが、他の多くの島の場合は現行の方言も含まれることが多いが、与論の場合40代の人でも環境として与論語が存在していたという。『30年島を離れていたのに、島に戻ったら方言がしゃべれる自分に驚きました』との語りもあった。『だから、私が島を離れている間に方言が減っていて悲しかった』。母語を相対化できる機会が島を離れることだと言えるレベルの人々が多くいる。そして次の世代が話せないことへの危機感が高齢者以上であるとも言える。『方言劇と聞いたときすぐに返事してしまいました』。しかし一回目の「方言」の扱われ方は『最初だから仕方ないか。最初だからあんなものでしょう』と考えていた二回連続の出演者がいた。『もっとできる、ていうか「方言劇」と言っているのにみんな遠慮してるな』。スタッフ・キャストは手探りの中で着地点を探した。それは与論語の「割合」であった。一方で『たくさん人の前で方言で話せる、感激でした』と最初の公演を振り返る人もいた『みんな自分ができる、できたと思ったはず』。これらから最初と二回目の変化を覗える。演じることもさておき方言を核に何かができる、何かをするという経験も想像することも多くの人にはなかったこと、それがプロの手にかかって人に見てもら

に足るものになるということへの人々の気づきがあったわけだ。『全部方言も「あり」とおもいますよ』と言ったのは自身は話者ではないと考えている人だ『わからなくてもやり続けたらみんなわかっていくんじゃないですか』。字幕をつける、あらすじを書いたものを配布する、など複数の人から複数のアイデアを聞いた。つまり到達点、あるいは完成形はすべてを与論語で演じる作品であると考えられていることがわかった。そしてここでも他の地域同様に、自身の運用能力を低く評価する人が多かった。相当にうまくても自分は話せない、下手だということになっている。もちろん比較する対象は年長者だ。『年長者、家族の前ではできれば話したくない』『若いのにうまい』と評されることがあってもこのように考えてしまう。もちろんと言うべきか、年長者も自分より年上がうまいという。この年齢に依存した評価のシステムは「方言」を年寄りのものにしてしまう。

2.2 旅人（たびんちゅ）

このように小さなコミュニティに見られる濃い人間関係と年長者が絶対である感覚は、しばしば若者をコミュニティから遠ざけてしまう。しかし人口構成のところで述べたように高齢化はすすむものの、それに伴う疲れた感じは見られない。その原因はたとえば経済的なことがあげられるだろうが、旅人〜たびんちゅと呼ばれる与論出身者以外の移住者、居住者の存在感がある。つまり移り住んででも住む場所ということは、地域社会に活力があると言えないだろうか。このことは「方言」について言うと、学ぶべき言葉であるということにつながる。このたびんちゅと言う言葉はしばしば人々の口に上る。誰が与論出身で誰がよそから来たか、ということが人々に日常的に意識されているということでもあるが、差別的あるいは排他的なニュアンスがないのがむしろ驚きである。「よそ者」という文脈では今のところ聞いていない。この点については検証が必要であるが、「方言劇」ではこのたびんちゅの人々が実に重要な役回りをしていることが観察できた。劇での役という意味だけではなく、作り上げていく過程で、そして演劇を通じてできあがった新たな人間関係の中でも、たびんちゅは存在感があった。『こういうことがあると聞いたとき、すぐやりたいと思いました』と配偶者が与論出身であることで与論に移り住んだキャストの一人がいう。自身が「方言」ができるようになればいいと考えていたが機会がないままだったとも言う。『自分のためです、他に理由はありません』転勤で与論に来ていずればまた出て行くだろう人はこう言った『こんな機会ないですから』。『ことばに興味があります。どんな言葉にもです。覚えて使うと喜ばれる、みたいな感じもあります』このキャストは貪欲に「方言」を学び、劇の中でも見る人たちを驚かせた。もちろん劇もその後のモチベーションになったという。学習言語を使う「場」として演劇は機能したということがわかる。

一方で「しまんちゅ」についてはこういう言及があった『〇〇さんはプレッシャーあったと思いますよ。与論の人だからできて当たり前と見られるから』〇〇さんとは「空亡」の中で方言の台詞が多い重要な役をこなしたが、日常的話者ではない人だ。ここは与論語をめぐって、もしくは対称軸としてしまんちゅとたびんちゅが反対側に置かれる。母語である人が急速に減りつつある与論語であるが、与論の人間であればできなければならないという規範意識はまだ生きていて、たびんちゅが少しできれば褒められるというものと対照的である。たびんちゅはもちろん地域社会の構成員であるが、外側、あるいは別枠に

おかれるがゆえの自由さが確実にある。『与論はオープンだと思いますよ。よそから来ても住みやすいと思います』同様のコメントは両方の側から聞かれた。個々の事情の違いはもちろんだろうが、たびんちゅの地域社会での、そして演劇の中での活動の存在感は大きく感じられた。劇を通じてシマに大きな印象を与えそして去っていった高校の先生がいる。短い任期の間にシマのことばを『与論出身と言われてもわからないですよ、先生は』と言われるまで身につけ、生徒だけでなく地域で愛された先生が残したものは、学習言語としての可能性だと考える。与論語を難しいと考えているのはたびんちゅもしまんちゅも同様である。教室で教える試みも始まっているが、ロールモデルたり得る存在がいること、それが舞台という大勢の人が見られる場所で存在感を示せたことは大きい。

2.3 次世代への思い

『自分ができないからこそ、子どもができるようになる機会があればいいなと思います』というコメントが印象的であった。強制はしたくない、あるいは必ず覚えてほしい、というような語りばかりをいろいろな場所で聞いてきた。強制したくないは、子どもの意思を尊重したいということでもあるが、どう関わればいいのかわからないという文脈で語られることが多かった。必ずできなければいけない、のような規範が若い世代を苦しくさせていることもわかってきた。少数言語話者としてのある種の義務だというような語りや、琉球列島だけでなく世界中のコミュニティでおこっている。動機付けと排除の両刃の剣であることは意識されなければならないと考えている¹¹。次世代に与論語は伝えたいという思いは共通していたが、「方言劇」にその可能性を見いだしていることも共通していた。そのわかりやすいアイデアとしてインタビューをした全ての人が、それぞれ真剣に「方言劇」をどう継続するか考えていた。『劇団を作りたい。小さな規模でも定期的に島内で公演できるようにしたい』というのはこれまでの二回の公演が補助金に支えられていることを十分に理解しているからこそこのコメントだろう。『アマチュアの劇団がどのように活動してるのか、資金はどうしているのか知りたい。できるだけ質の高いものを見せれるように考えたい』。この二人は別の人物であるが、「方言劇」にかかわった人々は補助金が途絶した先のことを考えはじめている。

与論には地域芸能がないことについての言及もあった。今回の公演で最後を締めたのは子どもたちも含めたエイサー隊だった。華やかなエンディングに「唐船どーい」と「ワイド節」¹²が演奏され、奄美と沖縄の接点である与論の位置が図らずも表現されていた。それをオリジナリティーがないと評する必要は全くないが、与論のものがほしいという思いは当然ながらあるようだ。『多くの人に演じてもらいたい。決まった人が独占してしまうのではなく』という考え方もあった。自分が演じた経験は貴重で、そこでの「方言」の経験もまた誰かに伝えたいという意味だ。『方言教室を本格化させたい気持ちが強くなりました』とこの演劇を足がかりにしたいとのコメントもある。言語学習のモチベーションとし

¹¹ 前田達朗(2005)など

¹² 唐船どーいは沖縄の、ワイド節は奄美・徳之島の代表的な民謡で特に宴会や集まりの最後に会場で全員で踊るためのナンバーである。

て、つかう「場」があるということは大きい。自然習得することしか手段がなかった与論語が学習言語になるには、教え手や教材とともに「なぜ学ぶのか」が必要である。たびんちゅの中でこれまで第二言語として習得した人々は、生活の中で必要だというモチベーションがあったと言えるが、話し手が減り「方言」なしで生活ができるいま、別のモチーフの設定が必要とされる。琉球諸語についていえば伝統芸能がそのひとつといえるのだが、与論にはそれがなかった。そして「伝統」ではないことが逆に地域社会の窮屈さからも自由になれる可能性もある。『若者が主導権をにぎりたいたい』というコメントと『若い人が主導的にやるべきだ』というコメントは、別の立場から同じことを言っているようだが、若者は自分たちの思い通りになっていないと考え、年長者は若い者のことを考えていると思っている。どこにでもあるすれ違いだが、継続のためには越えなければならないものである。

おわりに

演劇が言語伝承に有効な手段であるかどうかという問いに答えるための材料を探してきた。最初のインパクトとしては十分なものを地域社会に与えたといえる。人々の意識は変わりはじめ、新しい動きや見直しも始まっている。とらえ直されているいちばん大きな物はもちろん「方言」である。演劇を続けたいと考えることは「方言」を考えることである。人々がこれまでの二回の公演を到達点と考えていないのは演劇としての完成度だけでなく「方言」で劇をするという目標が形になって見えてきたからであろう。これらのことに答えを出すためにも継続することが最大の課題であるというのがここでの結論である。

与論というコミュニティと演劇という手法はこれまでのところうまく合っているように見える。コミュニティの紐帯、若い世代と移住者の存在感、沖縄との距離などがうまく作用していると考えられる。そしてなにより感じたのはこのサイズのコミュニティであるにも関わらずじつに多くの才能が与論にはあると感じさせられた。

文化庁の支援がいずれ終わることは人々も理解しており、それに備えるために何ができるかを考えはじめている。演劇というのは技術や知識が必要であること、それを身につけたいと考える人がいることも見えてきた。お祭りのイベントではなく地域に演劇という文化を根付かせるためにどういった支援が得られるのかを考えるのは、研究の機会を与えられている我々の仕事でもあるかもしれないと感じている。特定の地域に連続して予算を配分できないという事情はわかりつつも他の方法がないかを文化庁の担当者とも考えたい。

また与論町の行政がどのように関わればいいのか決められないでいることも感じた。予算の動き方の問題でもある。町役場の直接の担当者は意欲的であるが町の事業にできないのは助成が劇団経由であるからということも考えられる。「備え」のためにも情報が共有できるような体制が望まれる。

参考文献

- ・石原昌英 2018 『(平成 27 年度) 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』琉球大学国際沖縄研究所
- ・前田達朗 2005 「エスニシティとしての『在日』と言語意識」『在日コリアンの言語相』

I 部 3 章 和泉書院

- ・前田達朗 2013 「経験としての『移民』とそのことば」『ことばと社会 12 号』三元社
- ・前田達朗 2018 「与論『方言劇』」『(平成 27 年度) 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』琉球大学国際沖縄研究所

参考資料 台本（確定版）

キャスト

- ・ 親父 一郎のお父さん。島のヤブ。（川畑）
- ・ 一郎 ヤブ見習い。（菊）
- ・ 漁師の頭 一郎の幼馴染。（狩集）
- ・ 漁師たち数名（小高、竹内誉、有馬）
- ・ 島民たち数名（田畑、鶴田、下久保、谷、高田、和田）
- ・ 海入道 東北地方の妖怪。人間に恨みを持つ。（吉田忠）
- ・ イシヤトウ 与論島の妖怪。イタズラ好き。（南館）
- ・ 妖怪たち数名（市山、綿谷、竹内絆、柳澤、吉田琉、田中、港、蔵元）

薄暗いステージ。

中央に一人の老人。

祭壇のような場所に立っている。

雷鳴が轟く。

親父

アアーティンヌナチユイ。ヤツパイヌガーララジヤ。ヤツ、ユク
ワーダイエーティユタシヤタンゲラヨ。ガンボー・・・ハッシヤフラ
ラジ。(ああ…空が哭いている…。やはり避けられぬか…。ワシの代でこのときが
訪れようとは…いや、むしろワシの代で良かったのか…。ならば…こうし
ちやおれん…。)

暗転

なにやら漁師たちのたまり場のような場所。

複数名の漁師が会合している。

漁師 1

イチャーエーティガ(どうだった?)

漁師 2

ナームヌ(てんで駄目だ。)

漁師 3

ウランイー。ションシイチャーナトルムヌゲラピヌマシヤドウア
イル(そっちもか…一体全体どうなってやがる?)

漁師 1

イチャー異常気象ナティチヤンチン ハシガデイイヌトウラランヌ
サーバングワイエイ(いくら異常気象だからって、魚が獲れなさすぎやし
ないか?)

漁師 2

ガシ。トウシヌアキティミードウシナイシトウマージンウツカシクナテ
イ。プイドーチバフヌアチサドー。ウンヤチャーヤブリ。ションシヌガウ

間

漁師3

リヤー。(ああ、年が明けて、新年になった途端におかしくなっちゃまった。冬だつてのにこの暑さ、海はいつも大荒れ、なんなんだ、全く。)

イユーヌトウララジチュシエークン ウンナンイユーヤ フランヌチャア
ランダライチガデイマーリユイ(獲れないってよりも、生き物の気配すら
感じないんだよな。)

漁師1

シヨンチヨ。ハツシユルウンヤミチャルフトウヌネー。ウリトウカワト
ウサーウンダキアアランヌ。ウシントウイイン ナマナマチムヌコー
ジナティムールシンパツテイ。イキチュシン アドウイキリトウイ。(ああ、
こんな海見たことがねえ。それに変なのは海だけじゃねえ。牛や鶏も急に
エサを食わなくなっちゃまって、ほとんど死んじゃまった。 どうにか生
き残っているやつも、ひよろひよるのガリガリだ。)

漁師2

フタバヤーヌーゲーラ タンガリバナイルトウシエイドー(今年はなんだか
恐ろしい年だな…。)

漁師3

ヌーナテイゲーラチチ サバクテイミチャシガ ムットウワカラジ(原因を
調べてみてもさっぱりわからねえ。)

漁師1

クミエーヌ蓄えヌアラリテイナマナテヤーフィシガ ウリガネーナラボ
ー・・・(組合の蓄えがあったからなんとかなっちゃいるがそれも底をつい
たら…)

漁師2 ヤイヤイ。ガシコトウルサルフトウユムンナ（…おいおい、怖いこと言うなよ！）

漁師3 ヌンナユン。イダムトウヌシマカティムデイテイクリリボーヤー（とにかく、早くもとの島に戻ってほしいな…。）

漁師1 ムトウカティムデュンチーボー 一郎ヌフィガヌウヤヤイチヤシユンガテョー（もとに戻ると言えば一郎の親父さん、様子はどうだい？）

漁師2 アアー、アヌシナン・・・。ガンチーボーエーシガ・・・ナランヌヤー（ああ…あつちのほうも…こう言っちゃなんだが…駄目だろうな。）

漁師3 フドウヌクリカラ「クーボー、クーボー」チチ、クラヌナーナンフマテイイチガチユッケードウパーカテヤーイジュツチュール（年末から「クーボー、クーボー」言ってる、蔵の中に閉じこもってたまにしか外に出ないようだ。）

漁師1 エー、ガンイー（そうか…。）

漁師2 一郎ヌヤーヌメートウタータルバンクラカラドウンミーネツシユル ユンジュトウネツシユル、ヌツチンイヤーランヌフィヌキカリテイキチョー。ワイ、ナーキーヌプリテイウワーチユイ、チムーユータン（二郎の家の前を通ったとき、蔵からうめき声のようなお経のような、気味の悪い声が聞こえてな。ああ、ついに気が触れちゃったか…って思っちゃまったよ。）

漁師3 フネーダナゴー、ヌーグトウゲーラ ユンタシユルガンチャナフマカティ

しまくとぅば継承としまくとぅば劇

石原昌英（琉球大学）

1 はじめに

本稿は昨年度（平成29年度）の事業報告書で発表した「しまくとぅば劇の効果について」（石原：2018）に引き続き、しまくとぅば復興の観点から、しまくとぅば劇の可能性について分析する。石原（2018）では、10代・20代の若者がしまくとぅば劇に演者・地謡として、しまくとぅば劇に参加することにより、自分たちが生まれ育った地域のしまくとぅばであるウチナーグチ（沖縄語）に関する言語意識や言語行動がどのような変化したのかを論じた。また、しまくとぅば劇に演者として参加したハワイ出身の沖縄系米国人4世へのインタビューの分析を通して、しまくとぅば劇の言語面での効果を分析した。本稿では、しまくとぅば劇に演者として参加している、劇団代表の50代男性へのインタビューを分析することにより、しまくとぅばの普及（復興）のしまくとぅば劇の関係性について論じる。

2 しまくとぅばの状況

しまくとぅば（琉球諸語）が消滅の危機に瀕していることは琉球新報（2017）や沖縄県（2017）の全県規模のアンケート調査の結果が示している。いずれの調査報告でも、しまくとぅばに対する理解度が低下し、話者数も減少していることが示されている。特に若い世代（10代・20代）でしまくとぅばが話せる、聞いて理解できる者の割合はかなり低い。例えば、琉球新報（2017）によると、アンケート調査に回答した20代でしまくとぅばを「聞くことも話すこともできる」と回答した者の割合は7.5%で、「まったく聞けないし、話せない」と回答した者の割合は25.4%であった。また、沖縄県（2017）によるとしまくとぅばを「よくわかる」と回答した者の割合は10代が0.8%で20代が2.5%である。一方で、いずれの調査でも、しまくとぅばに対する親しみや子供たちの継承への期待については80%以上が肯定的な回答をしている。このようなアンケート調査の結果をみると、しまくとぅばが維持継承されることが期待されているが、継承する若者の数が非常に少ないので、しまくとぅばの危機的状況はさらに悪化するということが予測される。

しまくとぅばの危機の状況については地域差がある。琉球新報（2017）及び沖縄県（2017）は全県的な調査の報告であるが、市町村毎のデータも示している。例えば、前者によると、沖縄島北部地区においては、45.9%の回答者が「聞くことも話すこともできる」と答え、5.5%が「まったく聞けないし、話せない」と答えている。一方、八重山地区では、25.4%の回答者が「聞くことも話すこともできる」と答え、15.3%が「まったく聞けないし、話せない」と答えている。また、沖縄県（2017）によると、しまくとぅばを「よくわかる」と回答した者の割合は調査全体でみると18.1%であるが、八重山地区では11.2%となっている。ここでみられるような地域差についてかりまた（2014a:274）は次のようにのべている。

40年近く琉球各地の方言を調査してきて感ずるのは、マイノリティのなかのマイノリティの方言の危機だ。ちいさな個性的な方言のなかには存在した証しさえのこさないまま消えてしまったものがある。わずかな記録をのこして消えていこうとする方言もある。個性的な弱小方言は、日本語と大方言からの二重の圧力をうけていて、消滅危機度がきわめてたかい。琉球諸語の多様性が失われようとしている。

後述するように、しまくとうば継承の観点からしまくとうば劇を演ずることについては、この「地域格差」の問題は、さけて通れない。

3 ことばへの気づき

石原（2018）のインタビュー調査に協力した若者達は例外的な存在と言えるが、彼・彼女達のしまくとうばに対する関心を深め、言語意識の変化をもたらしたのはしまくとうば劇である。若者達は劇の上演にいたる練習や関連する学習を通して、地域のしまくとうばへの気づきを経験した。いままで「昔のことば」「祖父母世代のことば」であって自分たちには関係のないことばであると思っていたものが、自分たちの周りで実際に使われていること、日本語とは異なるそのことばを使うことで年配者とのコミュニケーションがより深まることに気づき、次は自分たちの周りに広めたいと思うようになったのである。後述のインタビューでも述べられているように、学校教育において、児童生徒がしまくとうば劇に演者として参加することは、沖縄県には自分たちの母語（第一言語・生活言語）である日本語とは異なる言語が存在し、実際に使われていることを知る機会となる。劇を上演する目的の一つが児童生徒の「ことばへの気づき」をうながすことにあると言える。

4 インタビュー

本研究におけるインタビュー調査の概要は下記の通りである。当初は複数人にインタビューをする計画であったが、より深い分析をするために、一人だけに絞った。なお、インタビュー協力者の氏名を記すことについては承諾を得ている。

期日：2018年8月20日

対象者：上江洲朝男（演劇集団創造代表・元中学校教員（国語）・琉球大学教員）

時間：約1時間

質問

1. 琉球諸語（琉球諸方言）の現状をどう見ているか。
2. しまくとうば普及センターの波照間氏は、しまくとうば芝居に一つの可能性がある」と述べている。このことについてどう思うか。
3. 昨年度に「椎の川」をウチナーグチで上演したが、その目的は何であったのか。
4. 演者は稽古に入る前にどの程度のウチナーグチ能力を持っていたのか。その能力は、稽古を通してどう変わったのか。

5. ウチナーグチ能力の向上（があったと仮定して）以外に、演者の沖縄人意識が高まるというような効果もあったか。
6. ウチナーグチ（しまくとぅば）芝居を上演する上で、どのような課題があるのか。それはどのように解決できるのか（可能性も含めて）。
7. 観客の反応はどうであったか。ウチナーグチのセリフを観客が理解できるようにするために、どのような工夫がなされたのか。
8. 小学校・中学校の児童生徒がしまくとぅばを上演することについてどう思うか。もし、上演できたら、児童生徒のしまくとぅば能力の向上にどのような影響があると思うか。
9. 上演に関して、課題があるとしたらどのようなものか。その課題はどのように解決できるのか（可能性も含めて）。
10. しまくとぅばの普及促進について、何か提言等がありますか。

上江洲は、質問1に関して、琉球諸語は危機的な状況にあるが、若い世代が今話されていることばを受け継ぐ可能性はあるが、戦前や沖縄戦（1945年）直後に話されていたいわゆる「伝統方言」を引き継ぎ、「元に戻す」ことは困難であるとみている。「伝統方言」は、方言札も使われた戦前の標準語励行運動と戦後の共通語励行運動で継承が寸断されているので、寸断前のことばを取り戻すことは困難である。若者は自分たちが興味関心のあるものは引き継いでいくので、若者が興味関心を持つようにするには何が必要かを検討する必要がある。

質問2については、上江洲は次のように述べた。観客と演者は分けて考えるべきである。芝居は非日常的なものなので、それを見るだけでは、しまくとぅばを話せなかった観客が生活言語として使うようになれる可能性は非常に低い。一方で、演者は、発音・リズム・イントネーションを指導され、舞台の上ではあるが、生活と言語がつながっていることを学び、知らなかったことを知るようになるので、生活言語としてしまくとぅばを使えるようになる可能性はある。

質問3については、上江洲は次のように述べた。1945年の沖縄戦当時の生活、人々の感情、愛情表現、悲しみの表現を観客に体験してもらうには、当時のことばの発音、リズム、イントネーションで表現するのがベストである。大城貞俊作の『椎の川』はこれまでに3回上演されているが、最初の上演は知念正真が脚本を書いた、台詞のところどころにしまくとぅばが入る劇であった。2回目は作者の大城貞俊が脚本を書いたものが上演された。昨年の上演では、1回目の知念正真の脚本を又吉英仁が前編しまくとぅばに翻訳した。創造は、近年ではしまくとぅば劇を上演しているが、これはしまくとぅばが失われているといくことを懸念し、残さなければならないと言う必要性にかられたものだと思う。（年配の）メンバー達が年齢を重ねてたどり着いた答えである。

質問4について、上江洲は次のように述べた。『でいご村から』の上演（2014年）に際しては、自分（上江洲）は主役級の役を演じたが、当時はしまくとぅばを話せなかった。ほかの演者には琉球舞踊の経験者やうちなーぐち芝居の経験者がいて、演者のしまくとぅば能力の差が大きかった。自分は、発音、イントネーション、アクセントを徹底的に指導

された。その結果、しまくとうばに対して興味・関心があったはずだが、だんだんしまくとうばが嫌いになっていく自分がいることに気がついた。指摘・指導されるということは評価されるということであるが、自分が声に出した台詞が当たっているのか、当たっていないのかが不安になった。当時中学校の国語教員であったが、評価があることが「好き」「嫌い」を分けてしまう、言語なのに評価があっているのかと考えた。

また、『でいご村から』の舞台（場面）は山原（沖縄島北部）なのに劇で使われることばは中部のことばであることも気になった。関係者（演者・指導者）の多くが中部出身であることが、沖縄島内でのしまくとうば話者は中南部に多いというのが理由ではあった。舞台では一つの家族なので、ことばを一つにする必要はあった。ただ覚えて話すのではなく、生活で実際にしまくとうばを使っているかのように演じないといけなかったのでハードルがかなり高かった。稽古を通して、しまくとうば使用になれたが、日常的にしまくとうば話者である高齢者と接することがないので、覚えた台詞を舞台以外で使うということはない。ただし、講演等で例文として劇の台詞を用いることはある。

質問5について、上江洲は次のように述べた。若者が、劇に参加することでことばや沖縄っぽい動き（動作・所作）や文化・慣習を学ぶことで沖縄人意識を持つようになることはあり得ると思う。自分のような50代の者は、しまくとうばは元々自分たちのことばであったはずだと思っていて、それがどこかで途切れてしまっていて、別のことばにすり替えられてしまっているのだから、自分たちのことばであったはずのものを取り戻しているのではないかと思う。

質問6について、上江洲は次のように述べた。まず、しまくとうば劇を上演することの目的を明確にする必要がある。また、どこのどのことばで演じるのかについても理由付けをする必要がある。自分たちのことばを残したいという思いが強すぎると問題があるかも知れない。例えば、地域の公民館レベルで地域住民に地域のことばを知ってもらいたい、地域のことばを残していきたいというのでしまくとうば劇をするのであればその地域のことばで上演すべきであると思う。その場合には、演者・指導者は地域の住民であることが望ましい。一方で、様々な地域の人々が集まって上演する時には、どこのことばを使用するのかについての合意が必要である。ことばは本来日常生活のなかで継承されるものであるが、そのような継承ができなくなっていることが異常事態であるので、できるだけ日常生活と結びついたことばを残したほうが良いと考える。

質問7について、上江洲は次のように述べた。演劇集団創造がしまくとうば劇を上演するという事で観客は絞られてくる。若い人達にも伝えたいのに、観客はしまくとうばが分かる人達、舞台上で演じられる場面を懐かしく思う人達が多いので、観客の反応は良い。字幕も使用しているので、若者や県外出身者の反応も良いが、演じる者としては、観客には字幕ではなくて舞台上に注目してほしい。演出家には、字幕を嫌う者もいる。ただ、今の若者は意味が分からないと興味を示さないし、分からないままで劇を見るとずっといららしてしまう。そのことを考えると字幕は必要である。また、パンフレットにあらすじを載せたり、何らかの形でしまくとうばの台詞を抜き書きして示すことをしたりしている。

質問8・9について、上江洲は次のように述べた。児童生徒がしまくとうば劇に参加し、台詞を音声にしてしゃべってみたり、身体を使いながらしゃべってみたりすることで、しまくとうばを身近なものとして感じることは起こりえると思う。そこから、他にどのよう

なことばがあるのか、自分の台詞の「本当の発音」はどのようなものかに興味を持って調べることがあるだろう。ただ、だれがなんのためにしまくとうば劇を上演するののかについては、目的を明確にしておく必要がある。子どもの主体性を重視し、大人の目的のために子ども達を使ってはいけないと思う。その意味で、児童生徒がしまくとうばに興味・関心をもつような出会わせかたを考える必要がある。

指導者は、よりよい劇に仕上げたいので発音、リズム、イントネーションを少々厳しく指導してしまうかもしれない。そうすると、児童生徒の中には、しまくとうばを難しいことばであると思い、台詞をいうのが怖くなり、劇自体が楽しくないと思ってしまう者ができるかもしれない。指導が入るほど、しまくとうば（劇）が好きになっていく者もいるし、嫌いになっていく者もいる。後者のリスク・危険性があることを意識しながら指導する必要がある。

しまくとうば劇については、日本語の台詞のなかにとりどころにしまくとうばが入る劇にするのか、それとも台詞のすべてをしまくとうばにするのかを決め、いずれの場合でもなぜそのような劇にするのかについて、児童生徒に示すことが重要だと思う。指導者は、劇を通して、子ども達の方言に向かう態度を養うのか、それともことばを使う能力を養うのか、つまりしまくとうば劇の目的は何かを検討する必要がある。後者の場合には、一足飛びになってしまい、無理強いしてしまうことがある。指導者は許容範囲を広くすることが求められる。

質問 10 について、上江洲は次のように述べた。しまくとうばの継承については、継承する側（若者・子ども）の視点が重要である。子ども達が手を伸ばして、取りたいと思うようになることが必要である。継承させる側（大人）が「あげたい、あげたい」と思い渡しても、ただの押しつけであり、子ども達は自分が欲しいものでなければ捨ててしまうだろう。その意味で、出会わせ方が重要である。児童生徒がしまくとうばに興味・関心を持つようにさせることが学校教育に求められるべきである。学校教育では、地域には様々なことばがあることを教え、子ども達が言語の多様性を知る機会を与えることができる。「正しく」しゃべることまでを学校教育が担うようになってしまうと、そこには必ず評価が入ってきてしまうので、本当の意味での言語継承にはつながらないと思う。

現在の沖縄県においては、両親の出身地が異なる子どもは珍しくない。例えば、父親が宮古島市出身、母親は名護市出身で、子どもは那覇市で生まれ育つということがある。このような子どもが継承するしまくとうばは父親の出身地の宮古のことばなのか、母親の出身地の名護のことばなのか、それとも自分が生まれ育った那覇市のことばなのか。そもそも、大多数の子ども達にとって、日本語が第一言語（母語・生活言語）であるという現実のなかでしまくとうばを継承することにどのような意味があるのかを考える必要がある。

5 まとめ

今回のインタビューでは、筆者自身これまであまり重視していなかったことが課題として指摘された。まず、しまくとうば劇を上演する際に、どこで、どのことばで、どのようなテーマ（場面）を演じるのかということである。演劇集団創造が 2014 年に上演した『でいご村から』の舞台は大宜味村で、2017 年に上演した『椎の川』の舞台は国頭村楚洲である。

時代としては両方とも沖縄戦当時である。そのような舞台設定において沖縄島北部の国頭語（国頭方言・ヤンバル方言）ではなく、中南部のことばである沖縄語（ウチナーグチ）で上演されることの意味をあまり考えてこなかった。また、子ども達がしまくとうば劇に参加することをしまくとうば継承という観点からみた場合、どのことばを台詞に使うのが課題となる。首里方言・那覇方言がベースとなっているとされる、いわゆる沖縄芝居ことばを使うのか、学校が立地する地域のことばを使うのかを決め、その目的と理由が示される必要がある。沖縄芝居ことばを使った劇を宮古島で上演すること、逆に宮古島のことばを使った劇を沖縄島で上演すること、さらには宮古島のことばを使った劇を宮古島で上演することにはそれぞれの理由付けが求められるのである。次に、しまくとうば継承における劇の効果については、継承する側（若者・子ども）の視点が重要であることもあまり考えてこなかった。若者が劇に参加することはしまくとうば継承に関して効果があると石原（2018）で論じたが、インタビューに応じたのは主体的に劇に参加し、自ら進んで学びに参加した者達であった。学校教育の現場でしまくとうば劇を上演する場合には、参加する児童生徒に劇の目的を示す必要があり、音声面（発音・イントネーション・リズム）での指導が過剰とならないように注意する必要がある。子ども達がしまくとうばを嫌いになる可能性・リスクがあるからである。劇を通して、ことばへの気づきを経験させ、身近なものとなるようにすることができる一方で、遠ざけるようにしてしまう可能性もあるのである。言語継承の観点からしまくとうば劇を推進する場合には上記の課題を明確にし、なぜしまくとうば劇を上演するのかを考える必要がある。

参考文献

- ・石原昌英（2018）「しまくとうば劇の効果について」『平成29年度 文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」報告書』242 - 253 頁。琉球大学国際沖縄研究所。
- ・沖縄県（2017）『平成28年度 しまくとうば県民意識調査 報告書』
- ・かりまたしげひさ（2014a）「消滅危機言語の教育可能性を考える—多様な琉球諸語は継承できるか—」藤田陽子・渡久地健・かりまたしげひさ（編）『島嶼地域の新たな展望 自然・文化・社会の融合体としての島々』263-279。九州大学出版会。
- ・琉球新報（2014年4月9日）「初のうちなーぐち劇 演劇集団創造」
- ・琉球新報（2017）『沖縄県民意識調査報告書2016』琉球新報社。

¹ 演劇集団創造は1961年に幸喜良秀・又吉英仁・知念正真・中里友豪らによって設立された。設立後は日本語で演じる劇を上演してきたが、2014年に初めてしまくとうば（うちなーぐち）劇『でいご村から』を上演した。琉球新報（2014年）によると、設立者の一人で演出を担当した幸喜良秀はウチナーグチで劇を乗船することについて次のように述べている。

「『やまとに追い付け』とやまとぐちを勉強したが、母親の言葉に無頓着だった。（中略）沖縄の身体と心を復権する。（中略）芝居口調（くーちょー）（芝居で使われる言葉）は、近代にうちなーぐちの共通語になろうとしていた。村々の言葉を大事にしながら、共通語としてのうちなーぐちがあってもいい。

なお、演劇集団創造は、2017年に『椎の川』（大城貞俊作・1993年）をしまくとうば劇として上演したが、演出を担当した幸喜は、この上演について次のよう語っている（石原（2018）より引用した）。

観客に、しまくとうばを「いい言葉」として味わってもらうのも本公演の目的の一つだ。沖縄の言葉がなくなるという切迫感の中、私はこの演劇の「料理人」として、しまくとうばの素晴らしさを現代の人に知らせたい。／かつて沖縄の復帰運動の中で、しまくとうばが顧みられなかった時代もある。沖縄の言葉を大切にすることは、沖縄のアイデンティティを大事にすることでもある。／私たちには沖縄の言葉を教えてこなかった責任がある。だからこそ文化として回復させたい。」（『沖縄タイムス』2017/8/28）

危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した

実地調査研究 平成30年度

2019年3月

琉球大学 島嶼地域科学研究所

文化庁委託事業